ISSN 1342-6834

考古学財団

研究紀要 9

かながわの考古学

2004.2

財団法人 かながわ考古学財団

研究紀要 9

かながわの考古学

2004.2

財団法人 かながわ考古学財団

はじめに

今年度は、各時代の研究プロジェクトチームから提出された共同研究の成果７本と、個人論文１本の計８本を掲載することができました。
旧石器時代、縄文時代、弥生時代、奈良・平安時代、中世の各研究プロジェクトチームは設定したテーマの継続研究を続けております。

また今年度新たなテーマを設けたプロジェクトチームとして、古墳時代は故赤星直忠博士が残された「赤星ノート」から、古墳時代に関係する重要な未報告資料の報告、近世では発掘調査からえられた納屋(物置)や厩、肥料小屋(灰屋)・厠など、近世民家にかかわる遺構の集成に取り組みはじめました。

さらに財団の研究助成で行われた、県内の古墳出土の大刀と鉄鏃といった武器について研究された個人論文を掲載いたしました。

今後ともこうしたグループの共同研究を進めることによって、職員の資質向上が図られ、皆様にその成果が還元できるようであれば、幸いこの上ありません。

刊行にあたりまして、関係各位にご指導をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。

2004年２月

財団法人 かながわ考古学財団
理事長 熊 田 節 郎

目　　次

神奈川県内における旧石器時代の遺構（その３）－Ｂ１層下部～Ｌ２層－
旧石器時代研究プロジェクトチーム …… 1

神奈川県内における縄文時代文化の変遷Ⅵ
－中期後葉期　加曽利Ｅ式土器文化期の様相　その４　文化的様相（２）－
縄文時代研究プロジェクトチーム …… 19

宮ノ台式土器の研究（３）　弥生時代研究プロジェクトチーム …… 39

考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡（１）
－通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介－
古墳時代研究プロジェクトチーム …… 55

奈良・平安時代の宮ヶ瀬遺跡群の研究Ⅱ
奈良・平安時代研究プロジェクトチーム …… 67

神奈川県内の「やぐら」集成（２）－上行寺東遺跡と六浦周辺のやぐら群－
中世研究プロジェクトチーム …… 87

近世民家の集成（１）　近世研究プロジェクトチーム …… 103

神奈川県内における古墳出土鉄製品の形態的検討　－大刀・鉄鏃について－
柏　木　善　治 …… 117

例　　言

1．本書は、財団法人かながわ考古学財団および神奈川県教育庁教育部生涯学習文化財課の職員で構成する研究プロジェクトチームが、時代ごとに計画的に共同研究を行った結果と個人論文からなる。

2．各研究プロジェクトチームの構成は以下のとおりである（五十音順）。

・旧石器時代研究プロジェクトチーム

井関文明・大塚健一・加藤勝仁・栗原伸好・鈴木次郎・砂田佳弘・畠中俊明・三瓶裕司・御堂島　正
吉田政行

・縄文時代研究プロジェクトチーム

天野賢一・井澤　純・井辺一徳・小川岳人・恩田　勇・長岡文紀・松田光太郎

・弥生時代研究プロジェクトチーム

阿部友寿・飯塚美保・池田　治・伊丹　徹・櫻井真貴・新開基史・谷口　肇・村上吉正・渡辺　外

・古墳時代研究プロジェクトチーム

上田　薫・植山英史・柏木善治・谷　正秋・近野正幸

・奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

大上周三・加藤久美・木村尚二・河野喜映・小林耕一・冨永樹之・中田　英・依田亮一

・中世研究プロジェクトチーム

宍戸信悟・鈴木庸一郎・服部実喜・宮坂淳一

・近世研究プロジェクトチーム

市川正史・木村吉行・根岸洋史・桝渕規彰・柳川清彦

神奈川県における旧石器時代の遺構（その３）

－Ｂ１層下部～Ｌ２層－

旧石器時代研究プロジェクトチーム

はじめに

本プロジェクトでは、2001年度より、神奈川県内の旧石器時代遺跡において報告されている遺構の集成を実施している。これまでに(その１)として漸移層～Ｌ１Ｈ層、(その２)としてＢ１層上部に該当する資料を扱った。今年度はＢ１層下部を主な出土層位とする遺物群に伴って検出された遺構を対象としている。例年通り、各報告書において礫群・炭化物集中・炉址・配石・住居状遺構・土坑・ピット・デポなどの事例を対象とし、今回確認できた遺構は礫群・炉址・配石・土坑・石核原材集積・炭化物集中(大型炭化材集中部を含む)の６種類であった。以下、遺構ごとにその様相を述べる。

Ｂ１層下部検出の遺構について

a）礫　群（第１・２図）

今回確認された礫群は40遺跡234事例にのぼり(1)、対象とした遺構の中では、最も多く検出された遺構である。報告書に基数の記載があるものに関して、検出された礫群が１基のみである遺跡は７遺跡ほどであり、その他の遺跡ではおおむね複数基の礫群が発見されている。構成礫の数量については、月見野上野遺跡第１地点第５号礫群が300点と最も多い点数である。ちなみに最も少ない点数では２点で構成されている事例も報告されており(2)、平均点数は33.8点となる。数量に関する情報が掲載されている事例に限ると、接合していない状態での点数で、20点未満が93例、20～40点未満が52例、40～60点未満が21例、60～80点未満が13例、80～100点未満が４例、100点以上が11例となり、20点未満の例が最も多く５割を占める。分布範囲については、長軸は0.2～6.7m、短軸は0.1～5.0mが大半を占め、長軸・短軸がともに１m未満の例は222例中で42例存在した。また、ほぼ８割の例が長軸1.0m以上の規模を持つ例であった。使用された岩石種については、相模川水系にて採取可能と考えられる岩石が利用されている例が多い。構成礫の属性では、赤化の認められる資料がおおむね大半を占めている。

b）炉　址（第３図）

本遺構は２遺跡４事例を数え、すべて宮ヶ瀬遺跡群の事例である。上原遺跡Ｐ１号炉址以外は礫を伴った炉址とされる。焼土範囲については、上原遺跡Ｐ３号炉址が0.3×0.25mであるが、その他は約0.7×0.6mの範囲とされる。すべての例で下部遺構は確認されていない。構成礫については、完形礫は少なく、赤化礫については、上原遺跡Ｐ３号炉址は少なめであるが、他の２例では多数認められている。すべての例で炭化物の分布が認められている。また、中原遺跡Ｐ１号炉址以外では、複数の石器を伴った例はない。

c）配　石（第４図１・２）

本遺構は４遺跡18事例を数え、宮ヶ瀬遺跡群と大和市長堀南遺跡の事例である(3)。宮ヶ瀬遺跡群の例はＢ１層中～下部で確認され、おおむね１kg以上の礫・石器を配石として認定している。長堀南遺跡の例はＬ２層上面での確認となっており、基準をうかがい知ることはできない(4)。また、両遺跡ともに、下部遺構の存

在が確認されている例はない。使用された岩石種については、凝灰岩系あるいは安山岩系が多く、礫群でみられる岩石種に類似すると考えられる。構成礫については、完形礫は少ないが、赤化礫は、比較的多く認められる。数については１点・２点・３点・５点から成る例が存在し、２点が９例と最も多い例となる。石器との共伴関係については、中原遺跡ではすべて石器集中と重なる位置に分布しており、上原遺跡では配石構成資料に叩石や台石が含まれる例が存在する。

d）土　坑（第４図３）

本遺構は葛原滝谷遺跡Ｐ１号土坑のみである。第２大型炭化材集中部の下部に存在し、Ｂ１層下部～Ｌ２層上部を確認面とする。覆土中には炭化物は存在するが、石器は含まれていない。推定される平面形態および規模は、楕円形を呈し、長軸97cm、短軸77cm、深さ25cmと推定されている(5)。

e）ピット（第６図）

本遺構は用田鳥居前遺跡の１例のみである。大型炭化材第２集中部の下部に存在し、Ｂ１層下部を確認面とする。覆土の１層上面に大型炭化材が位置しており、覆土中には炭化物は存在するが、石器は含まれていない。平面形態はほぼ楕円形を呈し、規模は直径28cm、深さ42cmと推定されている。

f）石核原材集積（第５図１）

本遺構は宮ヶ瀬遺跡群サザランケ遺跡の１例のみであり、Ｂ１層中～下部において検出されている２点の石器からなる。原石を粗割りした同一母岩とされる剥片と大形の使用痕ある剥片からなり、北東２ｍに第３ブロックが設定されている。掘り込みを持つ遺構は伴っていないが、「石核原材として保管した「デポ遺構」の可能性がある」とされる。

g）炭化物集中（第５図２～４、第６図）

本遺構は６遺跡24事例を数え、この中には用田鳥居前遺跡と葛原滝谷遺跡の大型炭化材集中部も含まれている。平面的な広がりについては、おおむね長軸・短軸ともに１～２ｍほどである。用田鳥居前遺跡の第３石器集中地点において２箇所の炭化物集中が設定されている以外は、付近で石器が出土している例はみあたらない。本遺構では、大型炭化物集中部の存在が特筆されるが、用田鳥居前遺跡では、５箇所の集中部と6667点の炭化物粒が認められている。特に第２集中部については、板状の材が含まれており、下部には前述したピットが残されていた。葛原滝谷遺跡では、３箇所の大型炭化材集中部と多数の炭化物粒が認められている。特に第２大型炭化材集中部については、下部でＰ１号土坑が検出されている。

上述したように、礫群以外の遺構が報告されてはいるが、炉址や配石などの多くは宮ヶ瀬遺跡群の事例、土坑、ピットや大型炭化材集中は用田バイパス関連遺跡群の事例であり、遺跡が限定されているのが実情である。さらに用田鳥居前遺跡の出土石器は吉岡遺跡群Ｂ区出土石器との遺跡間接合が確認されており、そうした遺跡間の連なりも考慮していく必要があろう。（吉田政行）

註

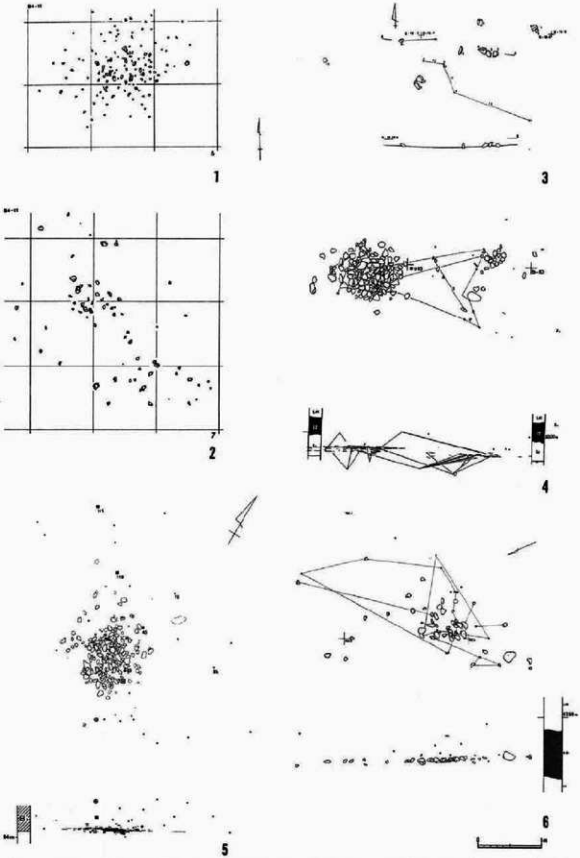
(1) ここで数に含まれる「遺跡」とは、報告書において「～遺跡」とされるものを対象とし、「～遺跡第○地点」については同一遺跡として扱った。ただし、月見野遺跡群は地点に相当する枠が「遺跡」となっており、「遺跡」のとらえ方には問題が残されている。

(2) この「最も少ない点数」については礫群を設定する際の基準にもよるため、参考程度としたい。

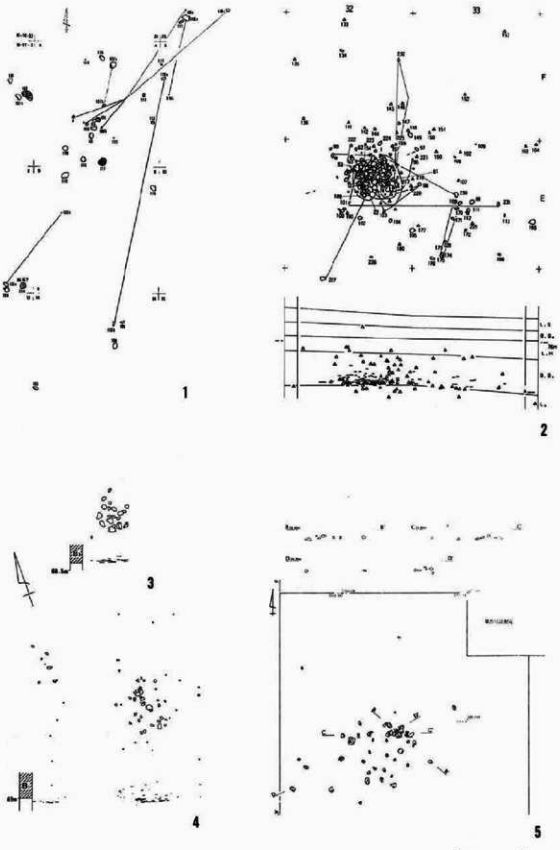
(3) 本遺構の報告については、報告者によるばらつきが大きい。例えば、「おおむね１kg以上の礫・石器によって構成される。」といった設定基準を援用した場合、他の遺跡でも抽出できる可能性が高いと考える。

(4) ただし、私信では「拳大程度よりも大きくて、被熱の度合いが弱い礫・石器が散在している場合に配石とした。」とのお答えを麻生順司氏よりいただいた。

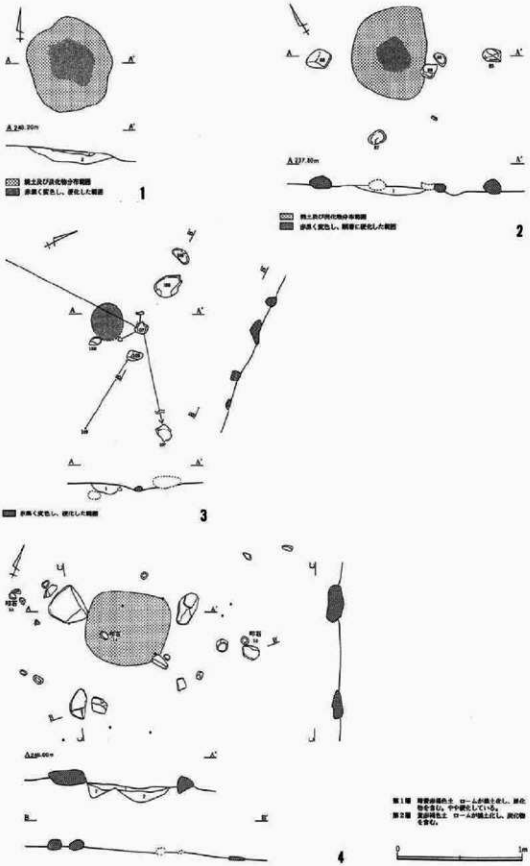
(5) 「約1/2のデータは失われてしまう」調査方法であったとされるが、掘り込みを持つ遺構が少ない旧石器時代遺跡の調査においては、当該報告者のような積極的かつ慎重な姿勢は重要であろう。



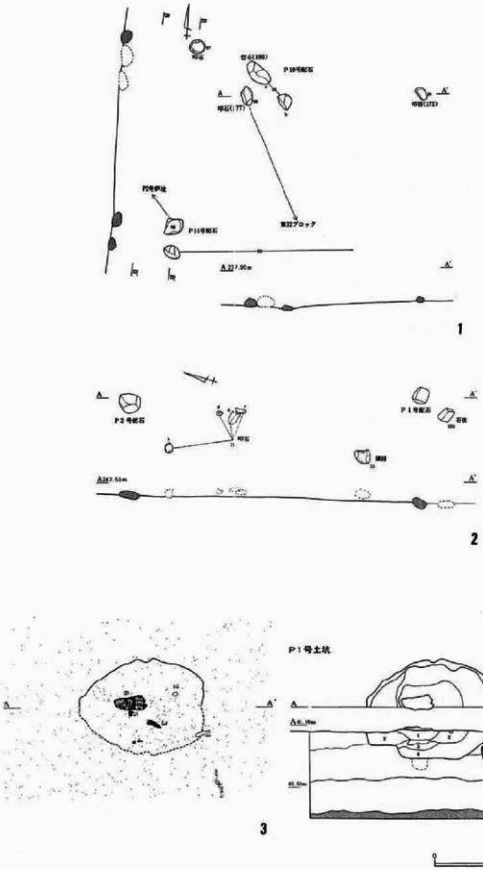
第1図　礫群〔1：橋本Ⅱ6号礫群、2：同7号礫群、3：田名稲荷山Ⅱ、4：古淵B2b14号礫群、5：下森底角Ⅲ6号礫群、6：中村5号礫群〕



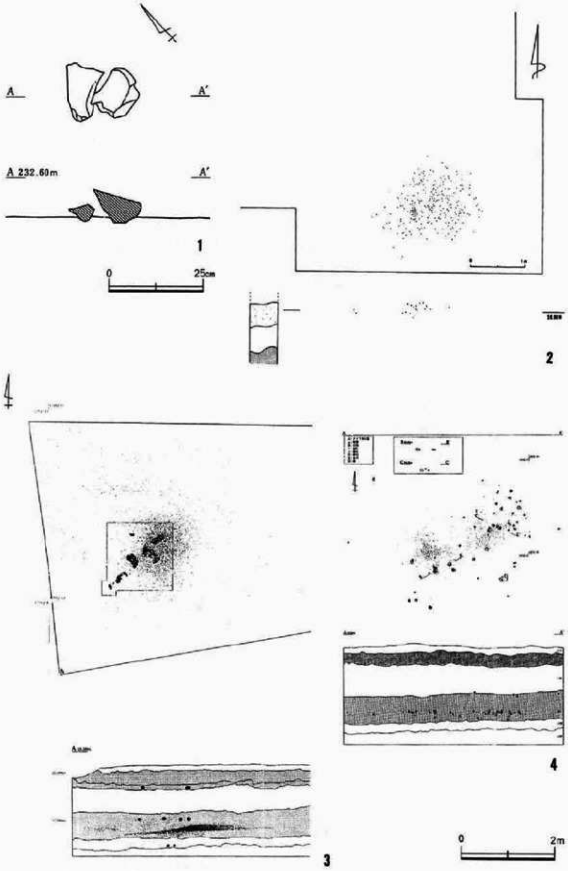
第2図　礫群〔1：栗原中丸Ⅴ11号礫群、2：月見野上野1Ⅳ第4礫群、3：長堀南Ⅳ23号礫群、4：同17号礫群、5：用田鳥居前Ⅳ〕



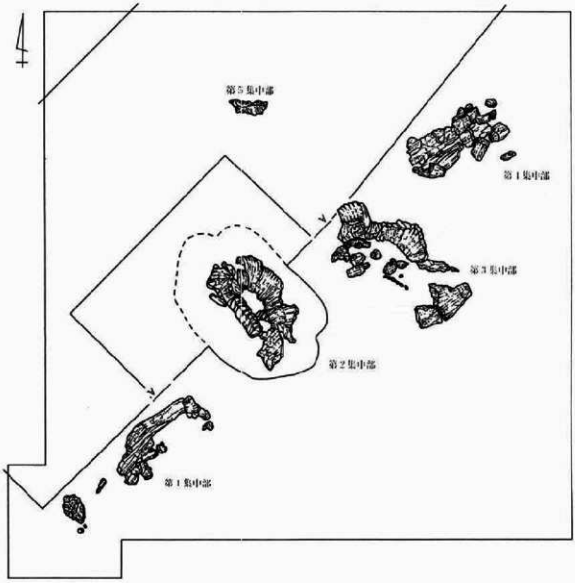
第3図　炉址〔1：宮ヶ瀬上原ＶＰ１号炉址、2：同Ｐ２号炉址、3：同Ｐ３号炉址、4：宮ヶ瀬中原ＶＰ１号炉址〕

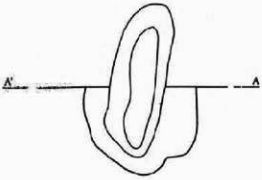


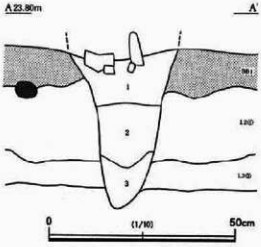
第4図　配石〔1：宮ヶ瀬上原ⅤP10・11号配石、2：同中原ⅤP1・2号配石〕・土坑〔3・4：葛原滝谷ⅣP1号土坑〕



第5図　デポ（石核原材）〔1：宮ヶ瀬サザランケV〕・炭化物集中1〔2：草柳一丁目B1中位、3・4：用田鳥居前IV〕







第6図　炭化物集中2（用田鳥居前Ⅳ大型炭化材出土状況）

第１表　礫群

遺跡No.	遺跡名	確認層位	文化層	遺構名	長軸 (m)	短軸 (m)	礫数 接合礫数	分布	礫の状態	礫群石材組成	備考 （共伴遺物等）
55	橋本	BB1 -L2	Ⅲ	礫群３	1.90	1.50	77	－	赤化：30、破損：45	砂岩59、硅岩15、他３	－
55	橋本	BB1 -L2	Ⅲ	礫群４	4.10	3.20	105	－	赤化：65、破損：85	砂岩85、硅岩18、他２	－
55	橋本	BB1 -L2	Ⅲ	礫群５	0.80	0.40	25	－	赤化：８、破損：12	砂岩23、硅岩２	－
55	橋本	BB1 -L2	Ⅲ	礫群６	2.50	1.90	138	－	赤化：28、破損：78	砂岩126、硅岩11、他１	－
55	橋本	BB1 -L2	Ⅲ	礫群７	3.70	2.40	70	－	赤化：14、破損：46	砂岩53、硅岩11、他６	－
55	橋本	BB1 -L2	Ⅲ	礫群８	1.90	1.40	79	－	赤化：40、破損：21	砂岩71、硅岩３、閃緑岩１、他４	－
55	橋本	BB1 -L2	Ⅲ	礫群９	0.80	0.60	28	－	赤化：12、破損：22	砂岩11、硅岩６、閃緑岩11	－
55	橋本	BB1 -L2	Ⅲ	礫群10	2.10	1.30	80	－	赤化：11、破損：25	砂岩77、硅岩３	－
55	橋本	BB1 -L2	Ⅲ	礫群11	3.90	3.00	67	－	赤化：11、破損：54	砂岩60、硅岩６、閃緑岩１	－
55	橋本	BB1 -L2	Ⅲ	礫群12	1.20	0.90	35	－	赤化：11、破損：27	砂岩28、硅岩１、閃緑岩６	－
57	下九沢山谷	BB1U -L	Ⅱ	礫群	－	－	－	散漫	－	－	－
57	下九沢山谷	L2	Ⅲ	礫群	－	－	－	密集	－	－	－
61	田名稲荷山 （B地区）	BB1L -L2	Ⅲ	礫群	3.00	1.00	11	散漫	赤化：10、スス：４、ヒビ：６、火撥：２、破損：４	閃緑岩２、輝緑岩１、細流凝灰岩１、硬砂岩３、火山礫凝灰岩１、玄武岩１、粗粒凝灰岩２	剥片２、ナイフ２
68	中村（C地区）	L2U	Ⅴ	１号礫群	3.30	2.00	4	散漫	赤化：４、ヒビ：	凝灰岩、硬砂岩	－
68	中村（C地区）	L2U	Ⅴ	２号礫群	1.50	1.50	15	集中	赤化：15、ヒビ：15、スス：有	凝灰岩、硬砂岩、安山岩	７ブロック重複
68	中村（C地区）	BB1L	Ⅴ	３号礫群	4.70	3.50	31	集中	赤化：31、スス：有、タール：有	閃緑岩、凝灰岩、粘板岩、硬砂岩、チャート	７ブロック重複
68	中村（C地区）	BB1L	Ⅴ	４号礫群	5.00	3.30	13	散漫	赤化：13、ヒビ：13、破損：13	硬砂岩、チャート	15ブロック重複
68	中村（C地区）	BB1M -L2U	Ⅴ	５号礫群	4.10	2.30	34	集中	赤化：34、ヒビ：34、破損：34	凝灰岩、凝灰角礫岩、硬砂岩、粘板岩	15・19ブロック一部重複
68	中村（C地区）	L2U	Ⅴ	６号礫群	0.90	0.50	13	集中	赤化：13、ヒビ：13、スス：有、タール：有	粘板岩、玄武岩、硬砂岩、凝灰角礫岩	－
68	中村（C地区）	BB1L -L2U	Ⅴ	７号礫群	6.20	3.70	44	散漫	赤化：多、ヒビ：多、破損：多	粘板岩、玄武岩、硬砂岩、凝灰角礫岩、閃緑岩	20～22ブロック重複
68	中村 （D～F地区）	L1H -BB1	Ⅴ	１号礫群	4.00	3.00	7	散漫	赤化：多	粘板岩１、硬砂岩６	ナイフ形石器、尖頭器、削器、ピエス、彫器、敲石、ＲＦ、ＵＦ、石刃、石核
68	中村 （D～F地区）	L1HL	Ⅴ	２号礫群	－	－	9	散漫	スス：２、破損：７	粘板岩６、チャート２、硬砂岩１	８ブロック重複
68	中村 （D～F地区）	BB1L	Ⅴ	３号礫群	5.50	4.00	36	集中	赤化：有、スス：有、タール：有、ヒビ：有、破損：34	チャート16、粘板岩６、硬砂岩13、凝灰角礫岩１	９ブロック重複
68	中村 （D～F地区）	BB1L～L2	Ⅴ	４号礫群	3.50	2.30	43	集中	赤化：43、破損：43	硬砂岩38、礫岩３、凝灰角礫岩２	12ブロック重複
68	中村 （D～F地区）	BB1L	Ⅴ	５号礫群	2.00	1.00	19	集中	赤化：有、スス：有、破損：13	硬砂岩11、閃緑岩５、粘板岩２、花崗岩１	15ブロック一部重複
68	中村 （D～F地区）	BB1L	Ⅴ	６号礫群	2.50	1.80	24	集中	赤化：有、スス：有、破損：17	硬砂岩12、凝灰角礫岩２、火山礫凝灰岩２、粘板岩３、閃緑岩２、粘板岩３、凝灰岩、チャート１	15ブロック重複
68	中村 （D～F地区）	BB1L	Ⅴ	７号礫群	4.00	3.00	62	集中	赤化：多、スス：多、タール：多	硬砂岩21、凝灰岩19、凝灰角礫岩14、粘板岩６、	16ブロック重複
68	中村 （D～F地区）	BB1L	Ⅴ	８号礫群	2.00	2.00	51	集中	赤化：有、スス：有、タール：有	チャート16、硬砂岩19、凝灰角礫岩11、粘板岩３、安山岩１、玄武岩１	17ブロック重複
70	栗原中丸	BB1M	Ⅴ	礫群No.１	4.30	4.10	39 (11)	散漫	赤化：７、スス：５、ヒビ：７、火撥：２、完形：４・破損：35	細粒凝灰岩１、粗粒凝灰岩３、火山礫凝灰岩５、硬砂岩２	No.１ブロックと重複 No.３礫群と接合
70	栗原中丸	BB1M	Ⅴ	礫群No.２	3.00	2.50	30 (12)	集中	赤化：９、スス：４、ヒビ：６、火撥：５、完形：５・破損：25	細粒凝灰岩１、粗粒凝灰岩１、火山礫凝灰岩１、凝灰角礫岩１、輝緑岩１、硬砂岩７	No.３ブロックと重複 No.３礫群と接合
70	栗原中丸	BB1M	Ⅴ	礫群No.３	3.60	3.40	50 (12)	集中	赤化：９、スス：３、ヒビ：９、火撥：４、完形：６・破損：44	細粒凝灰岩３、凝灰角礫岩１、火山礫凝灰岩４、輝緑岩１、硬砂岩２、不明１	No.４ブロックと重複 No.１・２礫群、No.６ブロック、N12-24区と接合

遺跡地	遺跡名	地形層位	文化層	遺構名	長軸（m）	短軸（m）	礫数 接合数	分布	礫の状態	礫群石材組成	備考（共作遺物等）
70	栗原中丸	BBⅢ	Ⅴ	礫群No.4	2.10	1.60	21 (5)	集中	赤化：3、スス：3、ヒビ：3、完形：1・破損：20	細粒凝灰岩2、粗粒凝灰岩1、凝灰角礫岩1、硬砂岩3	No.8ブロックと重複 No.6礫群、O13-17区と接合
70	栗原中丸	BBⅢ	Ⅴ	礫群No.5	2.60	1.80	20 (12)	集中	赤化：11、スス：5、ヒビ：7、火種：3、完形：7・破損：13	粗粒凝灰岩3、凝灰角礫岩1、火山礫凝灰岩1、粘板岩1、硬砂岩6	No.7ブロックと重複
70	栗原中丸	BBⅢ	Ⅴ	礫群No.6	3.10	2.60	22 (14)	集中	赤化：13、スス：5、ヒビ：8、火種：3、完形：8・破損：14	細粒凝灰岩1、粗粒凝灰岩3、凝灰角礫岩2、火山礫凝灰岩1、硬砂岩3、チャート1、不明1	No.8ブロックと重複 No.4礫群と接合
70	栗原中丸	BBⅢ	Ⅴ	礫群No.7	2.80	1.90	8 (3)	散種	赤化：2、スス：2、ヒビ：2、火種：1、完形：1・破損：7	粗粒凝灰岩1、玄武岩1、硬砂岩1	No.10ブロックと重複
70	栗原中丸	BBⅢ	Ⅴ	礫群No.8	2.50	1.10	14 (6)	集中	赤化：5、スス：2、ヒビ：4、完形：5・破損：9	細粒凝灰岩1、粗粒凝灰岩1、火山礫凝灰岩1、硬砂岩3	No.15ブロックと重複
70	栗原中丸	BBⅢ	Ⅴ	礫群No.9	3.50	2.40	38 (14)	集中	赤化：14、スス：5、ヒビ：5、火種：4、完形：5・破損：33	細粒凝灰岩1、粗粒凝灰岩2、火山礫凝灰岩1、安山岩3、硬砂岩7	No.16aブロックと重複
70	栗原中丸	BBⅢ	Ⅴ	礫群No.10	3.00	1.60	16 (11)	集中	赤化：10、スス：6、ヒビ：4、火種：2、完形：5・破損：11	細粒凝灰岩2、粗粒凝灰岩1、凝灰角礫岩1、火山礫凝灰岩1、閃緑岩2、硬砂岩3	No.17ブロックと重複
70	栗原中丸	BBⅢ	Ⅴ	礫群No.11	6.70	3.50	37 (20)	集中	赤化：26、スス：20、ヒビ：17、火種：3、完形：20・破損：17	細粒凝灰岩5、粗粒凝灰岩6、火山礫凝灰岩4、閃緑岩1、玄武岩1、硬砂岩11	No.14a・bブロックと重複 No.25礫群と接合
70	栗原中丸	BBⅢ	Ⅴ	礫群No.12	2.20	1.90	23 (12)	集中	赤化：12、スス：7、ヒビ：2、火種：4、完形：3・破損：20	細粒凝灰岩2、粗粒凝灰岩5、火山礫凝灰岩3、硬砂岩2	No.13ブロックと重複
70	栗原中丸	BBⅢ	Ⅴ	礫群No.13	2.20	0.60	10 (2)	集中	赤化：2、ヒビ：2、破損：10	火山礫凝灰岩2	No.19ブロックと重複
70	栗原中丸	BBⅢ	Ⅴ	礫群No.14	4.40	2.00	51 (9)	集中	赤化：7、スス：4、ヒビ：5、火種：4、完形：2・破損：49	粗粒凝灰岩1、安山岩1、玄武岩1、硬砂岩4、不明2	No.26ブロックと重複 No.15・21礫群と接合
70	栗原中丸	BBⅢ	Ⅴ	礫群No.15	2.40	2.10	15 (10)	散種	赤化：9、スス：3、ヒビ：2、完形：3・破損：12	細粒凝灰岩5、粗粒凝灰岩3、舞鶴岩1、玄武岩1	No.28bブロックと重複 No.14礫群、No.27ブロックと接合
70	栗原中丸	BBⅢ	Ⅴ	礫群No.16	3.80	2.70	21 (12)	集中	赤化：12、スス：10、ヒビ：10、火種：4、完形：6・破損：15	細粒凝灰岩2、粗粒凝灰岩4、火山礫凝灰岩4、硬砂岩2	No.31ブロックと重複
70	栗原中丸	BBⅢ	Ⅴ	礫群No.17	1.20	0.60	3 (3)	散種	赤化：3、スス：2、ヒビ：1、火種：2、完形：1・破損：2	凝灰角礫岩1、硬砂岩2	No.30ブロックと重複
70	栗原中丸	BBⅢ	Ⅴ	礫群No.18	2.40	0.20	4 (4)	散種	赤化：4、スス：3、ヒビ：3、火種：2、完形：2・破損：2	粗粒凝灰岩3、硬砂岩1	No.35ブロックと重複 No.16礫群と接合
70	栗原中丸	BBⅢ	Ⅴ	礫群No.19	3.40	2.10	34 (11)	集中	赤化：16、スス：7、ヒビ：6、火種：3、完形：2・破損：32	細粒凝灰岩3、粗粒凝灰岩4、凝灰角礫岩1、硬砂岩2、不明1	No.32ブロックと重複 No.20・33礫群、No.32ブロックと接合
70	栗原中丸	BBⅢ	Ⅴ	礫群No.20	3.40	2.20	28 (9)	集中	赤化：8、スス：3、ヒビ：6、火種：6、完形：1・破損：27	細粒凝灰岩2、粗粒凝灰岩3、凝灰角礫岩1、粘板岩1、硬砂岩1、不明1	No.35bブロックと重複 No.21・23・33礫群、No.33・35・35bブロックと接合
70	栗原中丸	BBⅢ	Ⅴ	礫群No.21	2.00	1.20	6 (5)	散種	赤化：4、スス：3、ヒビ：4、火種：3、完形：2・破損：6	無粒凝灰岩7 1、硬砂岩3、不明1	No.37ブロックと重複 No.14礫群、No.29ブロックと接合
70	栗原中丸	BBⅢ	Ⅴ	礫群No.22	2.90	1.80	14 (13)	集中	赤化：13、スス：11、ヒビ：5、火種：6、完形：8・破損：6	細粒凝灰岩4、粗粒凝灰岩2、凝灰角礫岩1、火山礫凝灰岩1、硬砂岩5	No.38ブロックと重複
70	栗原中丸	BBⅢ	Ⅴ	礫群No.23	2.70	2.40	27 (9)	集中	赤化：9、スス：7、ヒビ：3、火種：6、完形：2・破損：25	細粒凝灰岩1、粗粒凝灰岩3、凝灰角礫岩1、安山岩1、硬砂岩3	No.40bブロックと重複 No.24・25礫群と接合
70	栗原中丸	BBⅢ	Ⅴ	礫群No.24	1.70	1.00	8 (7)	集中	赤化：6、スス：3、ヒビ：3、火種：3、完形：4・破損：4	細粒凝灰岩2、粗粒凝灰岩2、凝灰角礫岩2、硬砂岩1	No.40cブロックと重複 No.23・25礫群と接合

遺跡地	遺跡名	層位	文化層	遺構名	長軸 (m)	短軸 (m)	礫数 接合礫数	分布	礫の状態	礫群石材組成	備考（共伴遺物等）
70	栗原中丸	BBIM	V	礫群No25	4.00	2.80	21 (15)	散漫	赤化：15、スス：5、ヒビ：10、火撥：5、完形：6・破損：15	細粒凝灰岩4、粗粒凝灰岩2、火山礫凝灰岩2、輝緑岩1、安山岩1、玄武岩1、硬砂岩3、不明1	No40ブロックと重複 B20-15BCと接合
70	栗原中丸	BBIM	V	礫群No26	1.00	0.50	6 (4)	集中	赤化：4、スス：2、ヒビ：2、火撥：1、破損：6	安山岩1、玄武岩3、硬砂岩1	No43ブロックと重複
70	栗原中丸	BBIM	V	礫群No27	3.20	2.60	15 (8)	集中	赤化：6、スス：2、ヒビ：2、火撥：4、完形：1・破損：14	細粒凝灰岩1、粗粒凝灰岩2、凝灰角礫岩1、玄武岩1、硬砂岩1	No43ブロックと重複 No26礫群と接合
70	栗原中丸	BBIM	V	礫群No28	3.10	3.00	25 (14)	集中	赤化：13、スス：6、ヒビ：6、火撥：4、完形：7・破損：18	細粒凝灰岩1、粗粒凝灰岩1、凝灰角礫岩1、火山礫凝灰岩2、玄武岩2、硬砂岩7	No45ブロックと重複 No44ブロックと接合
70	栗原中丸	BBIM	V	礫群No29	3.30	2.50	66 (13)	集中	赤化：13、スス：6、ヒビ：9、火撥：7、完形：1・破損：65	細粒凝灰岩3、粗粒凝灰岩3、凝灰角礫岩1、火山礫凝灰岩1、安山岩1、硬砂岩1	No46ブロックと重複 No25・26・27・30・31・34礫群、No32・42・43ブロックと接合
70	栗原中丸	BBIM	V	礫群No30	2.60	1.20	11 (5)	散漫	赤化：5、スス：4、ヒビ：4、火撥：2、完形：1・破損：10	細粒凝灰岩1、粗粒凝灰岩1、火山礫凝灰岩1、安山岩1、硬砂岩1	No47ブロックと重複
70	栗原中丸	BBIM	V	礫群No31	2.90	1.80	29 (7)	集中	赤化：7、スス：4、ヒビ：6、火撥：3、完形：2・破損：18	細粒凝灰岩1、粗粒凝灰岩1、凝灰角礫岩3、硬砂岩2	No48ブロックと重複 No32礫群、No49ブロックと接合
70	栗原中丸	BBIM	V	礫群No32	3.10	2.30	13 (5)	散漫	赤化：5、スス：3、ヒビ：4、火撥：2、破損：13	細粒凝灰岩1、粗粒凝灰岩2、硬砂岩2	No49ブロックと重複 No31礫群と接合
70	栗原中丸	BBIM	V	礫群No33	2.60	1.20	12 (8)	散漫	赤化：7、スス：4、ヒビ：4、火撥：3、完形：4・破損：8	細粒凝灰岩2、粗粒凝灰岩2、硬砂岩1、不明1	No24ブロックと重複 No36礫群と接合
70	栗原中丸	BBIM	V	礫群No34	4.10	2.70	25 (12)	散漫	赤化：13、スス：9、ヒビ：5、火撥：7、完形：5・破損：20	細粒凝灰岩1、粗粒凝灰岩2、火山礫凝灰岩1、安山岩1、硬砂岩4	No44ブロックと重複
70	栗原中丸	BBIM	V	礫群No35	3.40	1.50	20 (16)	集中	赤化：16、スス：14、ヒビ：14、火撥：2、完形：10・破損：10	粗粒凝灰岩4、凝灰角礫岩1、火山礫凝灰岩4、硬砂岩5	No21ブロックと重複 No11礫群と接合
70	栗原中丸	BBIM	V	礫群No36	2.50	1.30	21 (18)	集中	赤化：17、スス：11、ヒビ：10、火撥：3、完形：15・破損：6	細粒凝灰岩5、粗粒凝灰岩5、凝灰角礫岩1、火山礫凝灰岩2、硬砂岩5	No33ブロックと重複
70	栗原中丸	BBIM	V	礫群No37	2.80	1.70	12 (5)	集中	赤化：4、スス：2、火撥：1、完形：2・破損：9	細粒凝灰岩1、粗粒凝灰岩1、凝灰角礫岩1、安山岩1、硬砂岩1	No20ブロックと重複
76	下鶴間甲1号	BBI -L20	IV	1号礫群	2.20	1.20	35	散漫	赤化：32、完形：5・破損：34・ヒビ：6	砂岩1 2、凝灰岩13、ホルンフェルス4、花崗4、安山岩3、不明2	—
76	下鶴間甲1号	BBI -L20	IV	2号礫群	2.70	1.70	21	散漫	赤化：16、完形：8・破損：10・ヒビ：3	凝灰岩9、砂岩7、礫岩2、花岩1、安山岩1、頁岩1	—
77	月見野IVC	BBI	—	礫群	—	—	—	—	—	—	B1中層、下層から2基検出
81	月見野上野第一地点	BBILL	VI	第1号礫群	2.00	1.30	46	集中	—	—	—
81	月見野上野第一地点	BBILL	VI	第2号礫群	6.60	6.00	100	密集	—	—	—
81	月見野上野第一地点	BBILL	VI	第3号礫群	6.60	6.40	44	散漫	—	—	—
81	月見野上野第一地点	BBILL	VI	第4号礫群	6.80	6.80	230	密集	—	—	第3ブロック重複
81	月見野上野第一地点	BBILL	VI	第5号礫群	1.70	1.30	300	密集	—	—	第4ブロック重複
82	月見野上野第三地点	BBIL	III	1号礫群	2.00	2.20	57	集中	赤化：有、ヒビ：有、スス：有	凝灰岩、砂岩、玄武岩、ホルンフェルス	総重量12.46kg
85	長堀北	BBIL	VI	1号礫群	1.30	0.85	—	集中	—	—	—
85	長堀北	BBIL	VI	2号礫群	1.00	0.75	—	密集	—	—	—
85	長堀北	BBIL	VI	3号礫群	3.00	2.00	—	散漫	—	—	—
85	長堀北	BBIL	VI	4号礫群	1.20	0.70	—	密集	—	—	—
85	長堀北	BBIL	VI	5号礫群	2.60	1.30	—	散漫	—	—	—
85	長堀北	BBIL	VI	6号礫群	8.80	3.30	4	散漫	—	—	—
85	長堀北	BBIL	VI	7号礫群	0.20	0.10	3	集中	—	—	—
85	長堀北	BBIL	VI	8号礫群	0.60	0.30	3	散漫	—	—	—

遺跡No.	遺跡名	確認層位	文化層	遺構名	長軸(m)	短軸(m)	礫数	分布	礫の状態	礫群石材組成	備考(共伴遺物等)
85	長堀北	BBIL	Ⅵ	9号礫群	1.20	0.30	3	散漫	－	－	－
85	長堀北	BBIL	Ⅵ	10号礫群	1.30	0.90	7	散漫	－	－	－
85	長堀北	BBIL	Ⅵ	11号礫群	0.30	0.30	3	集中	－	－	－
85	長堀北	BBIL	Ⅵ	12号礫群	3.70	1.50	9	散漫	－	－	－
85	長堀北	BBIL	Ⅵ	13号礫群	0.50	0.10	2	散漫	－	－	－
86	下鶴間長堀	BBIL	Ⅲ	1礫群	2.50	1.60	－	集中	－	－	14礫群と接合
86	下鶴間長堀	BBIL	Ⅲ	2礫群	6.20	3.50	－	集中	－	－	周囲は散漫 10、11礫群と接合
86	下鶴間長堀	BBIL	Ⅲ	3礫群	1.70	0.80	－	散漫	－	－	14礫群と接合
86	下鶴間長堀	BBIL	Ⅲ	4礫群	0.80	0.50	－	密集	－	－	－
86	下鶴間長堀	BBIL	Ⅲ	5礫群	0.50	0.30	－	散漫	－	－	－
86	下鶴間長堀	BBIL	Ⅲ	6礫群	1.90	0.50	－	散漫	－	－	－
86	下鶴間長堀	BBIL	Ⅲ	7礫群	2.60	2.20	13	散漫	－	－	15礫群と接合
86	下鶴間長堀	BBIL	Ⅲ	8礫群	2.20	0.60	－	散漫	－	－	－
86	下鶴間長堀	BBIL	Ⅲ	9礫群	1.30	0.50	－	散漫	－	－	－
86	下鶴間長堀	BBIL	Ⅲ	10礫群	2.70	2.30	－	集中	－	－	2礫群と接合
86	下鶴間長堀	BBIL	Ⅲ	11礫群	2.10	1.50	－	集中	－	－	2礫群と接合
86	下鶴間長堀	BBIL	Ⅲ	12礫群	2.50	1.30	－	集中	－	－	－
86	下鶴間長堀	BBIL	Ⅲ	13礫群	1.50	0.60	－	集中	－	－	－
86	下鶴間長堀	BBIL	Ⅲ	14礫群	3.50	3.00	86	集中	－	－	1、3、16礫群と接合
86	下鶴間長堀	BBIL	Ⅲ	15礫群	0.70	0.50	－	－	－	－	－
86	下鶴間長堀	BBIL	Ⅲ	16礫群	2.00	0.60	7	散漫	－	－	－
86	下鶴間長堀	BBIL	Ⅲ	17礫群	3.00	1.70	176	集中	－	－	－
86	下鶴間長堀	BBIL	Ⅲ	18礫群	2.00	1.20	－	散漫	－	－	7、25礫群と接合
86	下鶴間長堀	BBIL	Ⅲ	19礫群	1.80	0.60	－	集中	－	－	－
86	下鶴間長堀	BBIL	Ⅲ	20礫群	1.80	0.80	－	散漫	－	－	－
86	下鶴間長堀	BBIL	Ⅲ	21礫群	0.90	0.50	18	集中	赤化：2、完形：10・破損：8	－	24礫群と接合
86	下鶴間長堀	BBIL	Ⅲ	22礫群	0.80	0.60	－	－	－	－	－
86	下鶴間長堀	BBIL	Ⅲ	23礫群	5.00	4.00	－	散漫	－	－	－
86	下鶴間長堀	BBIL	Ⅲ	24礫群	3.50	1.50	26	散漫	－	－	－
86	下鶴間長堀	BBIL	Ⅲ	25礫群	5.20	4.00	－	散漫	－	－	18礫群と接合
86	下鶴間長堀	BBIL	Ⅲ	26礫群	2.30	1.80	－	集中	－	－	14、21礫群と接合
86	下鶴間長堀	L2B	Ⅳ	礫群	5.00	5.00	39	散漫	－	－	－
87	長堀南	L2BU	Ⅳ	1号礫群	1.70	0.90	10	密集	赤化：10、スス：3、完形：3	礫岩1、砂岩4、安山岩2、閃緑岩1	2ユニット直下
87	長堀南	L2BU	Ⅳ	2号礫群	1.10	0.60	13	集中	赤化：13、スス：4、タール：2	礫岩2、砂岩6	2ユニット直下
87	長堀南	L2BU	Ⅳ	3号礫群	0.40	0.40	14	密集	赤化：14、スス：6、タール：1、完形：3	礫岩2、砂岩5、安山岩2、火砕岩1	－
87	長堀南	L2BU	Ⅳ	4号礫群	2.90	2.00	19	集中	赤化：19、スス：7、完形：7	礫岩3、砂岩8、安山岩8、ホルンフェルス1	－
87	長堀南	L2BU	Ⅳ	5号礫群	1.10	0.70	11	集中	赤化：11、スス：5、タール：1、完形：4	礫岩2、砂岩4、安山岩1、火砕岩1	－
87	長堀南	L2BU	Ⅳ	6号礫群	0.70	0.40	17	密集	赤化：17、スス：5、タール：1、完形：6	砂岩6、安山岩3、閃緑岩1、礫岩2	－
87	長堀南	L2BU	Ⅳ	7号礫群	1.00	0.50	28	密集	赤化：28、スス：9、タール：3、完形：11	安山岩7、礫岩4、砂岩6、閃緑岩1	9ユニット直下
87	長堀南	L2BU	Ⅳ	8号礫群	2.10	0.80	16	密集	赤化：14、スス：5、タール：2、完形：7	礫岩2、砂岩4、チャート1、安山岩5、閃緑岩1、ホルンフェルス1	－
87	長堀南	L2BU	Ⅳ	9号礫群	2.10	1.40	15	集中	赤化：15、スス：3、タール：1、完形：5	礫岩2、砂岩4、チャート3、安山岩1、火砕岩1	8ユニット直下
87	長堀南	L2BU	Ⅳ	10号礫群	2.40	1.80	40	集中	赤化：40、スス：6、完形：6	礫岩4、砂岩6、チャート6、閃緑岩1、閃緑岩1	8ユニット直下
87	長堀南	L2BU	Ⅳ	11号礫群	1.80	1.30	28	集中	赤化：28、スス：15、タール：2、完形：17	砂岩11、泥岩3、安山岩8、閃緑岩1、火砕岩1、その他2	8ユニット直下
87	長堀南	L2BU	Ⅳ	12号礫群	2.90	1.40	27	集中	赤化：27、スス：3、タール：2、完形：4	礫岩1、砂岩6、泥岩2、安山岩5、ホルンフェルス1	－
87	長堀南	L2BU	Ⅳ	13号礫群	1.30	0.40	26	密集	赤化：28、スス：3、完形：9	礫岩2、砂岩9、安山岩6、火砕2	－
87	長堀南	L2BU	Ⅳ	14号礫群	1.10	1.00	11	集中	赤化：11、スス：1、完形：2	礫岩1、砂岩2、安山岩2、火砕岩1、その他1	－
87	長堀南	L2BU	Ⅳ	15号礫群	1.50	1.20	20	集中	赤化：19、スス：4、完形：13	礫岩2、砂岩10、チャート1、安山岩5、閃緑岩2	－

遺跡番号	遺跡名	地形層位	文化層	遺構名	長軸（m）	短軸（m）	礫数 接合点数	分布	礫の状態	礫群石材組成	備考（共伴遺物等）
87	長堀南	L2DU	Ⅳ	16号礫群	0.70	0.50	10	集中	赤化：10、スス：6、タール：4、完形：7	礫岩3、砂岩1、安山岩3、閃緑岩1、ホルンフェルス1、その他1	11ユニット直下
87	長堀南	L2DU	Ⅳ	17号礫群	2.90	2.30	67	密集	赤化：66、スス：7、タール：1、完形：7	礫岩2、砂岩19、チャート2、安山岩19、ホルンフェルス1	－
87	長堀南	L2DU	Ⅳ	18号礫群	1.60	1.50	47	集中	赤化：47、スス：15、タール：3、完形：6	礫岩3、砂岩7、頁岩1、安山岩18、閃緑岩1、ホルンフェルス2	12ユニット直下
87	長堀南	L2DU	Ⅳ	19号礫群	1.00	0.60	13	集中	赤化：13、スス：9、タール：3、完形：6	礫岩1、砂岩4、安山岩6、閃緑岩1、その他1	－
87	長堀南	L2DU	Ⅳ	20号礫群	2.00	0.90	60	集中	赤化：60、スス：9、完形：4	礫岩2、砂岩11、安山岩19	14ユニット直下
87	長堀南	L2DU	Ⅳ	21号礫群	0.70	0.50	10	集中	赤化：10、完形：	砂岩1、安山岩5	15ユニット直下
87	長堀南	L2DU	Ⅳ	22号礫群	2.30	1.60	27	散漫	赤化：27、スス：	砂岩1、チャート1、安山	15ユニット直下
87	長堀南	L2DU	Ⅳ	23号礫群	0.90	0.50	20	密集	赤化：20、スス：16、タール：4、完形：9	礫岩1、砂岩5、安山岩8、火砕岩2	－
87	長堀南	L2N	Ⅴ	1号礫群	0.70	0.30	18	集中	赤化：18、スス：15、タール：8、完形：12	砂岩7、チャート1、安山岩3、閃緑岩2、火砕岩3	1ユニット直下
88	深見諏訪山	BB1L	Ⅳ	9号礫群	2.20	2.00	34	散漫	－	－	－
88	深見諏訪山	BB1L	Ⅳ	15号礫群	1.30	0.70	8	散漫	－	－	－
92	上草柳	BB1N	Ⅰ	a礫群	0.60	0.50	19	集中	－	－	－
92	上草柳	BB1N	Ⅰ	b、c礫群	4.20	2.30	33	散漫	－	－	－
101	吉岡B区	BB1L	Ⅳ	礫群1	5	2	81	集中	完形：2、半欠：2、赤化：65、スス：65、タール：65、赤化のみ：5、付着物のみ：8	安山岩4、細粒凝灰岩29、中粒凝灰岩41、細粒頁レイ岩3、砂岩4	石器集中1と重なる 接合機会む
107	今田	BB1L or L2DU	Ⅲ	1号礫群	1.10	1.10	81	密集	－	砂岩39、閃緑岩13、ホルンフェルス5、火砕岩4、チャート3、凝灰岩3、安山岩3、礫岩3、その他4	いずれの礫群も規模は小さいが出土点数は多く、分布密度は高い また、2基検出されているユニットとは分布は重ならない
107	今田	BB1L or L2DU	Ⅲ	2号礫群	1.10	0.80	40	密集	－	砂岩20、閃緑岩5、火砕岩3、安山岩2、ホルンフェルス1、チャート1、その	
107	今田	BB1L or L2DU	Ⅲ	3号礫群	0.80	0.60	61	密集	－	砂岩35、閃緑岩5、ホルンフェルス4、火砕岩6、チャート3、凝灰岩2、安山岩1、礫岩3、その他4	
107	今田	BB1L or L2DU	Ⅲ	4号礫群	0.60	0.50	28	密集	－	砂岩16、火砕岩5、安山岩2、閃緑岩1、その他4	
118	慶應SFC	BB1M -L2M	Ⅲ	第8調査区第1礫集中部	0.30	0.24	4	密集	赤化	安山岩4	集中部以外の礫4点を含め、計8点の接合が確認。長さ15cmの完形各礫となる 同剥に5点の礫
118	慶應SFC	BB1M -L2M	Ⅲ	第8調査区第2礫集中	3.04	1.16	15	やや密集	赤化：12、完形：2・破砕：13	硬砂岩14、安山岩1	接合はいずれも近距離の資料同士
118	慶應SFC	BB1M -L2M	Ⅲ	第8調査区第3礫集中	1.40	1.28	4	散漫	赤化：3、完形：3・破砕：2	ホルンフェルス1、砂岩3	接合は集中部内1例
118	慶應SFC	BB1M -L2M	Ⅲ	第8調査区第4礫集中部	3.00	1.80	37	密集	赤化：31、完形：17・破砕：20	細粒凝灰岩11、硬砂岩9、砂岩8、安山岩7、頁岩1、不明1	接合は集中部内で5例確認 接合状態は3/4以上の遺存率
118	慶應SFC	BB1M -L2M	Ⅲ	第8調査区第5礫集中部	1.08	0.48	5	やや密集	赤化：3、完形：4	砂岩2、硬砂岩1、安山岩1、細粒凝灰岩1	接合は第7礫集中部との間で1例 距離5.2m
118	慶應SFC	BB1M -L2M	Ⅲ	第8調査区第6礫集中	0.80	0.58	4	やや密集	赤化：4、完形：	安山岩1、砂岩1、硬砂岩1、細粒凝灰岩1	－
118	慶應SFC	BB1M -L2M	Ⅲ	第8調査区第7礫集中部	0.74	0.68	3	散漫	完形：1・破砕：2	砂岩2、安山岩1	接合は集中部内で1例、第6礫集中部との間で1例確認 第5礫集中部との距離5.2m 第9石器集中部が共伴（E F）
120	川尻	BB1U	Ⅳ	1号礫群	2.40	2.00	35	集中	赤化：35、スス：33、タール：23、完形：3・破損：32	砂岩24、頁岩6、凝灰質砂岩4、凝灰質泥岩1	第1ブロックと重複
120	川尻	BB1U	Ⅳ	2号礫群	3.80	2.50	38	集中	赤化：38、スス：6、タール：6、完形：5・破損：33	砂岩13、頁岩11、凝灰質砂岩13、ホルンフェルス1	第7ブロックと重複

遺跡No.	遺跡名	確認層位	文化層	遺構名	長軸 (m)	短軸 (m)	礫数	分布	礫の状態	礫群石材組成	備考 (共伴遺物等)
127	宮ヶ瀬上原 (No.13)	BBIN -L	V	P1号礫群	1.00	1.00	10	散漫	赤化：10、スス：2、タール：2、完形：1、剥落：2	硬質砂岩	炭化物はカラマツ属 orトウヒ属 19,470±100y.B.P (AMS法)
127	宮ヶ瀬上原 (No.13)	BBIN -L	V	P2号礫群	3.00	1.00	29	集中	赤化：23、スス：20、タール：20、完形：1・ヒビ：2、剥落：4	粗粒凝灰岩6、硬質砂岩3、中粒凝灰岩2、硬質中粒凝灰岩1	－
127	宮ヶ瀬上原 (No.13)	BBIN -L	V	P3号礫群	1.50	1.50	17	散漫	赤化：14、スス：8、タール：8、完形3、ヒビ：7	安山岩5、硬質砂岩3、中粒凝灰岩2、硬質細粒凝灰岩1、硬質中粒凝灰岩1	－
127	宮ヶ瀬上原 (No.13)	BBIN -L	V	P4号礫群	3.00	2.50	16	散漫	赤化：11、スス：6、タール：6、完形：1、ヒビ：8	軟質細粒凝灰岩3、硬質砂岩2、粗粒凝灰岩1、中粒凝灰岩1、砂岩1	－
127	宮ヶ瀬上原 (No.13)	BBIN -L	V	P5号礫群	1.30	1.30	6	散漫	赤化：6、完形：2、ヒビ：3	流紋岩質凝灰岩1、安山岩1、礫岩1、中粒凝灰岩1、硬質砂岩1	炭化物は径0.7mの範囲に集中
127	宮ヶ瀬上原 (No.13)	BBIN -L	V	P6号礫群	2.50	1.50	13	散漫	赤化：8、スス：6、タール：6、完形：1、ヒビ：4	粗粒凝灰岩5、硬質砂岩4、安山岩2、中粒凝灰岩1、礫岩1	－
127	宮ヶ瀬上原 (No.13)	BBIN -L	V	P7号礫群	1.50	1.50	7	散漫	赤化：6、完形：1、ヒビ：2	中粒凝灰岩2、流紋岩質凝灰岩1、火山礫凝灰岩1、石英閃緑岩1、安山岩1	－
127	宮ヶ瀬上原 (No.13)	BBIN -L	V	P8号礫群	1.00	0.30	3	散漫	赤化：4、スス：1、タール：1、完形：1、ヒビ：2	粗粒凝灰岩2、流紋岩質凝灰岩1、中粒凝灰岩1、火山礫凝灰岩1	－
127	宮ヶ瀬上原 (No.13)	BBIN -L	V	P9号礫群	1.60	－	5	直線	赤化：3、スス：2、タール：2、完形：2、剥落：3、ヒビ：3	硬質砂岩1、軟質細粒凝灰岩1	－
171	原口	BBIL 相当	I	1号礫群	0.55	0.30	4	散漫	赤化：4、破砕：4	－	剥片石器1
171	原口	BBIL 相当	I	2号礫群	0.70	0.45	11	集中	赤化：11、破砕：8	－	剥片石器1
171	原口	BBIL 相当	I	3号礫群	1.00	0.80	17	密集	破砕：14、赤化	－	剥片石器7
171	原口	BBIL 相当	I	4号礫群	2.80	0.80	34	集中	赤化、破砕あり	－	剥片石器14
183	月見野ⅢA	BB1	－	礫群	－	－	－	－	－	－	B1上層、下層、L2層から6基検出
183	月見野ⅢB	BB1	－	礫群	－	－	－	－	－	－	B1中層から3基検出
185	県営 高座渋谷団地内	BBILL	Ⅳ	1号礫群	2.40	1.60	66	集中	赤化、破損顕著	－	周辺部は散漫
185	県営 高座渋谷団地内	BBILL	Ⅳ	2号礫群	2.40	2.40	52	集中	－	－	周辺部は散漫
185	県営 高座渋谷団地内	BBILL	Ⅳ	3号礫群	2.00	1.10	9	散漫	赤化：9、破損：9	－	－
185	県営 高座渋谷団地内	BBILL	Ⅳ	4号礫群	3.20	0.30	3	散漫	全点赤化、破損	－	－
186	上草柳第4地点	BBIN	I (a)	礫群	3.30	3.30	75	散漫	25個体、赤化、スス	－	－
187	月見野Ⅰ	BBIL	－	礫群	－	－	－	－	－	－	2基検出
188	月見野Ⅱ	BB1	－	9号礫群	0.70	0.50	－	集中	－	－	－
188	月見野Ⅱ	BB1	－	10号礫群	1.40	1.20	－	集中	－	－	－
188	月見野Ⅱ	BB1	－	11号礫群	1.20	0.50	－	集中	－	－	－
188	月見野Ⅱ	BB1	－	12号礫群	1.70	1.20	－	集中	－	－	－
188	月見野Ⅱ	BB1	－	13号礫群	1.00	0.80	54	集中	－	－	－
188	月見野Ⅱ	BB1	－	14号礫群	1.80	1.20	57	集中	－	－	－
188	月見野Ⅱ	BB1	－	15号礫群	1.20	0.80	132	密集	－	－	－
216	下森鹿島	BB1L	Ⅲ	1号礫群	0.50	0.30	23	密集	赤化：23、スス：6、タール：1、完形：9・破損：14	砂岩3、チャート4、閃緑岩3、安山岩3、泥岩1、その他1	3号礫群と接合
216	下森鹿島	BB1L	Ⅲ	2号礫群	0.80	0.60	29	密集	赤化：29、スス：20、完形：11・破損：18	砂岩9、凝灰岩1、火砕岩2、閃緑岩3、安山岩7、泥岩1、その他4	－
216	下森鹿島	BB1L	Ⅲ	3号礫群	2.00	1.60	42	集中	赤化：45、スス：5、完形：15・破損：27	砂岩12、チャート3、火砕岩2、閃緑岩4、安山岩4、礫岩2、その他5	1号礫群と接合
216	下森鹿島	BB1L	Ⅲ	4号礫群	0.50	0.50	35	密集	赤化：35、スス：9、タール：1、完形：16・破損：19	砂岩21、チャート1、凝灰岩1、火砕岩4、閃緑岩1、安山岩3、泥岩1、その他2	10号礫群と接合

遺跡No.	遺跡名	確認層位	文化層	遺構名	長軸 (m)	短軸 (m)	礫数 接合礫数	分布	礫の状態	礫群石材組成	備考 (共伴遺物等)
216	下森鹿島	B81L	Ⅲ	5号礫群	1.00	0.70	48	密集	赤化：49、スス：25、タール：2、完形：31・破損：17	砂岩9、チャート4、凝灰岩3、火砕岩7、閃緑岩4、安山岩10、泥岩5、礫岩1、その他5	−
216	下森鹿島	B81L	Ⅲ	6号礫群	2.60	1.90	214	密集	赤化：210、スス：37、タール：1、完形：65・破損：149	砂岩58、チャート11、凝灰岩12、火砕岩8、閃緑岩17、安山岩37、泥岩4、礫岩4、その他10	−
216	下森鹿島	B81L	Ⅲ	7号礫群	1.40	0.60	44	密集	赤化：44、スス：15、完形：27・破損：17	砂岩11、凝灰岩1、火砕岩4、閃緑岩5、安山岩13、泥岩2、礫岩2、その他4	−
216	下森鹿島	B81L	Ⅲ	8号礫群	1.80	0.40	11	集中	赤化：11、スス：1、タール：3、破損：11	砂岩2、凝灰岩1、火砕岩3、安山岩3、その他1	9号礫群と接合
216	下森鹿島	B81L	Ⅲ	9号礫群	1.80	0.70	9	散漫	赤化：9、破損：	安山岩4、泥岩1、その他	8号礫群と接合
216	下森鹿島	B81L	Ⅲ	10号礫群	0.80	0.60	24	密集	赤化：24、スス：3、破損：24	砂岩2、凝灰岩1、火砕岩1、閃緑岩6、安山岩6、泥岩1、その他1	4号礫群と接合
217	田名塩田原	B81U-M	Ⅱ	1号礫群	1.80	−	2	散漫	−	−	第2ブロックと重複
217	田名塩田原	B81U-M	Ⅱ	2号礫群	2.40	0.40	3	散漫	−	−	−
217	田名塩田原	B81U-M	Ⅱ	3号礫群	4.00	−	2	散漫	−	−	第1ブロックと重複
217	田名塩田原	B81M	Ⅲ	1号礫群	5.20	2.40	11	集中	−	−	第2ブロックと重複
217	田名塩田原	B81M	Ⅲ	2号礫群	4.20	3.00	13	集中	−	−	第1ブロックと重複
219	藤沢市No.419 第1地点	B81	Ⅱ	1号 礫集中部	2.00	1.00	3	散漫	−	凝灰岩2、頁岩1	全て別母岩
219	藤沢市No.419 第2地点	B81L-L2	Ⅲ	1号 礫集中部	5.50	4.50	65	やや散漫	−	中粒凝灰岩108、硬質中粒凝灰岩26、砂岩53、ホルンフェルス16、火山礫凝灰岩12、安山岩/斑レイ岩7、流紋岩1、閃緑岩/硬質砂岩18、礫岩2、チャート/粘板岩1	スクレイパー1、二次加工剥片1、使用剥片2、ハンマーストーン1、剥片6、砕片3が共伴
219	藤沢市No.419 第2地点	B81L-L2	Ⅲ	2号 礫集中部	5.70	4.00	204	やや密集	−	中粒凝灰岩108、硬質中粒凝灰岩26、砂岩53、ホルンフェルス16、火山礫凝灰岩12、安山岩/斑レイ岩7、流紋岩1、閃緑岩/硬質砂岩18、礫岩2、チャート/粘板岩1	二次加工剥片1、石核1、剥片1が共伴
219	藤沢市No.419 第5地点	B81L-L2	Ⅱ	1号 礫集中部	5.00	2.50	43	やや密集	−	中粒凝灰岩14、硬質中粒凝灰岩13、閃緑岩5、火山礫凝灰岩4、硬質砂岩3、ホルンフェルス2、安山岩1、チャート1	石核3、剥片1が共伴
228	相模野No.35	L1S-B82U	−	礫群	−	−	−	−	−	−	断面観察で4基確認
231	相模野No.61	L2	−	礫群	−	−	−	−	−	−	断面観察で2基確認
239	大塚東	Ⅱ-Ⅲ	−	3号集石	1.00	0.40	10	散漫	赤化	シルト岩	ナイフ形石器2、加工痕のある剥片5、使用痕のある剥片2、剥片9、石核1
279	相模野No.72	L2	−	礫群	−	−	−	−	−	−	断面観察で1基確認
323	神明若宮A地区	L2U	Ⅲ	1号礫群	2.40	1.60	70	集中	赤化：11、完形：11、破損：59	−	−
323	神明若宮A地区	L2U	Ⅲ	2号礫群	0.80	0.80	23	集中	赤化：14、完形：14、破損：9	−	3号礫群と接合
323	神明若宮A地区	L2U	Ⅲ	3号礫群	1.20	0.60	15	散漫	赤化：4、完形：4、破損：11	−	2号礫群と接合
323	神明若宮A地区	L2U	Ⅲ	4号礫群	0.60	0.10	2	散漫	赤化：2、破損：2	−	−
323	神明若宮C地区	B81L	Ⅱ	1号礫群	0.30	0.10	2	散漫	赤化：2、破損：2	−	−
325	月見野上野 第5地点	B81L	Ⅳ	1号礫群	3.60	1.20	6	散漫	−	−	−
325	月見野上野 第5地点	B81L	Ⅳ	2号礫群	2.50	1.00	3	散漫	−	−	−
329	大和市No.202	B81U	Ⅱ	1号礫群	1.20	0.95	29	集中	赤化：29、ヒビ：29、スス：29	中粒凝灰岩13、細粒凝灰岩5、砂岩4、輝緑岩2、安山岩2、斑レイ岩1、流紋岩1、流紋岩質凝灰岩1、アプライト1	石材構成は境川中島橋付近の河床礫と共通
333	大和市No.210	B81L-L2U	Ⅱ	1号礫群	2.40	2.40	200	密集	赤化：33、スス：33、タール：33、完形：33	粗粒凝灰岩、火山礫凝灰岩、ホルンフェルス、斑レイ岩	大半が1m×1mに集中。第4、6号礫群と接合

遺跡No.	遺跡名	確認層位	文化層	遺構名	長軸(m)	短軸(m)	礫数 接合後数	分布	礫の状態	礫群石材組成	備考(共伴遺物等)
333	大和市No.210	BB1L-L2U	Ⅱ	2号礫群	2.20	0.80	51	集中	赤化：17、スス：17、タール：17、完形：17	粗粒凝灰岩、火山礫凝灰岩、砂岩	大半が1m×0.6mに集中
333	大和市No.210	BB1L-L2U	Ⅱ	3号礫群	1.50	0.80	19	散漫	赤化：17、スス：17、タール：17、完形：3	凝灰岩	−
333	大和市No.210	BB1L-L2U	Ⅱ	4号礫群	1.30	0.80	5	散漫	赤化：有、スス：有、タール：有、完形：1・破損：4	凝灰岩、チャート	第1、6号礫群と接合
333	大和市No.210	BB1L-L2U	Ⅱ	5号礫群	0.60	0.20	3	散漫	−	凝灰岩	−
333	大和市No.210	BB1L-L2U	Ⅱ	6号礫群	0.80	0.40	7	散漫	破損：7	凝灰岩	第1、4号礫群と接合
334	福田丙二ノ区	BB1L	Ⅱ	1号礫群	2.50	1.50	9	散漫	赤化：9、スス：8、タール：8、完形：2・破損：6	中粒凝灰岩7、粗粒凝灰岩1、斑レイ岩1	1号ブロックと重複 2号礫群と接合関係 内側に炭化物
334	福田丙二ノ区	BB1L	Ⅱ	2号礫群	4.00	2.00	207	密集	赤化：203、スス：203、完形：12・破損：195	中粒凝灰岩122、砂岩42、安山岩、閃緑岩、斑レイ岩、中斑レイ岩、粗粒凝灰岩、硬質細粒凝灰岩、流紋岩質凝灰岩、ホルンフェルス、チャート、頁岩	2ブロックと重複 1号・5号礫群と接合関係 集中を囲むように炭化物
334	福田丙二ノ区	BB1L	Ⅱ	3号礫群	3.50	3.00	21	散漫	赤化：18、完形：1・破損：20	砂岩8、閃緑岩6、中粒凝灰岩6、流紋岩質凝灰岩1	3ブロックと重複 4・7号礫群と接合関係 広範囲に炭化物
334	福田丙二ノ区	BB1L	Ⅱ	4号礫群	4.00	2.50	92	散漫	赤化：90、スス：90、タール：90、完形：6・破損：86	中粒凝灰岩30、砂岩27、粗粒凝灰岩19	9ブロックと重複 3・7号礫群と接合関係 炭化物の分布と重なる
334	福田丙二ノ区	BB1L	Ⅱ	5号礫群	2.50	2.00	49	集中	赤化：49、完形：5・破損：44	中粒凝灰岩29、チャート5、砂岩4、中粒斑レイ岩4、粗粒凝灰岩、輝緑岩、閃緑岩、硬質細粒凝灰岩	10ブロックと重複 2号礫群と接合
334	福田丙二ノ区	BB1L	Ⅱ	6号礫群	1.60	1.50	13	集中	赤化：13、スス：13、タール：13、完形：2・破損：11	中粒凝灰岩7、砂岩2、、流紋岩1、輝緑岩、ホルンフェルス、流紋岩質凝灰岩	11ブロックと重複
334	福田丙二ノ区	BB1L	Ⅱ	7号礫群	0.80	2.20	27	散漫	赤化：27、スス・タール：27、完形：8・破損：19	中粒凝灰岩7、流紋岩質凝灰岩4、硬質細粒凝灰岩3、斑レイ岩3、砂岩3、粗粒凝灰岩2、流紋岩2、頁岩2、ホルンフェルス1	13号ブロックと重複 4号礫群と接合関係
334	福田丙二ノ区	BB1L	Ⅱ	8号礫群	0.60	0.30	11	密集	赤化：11、完形：5、破損：6	中粒凝灰岩6、砂岩2、チャート1、ホルンフェル	配石の可能性あり
335	用田鳥居前	BB1L	Ⅲ	第2石器集中地点	3.80	3.40	46	やや密集	赤化：46	中粒凝灰岩35、硬質細粒凝灰岩5、砂岩3、ホルンフェルス1、流紋岩1、閃緑岩1	集中約2.6m×1.6m 石核（硬質細粒凝灰岩1）、剥片(硬質細粒凝灰岩4、黒曜石1)が共伴
337	大塚戸	L1HL-BB1L	Ⅱ	1号礫群	3.60	1.20	6	散漫	−	−	−
337	大塚戸	BB1	Ⅱ	2号礫群	1.80	0.40	3	散漫	−	−	−

第2表　炉址

遺跡No.	遺跡名	確認層位	文化層	遺構名	長軸(m)	短軸(m)	掘込みの有無	礫数	礫分布	礫の状態	石材組成	備考
126	宮ヶ瀬中原(No.13c)	BB1M-L	Ⅴ	P1号炉址	0.65	0.55	無	31	-	完形：8、赤化：25、剥落：3、ヒビ：20、スス：1、タール：5	軟質細粒凝灰岩：5、中粒凝灰岩：1、粗粒凝灰岩：1、火山礫凝灰岩：3、斑れい岩：1、硬質砂岩：4、硬質中粒凝灰岩：1	叩石：1、剥片：3、砕片：1含む 18920±100y.B.P.(AMS法)
127	宮ヶ瀬上原(No.13)	BB1M-L	Ⅴ	P1号炉址	0.75	0.65	無	-	-	炭化物分布：中央部（0.3×0.4m）多量 カラマツ属orトウヒ属19240±100y.B.P（AMS法）ナイフ形石器1		
127	宮ヶ瀬上原(No.13)	BB1M-L	Ⅴ	P2号炉址	0.75	0.60	無	5	散漫	完形：3、赤化：4、剥落：2、ヒビ：2	中粒凝灰岩：3、硬質砂岩：1、斑れい岩：1	炭化物分布：全面 掻器伴う
127	宮ヶ瀬上原(No.13)	BB1M-L	Ⅴ	P3号炉址	0.30	0.25	無	10	散漫	完形：2、赤化：4、剥落：1、ヒビ：4、スス：1、タール：1	粗粒凝灰岩：1、安山岩：1、硬質砂岩：1、火山礫凝灰岩：2	炭化物分布：全面

第3表　配石

遺跡No.	遺跡名	確認層位	文化層	遺構名	長軸(m)	短軸(m)	礫数	分布	礫の状態	石材組成	備考(共伴遺物等)
87	長堀南	L3UU	Ⅳ	1号配石	1.00	0.30	3	−	−	−	台石など
126	宮ヶ瀬中原(No13c)	BB1M-L	Ⅴ	P1号配石	−	−	1	−	赤化	粗粒凝灰岩	1ブロック内
126	宮ヶ瀬中原(No13c)	BB1M-L	Ⅴ	P2号配石	−	−	1	−	赤化、スス、タール	中粒凝灰岩	1ブロック内
126	宮ヶ瀬中原(No13c)	BB1M-L	Ⅴ	P3号配石	0.80	−	2	−	−	硬質砂岩	2ブロック内
126	宮ヶ瀬中原(No13c)	BB1M-L	Ⅴ	P4号配石	0.55	−	2	−	赤化：1	中粒凝灰岩	4ブロック内
127	宮ヶ瀬上原(No13)	BB1M-L	Ⅴ	P1号配石	0.50	0.50	3	集中	赤化：3、ヒビ：3、スス：3、タール：3、剥落：1	粗粒凝灰岩1、軟質細粒凝灰岩1	−
127	宮ヶ瀬上原(No13)	BB1M-L	Ⅴ	P2号配石	0.50	−	2	−	完形：2、赤化：2、スス：1、タール：1	硬質砂岩1、硬質細粒凝灰岩1	−
127	宮ヶ瀬上原(No13)	BB1M-L	Ⅴ	P3号配石	0.50	−	2	−	完形：1、赤化：2、ヒビ：2	中粒凝灰岩2	−
127	宮ヶ瀬上原(No13)	BB1M-L	Ⅴ	P4号配石	−	−	1	−	赤化	火山礫凝灰岩	−
127	宮ヶ瀬上原(No13)	BB1M-L	Ⅴ	P5号配石	0.40	−	2	−	完形：1、赤化：2、ヒビ：2、剥落：1	中粒凝灰岩、安山岩	−
127	宮ヶ瀬上原(No13)	BB1M-L	Ⅴ	P6号配石	0.70	−	2	−	赤化：2、ヒビ：2	中粒凝灰岩、火山礫凝灰岩	−
127	宮ヶ瀬上原(No13)	BB1M-L	Ⅴ	P7号配石	−	−	1	−	赤化	石英閃緑岩	−
127	宮ヶ瀬上原(No13)	BB1M-L	Ⅴ	P8号配石	0.75	−	3	−	赤化：3、ヒビ：2、剥落：3	中粒凝灰岩2、火山礫凝灰岩1	−
127	宮ヶ瀬上原(No13)	BB1M-L	Ⅴ	P9号配石	0.25	−	2	−	赤化：2、ヒビ：2	安山岩	−
127	宮ヶ瀬上原(No13)	BB1M-L	Ⅴ	P10号配石	2.00	2.00	5	集中	完形：1、赤化：5、ヒビ：5、剥落：1	中粒凝灰岩2、安山岩2、硬質砂岩1	−
127	宮ヶ瀬上原(No13)	BB1M-L	Ⅴ	P11号配石	0.35	−	2	−	赤化：2、ヒビ：1、スス：1、タール：1	硬質砂岩1、安山岩1	−
127	宮ヶ瀬上原(No13)	BB1M-L	Ⅴ	P12号配石	−	−	1	−	完形	安山岩	−
128	宮ヶ瀬サザランケ(No12)	BB1M-L	Ⅴ	P2号配石	0.30	−	2	−	完形：1、赤化：2、ヒビ：2、タール：2	火山礫凝灰岩	−

第4表　デポ（石核原材集積）

遺跡No.	遺跡名	確認層位	文化層	遺構名	長軸(m)	短軸(m)	遺物数	分布	遺物の様相	石材組成	備考
128	宮ヶ瀬サザランケ(No12)	BB1L-L2U	Ⅴ	石核原材集積	0.20	0.20	2	密着	2点の遺物が密着して出土	硬質細粒凝灰岩	周囲に遺物見られない

第5表　炭化物集中

遺跡No.	遺跡名	確認層位	文化層	遺構名	長軸(m)	短軸(m)	備考（共伴遺物等）
10	橋本	−	Ⅲ	炭化物片集中ヶ所9	−	−	記述及び明確な図無し、詳細不明
118	慶應SFC	L1H-BB1	Ⅲ	第8調査区第1炭化物	1.36	0.94	分布の中心はB1
118	慶應SFC	BB0-L2	Ⅲ	第8調査区第2炭化物	1.40	1.26	分布の中心はB1
118	慶應SFC	BB1	Ⅲ	第8調査区第3炭化	1.92	1.80	−
192	草柳1丁目	BB1M	−	1号炭化物集中	1.50	1.20	−
219	藤沢市No419 第2地点	BB1L-L2	Ⅲ	1号炭化物集中部	1.50	1.20	炭化物は径2～5㎜程度 分布は比較的散漫
335	用田鳥居前	BB1L	Ⅳ	第3石器集中地点内	4.60	2.90	石器集中地点内に、2個所の炭化物集中が認められる 石器の出土状況は、この2個所の炭化物集中を取り囲むような状況で出土してる
335	用田鳥居前	BB1L	Ⅳ	大型炭化材集中部	1.30	1.30	5個所の集中部が検出されている　板状の炭化材が直立した状態で出土した第2集中部の下部からは、直径28cm・深さ42cmを測るピットが検出されている　また、周辺からは6667点におよぶ炭化物粒も出土しており、炭化物粒を含めた分布範囲は約6.7m×4.7mとなる
336	葛原滝谷	BB1L	Ⅳ	第1大型炭化材集中部	1.22	0.65	炭化材(計6点)は比較的小型であり、横たわった状態で出土
336	葛原滝谷	BB1L	Ⅳ	第2大型炭化材集中部	0.78	0.42	炭化材(計6点)は横たわった状態で出土　この内の1点は、最大長25.5cm・最大幅12.0cm・最大厚5.6cmを測る大型のもの　また、下部からは71号土坑が検出されている
336	葛原滝谷	BB1L	Ⅳ	第3大型炭化材集中	1.50	0.36	計3点出土した炭化材のうち、2点はほぼ直立した状態で出土

第6表　礫群（補遺編）

遺跡No.	遺跡名	確認層位	文化層	遺構名	長軸(m)	短軸(m)	礫数(接合後数)	分布	礫の状態	礫群石材組成	備考(共伴遺物等)
157	古淵B	LIHL-BB1M	2a	1号礫群	3.20	2.30	64		赤化：64、破損：32	チャート4、安山岩21、砂岩39、	5号ユニット重複
157	古淵B	LIHL-BB1M	2a	2号礫群	3.50	1.20	50		赤化：47、スス：43、タール：6、破損：28	チャート2、安山岩21、砂岩26、頁岩1	
157	古淵B	LIHM-BB1U	2a	11号礫群	2.90	2.20	51		赤化：50、スス：28、タール：3、破損：20	チャート6、安山岩7、砂岩37	10号aユニット重複
157	古淵B	LIHL	2a	12号礫群	2.10	1.90	49	密集	赤化：40、スス：22、タール：7、破損：27	チャート9、安山岩10、砂岩30	10号bユニット重複
157	古淵B	BB1U-L2U	2a	16号礫群	3.20	3.10	35		赤化：29、スス：21、タール：7、破損：34	チャート2、安山岩1、砂岩33	38号ユニット重複
157	古淵B	BB1U	2a	18号礫群	4.80	4.10	16	散漫	赤化：16、スス：6、タール：1、破損：12	チャート1、安山岩1、砂岩13、頁岩1	3号a・bユニット重複
157	古淵B	LIHL～BB1M	2a	23号礫群	4.80	4.10	48	散漫	赤化：37、スス：21、タール：3、破損：15	チャート2、安山岩8、砂岩38	12号ユニット重複
157	古淵B	BB1U	2a	24号礫群	3.20	3.00	10		赤化：9、スス：6、破損：3	チャート2、安山岩2、砂岩6	
157	古淵B	BB1U	2a	25号礫群	3.10	2.00	24	散漫	赤化：22、スス：5、タール：1、破損：20	チャート2、安山岩6、砂岩16	
157	古淵B	BB1M	2a	27号礫群	4.30	2.60	45		赤化：43、スス：40、タール：1、破損：34	チャート1、安山岩2、砂岩40、凝灰岩2	11号ユニット重複

参考・引用文献

金山喜昭・土井永好・武藤康弘　1984.8「第Ⅲ文化層」「橋本遺跡先土器時代編」相模原市橋本遺跡調査会 pp.18-19
中村喜代重　1979.11「神奈川県相模原市下九沢山谷遺跡の石器群」「神奈川考古」7 神奈川考古同人会 pp.89-116
鈴木次郎　1986.7「第Ⅴ章第2節B地区」「田名稲荷山遺跡」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告12神奈川県立埋蔵文化財センター pp.29-44
長沢邦夫・中三川　昇他　1987.3「第Ⅴ文化層（C地区）」「中村遺跡」中村遺跡発掘調査団 pp.163-302
長沢邦夫・中三川　昇他　1987.3「第Ⅴ文化層（D～F地区）」「中村遺跡」中村遺跡発掘調査団 pp.303-390
鈴木次郎　1984.3「第Ⅴ章第6節第Ⅴ文化層」「栗原中丸遺跡」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告3神奈川県立埋蔵文化財センター pp.87-292
高杉博章　1991.10「第Ⅳ章第2節（2）第Ⅳ文化層」「神奈川県大和市下鶴間甲一号遺跡発掘調査報告書」下鶴間甲一号遺跡調査団 pp.167-198
明治大学考古学研究室月見野遺跡調査団　1969「概報　月見野遺跡群」
相模野考古学研究会　1971.9「先土器時代遺跡分布調査報告書相模野編」相模野考古学研究会
相田　薫　1988.3「第4章第3節第Ⅱ文化層」「月見野遺跡群上野遺跡第三地点」神奈川県大和市文化財調査報告書第27集　大和市教育委員会 pp.50-57
小池　聡　1991.3「第5章第5節第Ⅴ文化層」「長堀北遺跡」大和市文化財調査報告書第39集　大和市教育委員会 p.27、pp.67-85（資料編）
中村喜代重　1984.9「第Ⅴ章第4節第Ⅲ文化層」「下鶴間長堀遺跡」神奈川県大和市文化財調査報告書第17集　大和市教育委員会 pp.165-351
麻生順司　1987.12「第Ⅲ章第5節第Ⅴ文化層」「長堀南遺跡発掘調査報告書」神奈川県大和市文化財調査報告書第28集　大和市教育委員会 pp.183-197
曽根博明・堤　隆・諏訪間　順他　1983.3「第3章先土器時代」「深見諏訪山遺跡発掘調査報告書」神奈川県大和市文化財調査報告書第14集　大和市教育委員会 pp.32-98
服部隆博・中村喜代重　1984.3「第Ⅴ章第5節第Ⅱ文化層」「上草柳第2地点遺跡」神奈川県大和市文化財調査報告書第15集　大和市教育委員会 pp.151-217
砂田佳弘・三瓶裕司　1998.3「第Ⅰ章旧石器時代B1層」「吉岡遺跡群Ⅴ」かながわ考古学財団調査報告38（財）かながわ考古学財団 pp. 6-85
麻生順司他　1992.3「第3節第Ⅲ文化層（B1下部）」「今田遺跡」藤沢市教育委員会 pp.61-78
吉田政行　2003.3「第Ⅴ章第4節第5項旧石器時代遺跡群Ⅳ」「吉岡遺跡群Ⅹ」かながわ考古学財団調査報告153（財）かながわ考古学財団 pp.35-119
小林謙一・桜井準也　1992.8「第Ⅴ章第Ⅲ文化層（B1・L2）」「湘南藤沢キャンパス内遺跡」第2巻岩宿時代縄文時代Ⅰ部　慶應義塾 pp.145-232
鈴木次郎・市川正史・三瓶裕司　1997.3「第Ⅴ章第6節第Ⅴ文化層」「宮ヶ瀬遺跡群Ⅹ中原（No.13C）遺跡」かながわ考古学財団調査報告16（財）かながわ考古学財団 pp.287-356
鈴木次郎・恩田　勇　1997.3「第Ⅴ章第7節第Ⅴ文化層」「宮ヶ瀬遺跡群ⅩⅡ上原（No.13）遺跡」かながわ考古学財団調査報告18（財）かながわ考古学財団 pp.228-557
鈴木次郎　1996.3「第Ⅴ章第6節第Ⅴ文化層」「宮ヶ瀬遺跡群Ⅵサザランケ（No.12）遺跡」かながわ考古学財団調査報告8（財）かながわ考古学財団 pp.297-376
松井　泉　1990.3「第4節第2文化層bの遺構と遺物」「神奈川県相模原市古淵B遺跡」相模原市古淵B遺跡発掘調査団 pp.159-254
畠中俊明　2002.3「第Ⅳ章第1節旧石器時代第Ⅰ文化層（B1層下部相当）の調査」「原口遺跡Ⅳ」かながわ考古学財団調査報告135（財）かながわ考古学財団 pp.25-382
小池　聡　1995.7「第Ⅳ章第5節第Ⅳ文化層」「大和市県営高座渋谷団地内遺跡」大和市県営高座渋谷団地内遺跡発掘調査団 pp.62-84
加藤晋平・村田良介編　1979.9「Ⅵ礫群と炭化物」「大和市草柳一丁目遺跡」草柳一丁目遺跡調査会 pp.23-27
戸田哲也　1993.9「第Ⅲ章第3節第3文化層」「下森鹿島遺跡」下森鹿島遺跡発掘調査団 pp.127-179
櫻井準也　1997.6「第Ⅲ章第2節第Ⅱ文化層」「藤沢市No.419遺跡第1地点発掘調査報告書」東国歴史考古学研究所 pp.33-49
櫻井準也　1999.3「第Ⅲ章第3節第Ⅲ文化層」「藤沢市No.419遺跡第2地点発掘調査報告書」東国歴史考古学研究所 pp.37-57
櫻井準也　1999.2「第Ⅳ章第1節旧石器時代」「藤沢市No.419遺跡第4・5地点発掘調査報告書」東国歴史考古学研究所 pp.26-33
大坪宣雄・横山太郎　1991.3「第Ⅳ章調査大塚東遺跡」「大塚東遺跡・大塚西遺跡」横須賀リサーチパーク計画地内埋蔵文化財発掘調査団 pp 24-38
小池　聡・細井佳浩　1997.3「第Ⅲ章第3節旧石器時代の調査」「神明若宮地区内遺跡」神明若宮地区内遺跡発掘調査団 pp.42-102
小池　聡・細井佳浩　1997.3「第Ⅴ章第5節旧石器時代の調査」「神明若宮地区内遺跡」神明若宮地区内遺跡発掘調査団 pp.239-266
小池　聡他　1993.3「第Ⅴ章第5節第Ⅳ文化層」「月見野遺跡群上野遺跡第5地点」上野遺跡第5地点発掘調査団 pp.83-90
村澤正弘　1996.3「第5章第2節第Ⅱ文化層」「大和市No.202遺跡大和市No.159遺跡」大和市文化財調査報告書第63集　大和市教育委員会 pp.15-44
小池　聡　1999.3「第Ⅲ章第3節第Ⅱ文化層」「大和市No.210遺跡」大和市文化財調査報告書第71集　大和市教育委員会 pp.29-55
峰　治・畠中俊明・井関文明　1999.12「第Ⅴ章第2節第Ⅱ文化層（B1層下部）の調査」「福田丙二ノ区遺跡」かながわ考古学財団調査報告68（財）かながわ考古学財団 pp.93-230
栗原伸好他　2002.3「（4）第Ⅳ文化層（BB1層：ナイフ形石器／大型炭化材）」「用田鳥居前遺跡」かながわ考古学財団調査報告128（財）かながわ考古学財団 pp.340-444
栗原伸好　2003.3「第Ⅴ章第5節（4）第Ⅳ文化層」「葛原滝谷遺跡葛原下滝谷戸遺跡」かながわ考古学財団調査報告151（財）かながわ考古学財団 pp.127-1
小池　聡・小塚知之他　1994.3「第Ⅳ章第3節第Ⅱ文化層」「大塚戸遺跡」大和市文化財調査報告書第60集　大和市教育委員会 pp.53-65

神奈川における縄文時代文化の変遷Ⅵ

－中期後葉期　加曽利E式土器文化期の様相　その4　文化的様相(2)－

縄文時代研究プロジェクトチーム

Ⅰ．はじめに

平成12年度から開始した中期後葉期・加曽利E式土器文化期の様相をめぐる研究の４年次目にあたる平成15年度は、前年度に行った竪穴住居址・柄鏡形（敷石）住居址以外の各種遺構の分析に焦点を絞った研究活動を実施し、集落構造や墓制の様相については次年度以降の検討課題とした。

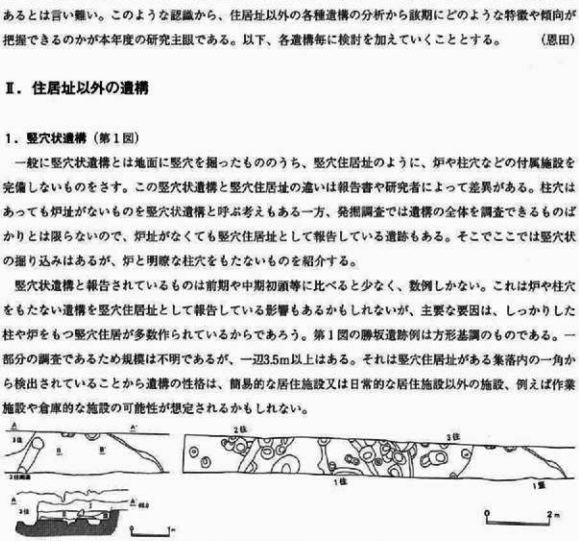
該期は、前年度の集成を待たずしても明らかなように、非常に多くの竪穴住居址が認められ、それ故それらの研究も盛んに進められてきたと認識されるが、その他の遺構については必ずしもそのような研究状況にあるとは言い難い。このような認識から、住居址以外の各種遺構の分析から該期にどのような特徴や傾向が把握できるのかが本年度の研究主眼である。以下、各遺構毎に検討を加えていくこととする。　（恩田）

Ⅱ．住居址以外の遺構

1．竪穴状遺構（第１図）

一般に竪穴状遺構とは地面に竪穴を掘ったもののうち、竪穴住居址のように、炉や柱穴などの付属施設を完備しないものをさす。この竪穴状遺構と竪穴住居址の違いは報告書や研究者によって差異がある。柱穴はあっても炉址がないものを竪穴状遺構と呼ぶ考えもある一方、発掘調査では遺構の全体を調査できるものばかりとは限らないので、炉址がなくても竪穴住居址として報告している遺跡もある。そこでここでは竪穴状の掘り込みはあるが、炉と明瞭な柱穴をもたないものを紹介する。

竪穴状遺構と報告されているものは前期や中期初頭等に比べると少なく、数例しかない。これは炉や柱穴をもたない遺構を竪穴住居址として報告している影響もあるかもしれないが、主要な要因は、しっかりした柱や炉をもつ竪穴住居が多数作られているからであろう。第１図の勝坂遺跡例は方形基調のものである。一部分の調査であるため規模は不明であるが、一辺3.5m以上はある。それは竪穴住居址がある集落内の一角から検出されていることから遺構の性格は、簡易的な居住施設又は日常的な居住施設以外の施設、例えば作業施設や倉庫的な施設の可能性が想定されるかもしれない。



第１図　竪穴状遺構〔S＝1/100、1/1200〕

2．掘立柱建物址（第２・３図）

掘立柱建物址では遺物が伴出することが少ない。また掘立柱建物址は勝坂式期から連続する集落で発見されると掘立柱建物址の時期を特定するのは難しい。しかし中期後葉期に限定できる掘立柱建物址もある。現在報告書が刊行されているものの中では相模原市山王平遺跡１号・３号掘立柱建物址（第２図２・３）は柱穴内から加曽利Ｅ式土器が出土しており、中期後葉期の所産であると思われ、川崎市宮添遺跡では出土遺物はないものの、周囲の遺構などから中期後葉期に属すると推定した掘立柱建物跡が５基報告されている（同４）。また正式な報告ではないが、港北ニュータウン内で中期後葉に限定できる掘立柱建物址は横浜市二の丸遺跡、三の丸遺跡、神隠丸山遺跡などで少なくとも20例以上確認されているようである（石井1989）。また綾瀬市道場窟遺跡でも１基の存在が発表されている。

港北ニュータウンでの成果をまとめた石井氏によれば、中期後葉期は柱穴が長方形に一巡するものが多く、二重に巡る勝坂期特有のものはみられないらしい。また一巡するものの中でも、短辺が２本の柱穴からなるものが多く、長辺が５ｍを超える大形のものが顕著であるという。短辺が３本の柱穴から構成されるもの（同５）は後期に多く該期には少ないが、該期のものは大形で柱穴間隔が広いらしい。炉をもつものもある。ここで港北ニュータウン外の遺跡の掘立柱建物跡を見ると、山王平遺跡の２例、宮添遺跡の５例中４例、道場窟遺跡の１例が、柱穴が長方形に一巡し、短辺が２本の柱穴からなるものであった（同２～４）。またその規模は、山王平遺跡例が長辺5.5ｍ、７ｍ、宮添遺跡例が長辺6.5ｍ、7.5ｍ、8.5ｍ、10ｍと５ｍ以上の長大なものが多く、道場窟遺跡例が４ｍと小形であった。これらのことは石井氏の指摘と合致し、港北ニュータウン内での傾向が県内他遺跡にも通用することを示している。しかしその一方、宮添遺跡では柱穴が二重に巡るものが１例ある。二重に巡るものは一般に勝坂式期のものと言われ、これが中期後葉期にも存在するのか否か、石井氏も言及しているが、その追求が必要であろう。

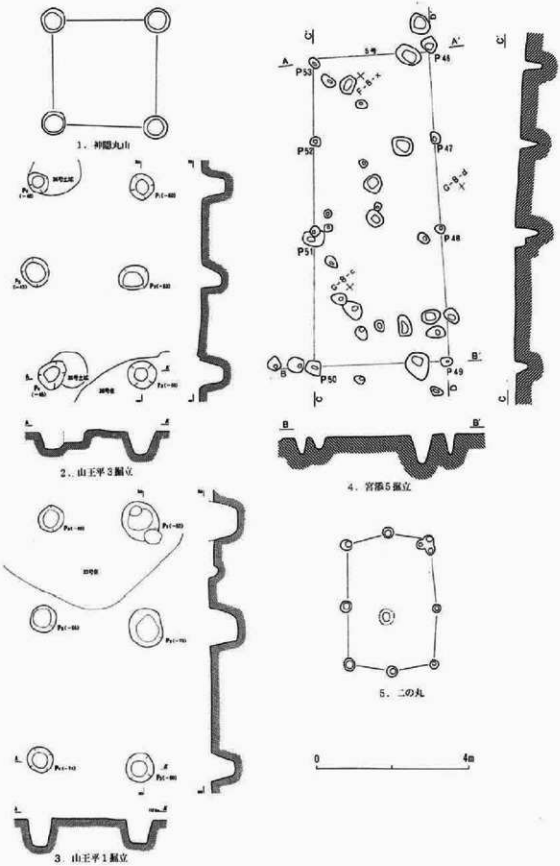
集落内での位置を見ると、山王平遺跡では環状に巡る竪穴住居址群帯の内側、中央土坑群の外側に、住居址と同規模（長軸長６～８ｍ）の掘立柱建物址が帯状に分布している（第３図上）。また神隠丸山遺跡や宮添遺跡では竪穴住居址群帯の内側にやや大形の掘立柱建物址が分布している（同下）。いずれも掘立柱建物跡の長軸が環状に巡る竪穴住居址群の環の方向と平行し、集落中央を向かないこと、掘立柱建物跡が中央の土坑群より竪穴住居跡群の分布帯に接近して占地する共通点があり、それらの影響もあってか、中央の土坑群の分布との明確な対応関係を見ることはできない。またその一方、勝坂式期と比べると、一遺跡内での遺構数に占める掘立柱建物跡は幾分低くなっているようである。勝坂式期の横浜市前高山遺跡では竪穴住居跡より多くの掘立柱建物跡が残されており、勝坂式から加曽利Ｅ式期に連続的に営まれた横浜市南原遺跡では勝坂式期の掘立柱建物跡は多数あるが、加曽利Ｅ式期のものはないからである。中期後葉期は竪穴住居跡が非常に多くなるので、掘立柱建物跡は竪穴住居址に比べ数が少なくなり、その結果、中期後葉期のものは共同利用的性格が思起されやすくなると言える。機能としては竪穴住居址とは異なる居住施設、作業施設、倉庫・貯蔵施設、祭祀・葬送儀礼設など、さまざまな可能性が考えられ、今後の研究課題と言える。

参考文献（報告書は除く）

石井　寛　1989　「縄文集落と掘立柱建物跡」『調査研究紀要』６

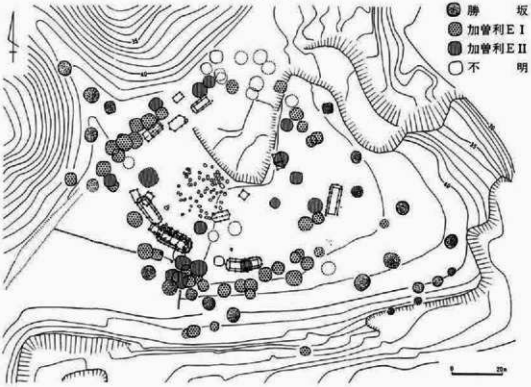
3．ピット群

ピットは時期判別が難しいが、ピットの覆土から該期の土器が出土したり、該期の集落からピットが発見



第2図　掘立柱建物址〔S＝1/100〕

山王平遺跡



神隠丸山遺跡

第3図　集落址内での掘立柱建物址〔S＝1/1500〕

されることから、中期後葉もピットが多数存在したことは明らかである。そのうちピットが規則的配置をとるものは掘立柱建物址として扱ったが、規則的配置をとらないピットも同時期に多数存在する。そのうちピットがある限られた場所に集中して存在することがあり、藤沢市No322遺跡、相模原市相原森ノ上遺跡、座間市米軍キャンプ座間地内遺跡などでは、該期の住居址と近接して出土した多数のピットに対して、ピット群として報告している。性格としては竪穴住居址や掘立柱建物址の柱穴の一部、またはそれらとは異なった何らかの建物の柱穴の可能性が考えられる。（松田）

4．屋外炉址・焼土址（第4図、第1表）

「炉址」あるいは「焼土址」と呼称される遺構・痕跡は、竪穴住居址内において検出されることが通常である。従って、「炉址」・「焼土址」が単独で検出されているケースでも、周辺部における諸状況が一定の要件を満たしている場合（多くは周辺部における床面（硬化面）・柱穴・埋設土器等の検出を指す）、これを竪穴住居址として報告している例はかなりの数にのぼる。一方で、住居址に伴うとみなす根拠を明らかに欠いたものが存在することも事実である。ここで取り扱う「炉址」・「焼土址」は、調査者・報告者によって竪穴住居址に伴うとみなす最低限の根拠を欠落していると判断されたものを対象とする。

「屋外炉址」・「焼土址」として報告されている遺構・痕跡は少なくないが、当該期に帰属することが明らかなもののみを抽出すると、伴出遺物の少なさに起因しその数は激減する。第1表に、比較的確度の高いと思われるもの（12遺跡26事例）を抽出した。これらに対して報告者が冠している名称は、「炉址」・「炉穴状遺構」・「焼土址」・「焚き火跡」等様々で、形態的には区別のつかないものに別の名称が付されているケースも少なくない。

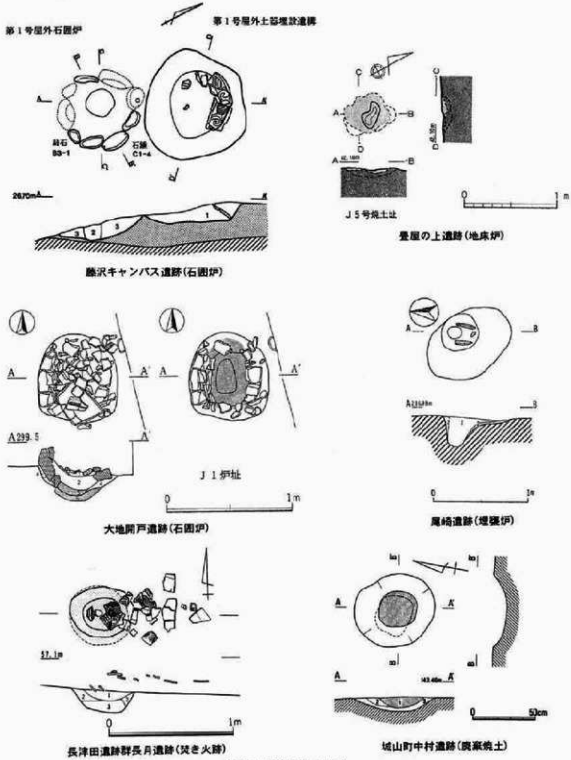
屋外炉址と考えられるものは、5遺跡10例存在する。うち、藤沢キャンパス遺跡の1事例、中原・加知久保遺跡の1事例、大地開戸遺跡の2事例、尾崎遺跡の4事例は、石囲あるいは埋甕の形態を採るもので、かなり蓋然性の高い事例といえよう。畳屋の上遺跡で検出されたJ5号焼土址は特別な施設を有するものではないが、掘り方底面・壁面に硬化した顕著な熱焼面が形成されており、一定期間の使用を窺わせる。屋外地床炉の可能性があろう。

焼土址と考えられるものは、9遺跡12例存在する。焼土址と判断したものには、明確な掘り込みを有するものと掘り込みをもたないものの別がある。前者は屋外地床炉と形態的には区別できないものであるが、顕

第1表　中期後葉期の屋外炉址・焼土址

No.	遺跡名	遺構名	時　期	用　途	備考
1	泉蒼寮遺跡	J1号焼土址	Ⅱ段階	焚き火跡	底面・壁面硬化面
2	F畳屋の上遺跡F区	J4号焼土址	Ⅱ段階	廃棄焼土	覆土中層に焼土塊入層
		J5号焼土址	Ⅱ段階	屋外炉	熱被面硬化
3	長津田遺跡群長月遺跡	焚火跡（ST001）	Ⅳ段階	焚き火跡	覆土下層に焼土層
4	藤沢キャンパス遺跡Ⅱ区	第1号屋外石囲炉	Ⅲ段階？	屋外炉	石器・円礫で楕円囲繞
5	中伏野成井田遺跡	炉穴状遺構	Ⅱ～Ⅲ段階？	廃棄焼土	覆土中層に焼土層
6	及川中原遺跡	焼土址	Ⅲ段階	焚き火跡	焼き火跡との所見
7	中原・加知久保遺跡	集石炉	中期後葉	集石？	覆土中層域に焼種
		石組炉	中期後葉	屋外炉	河原石16個で囲繞
8	原口遺跡	J50号焼土址	Ⅲ段階（曾利Ⅳ式）	廃棄焼土	焼土上面に大形土器片
9	大地開戸遺跡	J1号炉址	Ⅳ段階	屋外炉	方形石囲炉
		J2号炉址	Ⅲ段階（曾利Ⅳ式）？	住居？	石囲炉、周辺にピット群
		J3号炉址	中期後葉？	住居？	石囲炉、周辺にピット群
		J4号炉址	Ⅲ段階（曾利Ⅲ～Ⅳ式）	住居？	地床炉、周辺にピット群
		J5号炉址	Ⅲ～Ⅳ段階（曾利Ⅴ式）	屋外炉	石囲炉または石置炉
10	原東遺跡	第1号焼土址	中期後葉	廃棄焼土	覆土上層に焼土層
		第2号焼土址	中期後葉	廃棄焼土	覆土上層に焼土塊入層
11	城山町中村遺跡	1号焼土址	Ⅲ～Ⅳ段階	廃棄焼土	焼土廃棄土坑との所見
12	尾崎遺跡	第1号炉址	Ⅳ段階	焚き火跡	覆土下層に焼土層
		第2号炉址	Ⅲ～Ⅳ段階（曾利Ⅴ式）	焚き火跡	炉址内の土器二次焼成
		第3号炉址	Ⅲ～Ⅳ段階（曾利Ⅴ式）	屋外炉	方形石囲炉
		第5号炉址	Ⅲ段階（曾利Ⅳ式）	屋外炉？	炉内より2個体土器
		第6号炉址	Ⅳ段階	廃棄焼土	最き8cm程の焼土層
		第7号炉址	中期後葉？	屋外炉	方形石囲炉
		第10号炉址	中期後葉？	屋外炉	方形石囲炉
		第12号炉址	Ⅳ段階	屋外炉	楕円形埋甕炉

著な焼成面（硬化面）の形成が認められないものは焼土址として扱えた。焼土址の性格は、一時的な焚き火跡と考えられるもの、焼土・灰等が廃棄された痕跡と考えられるものに大別できる。覆土下層域に焼土層が形成され底面・壁面が僅かに赤化するものは前者に類別できよう。泉警察遺跡・長月遺跡・及川中原遺跡等がこれに該当する。覆土中層から上層域にブロック状の焼土層が認められるものは後者の可能性が高い。原口遺跡・城山町中村遺跡等がこれに該当する。（井辺）



藤沢キャンパス遺跡（石囲炉）

叠屋の上遺跡（地床炉）

大地開戸遺跡（石囲炉）

尾崎遺跡（埋甕炉）

長洋田遺跡群長月遺跡（焚き火跡）

城山町中村遺跡（廃棄焼土）

第4図　屋外炉址・焼土址

5．集　石（第5図）

本項では、覆土内から当該期の土器が伴出しているものと報告書で中期後半の遺構であることが明記されている集石を対象とし、その形態の特長と傾向について概観することとする。このように抽出された当該期の集石は、県内28遺跡108基を数える。

これらをまず掘り込みの有無で二分すると、その約8割、86基が掘り込みを有するものであった。

掘り込みはその断面形状から、底面が小さくやや傾斜が急な掘り込みをもつものを「すり鉢状」(1)、底面がほぼ平らで立ち上がりがやや急なものを「タライ状」(2)、同様に平らな底面を有し約40cm以上の直立ぎみのやや深い掘り込みを有するものを「バケツ状」(4)、そして掘り込みが浅く緩やかに開くものを「皿状」(5)、底面がほぼ球状で弧を描くように立ち上がるものを「丸底状」(3)の5種に便宜上分けると、これらの比率は、すり鉢状を呈するものが7基(8％)、タライ状39基(45％)、バケツ状4基(6％)、皿状17基(20％)、そして丸底状18基(21％)となる。また、確認面からの掘り込みが最も深いものは54cmで、40cm以上の深さをもつものはバケツ状としたもの以外では、すり鉢状としたものの2基のみであり、当該期の集石は底面が平らでやや浅い掘り込みのものが多いとの傾向が窺える。なお、掘り込みの深さの平均は約22cmであった。

平面形態は、やや歪んだものも含めて円形及び楕円形基調がほとんどで、その数は78基にのぼり、掘り込みをもつ集石のおよそ9割を占め、当該期以外の一般的な集石の掘り込み形態との大きな違いは認められない。その他の平面形は、不整形なものが6基、隅丸長方形が1基であった。

大きさは、平面形が円形・楕円形を呈するものでは、長径200cmを越える大きなものから、40cmに満たないものまで見つかっている。同一遺跡内においてもその大きさは一律ではないが、長径が50～150cmのものが8割を超え、平均は約100cmであった。

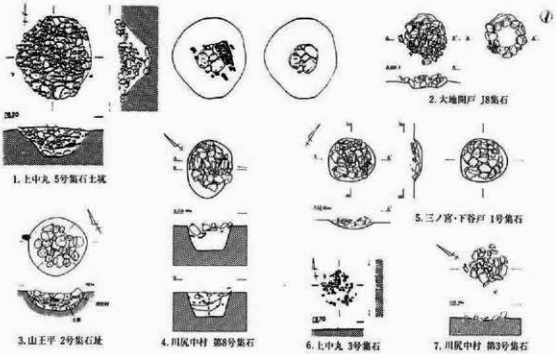
掘り込み内における礫の検出状況は、その立面分布にいくつか特徴的なものが認められる。底面に礫が集中しているもの、土坑内にはほとんどみられないが表面に多くの礫が集中してみられるもの(4)、そして掘り込み内全体に充満しているものがある(1・2・5)。これらの中で、特徴的なものとして底面に明らかに礫を敷き並べたものが挙げられる(1)。その数は20基認められ、掘り込みを有する集石の約24％に及ぶ。そのうち13基が相模原市上中丸遺跡であり、その数は同遺跡の約7割(69％)にものぼる。また、稀に側壁面に並べられているものもあり(2)、他の集石と機能・用途や、その使用手順に違いがみられる可能性も考えられる。

次に、全体の約2割にあたる掘り込みの無いもの22基については、その多くは小礫が平面的にある一定範囲のまとまりを有するものであるが、その様相は集積密度が高いもの(7)と低いもの(6)があり、一様ではない。また、これらの多くは付随施設もなく、廃棄されたものか何らかの理由でその場に集積されたものなのか、その場で何らかの機能を有していたものなのか、その判断は難しい。

以上のように今回は表層的な形態差から、その様相と傾向を示したが、その機能・用途は上述のとおり一律には扱えない。ただ掘り込みを有する集石は、これまで行われてきた研究の成果から、調理施設としての機能していたものが多いと思われる。今後は機能・用途に基づく分類へと昇華し、調理施設とされる集石は、以前からいわれている日常、非日常利用の問題も含めて、その使用方法を更に検討する必要があろう。

なお、形態毎の時間的・空間的な分布については、特筆すべき顕著な傾向が見い出せなかった。

（井澤）



第5図 集 石（S＝1/60）

6．配 石（第6図）

本項では13遺跡98基について、その様相と傾向について概観する。なお、下部に土坑や埋設土器を有するものについてはそれぞれ「土坑」、「屋外埋設土器」の項目で取り上げるため、ここでは主に付帯施設を持たないものについて触れることとする。

まず、その形状について、配置される礫の数は数個から数十個まで様々で、礫の大きさも配置された形状についても不規則なものが多く画一的ではない。

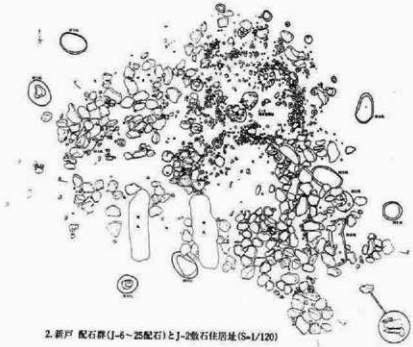
これら配石は範囲が100cm四方に満たない小規模なものが単体で検出されるもの（1）や、相模原市勝坂遺跡、相模原市新戸遺跡、山北町尾崎遺跡、津久井町大地開戸遺跡のように小規模な配石が群を成すものが認められる。中には大地開戸遺跡のように広範囲にひとまとまりの大形配石を形成するとも考えられるものもある（3）。また、新戸遺跡のように柄鏡形住居址と隣接している例（2）もあり、住居との関連が窺える。城山町川尻中村遺跡では、環状集落の竪穴住居群と内側で検出された墓壙群との間を区画するように巡る配石（列石）が見つかっている（4）。

配石に伴出する土器はⅡ～Ⅳ段階に相当するもので、特にⅢ～Ⅳ段階が多い。このことから当該期の配石はこの段階に構築されたものと思われる。

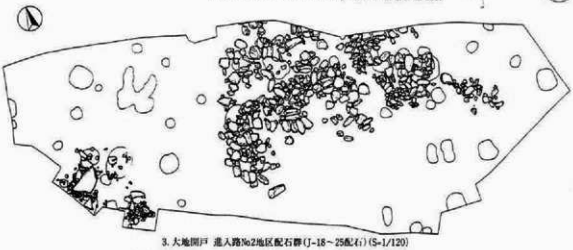
分布の傾向は、相模原市や津久井郡域には、今回取り上げた配石の約79％にあたる77基が見えかかっているのをはじめとして、伊勢原市、平塚市、山北町など相模側流域並びに岡河川以西にそのほとんどが分布していることが看取できる。

配石の用途・機能は、その規模や石の配置形態と同様に、多岐に渡るものと思われるが、いわゆる「祭祀」の場としての機能や、葬送（埋葬）機能、川尻中村遺跡の列石にみられる日常・非日常空間を分かつ機能など、その多くは慣習・宗教など観念的な性質を併せもつものであろう。（井澤）

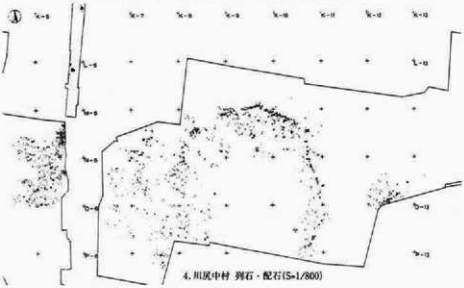
1. 上中丸 5号配石(S=1/60)



2. 新戸 配石群(J-6～25配石)とJ-2敷石住居址(S=1/120)



3. 大地開戸 進入路No2地区配石群(J-18～25配石)(S=1/120)



4. 川尻中村 列石・配石(S=1/800)

第6図 配 石

7．土　坑（第7・8図）

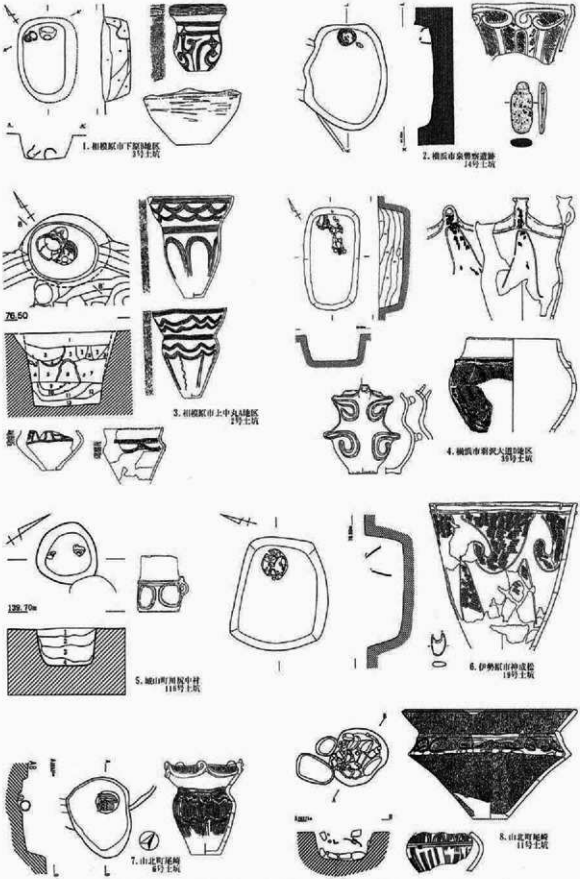
土坑として分類されている一群には様々な用途・性格のものが包括されていると考えられ、また時期を決定する遺物の乏しい事例が大半を占めている。このような資料的状況のなかで、これまでに検出された当該期の土坑全てを対象に用途・性格を特定していく作業は困難といわざるを得ない。従ってここでは土坑のなかでも遺跡内における位置や遺構の形態に比較的特徴が現れやすく、また土器等の伴出遺物がある程度確認できる土壙墓と貯蔵穴に用途が推定されるものをでき得る限り抽出することに努めた。

①土壙墓（第7図）

墓穴と推定される土坑で、当該期と認定し得るものは25遺跡86例確認できるが、この他に屋外埋設土器と区別の難しい14遺跡20例、貯蔵穴と区別の難しい11遺跡58例、土壙墓と推定するには根拠の希薄な26遺跡227例が存在する。なお、上記の事例数には詳細が未公表の遺跡や当該遺構単独で時期決定不能なものを対象外としているが、これらを加えると現時点での事例数はかなりの数に達する。時期的には、先の編年案の段階呼称を用いれば、Ⅰ段階に比定できる明確な事例は把握できず、Ⅱ段階に至り漸く少数の事例が確認できるようになる。大半の事例はⅢ段階からⅣ段階に比定されるものである。ちなみに、勝坂期では甕被葬が想定されるもの、土器の副葬がなされたと推定されるもの、形態と土器片の出土から墓穴と推定されるものに事例を大別したが、ここでは土器以外の副葬品や裸を伴う事例は特定されていない。土坑の平面形態は楕円形もしくは円形基調が多く、規模は概ね径１ｍ内外を測ることが把握されている。

先述のような前時期の様相を踏まえて、遺物等に特徴的な出土状況の認められる中期後葉期の土坑を通覧すると、倒置された土器や大型の土器片が認められ甕被葬が想定されるもの（1～3・6）、小型土器が副葬されたと推定されるもの（1・5）、土器片の出土状況から墓穴と推定されるものが勝坂期から引き続き確認できるが、小型土器が副葬されたと推定し得る明確な事例は稀少である。土器の出土状態をみると、甕被葬が想定される倒置例が最も多いが、これが想定しにくい横置例（4・7）や正置例も事例数としては無視できず、また複数土器のみられる事例には各々異なる出土状態を示す事例（3）も存在する。土器の平面的出土位置については、長軸方向の一端に偏在を示すものが典型例で、この他短軸方向に偏在するものや中央付近から出土するものも数的には少ないが一定数確認できる。垂直的出土位置については、明らかな覆土中出土の事例が多くを占める一方、坑底面に接するような出土状態を示す事例もみられ、一様でない葬法が窺える。土器の器種は、深鉢が大半を占めるが、浅鉢・鉢・注口等の事例も散見される。土器の個体数は１個体が多数を占め、４個体以上の事例は希である。土器の遺存状態は、概ね口縁部から底部まで遺存しているもの、底部付近だけを欠いたもの、口縁部から胴部上半のもの、胴部下半から底部のもの等がみられるが、これらの別に際立った数的偏りは窺えない。土器型式からみると、県北西部域では曽利式または折衷的土器の事例が顕著である。土器以外には、石鏃・打製石斧・磨石・浮子等の石器類のほか石製垂飾品・土器片円盤等の出土も認められる。これらに加えて、中・大型の礫が用いられる事例（7・8）が確認できるが、これは石材の豊富な県北西部域に多い傾向がある。この他、土壙墓の事例ではないが、埋葬に関わる稀有な事例として横浜市青ヶ台貝塚竪穴住居址内からの熟年男子の伸展葬人骨と壮年男子の頭骨の出土があげられる。

土壙墓の平面形態は、前時期から引き続き円形・楕円形基調が存在し、楕円形基調が多数を占めるが、新たに長方形基調の事例が多く認められるようになる。平面的規模については、円形基調のものは前時期からさほど大きな変化はないが、楕円形・長方形基調のものは長短比が明瞭となる長軸１ｍ以上を測るものが7割を越えるようになる。集落内配置については、環状集落中央広場における墓域形成が顕著となる。（恩田）



第７図　土壙墓〔遺構：S＝1/60、遺物：S＝1/10（但し３土器はS＝1/20、６石製品はS＝1/3）〕

②貯蔵穴（第８図）

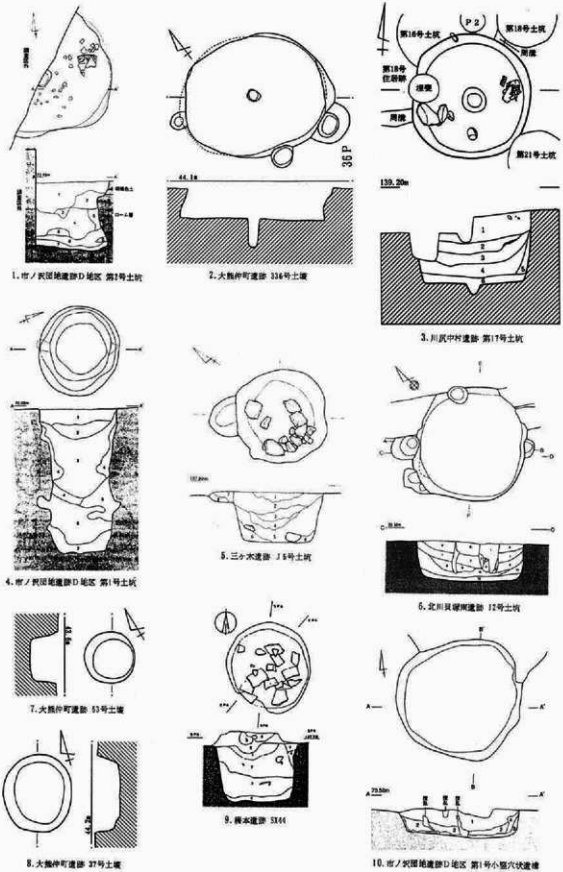
貯蔵穴と考えられる土坑は10遺跡29例を確認した。前述のように土坑の機能を推定するには、形態及び出土遺物などの特徴による部分が大きい。今回は特に土坑の形態に着目して貯蔵穴を捉えた。また報告書に小竪穴など他の遺構名で掲載されるものについても、規模や形態的な特徴が類似するものが含まれている場合があり、注意を要する。

形態的な特徴はいくつかの類型が認められるが、概の内傾しながら立ち上がる「フラスコ状土坑」などと呼称されるものが代表的であり、市ノ沢団地遺跡（１）・大熊仲町遺跡（２）などの好例がある。平面規模は径２ｍ前後で、平面形はいずれも円形基調のものである。平面及び深さなど比較的規模が大きいこともフラスコ状土坑の特徴である。深さについて見ると、１は１ｍを越えている。２は50cmで、遺構の依存状況や遺跡の立地条件などの影響を受けていることも考えられる。またフラスコ状土坑の底面にはピット状施設を有するものが比較的多く、１・２の場合はいずれにも認められる。ピット状施設の平面規模は20～30cmで、比較的浅いものが多いと思われるが、２の深さは約40cm程度と深い。

フラスコ状土坑以外の土坑については、規模が大きい事などの特徴から貯蔵穴として捉えられるものがあるが、規模の小さいものについては土坑墓などと識別することは困難な状況である。その中で貯蔵穴として捉えられるもの及び報告書などで貯蔵穴として捉えられたものなどについて概観したい。

壁の立ち上がりがほぼ垂直で、規模が大きなものとしては、いくつかの事例がある。平面形は円形基調であるものが多く認められ、径２ｍ前後と平面規模が大きいもの（３）が挙げられる。３には、底面に径30cm、深さ20cmのピット状施設が認められ、フラスコ状土坑と類似する特徴を有する。４は平面規模が径1.5ｍ前後のものであるが、深さ２ｍ以上と極めて良好な掘り込みを有する形態のものである。底面はやや起伏を有する程度で比較的平坦である。また両側壁面には足掛け状のピット状施設が認められる希少な例である。深い掘り込みが認められる土坑については、底面が平坦ではなく、狭くすぼまる形態のものも認められるが、柱穴との識別が困難である場合が多い。５・６は径1.5ｍ～１ｍ、深さ50cm前後のもので、底面はほぼ平坦なものが多い。壁の立ち上がりは、やや開きながら立ち上がるもの（５）、ほぼ垂直なもの（６）などがある。遺物は覆土中層から上層にかけて土器・石器などが出土している事例が認められる。また比較的大きな礫がまとまって下層及びその付近から出土しているものは５などが挙げられる。その他、底面直上付近から礫が単独で出土するものなどがある程度認められるが、底面からの出土遺物は概して少ない。

平面規模が形1.5ｍ～１ｍ程度と比較的小さい規模の土坑から土器などがややまとまって出土する事例は多々認められるが、土坑墓との識別が困難である場合が多い。大熊仲町遺跡では住居跡群に伴う貯蔵穴39基が報告されている。比較的規模の小さいものについてみると、形態は円形基調のもの（７）などが主体的であるが楕円形に近い形態のもの（８）なども認められる。その他、平面規模が径１ｍ前後で土器破片などの遺物がまとまって出土する土坑も９・10などのように多く認められる。土器破片が多く出土しているもの（９）、土器片と礫が密集して敷き詰められるよう出土しているもの(10)などがある。いずれも貯蔵穴としての可能性を含むものであるが、断定することは困難である場合が多い。貯蔵穴として捉えられたものでもフラスコ状土坑の底面に認められるピット状施設の機能など、その構造は明らかでない点も多く、現状では多くの課題がある。また集落内での分布についても、三ヶ木遺跡では５など平面規模1.5ｍ～１ｍ、深さ１ｍ前後の規模・形態が類似する土坑が近接して10基まとまって発見されている。いずれも貯蔵穴としての機能が考えられるものであり、集落構造との関係からも捉えていく必要がある。（天野）


1. 市ノ沢国地遺跡D地区 第2号土坑
2. 大熊仲町遺跡 336号土壙
3. 川尻中村遺跡 第17号土坑
4. 市ノ沢国地遺跡D地区 第1号土坑
5. 三ケ木遺跡 J5号土坑
6. 北川貝塚遺跡 12号土坑
7. 大熊仲町遺跡 53号土壙
8. 大熊仲町遺跡 27号土壙
9. 稲本遺跡 SX44
10. 市ノ沢国地遺跡D地区 第1号小型穴状遺構
第16号土坑
第18号土坑
第18号住居跡
炉跡
周溝
第21号土坑
139.20m
44.1m
35P

第8図 貯蔵穴〔S＝1/60〕

8．屋外埋設土器（屋外埋甕・伏甕）（第９～11図）

ここでは屋外埋設土器、いわゆる屋外埋甕・伏甕類について扱う。分析は報告書に屋外埋設土器あるいは屋外埋甕・伏甕として記載されているものを対象としたが、住居址に伴う可能性のある事例や、明らかに墓坑への副葬と見られる事例はここから除外した。また配石と報告されているものの中で埋設土器を伴う事例については、同様に屋外埋甕・伏甕として扱っている。

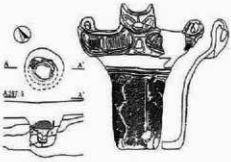
形　態（第９図）：屋外埋設土器は52遺跡299基が検出されている。これらの内で、形態が明らかにできたものは161基である。形態としては、タイプ１．口を上に向けた正位に埋設され底部が完存するもの、タイプ２．１と同様に正位に埋設されるが底部あるいはその一部を欠損するもの、タイプ３．１や２とは逆に口を下にした逆位に埋設され底部が完存するもの、タイプ４．３同様に口を下にした逆位に埋設され底部あるいはその一部を欠損するもの、タイプ５．完形あるいは半完形の土器が土坑内に破砕した状態で埋置されるもの、タイプ６．複数の土器が入れ子状に埋設されるものの６形態が認められた。また各タイプには土器が埋設されるのみのもと、周囲に配石が施されるものの両方が見られる。これらのうちタイプ１・２と６が狭義の屋外埋甕、タイプ２と３が狭義の屋外伏甕となるだろう。

正位に埋設され土器底部が完存するタイプ１は各形態中最も多く64基が認められ、このうち埋設土器の周囲に石が配されるものが15基あった。正位に埋設され土器の底部を欠損するタイプ２は１に次いで60基が認められる。このうち配石のあるものが９基あった。逆位に埋設され土器底部が完存するタイプ３は３基のみで、配石を伴うものも認められない。逆位に埋設され土器底部あるいはその一部を欠損するタイプ４は12基あり、このうち配石を伴うものが２基あった。土器が土坑内に破砕した状態で埋置されるタイプ５は22基あり、配石を伴うものが１基あった。土器が入れ子状に埋設されるタイプ６は10基認められた。このうち配石を伴うものは３基で、数はともかくこの形態の1/3に認められることになり、比率としては最も高い。

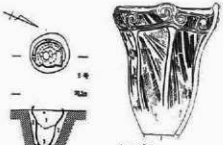
所属時期（第10図）：上記299基のうち、報告書の記載から所属時期を特定できたものは160基である。時期別に見るⅠ段階では認められず、Ⅱ段階で加曽利Ｅ式のものが７基、曽利式のものが14基ある。Ⅲ段階では加曽利Ｅ式が35基、曽利式が67基に増加する。Ⅳ段階では加曽利Ｅ式が36基、曽利式が21基認められた。おおよそとしては、Ⅱ段階に出現し、Ⅲ段階で激増、Ⅳ段階へ続くものと把握できるだろう。また、Ⅱ～Ⅲ段階においては、曽利式土器の埋設が加曽利Ｅ式を数的に圧倒しているが、Ⅳ段階において両者の数が逆転している。また、入れ子状を呈するタイプ６とした10基の所属時期はⅣ段階に限定される。

出土位置（第11図）：屋外埋設土器の検出遺跡は、資料集成した県下の当該期遺跡中55遺跡にすぎず、この時期に屋内に設けられる埋甕に対して、その存在は限定的である。規模の大きな集落遺跡では比較的多数が認められる例があり、座間市中原・加知久保遺跡で24基、相模原市上中丸遺跡で18基、城山町川尻中村遺跡で10基が検出されている。これらの遺跡は、住居址群が広場を囲んで環状に展開するいわゆる環状集落址であり、屋外埋設土器が住居址群と中央広場との境界付近に分布している状況が看取される。

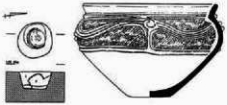
小　括：屋外埋設土器は屋内に設けられる埋甕と形態的に近似し、時期的な変遷も重なるなど、何らかの関連性をうかがわせるが、一方で屋内の埋甕の多くが底部を抜いた深鉢形土器を使用するのに対し、底部を完存する例が半数強を占めるなど相違点も少なくない。配石を伴う事例が少なくないことや集落の中央広場に接して設けられることの多いその位置から、幼児の埋葬や再葬等の埋葬儀礼に関わる施設としての捉え方も可能だろうが、埋設土器の形態は多様であり、他の機能を有する施設を含んでいる可能性も高い。現状では埋葬儀礼との関わりについて可能性を指摘するにとどめ、資料の増加と新知見の発見を待ちたい。（小川）



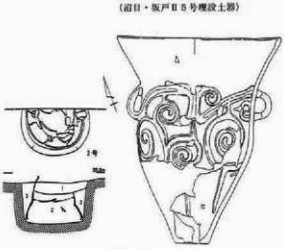
タイプ1
土器を正位に埋設し底部が完存するもの
（大地関戸Ⅰ9埋設土器）



タイプ2
土器を正位に埋設し底部が欠損するもの
（沼目・坂戸Ⅱ5号埋設土器）

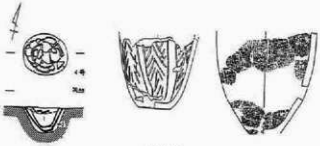


タイプ3
土器を逆位に埋設し底部が完存するもの
（川尻中村7号埋設土器）

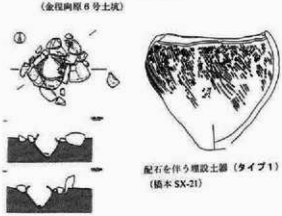


タイプ4
土器を逆位に埋設し底部が欠損するもの
（沼目・坂戸Ⅱ2号埋設土器）

タイプ5
破砕された土器が埋設されたもの
（金程向原6号土坑）

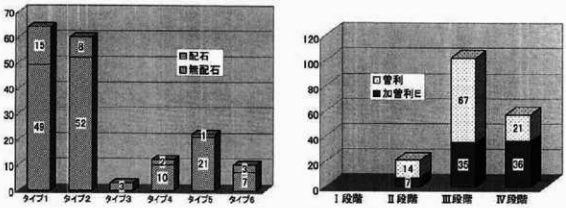


タイプ6
土器を入れ子状に埋設するもの
（沼目・坂戸Ⅱ4号埋設土器）

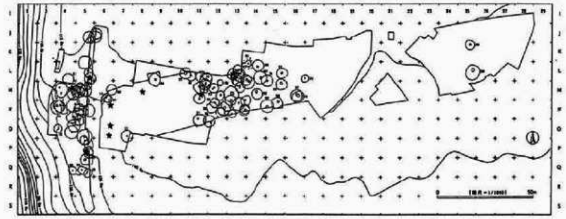


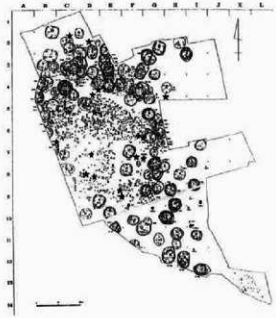
配石を伴う埋設土器（タイプ1）
（橋本SX-21）

第9図　屋外埋設土器



第10図　各類型の検出数と屋外埋設土器の時間的推移





第11図　集落遺跡内における屋外埋設土器の分布状況
（上）　川尻中村遺跡
（下）　上中丸遺跡

9．貝塚・住居内貝層（第12図、第２表）

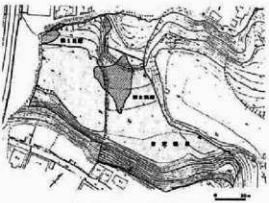
神奈川県内における縄文時代の貝塚は113箇所が知られている（御堂島・長岡1990）が、このうち時期や内容がある程度明らかになっている主要貝塚（90箇所）に関しては、中村若枝氏によって分布図・一覧表が作成・提示されている（中村1994）。これに基づいて中期後葉期に帰属する貝塚を抽出したものが第２表である。当該期の貝塚は18貝塚（遺跡）が確認されているが、うち１貝塚内で複数地点あるいは複数層の貝層・貝ブロックが検出されているものがあるため、貝層単位でカウントすると28貝層が当該期に帰属する貝層・貝ブロックということになる。第２表に紹介した貝塚は部分調査がなされただけのものが大半で、中には詳細な調査がなされないまま消滅したものや保存の対象になったものもあり、小規模な地点貝塚や住居内の貝ブロックを除くと全容が明らかになっているものは皆無に等しい。従って、ここでの分析もかなり雑駁なものとならざるを得なかった。

第12図（左上）は中期後葉期に帰属する貝塚の分布を示したものである。東京湾沿岸への集中が顕著であり、県西部における分布が極めて希薄であるという２点を該期貝塚分布の明確な傾向として捉えることができる。かかる傾向は早・前期段階から継続して看取されるもので、神奈川県下においては普遍的な様相である。該期の貝塚は内陸部を中心に分布する前期段階の貝塚に比べるとかなり東京湾沿岸に近い区域に分布しており、海退による分布域の変動を如実に示している。６貝塚（１～６）が分布する鶴見川流域と５貝塚（12～16）が分布する三浦半島南東端に分布の核がありそうだ。両地域をつなぐ東京湾岸には５貝塚（７～11）が

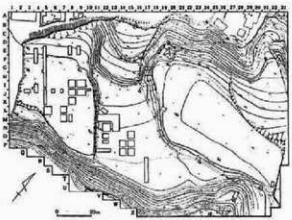
第２表　県内の中期後葉期の貝塚

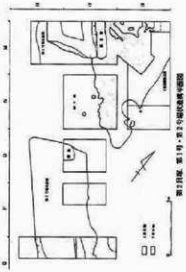
No.	貝塚名	貝層・ブロック	時　期	備　考
1	下田西貝塚		中期後葉	ｲﾁｼﾞﾚ
2	北川貝塚	J51号住居内貝層	Ⅱ段階	J51・71号住居床面直上に人骨、J51号住居より貝刃、ｻﾔﾄｼｼﾞﾐ主体、ﾊｯｻﾞﾀ・ｶｷﾉﾊﾅﾀﾞｲ、ｲﾁｼﾞﾚ・ｼｶﾞﾐ
		J56号住居内貝層	Ⅱ段階	
		J71号住居内貝層	Ⅱ段階	
3	宮の原貝塚	北貝塚第1貝層	中期中葉～後葉	ﾏﾀﾞｷ・ﾊﾏｸﾞﾘ・ﾊｯｻﾞﾀ・ｶｷﾉﾊﾅﾀﾞｲ・ｶｷｼﾞﾐ
4	鴨倉貝塚	上部貝層	Ⅲ段階	ｵｷﾅﾀﾞｸﾞﾘ・ﾊｯｻﾞﾀ
		下部貝層	Ⅲ段階	ｲﾀﾞｷﾀｺﾞ
5	荒立貝塚	第2区下層	中期後葉～後期前葉	純鹹水産28種類、11基の貯蔵穴検出
6	大口台遺跡（第1・2次調査）	1号住居内貝層	Ⅱ段階	ﾊｯｻﾞﾀ・ｱﾜｸﾞﾐ・ｵｷｼｼﾞﾐ
		4号住居内貝層	Ⅰ段階	貝層下に人骨、ﾊｯｻﾞﾀ・ｱﾜｸﾞﾐ・ｵｷｼｼﾞﾐ
	大口台遺跡（第3次調査）	14号住居内貝層	Ⅰ段階	住居址覆土中層域に小型貝層、ｲﾀﾞｷﾀｺﾞ主体、ｱﾜｸﾞﾐ・ﾏﾀﾞｷ・ｶｷﾞﾐﾀﾞｲ
7	山王台貝塚	台地北縁斜面	Ⅲ段階	ﾊｲﾀﾞｲ
8	杉田貝塚	台地斜面	中期後葉～後期中葉	貝層は弧状分布、ﾊｯｻﾞﾀ
9	称名寺貝塚	A貝塚下層	中期後葉～後期初頭	砂丘上に形成、ｵｷｼｼﾞﾐ・ｶｷ・ﾊｲﾀﾞｲ
10	青ヶ台貝塚	第1地点貝層	Ⅰ～Ⅱ段階	1～3号住居上面に貝層
		第2地点貝層	中期後葉	西斜面に厚い貝層、純鹹20種類
		第3地点貝層	Ⅱ段階	4号住居上面に貝層
11	榎戸貝塚	B貝塚	中期中葉～後期中葉	ｵｸﾀﾞﾎﾗｶﾞ主体、詳細不明
12	深田貝塚	丘陵西側斜面	Ⅱ段階	ﾏﾀﾞｷ主体
13	中台北貝塚	台地北急斜面	Ⅳ段階～後期中葉	ｽﾀﾞｲ・イシﾀﾞﾀﾐ・ｻﾙﾏﾀ・ｴｰｲﾀﾞﾆ等
14	中台南貝塚	台地斜面	Ⅲ段階～後期前葉	詳細不明
15	江戸坂貝塚	舌状台地北斜面	Ⅱ～Ⅳ段階	中期後半期貝層形成、標高12m、小貝ブロック点在、ﾊｯｻﾞﾀ・ｶｷ・ｽﾀﾞｲ
16	吉井貝塚（吉井城山遺跡）	第1貝塚上部a貝層	Ⅱ～Ⅲ段階	骨角器・貝刃、ｽﾀﾞｲ・ﾆｼｷﾞﾀﾞｺﾞﾝｶﾞﾀﾞ・ｲﾀﾞﾀﾆｼﾞ・ﾏﾀﾞｷ・ﾚｰｲﾀﾞｲ・ﾊｲﾀﾞｲ等、ｻﾙﾞｲ
		第1貝塚上部b貝層	Ⅱ～Ⅲ段階	
		第2貝塚上部貝層1b層	Ⅲ～Ⅳ段階	貝層検出面にﾋﾞｯﾄ群、ヤス状刺突具・板状骨角器・装飾状骨製品・巴形貝製品、ｽﾀﾞｲ・ｺﾝｶﾞﾀﾞｺﾞﾝｶﾞﾀﾞ・ｲﾀﾞﾀﾆｼﾞ・ﾏﾀﾞｷ・ﾚｰｲﾀﾞｲ・ﾊｲﾀﾞｲ等、ﾀｺﾞﾀﾞｲ・ﾎﾞﾗ
		第2貝塚上部貝層1a層	Ⅳ段階～後期初頭	
17	平戸山貝塚		中期中葉～後葉	厚さ10cm程の小規模貝層、ｻﾙﾎﾞｳ・ｶｷﾞﾐ・ﾊｲﾀﾞｲ・ｱﾜｸﾞﾐ・ﾊｯｻﾞﾀ・ﾏﾀﾞｷ
18	向川名貝塚		中期後葉	厚さ30cm程の小規模貝層、ﾀﾞﾝﾍﾞｲｷﾞﾐ主体

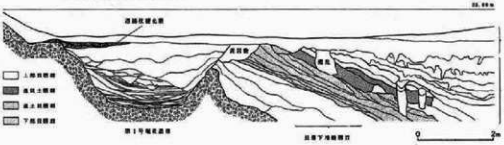
吉井第2貝塚



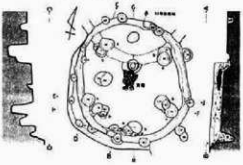
「吉井貝塚を中心とした遺跡」の指定範囲



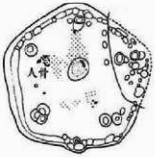




大口台遺跡第14号住居址



北川貝塚J51号住居址



第12図 貝塚の分布(左上)と主要貝塚

存在するが、分布は散在的である。県央に近い境川左岸に2貝塚(17・18)が存在し、これらが現時点における分布の西限である。

該期貝塚の形態は、丘陵・台地縁辺部に形成される斜面貝塚と住居内(廃屋)等に投棄された小規模貝層に大別できる。大半は地点貝塚と目されるもので環状・馬蹄形をなす大規模貝塚はみあたらないが、Ⅱ段階からⅣ段階に亘る多量の遺物が出土している江戸坂貝塚(15)、2地点4貝層が検出されている吉井貝塚(16)は比較的長期間営続した斜面貝塚の可能性がある。北川貝塚(2)・大口台遺跡(6)は後者の形態を探る確実なもので、他に青ヶ台貝塚(10)もその可能性がある。上述の3貝塚(遺跡)ではいずれも人骨の出土が確認されており、留意される符合である。 (井辺)

引用・参考文献
御堂島 正・長岡文紀 1990 「Ⅲ-2 縄文時代の貝塚の分布」『かながわの考古学』第1集 神奈川県立埋蔵文化財センター
中村若枝 1994 「神奈川県下の縄文時代貝塚を概観して(序)」『考古論叢神奈河』第3集 神奈川県考古学会

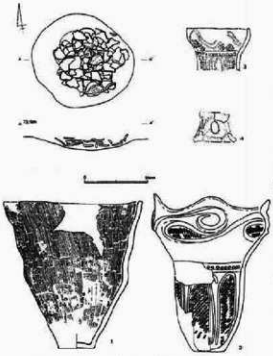
10. 土器集中(第13図)

ここでは、初年度に作成したデータベース・データシートをもとに、「土器(遺物)集中」として報告されている事例を抽出し紹介する。

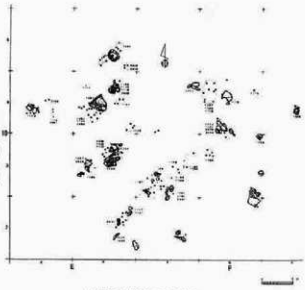
「土器集中」として報告されている遺構は、周辺部との比較においてより遺物密度の高い範囲を包含層出土遺物と区別し、「土器集中」という名称を冠して報告しているものが多い。従って、遺物の出土状況は、破砕資料が高密度に分布するが接合率が低く包含層出土遺物との境界が曖昧なもの、大形破片や完形に近い資料が単独出土しているもの、一括性の高い纏まった資料が集積しているもの等様々である。「集中」とみなす根拠は当該遺跡内における相対的な尺度によるもので、統一的な基準が存在しないため遺跡間の比較が難しい。また、「集石」のように時期決定に難渋することはなくとも、「集中」に至るプロセスに人為(廃棄行為)の介在を明らかにし得ないものも多く、遺構として捉えるかどうかも含め、課題の多い対象である。

「土器集中」として報告されている遺構は一切の人為的な掘り込みを伴わないものが一般的であるが、概して浅いが明確な掘り方を有しているものも存在する。市ノ沢団地遺跡D地区で検出された5基の土器集中遺構(第1～4・6号土器集中遺構)が好例である。特筆すべきは円形基調をなす土坑状の掘り込み中から遺存度の高い複数個体の土器が出土している第1号土器集中遺構(第13図)および第6号土器集中遺構で、一見した限りでは埋納遺構・貯蔵穴あるいは墓坑等との識別に難渋するものである。特に第6号からは完形の炭化クルミが出土していることから貯蔵穴である可能性も否定できず、ここでは第1号土器集中遺構のみを取り上げた。第1号土器集中遺構は、径80cm・深さ10cm程の円形の掘り方を有し掘り方内に土器片100点・礫13点が集積するものである。出土土器は数個体に識別され、うち4個体は復元個体である。短期間の廃棄ブロックの可能性が高いと思われるが屋外炉跡・集石等とともに環状集落の内側に配されており、判断が難しい。

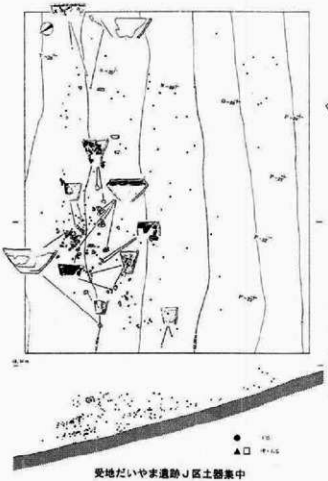
この他、明確な土器集中の事例として「土器捨て場」と認識される空間(遺物集中区域)の存在が挙げられる。ここでいう「土器捨て場」とは、ある期間継続して廃棄行為が行われたと推察される一定の空間を指している。管見に触れたものは、上坂東遺跡(北西斜面土器捨て場)、曇屋の上遺跡(F区北斜面土器捨て場)、受地だいやま遺跡(A・D・J区土器集中遺構)、真田大原遺跡(4号廃棄ブロック)の4遺跡6事例で、うち第13図に3事例の遺物平面・垂直分布図を掲載した。今回は紙幅の関係で充分な検討を行うことができなかった。今後の課題として、ここでは事例の提示にとどめておく。 (井辺)



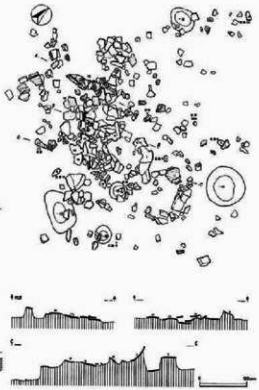
市ノ沢団地遺跡D地区第1号土器集中遺構



畳屋の上遺跡F区斜面



受地だいやま遺跡J区土器集中



真田大原遺跡遺物集中ブロック4

第13図　中期後葉期の土器集中遺構

宮ノ台式土器の研究（3）

弥生時代研究プロジェクトチーム

はじめに

昨年度に引き続き、宮ノ台式土器を対象に検討を行った。今年度は宮ノ台式土器の成立期の資料抽出を行い、分布傾向についてまとめた。

資料集成の対象は、前々稿でⅠ段階・Ⅱ段階とした時期で（弥生時代研究プロジェクトチーム2002）、器種は壺形土器と甕形土器を対象として、この時期に特徴的な文様要素を取り上げて収集を行った。資料抽出の基準は以下に記したとおりである。この基準は必ずしも宮ノ台式土器成立期の土器をすべて規定するものではなく、今回の収集にあたって基準としたものである。

資料集成はプロジェクトメンバー全員で分担して行い、集成図の縮尺は、実測図を1/8、拓影図を1/6に統一した。なお、基準資料（第１図）は実測図1/6、拓影図1/3の縮尺で提示した。分布図の遺跡番号は新たな番号を付し、前回の遺跡分布図との対照を第１表に記した。また、分布図は新開、一覧表は櫻井の原案をもとに渡辺が作成し、その他の文責は各文末に記した。全体の編集は池田の指示により渡辺が中心となり行った。

（池田）

１．資料抽出の基準

宮ノ台式土器の成立期は、櫛描文の導入・波及期として捉えられる時期である。壺形土器（以下「壺」）については流水文・擬流水文をもつものを主として抽出し、櫛描直線文に懸垂文を重ねたものも取り上げた。小田原（谷津）遺跡で認められる複合鋸歯文や櫛描直線文と波状文を密に交互に重ねたものは単体としては取り上げていない。

甕形土器（以下「甕」）については櫛目鎮状文を指標とした。波状を呈するものや扇形文も含め、口縁部内面に加飾するものである。ただし、櫛状工具による連続刺突はこの時期には既に認められないと考え除外した。また、ヘラ描羽状文や櫛状工具による横走羽状文についてはこの時期に限定できないため（後半期の資料にも見られることがある）、単体では取り上げていない。また、上記の遺物が主体となる遺構については、その他のものも候補とした。

（伊丹）

２．宮ノ台式土器の型式学的特徴における古相

神奈川県域における宮ノ台式土器の研究では、Ⅰ段階を宮ノ台式土器の成立段階、Ⅱ段階を壺・甕共に特徴的な文様要素である櫛描文と、それぞれ特有の文様構成が定着し、主体的になる段階として評価してきた（弥生時代研究プロジェクトチーム2002・2003）。Ⅰ段階は厚木市戸室子ノ神遺跡第12号址及び第68号址出土資料（第１図１～６）を、Ⅱ段階は鎌倉市手広八反目遺跡第15号住居址出土資料（第１図７～19）及び小田原市上山神遺跡出土資料（第９図278）を、それぞれ標式としている（安藤1990・1991ほか）。

Ⅰ段階の土器　第１図１～３は子ノ神遺跡第12号址から出土した壺である。１は最大径位を胴部下半にもち、頸部との間にくびれが全くない例で、これ以外は破片のためいずれも器形が判然としない。また文様も非常

に特徴的で、上半は横方向に連繋する重四角文と横位沈線・列点刺突の組み合わせに、文様の間や内部を縄文で充填している。下半は縦方向の振幅が非常に浅い波状文を多段に施し、一段おきに縄文を充填する段と粗いナデ消しを加える段とを交互に配している。2は縄文地に沈線による同心円文を、3は櫛描の横線と波状文を交互に加える。1のような下膨れの器形は前段階である弥生時代中期中葉にはほとんど認められず、また器面全体の文様が多段の横帯構成をもたないという点は非常に特徴的である。4～6は第12号址及び第68号址から出土した甕である。4は胴部中位、5・6は口縁部の破片で、何れも全体の器形・法量は不明である。ただし頸部に僅かなくびれをもち、口縁部が外反して直線的に立ち上がる器形であることは推定できる。文様は外面に斜方向または横羽状の櫛描文を施し、口唇上端に工具による押捺を、内面に櫛描文と同じ工具による横方向の短線(1)を加えるもの(5・6)と、外面整形後に沈線による横位羽状文を加えるもの(4)がみられる。器形は明瞭ではないが後続する段階のものには類似した要素が認められる。文様要素としての櫛描文はこの段階からみられるが主体的とはいえず、器面調整に刷毛目を用いている例は認められない。また横位羽状文は既に前段階にも存在しているが、沈線により施文されるものは中期中葉段階にはみられず、また所謂「櫛目鎮状文」を口縁内面に持つ例も、現在のところ確認されていない。壺の文様要素には前段階の中期中葉のものと共通する要素が散見されるが構成自体は全く異なっており、かつ後続する中期後葉のそれに引き継がれる部分が少ない。また甕の属性から見た場合、前段階の中でも後出的な様相としてとらえられる横羽状文に、Ⅰ段階に入ってから初めて見られる櫛目鎮状文のような新しい要素が伴っている。Ⅱ段階以降へと基本的な構成がそのまま引き継がれるという点は、壺の場合とは全く異なる状況であるといえよう。

こうした点からⅠ段階の資料をみた場合、中期中葉から後葉への過渡期にあたる資料に共通する要素を多分に含んでいることは間違いがない。しかし前段階から受け継ぎ、なおかつ後続する段階へと漸移的に変化する要素がどの程度認められるか、つまり型式組列上の位置付けという点になると未解決の問題を数多く孕んでいる。時間的な位置付けには問題がなくとも、宮ノ台式土器の最古段階としての評価が妥当であるかどうかについては、未だ意見の分かれるところである(2)。 (渡辺)

Ⅱ段階の土器 第1図7～13は手広八反目遺跡第15号住居址から出土した甕である。外面に櫛描による横位羽状文が施されるもの(7)、一本描沈線による横位羽状文が施されるもの(8・9)、ハケ目のみで横位羽状文を施さないものや(10)、紙幅の関係で掲載できなかったがナデ消してハケ目が不明瞭になったものとがある。また、口縁部内面に櫛目鎮状文がかなりの高い確率で認められる(7～9)。口唇部にハケ状工具によるキザミが主体となる(7～10)。器形はやや強めに外反する口縁部に最大径をもち、胴部の張りの弱いものが多いようである。11・12は台付甕の脚部である。定形化した弥生時代後期などの脚部と比較すると、ごく低脚のものではあるが、現状で遡れる台付甕の最も古い資料である。13は甕の底部で、網代痕が認められる。

14～19は壺である。14は頸部から胴部にかけて櫛描波状文と櫛描直線文を交互に施す。15は外面が全面に赤彩されるもので、頸部下半と胴部にそれぞれ半載竹管による刺突文を巡らせ、その間に擬流水文を施している。16は頸部に竹管による刺突文が巡り、その下に擬流水文が施される。17は頸部に巡る櫛描直線文が斜めのヘラ描沈線文により縦断されている。18は胴部に櫛描直線文が施され、それに断続的な櫛描直線文が付加されている。19は口唇部に縄文を施し、胴部上半に沈線区画された結紐文が施される。

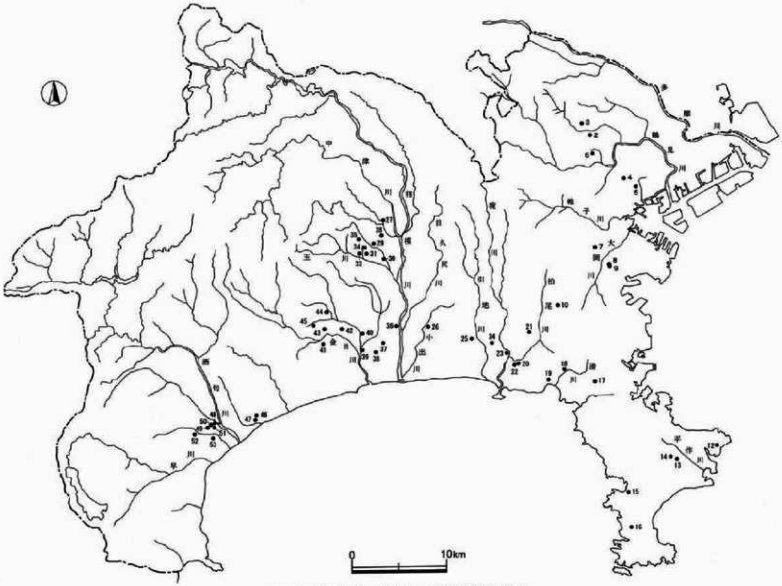
これらをふまえた上でⅡ段階の資料をみると、まず、甕は櫛描もしくは一本描沈線による横位羽状文が施されるものと、ハケ目のみで横位羽状文を施さないものが併存する。口縁部内面の櫛目鎮状文も高い確率で

28. 戸室子ノ神遺跡

1～4：第12号址　5・6：第68号址

20. 手広八反目遺跡

第1図　Ⅰ・Ⅱ段階の標式資料（実測図S＝1/6、拓影S＝1/3）



第２図　神奈川県内におけるⅠ・Ⅱ段階資料出土地点

第1表　宮ノ台式土器（Ⅰ～Ⅲ段階）出土遺跡一覧表

新No	旧No	遺跡名	時期	甕口縁内部の加飾			壺の主文様					その他	備考
				櫛目線状	波状	扇形	擬流水	流水文	擬流水＋複合櫛歯	直線＋懸垂	蕨四角		
川崎市													
1	9	南加瀬貝塚	Ⅰ～Ⅱ								○		文献追加
横浜市													
2	24	狭間根（池辺町）	Ⅱ～Ⅲ									○	壺1点のみ。櫛描横線＋扇形。
3	27	大塚	Ⅱ～Ⅲ	○			○			○	○		
4	44	西富士塚	Ⅱ～Ⅲ							○			
5	45	大口台	Ⅱ～Ⅲ								○		
6	51	折本西原	Ⅱ～Ⅲ		△		○	○	○	○		○	甕に擬流水文あり
7	65	東台	Ⅱ～Ⅲ									○	横線＋刺突の壺1点
8	67	竹の橋貝塚	Ⅱ～Ⅲ				○						擬流水＋結縄文
9	68	三殿台	Ⅱ～Ⅲ	○		○	○					○	横線＋刺突の壺あり
10	74	上俣田	Ⅱ～Ⅲ	○			○			○		○	横線＋弧線の壺あり
11	75	上台	Ⅱ～Ⅲ							○			
横須賀市													
12	81	鴨居上の台	Ⅱ～Ⅲ				○						
13	83	佐原城跡	Ⅱ～Ⅲ				○			○			
14	84	佐原東	Ⅱ～Ⅲ				○						
15	87	大本桃東	Ⅱ～Ⅲ				○						
三浦市													
16	89	赤坂	Ⅱ～Ⅲ	○			○	○		○	○	○	甕口縁に円形刺突
逗子市													
17	95	池子遺跡群	Ⅰ～Ⅲ	○		○	○	○				○	櫛描波状文乗あり
鎌倉市													
18	98	大倉南御門	Ⅱ～Ⅲ	○			○			○			
19	99	伝安達泰盛邸跡	Ⅱ？		○								
20	102	千広八反田	Ⅱ	○			○			○		○	Ⅱ段階の標式資料
21	103	大船山房	Ⅱ～Ⅲ				○						
藤沢市													
22	106	川名清水	Ⅱ	○									
23	108	若尾山	Ⅱ～Ⅲ	○			○						袋状口縁の壺あり
24	109	福岡台地U地点	Ⅱ	○			○						
25	116	大鹿藤山	Ⅱ～Ⅲ				○						
茅ヶ崎市													
26	120	下寺尾西方A	Ⅱ	○									
厚木市													
27	136	東田西・白根	Ⅱ				○			○			
28	138	子ノ神	Ⅰ	○							○		Ⅰ段階の標式資料
29	141	恩名神原	Ⅰ～Ⅱ	○									甕1点のみ
30	143	船子・宮の前	Ⅱ	○			○						
31	145	長谷登野	Ⅰ～Ⅱ	○									甕の破片1点のみ
32	146	小野川野	Ⅰ	○									甕の外面縦位
33	一	小野川原	Ⅰ	○									甕の外面縦位
34	147	愛名鳥山	Ⅱ～Ⅲ				○						擬流水＋結縄文
35	148	愛名宮地	Ⅰ？	○								○	甕内面口縁に横羽状
平塚市													
36	159	鷹見堂	Ⅱ～Ⅲ									○	壺1点のみ
37	161	山王B	Ⅰ～Ⅱ	○									甕の外面縦位
38	162	大原	Ⅱ～Ⅲ				○					○	甕内面口縁に横羽状
39	164	南原B	Ⅱ～Ⅲ							○			壺1点のみ
40	165	豊田本郷	Ⅱ	○									甕破片1点のみ
41	169	原口	Ⅱ	○			○	○					櫛目線状文二段施文
42	170	沢検	Ⅱ～Ⅲ						○				壺1点のみ
43	171	真田・北金目	Ⅱ～Ⅲ				○	○					
秦野市													
44	173	根丸島	Ⅱ～Ⅲ				○						
45	174	砂田台	Ⅱ～Ⅲ	○			○					○	櫛描波状文乗あり
小田原市													
46	178	三ツ俣	Ⅱ～Ⅲ	○			○						櫛目線状文二段施文
47	179	町畑	Ⅱ～Ⅲ				○						写真のみ
48	186	上山神	Ⅱ				○						擬流水＋結縄文
49	187	山ノ神	Ⅱ～Ⅲ	○			○			○			櫛目線状文二段施文
50	189	山神下	Ⅱ				○						
51	190	多古（白山神社）	Ⅱ～Ⅲ									○	複合櫛歯＋波状文壺
52	194	久野多古境	Ⅰ～Ⅱ	○									
53	195	小田原（谷津）	Ⅰ～Ⅱ				○		○			○	

新No.は今回の分布図、旧No.は前回の分布図の遺跡番号　○：該当あり　△：櫛描以外の手法で該当あり
旧No.24と78は新No.2に統合した

認められるが、Ⅰ段階に比べ横位羽状文は単位間の間隔があき、櫛目鎮状文も条数が減少するという指摘がある(安藤1990)。口縁部の装飾としてはキザミが主体となる。新しい要素として、台付甕と思われる脚部が認められる一方で、底部に網代痕が残るなど前段階の要素も残存する。

壺にみられる特徴としては、まず、流水文や擬流水文、懸垂文、直線文、波長の細かい波状文といった櫛描文の比率が非常に高いことがあげられる。水平方向に展開する文様単位を密に重ねることが多く、文様帯は頸部から胴部上半にかけて幅広いという傾向がある。縄文を使用するモチーフは少ないが、結紐文や舌状文などが確認されている。この段階の文様帯構成・文様モチーフは、白岩式古段階を中心とした土器群との類似性が従来より指摘されている(安藤1990等)。文様帯以外の部分では、ハケ目が残ることが多く、ミガキや赤彩の比率は低い。器形は胴部中央もしくは胴部上半に最大径をもつものが多い。

Ⅱ段階は櫛描文の導入・波及期として捉えられてきた時期である。櫛描文の導入・波及という点に画期を見出し、このⅡ段階を宮ノ台式土器の成立を考える上で重視することも可能であるが、このことは宮ノ台式土器の設定に関わる問題と不可分である。いずれにしても、中期中葉以前の系統をひく要素は残存するものの、東遼江地域の土器群の要素が本格的に展開し始める段階ということは可能であろう。

そして、続くⅢ段階は、壺の羽状縄文帯が盛行して文様帯の縮小化が進行し、甕はハケ目調整だけのものが組成するなど、南関東地方独自の展開が始まる。そして、遺跡数は増加し、新たに地域差が出現することなどが指摘されている。大きな転換点となるⅡ段階からⅢ段階への変遷も、宮ノ台式土器の枠組みを考える上では問題となってくる。このように、宮ノ台式土器の変遷のなかでのⅡ段階の評価は非常に重要な問題であり、その位置づけが今後の課題といえるだろう。 (飯塚)

3．各地域における様相

県内の遺跡において出土した宮ノ台式土器のうち、前述の基準に基づいて選別できたものは53遺跡にわたっている(第1表)。第3～9図はそのうち実測図・拓影資料から291点を選び出したものである。これらの資料は概ねⅠ・Ⅱ段階に該当し、神奈川県下で宮ノ台式土器の分布する多くの地域で確認される(第2図)。ただし壺の擬流水文、直線文と短線や懸垂文の組み合わせ等はⅢ段階の古い様相にもみられる構成であり、壺胴部の櫛描文が部分的に残存している破片などの場合はⅡ段階以前の時期に限定することができないため、Ⅱ～Ⅲ段階に該当する資料として扱っている。

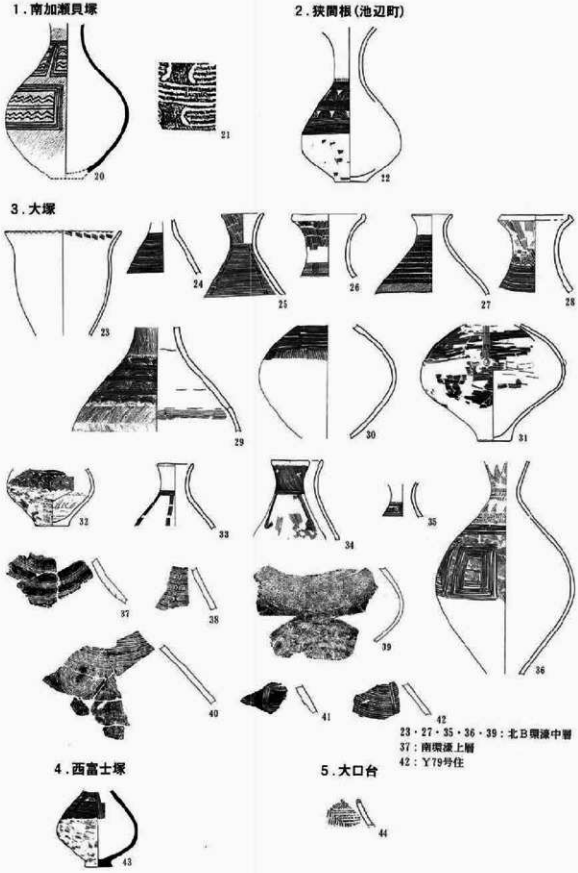
川崎・横浜北部地域（鶴見川流域・遺跡№1～6、第3図20～44・第4図45～93）

Ⅱ～Ⅲ段階にかけての資料がみられ、大半が壺の櫛描文部分の破片である。ごく稀に擬流水文と複合鋸歯文が一個体に施文される例(49・84)が認められる。南加瀬貝塚20は重四角文の内部に横線と波状文を交互に描く例で、大塚遺跡36・大口台遺跡44は重四角文をもち櫛描文以外の文様要素を用いている。

甕でⅠ・Ⅱ段階に該当するものはほとんどなく、大塚遺跡23がまばらな櫛目鎮状文を加えられる。また折本西原遺跡83の甕は口縁内面に沈線による波状文が施文され、同遺跡89は甕の胴部に櫛描きの擬流水文と波状文が施文される非常に珍しい例である。

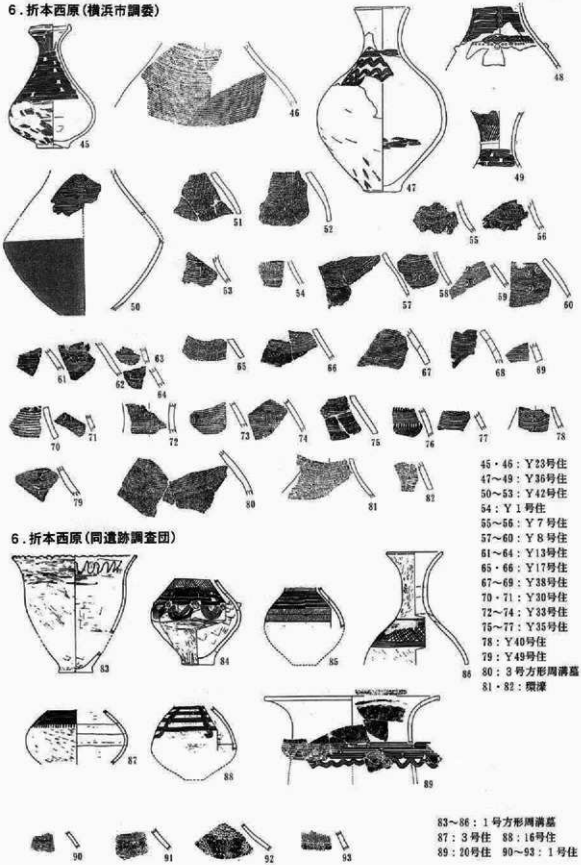
横浜南部地域（大岡川流域・遺跡№7～9、第5図94～104）

Ⅱ～Ⅲ段階の資料がみられる。竹の橋貝塚95は擬流水文の下位に縄文帯による結紐文が施される。三殿台遺跡では甕の破片が多く確認されているが、個体ごとに櫛目鎮状文の長短の差が著しい。また櫛目鎮状文の代わりに扇形の櫛描文が口縁内面に加飾されるもの(96)は珍しい。



第3図　神奈川県内の出土例（1）〔実測図S＝1/8、拓影S＝1/6〕

6．折本西原（横浜市調委）



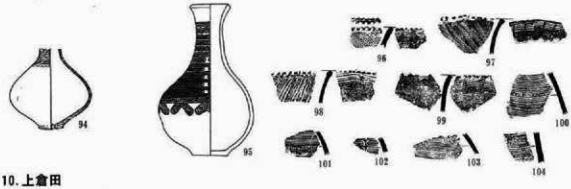
45・46：Y23号住
47～49：Y36号住
50～53：Y42号住
54：Y1号住
55～56：Y7号住
57～60：Y8号住
61～64：Y13号住
65・66：Y17号住
67～69：Y38号住
70・71：Y30号住
72～74：Y33号住
75～77：Y35号住
78：Y40号住
79：Y49号住
80：3号方形周溝墓
81・82：環溝

6．折本西原（同遺跡調査団）

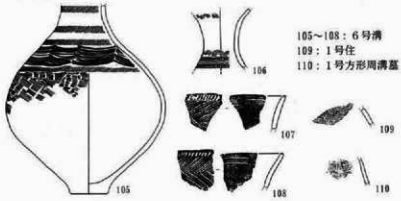
83～86：1号方形周溝墓
87：3号住　88：16号住
89：20号住　90～93：1号住

第4図　神奈川県内の出土例（2）〔実測図S＝1/8、拓影S＝1/6〕

7.東台　8.竹の橋貝塚　9.三殿台



10.上倉田



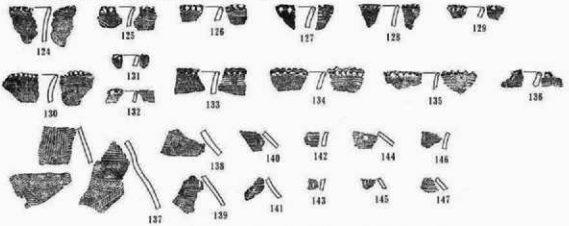
105～108：6号溝
109：1号住
110：1号方形周溝墓

11.上台

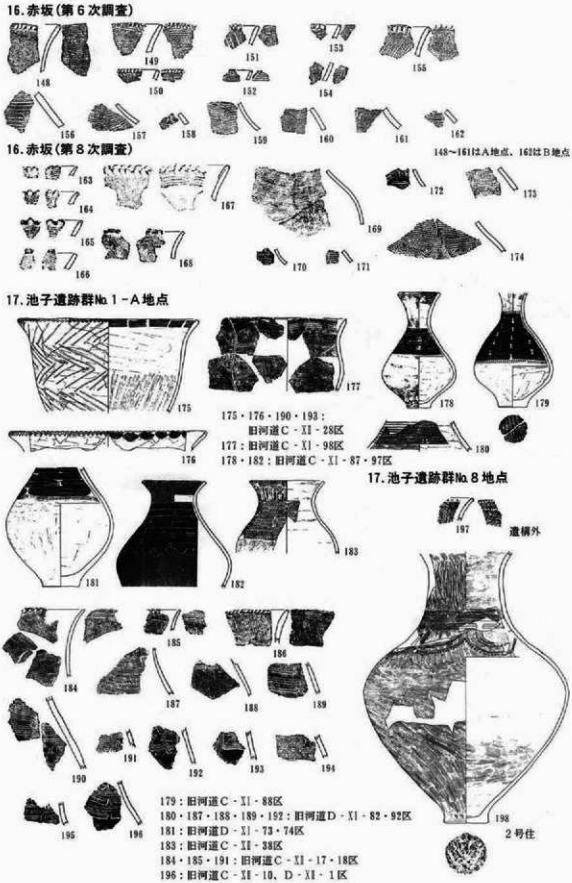
12.鴨居上の台　13.佐原城跡　14.佐原泉　15.大木根東

113：Y4号住　114・115：Y7号住　116：Y1号溝
117：Y5号溝　118：Y10号溝　119：遺構外
121～123：包含層

16.赤坂（第3次・5次調査）124～146は3次、147は5次調査

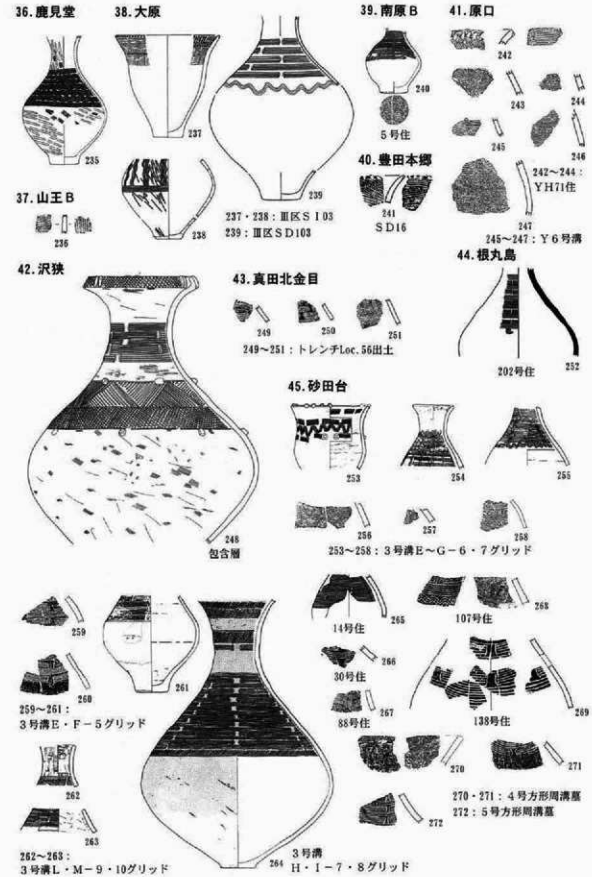


第5図　神奈川県内の出土例（3）〔実測図S＝1/8、拓影S＝1/6〕



第6図　神奈川県内の出土例（4）〔実測図S=1/8、拓影S=1/6〕

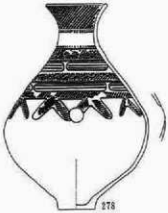
第7図　神奈川県内の出土例（5）〔実測図S＝1/8、拓影S＝1/6〕



第８図　神奈川県内の出土例（６）〔実測図Ｓ＝1/8、拓影Ｓ＝1/6〕

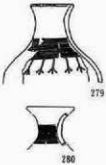
46. 国府津三ツ俣

48. 上山神



1号方形周溝墓

50. 山神下

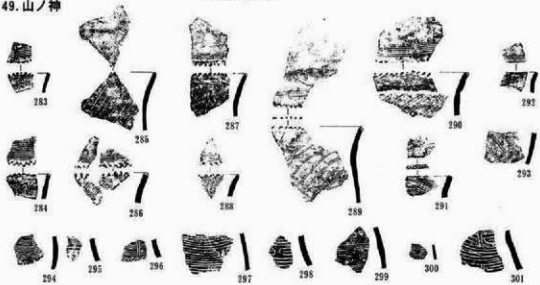


279：3号方形周溝墓
280：2号方形周溝墓

51. 多古（白山神社）

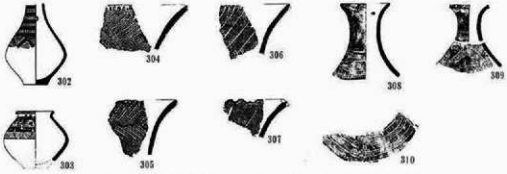
52. 久野多古境

49. 山ノ神



53. 小田原（谷津）

＊302・303は1/8、その他は縮尺不同



第9図　神奈川県内の出土例（7）〔実測図S＝1/8、拓影S＝1/6〕

横須賀・三浦地域（三浦半島・遺跡№12～16、第５図112～147・第６図148～174）

Ⅱ～Ⅲ段階の資料がみられる。赤坂遺跡では、甕に長短両方の櫛目鎮状文があり、その上方に櫛歯状工具の先端による列点刺突を加える例（133・134・149）もみられる。稀有な例としては、口縁内面に櫛目鎮状文を施文するのではなく、竹管状工具の先端による円形刺突を列点状に施すもの（155）が存在する。また167は内側に肥厚するかたちで口縁を折返し状に成形し、櫛目鎮状文を加えている。壺は174のような擬流水文に扇形文を伴うものがみられるほか、137では重四角文と縄文帯による結紐文とを組み合わせている。

逗子・鎌倉東部地域（滑川流域・遺跡№17～19、第６図175～198・第７図199～205）

Ⅰ～Ⅲ段階の資料がみられる。ただし池子遺跡群以外はⅡ～Ⅲ段階に該当する。池子遺跡群177は甕の外面に櫛描きの不整な波状・山形文を、口縁内面に櫛目鎮状文を施す。大倉南御門遺跡には甕の櫛目鎮状文に長短の両方が認められる。伝安達泰盛邸跡205は口縁内面に櫛描波状文を施している。

鎌倉西部・藤沢地域（境川・引地川流域・遺跡№20～25、第７図206～216）

Ⅱ段階単独とⅡ～Ⅲ段階の遺跡の両方が認められる。櫛描文の壺は擬流水文がほとんどで、甕の櫛目鎮状文は長短両方が存在する。若尾山遺跡では208のようなⅡ段階の甕と同じ方形周溝墓から、210のような袋状の口縁を持つ擬流水文壺が出土している。Ⅱ段階の標式である手広八反目遺跡はこの地域に含まれる。

茅ヶ崎北部地域（小出川流域・遺跡№26、第７図217）

下寺尾西方Ａ遺跡からⅡ段階の資料が出土している。217は口縁内面に若干乱れた櫛目鎮状文が施される。この他に、図示していないがⅡ～Ⅲ段階の資料が近年の茅ヶ崎市内発掘調査事例でも確認されている。

厚木南部地域（中津川下流域～玉川流域間・遺跡№27～35、第７図218～234）

Ⅰ段階に比定される資料が４遺跡から出土しているほか、Ⅰ～Ⅱ段階及びⅡ～Ⅲ段階にまたがるものと考えられる資料が数例みられる。Ⅰ段階の資料の標式である戸室子ノ神遺跡を初めとして、小野川野・小野川原両遺跡で断片的に櫛目鎮状文甕が出土している。Ⅰ～Ⅱ段階の資料も含めて、甕口縁内部の加飾では、櫛目鎮状文に列点刺突が伴う例（225・227）や櫛描文を横位羽状に施す例（233）がみられる。Ⅱ～Ⅲ段階の資料としては、愛名鳥山遺跡231の壺に擬流水文と列点刺突および縄文帯による結紐文が施されている。

平塚・秦野地域（相模川下流域～金目川間・遺跡№36～45、第８図235～272）

Ⅱ～Ⅲ段階の資料を中心に、僅かにⅠ～Ⅱ段階の様相のものがみられる。甕は櫛目鎮状文のものが散見され、中には原口遺跡242のように２段にわたって施す例や、大原遺跡237のような櫛歯状工具の先端による刺突を横位羽状に施すものがみられる。また特殊な例としては、砂田台遺跡253例のように櫛目鎮状文と波状文を外面に施して円形の貼付を加え、口縁内面にも櫛目鎮状文を施す甕が存在する。壺は擬流水文と櫛描波状文（239・268）、櫛描きによる横位直線文と綾波状の組み合わせ（238）のほか、沢狭遺跡248例のような擬流水文と複合鋸歯文を施したものもみられる。擬流水文には端部を全て揃えるか、または一段縦ずらし編えるもの（239・264など）のほかに、個々の単位が短くて弧状に閉じているもの（247・249・250）がある。

小田原地域（酒匂川流域・遺跡№46～53、第９図273～310）

遺跡によりⅠ～Ⅱ段階の古い様相が目立つ場合と、Ⅱ～Ⅲ段階の資料とに傾向が分かれる。甕の櫛目鎮状文は長短両方がみられ、特徴的な加飾を施される例はみられない。壺は擬流水文を中心に、縄文帯による結紐文（278）や波状文（294）、先端が三つ又で垂下する沈線（279）を加える例がみられる。また小田原（谷津）遺跡302・303のように複合鋸歯文と擬流水文などの櫛描文が組成するものも散見される。（渡辺）

4．まとめ　―Ⅰ・Ⅱ段階の様相と遺跡分布―

県内各地域における出土事例から選別した資料についての概略を述べてきた。従来、櫛描文を多用するⅡ段階までと、羽状縄文帯を多用するⅢ段階以降という新古の様相差が指摘されてきたが、今回資料を抽出した結果、Ⅰ・Ⅱ段階の間にそれとは別種の様相差というべきものが存在していることがより明らかとなった。まず、これらの資料の分布について見直してみたい。Ⅰ段階の資料は相模川中流域の西岸地域、特に中津川下流域～玉川流域間に分布し、他の地域には見られない。それぞれの遺跡の資料を見てみると、Ⅰ段階の土器が出土している遺跡の場合は概ねこの段階の資料に限られ、前段階の中期中葉の遺物が出土していることはあっても、同一遺跡内ではⅡ段階以降の土器は認められない。次にⅡ段階の資料の場合、その分布は山間部を除く県域全体に及び、この段階以降の宮ノ台式土器の分布にほぼ相当するといってよい。またそれぞれの遺跡から出土した資料を見ると、Ⅱ段階以降の土器へと続くことはあっても、Ⅰ段階以前の土器は伴出ない[31]。

このように、分布の上でⅠ段階の遺跡とⅡ段階以降の遺跡とは明らかに異なる一方で、Ⅱ段階の資料とそれ以降の段階の場合、同一遺跡内で連続する場合が多く、むしろⅡ段階単独の遺跡の方が少ないという傾向も確認できた。また、県東部を中心として、従来考えられていたよりもⅡ段階の土器を出土する遺跡が予想以上に多く存在した。Ⅲ段階以降に集落が続いたため、結果として遺構としての残存状況が悪く、Ⅱ段階に既に集落がつくられ始めている可能性のあるケースが考えられる。

このことから、宮ノ台式土器はⅢ段階を契機として出土する遺跡の数が増加し、各地域それぞれの様相が生じてくるものと理解されてきたが、既にⅡ段階～Ⅲ段階への変遷過程で遺跡の分布傾向は定着していった可能性がある。また宮ノ台式土器における地域相はⅢ段階に確立したとしても、その下地となる要素は同様にⅡ段階からⅢ段階への移行に伴い形成されていったことが想定される。

ただし今回は遺跡から出土した土器を集成した上で、その中から従来の段階設定に基づいて古い様相をもつ資料を選別した作業にすぎず、これまでのあくまでも仮説の域を出ないものである。本来は宮ノ台期の遺跡全体の様相を踏まえた上で、出土遺物・遺跡の変遷と規模・立地条件等の様々な要素を比較・検討した上で論じていくべきであるが、ここではその可能性を指摘するにとどめた。（飯塚・渡辺）

註

1）宮ノ台式土器の頸口縁内面に施されるこうした加飾を指して、櫛目鎖状文または平行鎖状文などの呼称が与えられている。本稿では「櫛目鎖状文」と呼ぶこととする。

2）こうした弥生時代中期中葉から後葉への過渡的な段階の資料では、北関東の下野地域や埼玉県域北部の荒川中流域で、地域色の非常に強い資料が注目されている（石川1996・1998、吉田2003）。神奈川県域でも宮ノ台式土器のⅠ・Ⅱ段階の資料の中にこのような土器との関連性を見わける要素が散見される。具体的には厚木市戸室子ノ神遺跡や愛甲宿遺跡、横浜市大塚遺跡の出土土器の一部である。

3）第1表中にも遺物の時期をⅠ～Ⅱ段階としているものがあるが、これは甕の櫛目鎖状文の部分だけの破片（例えば山王B遺跡・第8図236）のような、個々の資料の位置づけがⅠ・Ⅱ段階のどちらか確定できないものを指している。同一遺跡内で両段階の資料を出土していることが明確に把握できている例は確認できていない。

参考文献

安藤広道　1990「神奈川県下東古台地における宮ノ台式土器の細分―遺跡群研究のためのタイムスケールの整理―」（上）（下）　「古代文化」第42巻第6・7号（財）古代学協会

1991「相模湾沿岸地域における宮ノ台式土器の細分」『唐古』（藤田三郎さん・中岡紅さん結婚記念）　田原本唐古整理室OB会

1996「南関東地方（中期後半・後期）」『YAY！弥生土器を語る会20回到達記念論文集』弥生土器を語る会

1998「相模川流域における宮ノ台式期の集落―その時空間的展開の素描―」『考古論叢神奈河』第7集　神奈川県考古学会

石川日出志　1996　「東日本弥生中期広域編年の概略」「ＹＡＹ！弥生土器を語る会20回到達記念論文集」 弥生土器を語る会
　　1998　「弥生時代中期関東の４地域の併存」「駿台史学」第102号　駿台史学会
弥生時代研究プロジェクトチーム　2002　「宮ノ台式土器の研究（1）」「研究紀要７　かながわの考古学」（財）かながわ考古学財団
　　2003　「宮ノ台式土器の研究（2）」「研究紀要８　かながわの考古学」（財）かながわ考古学財団
吉田　稔　2003　「北島式の提唱」「北島式土器とその時代－弥生時代の新展開－」埼玉考古別冊７　埼玉考古学会

一覧表文献補遺

南加瀬貝塚　エヌ・ジー・モンロー　1908「PREHISTORIC JAPAN」(1982　第一書房)

考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡（1）

－通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介－

古墳時代研究プロジェクトチーム

はじめに

神奈川県立埋蔵文化財センターには、神奈川県における考古学の偉大な先駆者、故赤星直忠博士が寄贈された膨大な量のいわゆる「赤星ノート」が所蔵されている。これは氏が大正末年から逝去された平成3年までに書き綴った神奈川県内の遺跡の踏査記録等を中心とした個人的な備忘録である。その市町村別の目録については平成8年から平成11年にかけて刊行された、神奈川県立埋蔵文化財センター年報14～18に掲載されている。しかしながらこれはあくまでも目録であって、その内容が詳細に紹介されているわけではない。踏査記録には正式な報告が成されないまま湮滅し、このノートでしか内容を知ることができない貴重な情報が数多く含まれている。

そこで当プロジェクトとしては、この貴重な「赤星ノート」に記載された古墳時代の情報についてその概要を公開し、記載内容についての今日的な視野でのコメントも併せて掲載することを計画した。このことにより赤星博士の地道な業績が改めて評価され、神奈川県の古墳時代研究の進展に多少なりとも寄与できれば幸いである。

例　言

- 通称「赤星ノート」の神奈川県立埋蔵文化財センター保管分の古墳時代に関係する項目を抜枠し、報告・掲載していくものである。
- 研究紀要第9号には横浜市域にあたる01001・01011・01030・01032・01104番を掲載している。
- 番号は埋蔵文化財センター年報14～18に記載されている番号に対応している。
- 執筆分担は01030・01032番：上田　薫、01011番：植山英史、01104番：谷　正秋、01001番：柏木善治が行った。
- 各記述は「1．赤星ノートの内容」「2．記載資料の整理」の2つに大きく分け、1．の細目は［調査（踏査）年月］［資料保管場所］［記載内容概略］とし、2．は［（遺跡及び）遺物（遺構）概要］［掲載図書］［掲載図書概略］［小結］などとし、資料に応じ該当部分を記載した。
- 挿図や図版は基本的に作図者のタッチを重視し、赤星氏の図、もしくは実測者の図をそのまま掲載し、写真に関しても同様である。
- 「赤星ノート」は遺構図では略測図に寸法の数字が記載されるものが多く、遺物図は基本的に原寸に近い図ではあるが、なかにはそれから外れるものも存在するため、縮尺は任意掲載のものが多い。
- 本稿に掲載した赤星直忠資料は全て神奈川県教育委員会所蔵である。
- 個人情報保護の観点から、個人名・個人の住所などはマスキングして掲載している。

年報番号 01001　伝 保土ヶ谷区出土 頭椎大刀　横浜市保土ヶ谷区

1．赤星ノートの内容

[調査（踏査）年月]　昭和52年９月４日・昭和52年９月８日・昭和52年10月８日のつごう３回、福島県の穴沢氏との封書のやりとり有り（日付は穴沢氏→赤星氏への手紙）

[資料保管場所]　会津若松市 [redacted] 氏 蔵（昭和52年現在）

[記載内容概略]　穴沢氏の封書のみ存在。昭和52年９月４日付けの封書：近所の眼科医で刀剣の研究家（会津若松市[redacted]氏？）が入手し、紹介。保土ヶ谷区から出たもので柄頭を失っているが、頭椎大刀であることは確実。昭和52年９月８日付けの封書：写真送付、柄頭は遺存せず、後補の木製のものが挿入されている。茎には目釘があり、把の穴と相応するが、銹により挿入不可。菊座状の打込文が珍しい。昭和52年10月８日付けの封書：把（菊座状打込文）の拡大写真送付。

2．記載資料の整理

[遺物概要] 頭椎とされる大刀は伝保土ヶ谷区とされるのみで、出土地などの大刀以外の情報がないものである。資料化も図録に掲載された限りであり、大刀に関する詳細は不明と言わざるをえない。

実測図からの各数値であるが、残存長は76.5㎝、刃長は約66.8㎝、刃部幅は約2.8㎝を測る。目釘穴は尻側に１ヶ所存在し、把の飾り金具は金銅装で菊座状打込文（下辺が合わせ目）があしらわれ、その長さは10.5㎝である。鐔は金銅装の倒卵形で、六窓の透かしを持ち、長径は約6.7㎝である。鋒も金銅装で、長さ1.7㎝、幅2.8㎝を測り、筒金も金銅装で鋒に密接するものと、切先からおよそ14.5㎝のところに筒金縁金具と密接して、つごう２単位が遺存する。いずれも長さは約6.0㎝、幅は約3.5㎝を測る。筒金縁金具も金銅装で筒金に密接して２単位が存在する。外径は関側のもので約3.5㎝、鞘尻側のもので約3.4㎝を測る。責金具は不明瞭ながら金銅装とみられるものが２単位存在し、いずれも外径は約3.3㎝を測る。筒金と責金具の正確な位置は刀身に残った二つを除き分明ではないとの注釈がされる。鞘尻金具も金銅装で端部は円くおさめられ、内部には鞘の木質が遺存する。長さは約12.7㎝、幅3.0㎝、厚さ1.8㎝で、身厚は1.0㎜を測る。また、鞘尻金具は切先から約４㎝程度挿入可能との注釈がある。把頭にかかる、切羽や縁金などの装具は遺存しておらず不明である。

県内における古墳時代の大刀で、その拵えを含めた全体像の推察が可能なものは、そのほとんどが装飾大刀に限られるが、数量的にはとても少ないものである。頭椎大刀は県内で出土している装飾大刀のなかでも数的に少なく、横浜市西区出土や、川崎市加瀬台４号墳（丁源寺古墳？）として伝えられるものなどが挙げられるが詳細不明なものが多い。この伝保土ヶ谷区出土の大刀も柄頭は後補の木製のものが装着されているため、本来の柄頭が何であったのか再考も必要であろう。筒金も県内での出土は少なく、河南沢１号墓の圭頭大刀、塚田２号墳の環頭大刀、久野諏訪の原２号墳（断片）、埒面古墳（袋頭：詳細不明）、東方１号墓の円頭大刀などに限られる。金銅装で打込みによる柄の飾り金具が遺存している資料は、久野諏訪の原２号墳や川名新林右西斜面２号墓などで出土しているが、唐草文もしくは唐草状の打込であり、菊座状のものは珍しい。

[掲載図書] 福島県立博物館1988『日本刀の起源展－直刀から彎刀へ－』福島県立博物館展示図録

[掲載図書概略] 写真の掲載のみ。キャプションとして頭椎大刀外装（神奈川県横浜市保土ヶ谷区出土／７世紀／全長93.5㎝）とあるのみ。　（柏木）

※　大刀実測図掲載にあたっては穴沢咏光氏の了承並びに協力を頂きました。記して感謝いたします。

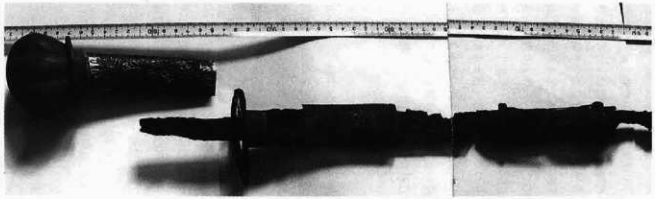
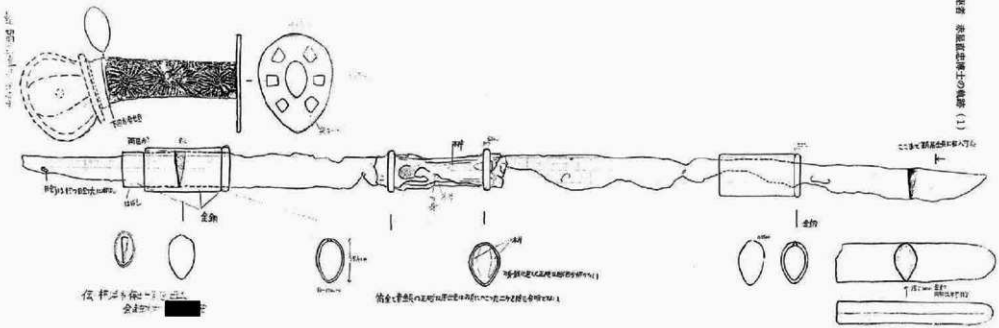


写真1　昭和52年9月8日郵送の大刀写真

写真2　昭和52年10月8日郵送の菊亟状打込文



第1図　昭和52年9月4日郵送の実測図（穴沢味光氏実測）（※S＝1/3）

年報番号 01011　岩瀬山横穴群（駒岡横穴、ひょうたん山横穴）　横浜市鶴見区駒岡1585

1．赤星ノートの内容

[調査（踏査）年月] 本資料の記載の一部は昭和52(1977)年に神奈川県立博物館で行われた「100体の仏像を見る－神奈川の彫刻－」開催案内・記事掲載依頼の裏、及び県史作成用に作られた集成カード神奈川県内主要遺物調査票　県史考古資料Ｂに記載されている。

[資料保管場所] 国立東京博物館、三殿台考古館、[redacted]（県史作成時）

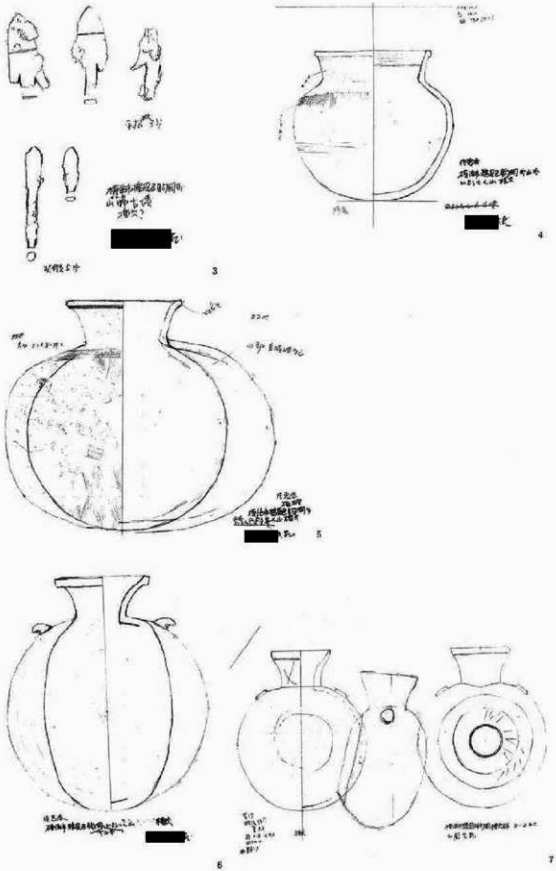
[記載内容概略] 本資料はＡ・８枚の遺物実測図、略図、Ｂ・５枚の写真、Ｃ・１枚の集成カードの計14枚の資料からなる。

Ａ・遺物実測図・略図　略図は２枚あり、いずれも子持勾玉の略図(①・②)である。「駒岡横穴、子持勾玉、[redacted]氏、滑石製一寸五分五厘・国立博物館蔵、[redacted]氏明治35年３月25日献納」の記述はほぼ両者とも同じで、片方には「[redacted]氏」、「記録には石剣頭と記す由」とのメモがある。実測図は６枚(③～⑧)で③鉄鏃図５本が書かれたものには「横浜市鶴見区駒岡町　山野古墳　横穴」「平根鏃３片　尖根鏃５片」等の記載がみえる。④は須恵器短頸壺実測図で計測値や調整技法の他に「横浜市鶴見区駒岡町山野ひょうたん山横穴」の記載があり「ひょうたん山古墳」の記載を横線で消している。その他に「[redacted]」氏の名前が書かれている。⑤は須恵器横瓶の実測図で、調整技法の他に④とまったく同様の「・・・ひょうたん山横穴」、「ひょうたん山古墳(消し)」の記述が見られる。⑥は須恵器提瓶の実測図で、同様に「・・ひょうたん山横穴」の記述がある。⑦も須恵器提瓶の実測図で計測値の他に「横浜市鶴見区駒岡横穴群Ｂ－２出土　三殿台蔵」の記述がある。⑧は⑦と同一個体の実測図に拓本が貼り付けてあるもので、７と同様「横浜市鶴見区駒岡横穴群Ｂ－２出土　三殿台蔵」と記されている。写真は計５枚で⑨完形の銅鋺２点⑩玉類で勾玉３点、小玉11点（紐通し）、管玉２点（紐通し）⑪馬具・引手２点⑫馬具・環状鏡板⑬馬具・環状鏡板（⑫の裏面と思われる）である。集成カードは一枚で⑭本遺跡の調査報告である「考古界８－６」(明治42年)の概要が記されている。赤星氏のオリジナルの所見等の書き込みは見あたらない。

2．記載資料の整理

[遺物概要] 実測図の考察①②の子持勾玉は同一遺物を扱ったものと思われ、記載内容もほぼ同一、②の方が丁寧に記されているが①では記載内容の整理がされており、①を元に②を作成したと推定される。③鉄鏃実測図　平根系鏃は２本が短茎柳葉腸抉鏃で、残る１本は残存部が僅かだが同様の形式と思われる。尖根系は長頸柳葉鏃２本である。④須恵器・短頸壺実測図　頸部～口辺の外反は小さく口縁端部は肥厚する。胴部は球形に近く肩部で内湾し、最大径は肩部下にある。底部は丸底。肩部に縦目のクシ目、中位下にカキ目と思われる調整が描かれる。⑤須恵器・横瓶実測図　口頸部は外反し端部下端に稜を持つ。端部は肥厚する。胴部は俵状を呈するが実測図計測で胴部最大径(長)28.5㎝、器高24.3㎝と胴張は比較的小さい。表面に不規則なクシ目が描かれている。⑥須恵器・提瓶実測図　口頸部は中位より強く外反し口縁部は肥厚し端部は面を持つ。胴部は扁平な球体で肩部に退化した鍵状の把手が対に付く。⑦⑧須恵器・提瓶実測図　口頸部は基部は僅かに外彎して立ち上がり中位で外反した後、端部はほぼ垂直に立ち上がる。端部は丸く仕上げられる。体部は扁平な球体を呈し、クシと思われる３条の同心円（回転）文内に放射状の調整を施す。頸部に「×」状のヘラ記号持つ。肩部に把手の退化したボタン状の把手が対に付く。

[掲載図書]　『神奈川県史20　考古資料』　古墳時代・古代図版719（図１～４）、概要210



第2図　岩瀬山横穴墓出土遺物（番号は本文記載○数字に対応）〔3：S＝1/3　4～7：1/4〕

[掲載図書概略] 本資料は概要で「岩瀬山横穴群」として紹介されている。岩瀬山横穴群は明治40年に坪井正五郎によって、本横穴群の所在する丘陵上にある駒岡山古墳(駒岡古墳・ひょうたん山古墳)と同時に調査され、上記に見られる考古界8-6(明治42年)に報告がなされている。概要には当時ひょうたん山保存会が出来て、同会作成の出土品の色刷石版画が売られたことが記されている(第3図・斉藤　忠編著「日本考古学史資料集成3　明治時代2」吉川弘文館)。今回扱った赤星ノートにはこの版画についての記載はない。横穴墓の形態については古いものと新しいものがあるとだけ記載されている。

図版は実測図④～⑧の4点の写真が掲載されており、④～⑥は[redacted]で、⑦=⑧は三殿台考古館蔵とされている。なお、県史では図版は本横穴群出土遺物のキャプションが「駒岡古墳出土」となっており、概要文中にある図版番号と齟齬が生じているが、赤星ノートの記載から概要文の「岩瀬山横穴群」が正しいと考えられる。

[小　結] 本資料に記載の見える遺構名は「横浜駒岡横穴・群」「横浜山野古墳・横穴」「横浜駒岡ひょうたん山横穴（古墳←消し）」である。「駒岡横穴・群」とされているものは略図①=③の子持勾玉（駒岡横穴）1点と実測図⑦=⑧の提瓶2点である。B－2出土とされる提瓶の特徴は須恵器編年でTK43に該当すると思われ、従来の年代観では6世紀後半～末のものと思われる。「山野古墳・横穴」と記されているものは実測図③の鉄鏃で短茎柳葉が3点、長頸柳葉が5点と記されている。記述に基づくと短頸鏃の占める割合が一般的な横穴墓出土のものより多く、その形態からも西暦600年以前のものである可能性が強い。「ひょうたん山横穴」と記されているものは実測図④⑤⑥の須恵器・短頸壺、横瓶、提瓶である。⑥の提瓶の年代はMT85（～TK43）、6世紀第三四半期にあたると思われる。以上、遺物は横浜市北部の当該地域では、6世紀後半以降の横穴式石室を有する古墳から出土するものと類似し、横穴墓との比較では横浜市熊ヶ谷横穴墓群や市ケ尾横穴墓群などと並び、現在判明している中では横穴墓から出土する須恵器としては早い段階が与えられるがその中でも時期差があると思われる。　（植山）

第3図　駒岡瓢箪山横穴出土遺物

年報番号 01030　横浜新羽横穴　　横浜市港北区新羽町1388

1．赤星ノートの内容

［調査（踏査）年月］昭和39年７月20日に、当時神奈川県教育委員会社会教育課の職員で埋蔵文化財を担当していた[redacted]氏が実見した、横浜市港北区新羽町[redacted]番地付近で発見された横穴墓に関する聞き書きのメモ。

［記載内容概略］Ｂ５大の藁半紙に、ボールペンで簡単なメモと略図が記載されている。内容は、宅地造成により横穴墓が破壊された。今は存在しないがかつて付近に横穴墓４基が存在し、今回はその左側で新たに発見された。凝灰岩を掘り込んで構築されており、シジミ、アサリ、その他の貝が床上に10cm程の厚さで敷かれていた。遺物は発見されなかったが、保存状態が良好な人骨を確認。

2．記載資料の整理

［遺構概要］赤星氏本人が実見したのではなく、簡単な聞き書きのメモ。したがって、その内容の信憑性については若干疑問もある。

略図によると、横穴墓の内部構造は玄室と羨道の区分のないタイプで、奥壁に接して棺座が設けられている。棺座の手前には壁障が認められる。前庭部が存在したか否かは不明。

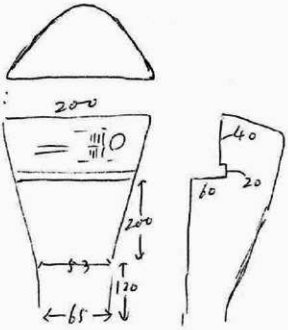
貝床を有する横穴墓は神奈川県内では極めて珍しいが、10cmもの厚さに敷かれたものとなると類例を知らない。貝が横穴墓の内部全体に敷かれていたか否かは不明であるが、おそらく棺座上のみに敷かれていたのであろう。なお、60cmもの高さを有する棺座はこの地域周辺では珍しい。ちなみに、本横穴墓の2.5km程西に位置する都筑区東方町の東方横穴墓群では21基の横穴墓が調査されているが、これだけの高さの棺座を有する横穴墓は１基も存在しない。

全長3.8ｍ、最大幅２ｍ、最大高は不明。全体の形状から７世紀中頃の所産と推察される。

遺跡のすぐ南には鶴見川が流れ、周辺地域は比較的横穴墓の分布が密なことで知られる。新羽町[redacted]番地を明細地図で確認すると、南西向きの崖面であったことが判る。『神奈川県遺跡分布図』並びに『神奈川県埋蔵文化財包蔵地台帳』には登録されていない。

［掲載図書］なし

（上田）



第４図　新羽横穴玄室平断面概略図

年報番号01032　緑区恩田町苗万坂横穴　　横浜市緑区（現在は青葉区）恩田町2296付近

1．赤星ノートの内容

［調査（踏査）年月］昭和47年7月5日に、横浜市の依頼により係員と現地に同行し確認した横穴墓群の踏査記録。

［記載内容概略］当日現地で書いたと思われる走り書きと、それを神奈川県立博物館のA4サイズの原稿用紙に清書したものとが存在する。その他、緑区（現在は青葉区）奈良町で発見された鴛ヶ谷横穴墓群の昭和47年6月2日付新聞のコピー及び、同横穴墓内の人物様の線刻画を観察する昭和47年6月16日付の赤星氏の写真四葉が存在する。

走り書きには、横浜市域緑区恩田町苗万坂横穴・鉄町宗英寺横穴遺跡の位置図及び側面図及び実見した5基の横穴墓の平断面概略図、さらには鉄町宗英寺付近に所在する横穴墓のごく簡単な平断面概略図と、宗英寺の石灯籠・庚申塔のスケッチが記載されている。清書には、横浜市緑区恩田町苗万坂横穴群測図との表題があり、5基の横穴墓の平断面概略図と所見が簡易に記されている。清書には走り書きに記されていないことも書かれており、記憶の定かなうちに頭の中で整理し記載したことが解り、赤星氏の考古学に対する真摯な人柄が偲ばれる。

2．記載資料の整理

［遺構概要］6基の横穴墓を実見したようであるが、図化されているのは5基である。向かって右から番号を付けたようである。

№1は、後世の改変が著しい。奥壁に接して棺座が存在するようにみえるが、玄室手前が風呂場に利用され切り取られたと記載されている。奥壁下方に丹少々残との記載もあり。玄室と羨道の区分のない終末期の横穴墓と考えられる。

№2は、入口部を欠くが遺存状態は良好だったようである。玄室と羨道の区分が残り、奥壁に接して棺座が存在し、側壁には鉋目が残るとの記載がある。天井、奥、側壁に丹塗りよく残るとの記載もあり。図によれば棺座左右に排水溝が掘られていたようであり、また右側壁付近に若干の礫が存在したことがうかがえる。

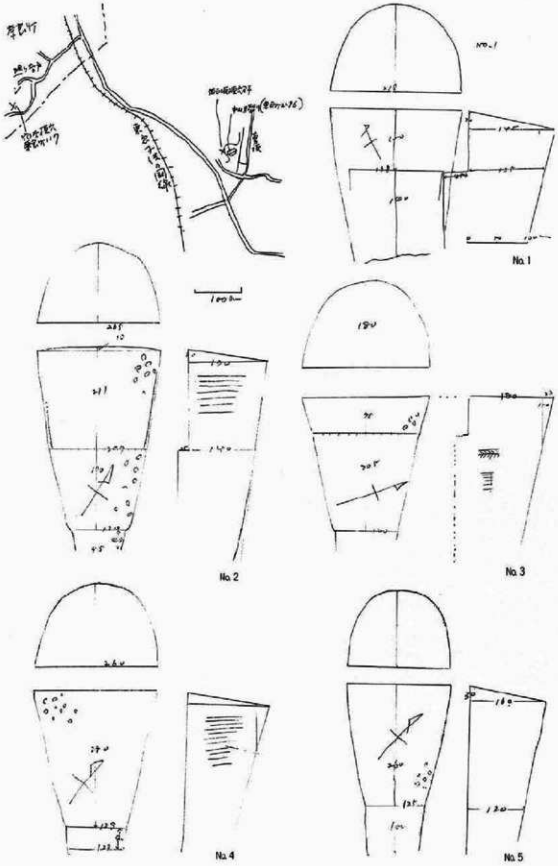
№3は、№2とほぼ同様の形状であるが棺座奥行きが狭い。側壁に新旧不明の線刻があり、天井及び側壁に丹塗りが少し残ると記載されている。棺座上右側壁寄りに若干の礫が存在したようである。

№4は、玄室と羨道の区分が明瞭でなく、棺座が認められないタイプの横穴墓で、側壁にやや細い肋状の削痕が残り、左側壁奥には礫が存在したようである。左側壁と右奥に丹が残ると記載されている。

№5は、№4とほぼ同様のタイプの横穴墓で、棺座を有さず側壁に肋状の削痕が少し認められ、右側壁寄りに若干の礫が敷かれていたようである。壁左上に丹が少々残るとの記載あり。

以上が5基の横穴墓の概略である。総体的にごく普遍的な終末期の横穴墓であることが判る。遺物に関しては、走り書きに「どの穴からか直刀がでたとつたえる」との記載がある。これといった特徴のない横穴墓群であるが、№3の線刻が注目される。留意すべきことは、すべての横穴墓に丹塗りが施されているとの記載である。これは赤星氏の大きな誤りで、壁面に湧出した鉄分を丹塗りと間違えている。こうした誤りは、横浜市緑区の市ヵ尾横穴墓群、三浦市の白山横穴墓、逗子市の山野根谷奥横穴墓群、二宮町の諏訪脇横穴墓群の報告に認められ、すでに消滅し検証することが不可能な横穴墓も存在するが、明らかな誤認であることを指摘しておく。

［掲載図書］なし　　（上田）



第5図　苗刀坂横穴墓群の位置と各横穴墓平面図概略図

年報番号 01104　日吉観音松古墳　　横浜市港北区日吉三丁目14付近

1、赤星ノートの内容

[調査(踏査)年月] 昭和13年

[資料保管場所] 慶応義塾大学　蔵

[記載内容概略] 三田史学会員による発掘調査に赤星氏が随行した際、出土遺物の一部を記録したものと思われる。内行花文鏡、碧玉製紡錘車、銅鏃、勾玉、管玉、算盤玉、ガラス小玉などの簡略なスケッチと写真のみ。古墳の外形・内部構造等の記述はない。

2、記載資料の整理

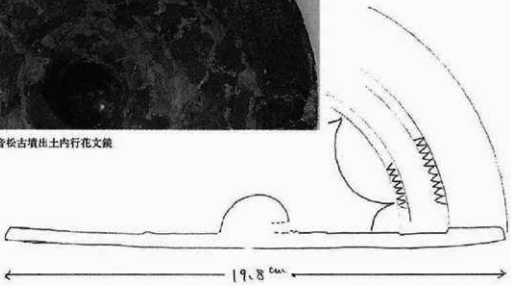
[遺跡及び遺物概要] 4～5世紀、台地の先端に造営された長径約90mの前方後円墳。主体部は粘土槨で、それと並行して設けられた粗末な粘土槨は陪葬か。出土遺物は内行花文鏡1、碧玉製紡錘車3、銅鏃3、鉄斧頭1、直刀1、硬玉製勾玉1、勾玉4、管玉10余、算盤玉1、ガラス小玉若干。内行花文鏡はごく初期の製品。碧玉製紡錘車・銅鏃は関東地方での出土が比較的少ない。いずれも大和政権との関係をうかがわせる副葬品ではある。当時多摩川・鶴見川流域を支配した豪族の墳墓と考えられる。

[掲載図書]　横浜市 1958『横浜市史』第1巻

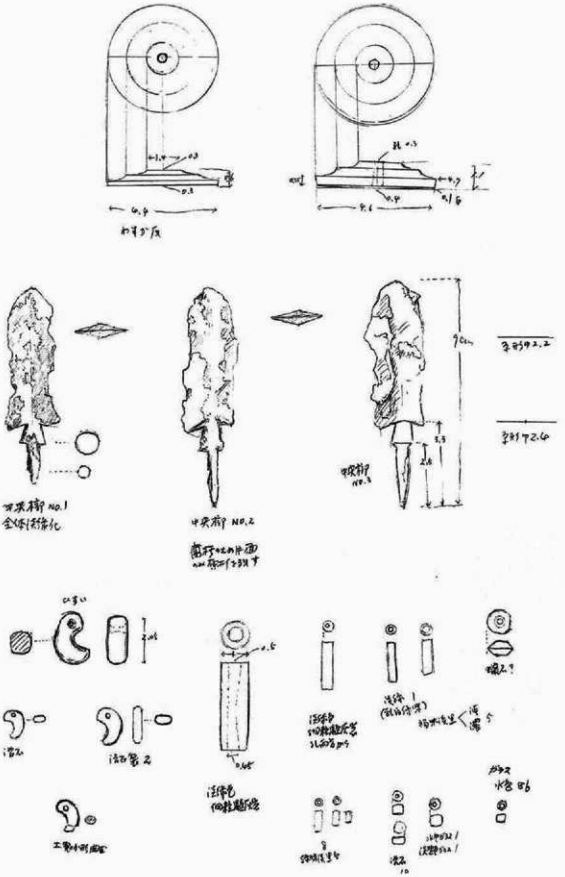
神奈川県県民部県史編纂室 1979『神奈川県史』資料編20　考古資料

[掲載図書概略]　『神奈川県史』に遺跡解説と遺物の図版が、『横浜市史』に観音松古墳を含む多摩川・鶴見川流域の古墳（時代）の概説がある。　(谷)

写真3　観音松古墳出土内行花文鏡



第6図　観音松古墳出土内行花文鏡平・断面図



第７図　観音松古墳出土遺物

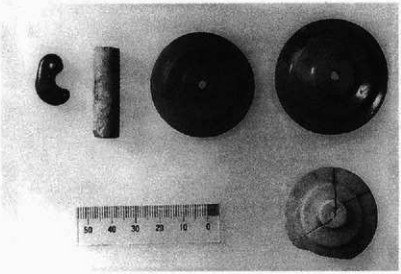


写真4　観音松古墳出土石製品類

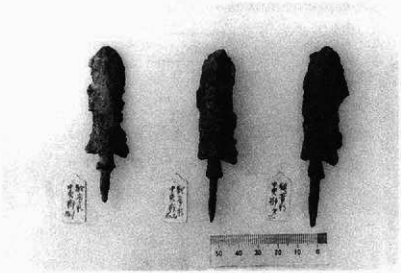


写真5　観音松古墳出土鋼鏃

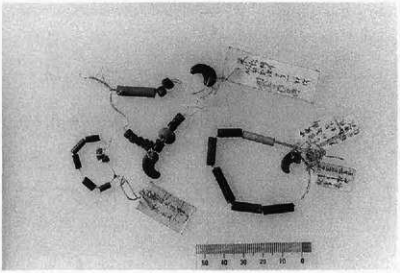


写真6　観音松古墳出土装身具類（その1）

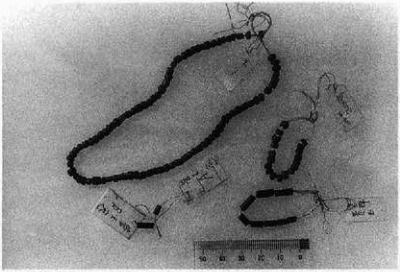


写真7　観音松古墳出土装身具類（その2）

奈良・平安時代の宮ヶ瀬遺跡群の研究Ⅱ

奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

（4）出土土器・陶器

（a）出土土器の土器組成と特色

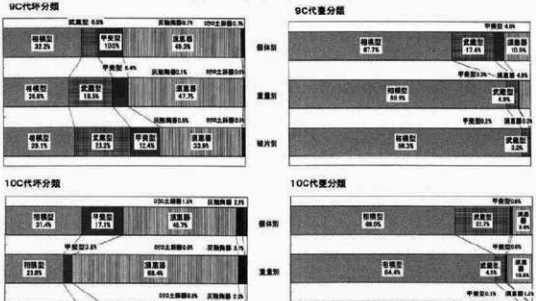
はじめに

土器組成については宮ヶ瀬遺跡群の各報告書で遺構毎に土器器種の数量について報告されているが、この小稿では坏類・甕類について型式や種別の検討を加え、相模国域内の遺跡と比較・検討を加えるものである。宮ヶ瀬遺跡群における各坏類・甕類における総点数、総重量、総推定個体数は第１表の通りである。第２表は宮ヶ瀬遺跡群のうち宮ヶ瀬地区の遺跡を中心とした竪穴住居址44軒を対象とした出土土器を分類した統計グラフである。分類方法として土師器は相模型、武蔵型、甲斐型の各型式及びロクロ土師器とし、その他は須恵器・灰釉陶器とした。器種は坏類と甕類を取り上げ、破片資料を含めた全出土土器について点数別・重量別・個体数別に数値を出し、さらに破片資料も扱うため９世紀代と10世紀代と時期を大まかに区分した。なお、推定個体数は重量を基にして平均重量で割り出す方法と、口縁部などの破片から推定した方法もあり、方法の上で不統一な点があるため若干信憑性に欠けることを考慮しておかなければならない。

第１表　出土土器の総点数・総重量・総個体数

器種	坏　類			甕　類		
時期	破片点数	破片重量（g）	推定個体数	破片点数	破片重量（g）	推定個体数
９世紀代	767	8411	152	17281	93227	201
10世紀代	489	3400	105	7297	42882	128

第２表　９・10世紀代の土器組成比率



坏類の分類比率について

9世紀代と10世紀代における坏類の分類を比較すると次の点が指摘できる。1)両時期ともに須恵器坏の割合が過半数以上を示し、特に10世紀代では重量で7割近くとなり、相模国域にしては比較的多い割合を示す。2)10世紀代に土師器武蔵型坏が見られなくなる。3)9・10世紀を通して甲斐型土器は1割前後見られるが、10世紀代の方は重量的に減少している。4)全体を総括すると相模型が3割強で、搬入土器が6割強である。以上の4点を踏まえた上で、特に須恵器坏と甲斐型坏について検討してみたい。

①須恵器坏

宮ヶ瀬遺跡群における須恵器坏は9世紀代に重量5割弱、10世紀代に重量7割弱を占め、相模国域の遺跡にしては多い割合である。この時期は相模型坏が主体を占める時期に当たっており、相模原市の遺跡を除く相模国域の集落では相模型坏が国府域においても主流であった。9世紀第2四半世紀から南多摩窯跡群の生産が軌道に乗ると、相模国域でも須恵器坏の需要が増えたが、相模原市の遺跡以外は須恵器が主流になるまで搬入されなかった。

相模国域における須恵器坏の割合は各地域によって異なることが報告書等で指摘されてきた。須恵器坏の割合が多い遺跡としては相模原市周辺があげられ、橋本遺跡や矢掛・久保遺跡で見られる。橋本遺跡は相模国と武蔵国の国境付近に位置し、南多摩窯跡群から至近距離にある。同遺跡の竪穴住居址から出土した須恵器坏の割合は、坏の総点数に対して9世紀代に8割、10世紀代に9割を示し、坏の総重量比で9世紀代に9割弱、10世紀代に9割強と須恵器が圧倒的な割合を占める(土井1986)。また、橋本遺跡に近接する矢掛・久保遺跡では10世紀前半期に須恵器がほとんどを占めることが報告されている(柳谷　博1989)。相模原市は南多摩窯跡群に隣接しているという地理的条件によって須恵器を多量に搬入できたと考えられ、坏に関していうと土師器よりも須恵器が多い割合を示している。

逆に須恵器坏の割合が少ない例としては、秦野市の西大竹尾尻遺跡群や草山遺跡、平塚市の向原遺跡の相模国西部内陸部をあげることができる。西大竹尾尻遺跡群では9・10世紀代の土師器坏：須恵器坏の割合が10：1であると報告されており、草山遺跡でも須恵器坏が少なく相模型坏が圧倒的な割合を占めることが報告されている。また、向原遺跡では、搬入土器の須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・他国土師器は全坏量の約18%にすぎないことが報告されており、その中に含まれる須恵器の割合は少ないことがわかる。

須恵器と土師器との割合が半数ずつを示す例としては一時期的な現象であるが、綾瀬市宮久保遺跡があげられる。同遺跡では8～9世紀前半までは相模型坏が9割以上を占めて主流であったが、宮久保Ⅷ期(9世紀第3四半期)頃は須恵器坏と土師器坏の個体数量がほぼ同じ割合になって、それ以降須恵器は1割前後で推移して減少する傾向が見られた(長谷川1990)と報告されている。

宮ヶ瀬遺跡群の土器組成は、搬入土器が6割強あり、その搬入品の中でも須恵器が坏全体の5割の割合を示している。こうした傾向は相模原市にある須恵器の割合が多い遺跡と近い傾向を示していると考えられる。

②甲斐型坏

搬入土器の坏において、甲斐型土器は相模国域では少なからず出土していることが多くの遺跡から知ることができる。甲斐型坏を出土した遺跡を地域別に表したのが第3表であるが、国府域の平塚市が圧倒的な出土例を誇っており、それに付随して相模湾沿岸部に出土例を見ることができる。こうした状況について、田尾誠敏は甲斐型坏の出土分布から相模湾沿岸や相模川・花水川流域等の河川流域に集中していたため、東海道の陸路よりはむしろ河川及び海路の流通経路を想定した(田尾1995・1997)。1992年の田尾誠敏による甲斐

型土器の出土遺跡一覧から10年経過し、出土例が増加して秦野市・伊勢原市・清川村において甲斐型坏が出土する遺跡が増加した。この状況からすると駿東からの海路や相模国内での河川経路のみで考えることには限界が見られるのではなかろうか。後述するように少なくとも甲斐型甕については、遺跡分布の上で陸路を想定しなければならない状況が見ることができる。宮ヶ瀬遺跡群の甲斐型坏は坏の中で９世紀代に１割程度の比率で使われており、相模国域の遺跡にしては出土比率が多く、図示された遺物についても40例ある。ただし、細かく見ると９世紀前半から中葉までが多く、それ以後は減少している。

甕類の分類比率について

甕類の分類に基づく特色として次の点があげられる。１）地元産と考えられる相模型が主体である。２）

第３表　甲斐型土器出土遺跡一覧

市町村	遺跡名	坏	甕	皿	大甕	小甕	鉢	羽釜
小田原市	三ツ俣遺跡(県)	35						
	国府津三ツ俣遺跡	4						
	矢代遺跡	1						
	千代北畑遺跡							1
	永塚北畑遺跡	9						
	永塚下り畑遺跡	23						
	千代南原遺跡第Ⅷ地点	2						
	高田北之前遺跡第Ⅰ地点	1						
	下曽我遺跡	6						
二宮町	天神谷戸遺跡	22						
大磯町	馬場台遺跡			1				
	坊地遺跡	1						
	[illegible]遺跡	•						
平塚市	四ノ宮高林寺遺跡	31						
	四ノ宮山王A遺跡	15		3				
	四ノ宮山王B遺跡	9						
	四ノ宮諏訪前遺跡	5						
	四ノ宮諏訪前A遺跡	21		1				
	四ノ宮諏訪前B遺跡	6						
	四ノ宮諏訪前C遺跡	10						
	四ノ宮天神前遺跡	102						
	四ノ宮下郷遺跡	17						
	神明久保遺跡	52		1				
	六ノ域遺跡	17						
	十七ノ域遺跡	1						
	相模国衙・四ノ域遺跡隣接地	•						
	中原上宿遺跡	42						
	坪ノ内遺跡	6		1				
	梶谷原B遺跡	2						
	中里B遺跡	3						
	王子ノ台遺跡	6				2		
	向原遺跡	12				1		
	[illegible]遺跡	•						
	真田北金目遺跡	62						
	厚木道遺跡	18		10				
	七ノ域遺跡	3						
	達上ヶ丘遺跡	2						
	稲荷前A遺跡	5						
	稲荷前B遺跡	2						
	大会原遺跡	1						
	[illegible]B遺跡	1						
	東中原遺跡	1						
	構之内遺跡	42	2					
秦野市	草山遺跡	35				2		
	草山No.24遺跡	12						
	太岳院遺跡	•						
	尾尻八幡山遺跡	1						
	尾尻八幡神社前遺跡	7		1				
	[illegible]丸島遺跡	•						
	[illegible]遺跡	1		1				
	下大槻峯遺跡	12			2			
	西大竹尾尻遺跡	10						
	鶴ノ木遺跡	4						
伊勢原市	東大竹遺跡	3	2					
	沼目清水谷遺跡	•						
	沼目天王原遺跡	2						
	坪ノ内久門寺遺跡	•						
	石田御太夫遺跡	•						
	田中登り道遺跡	•						
	板戸八幡前遺跡	•						
	神戸・上宿遺跡	10						
	坪ノ内宮ノ前遺跡	8						
	東富岡北三間遺跡	4						
	上粕屋遺跡	2						
伊勢原市	宮之前遺跡	2						
	上粕屋・三本松遺跡	1						
	[illegible]橋遺跡	1						
	西富岡地区遺跡群	4						
	伊勢原第二地区遺跡群[illegible]	18						
厚木市	鳶尾遺跡	13			1	1	1	
	恩名沖原遺跡	5						
	及川宮ノ西遺跡	3						
	及川天台遺跡	1						
	愛甲宮山遺跡	4						
	愛甲宮前遺跡	4						
	下荻野山中遺跡	1						
	菅野No.1遺跡	1						
海老名市	上浜田遺跡	5						
	本郷遺跡	20						
	本郷中谷津地区遺跡	1						
	大谷向原遺跡	7						
	大谷貝沢遺跡	1						
	国分尼寺北方遺跡	46						
綾瀬市	宮久保遺跡	1						
	早川城山地区遺跡群	3						
	No.27遺跡	•						
大和市	深見神社南遺跡	1						
相模原市	当麻遺跡	1						
	田名稲荷山遺跡	1		1				
	矢掛・久保遺跡	2						
	田名塩田遺跡群	9						
藤野町	[illegible]遺跡	1			12	3	3	
	篠原大刈田遺跡				2			
	大日野原(ナッサイ(?))遺跡				3			
	下小渕遺跡	•						
	門戸中原遺跡	•						
津久井町	青根馬渡遺跡	4			6			
	三ヶ木遺跡	2			2			
	青根引山遺跡				1			
	青根中学校校内遺跡				1			
	大井己遺跡	2						
城山町	川尻中村遺跡	1						
	川尻遺跡	1						
愛川町	半原向原遺跡	3						
	半原越中原遺跡	1						
清川村	北原(No.11)遺跡	3						
	馬場(No.6)遺跡	5						
	馬場(No.3)遺跡	1						
	馬場(No.6)遺跡(2)	2						
	南(No.2)遺跡	7	1		1			
	北原(No.10)遺跡	4			3			
	宮の里屋敷(No.8)遺跡	7			4			
	北原(No.10・11)遺跡	2						
藤沢市	南鍛冶山遺跡	2						
茅ヶ崎市	西久保上ノ町・広町遺跡	11	3					
	下町屋石原B遺跡	5						
	上ノ町遺跡	2						
	下寺尾東方遺跡	1						
鎌倉市	由比ヶ浜中世集団墓地遺跡	35						
	長谷小路周辺遺跡	2						
逗子市	池子遺跡群	32						
	菅ヶ谷台地遺跡	1						
横須賀市	長井町内原遺跡	4						
	大町谷東遺跡	2						
	鷲原遺跡	•						
合　計	1090点	1010	8	20	38	9	4	1
	器種組成率	92.7%	0.7%	1.8%	3.5%	0.8%	0.4%	0.1%

※坏の欄に●印のある遺跡は田尾誠敏1992年論文によったが文献で数値を確認できなかった遺跡である。

搬入土器は武蔵型、甲斐型、須恵器であるが、重量で見ると1割強となる。3)甲斐型甕が図示報告8点、破片資料を含めると、総点数39点、総重量524g、個体総数9個体あり、他地域に比べ比較的多く出土している。以上の3点を踏まえて搬入土器である武蔵型甕・須恵器甕及び甲斐型甕について検討してみたい。

①武蔵型甕・須恵器甕

搬入品である武蔵型甕及び須恵器甕は、相模国域の遺跡ではある程度の割合で出土する土器である。武蔵型甕は破片数や重量で見ると3～5％程度であるが、個体数で見ると9世紀代に2割弱、10世紀代に2割強を示しているが、実の総重量において9世紀代に4558gより10世紀代に1916gと大幅に減少している。これは、武蔵型甕のうち台付小形甕が比較的多く出土しているために起こった差違と考えられる。宮ヶ瀬遺跡群では相模型甕が主体的な煮炊具として位置づけられ、武蔵型甕は補完的に使用されたものであり、相模国域集落とほぼ同じ傾向にあるといえる。

須恵器甕は9世紀・10世紀代ともに1割以下を示し少ない割合を示している。須恵器甕は大甕の貯蔵具であり1個体の重量は土師器甕に比して数倍もの差があることを勘案すると少量の使用であったと考えられる。須恵器甕は住居の片隅に置かれた水甕であり、壊れる確率が少ないことや住居址に一つ存在すれば充分な容器であるため、搬入品としては数量的に少なかったと考えられる。

②甲斐型甕

甲斐型甕は破片点数、重量、個体数のいずれをとっても9世紀代で3～5％程度であり、10世紀代でも1％以下の比率で少ない傾向にある。また、その具体的な数値は破片点数で39点、重量で524g、個体数で9個体ある。清川村宮ヶ瀬において甲斐型甕が出土するという点は注目に値する。甲斐型土器の器種としては坏が主体を占めている点については田尾誠敏の見解通りである(田尾1995)が、微少ながらも甲斐型甕が出土することは煮炊具としての甕という器種の特性から流通経路の再検討が必要になると思われる。

相模国域で甲斐型甕が報告されている遺跡を第3表に示したが、その分布をみると藤野町、津久井町、厚木市、伊勢原市、秦野市となり、そして清川村宮ヶ瀬になる(第1図)。第1図から道志川流域、桂川から相模川上流に至る流域、そしてかなり南に離れて草山遺跡、下大槻峯遺跡、王子ノ台遺跡、向原遺跡の4遺跡が近距離でかたまっている。宮ヶ瀬遺跡群では、南(№2)遺跡で1点、北原(№10)遺跡で3点、表の屋敷(№8)で4点の計8点が報告されている(第2図)。相模湾沿岸部で甲斐型甕を出土している遺跡は小田原市国府津三ツ俣遺跡の1点を見るのみである。田尾誠敏は灰釉陶器を含めて甲斐型坏の搬入経路は海路であるとし、甕については言及していないものの基本的には海路を甲斐型土器の搬入経路と考えているようである(田尾1995、1997)。しかし、道志川を含めた相模川上流域や宮ヶ瀬地区の甲斐型甕の出土例は相模川を遡ってきたと考えるよりは甲斐国から下る陸路ないしは河川路を想定した方が自然であると考える。現在のところ、甲斐型甕の出土する遺跡は相模の山間部及び丹沢山塊縁辺の一地域であり、国府域を流通拠点とするならば、国府域に甲斐型甕が出土しないことは不可解といわざるを得ない。この状況を捉え直すと甲斐国から相模国への道を考えた方が穏当であると考えられる。

道として考えられるのは、甲斐国から都留市と大月市を抜ける桂川沿いの道や籠坂峠を越えて須走を通り東海道へ出る道などが考えられよう。この2ルートのうち桂川沿いの道が甲斐型土器の出土状況から理解でき、相模型坏・甕や武蔵型坏・甕等の甲斐国域の郡内地区における都留市や大月市等の遺跡の検討から甲斐型土器の流通経路として捉え直す必要があろう。

また、平安時代前半には富士山の火山爆発があって道が寸断された時期がある。日本紀略の延暦21(802)

年5月19日の記事によると富士山の噴火によって足柄路を廃して、筥荷(箱根)途を開くとある。8～9世紀にかけて富士山の火山活動は激しく、火山灰や溶岩流などによる被害が多くの記録に見られる。考古学的な調査においてもこの頃の富士山の火山灰は把握されており、こうした自然災害によって、交通ルートが変更されたことも考慮していかなければならない。ただ、先の足柄路は翌延暦22(803)年に復旧している。

ところで、藤野町周辺について国境問題がある。甲斐国と相模国が接する「国堺」に関して争い、中央政

1．大日野原(ｹｯﾃｲｺ)遺跡　2．姥峡遺跡　3．鬱戸中原遺跡　4．稲原大割目遺跡　5．三ヶ木遺跡
6．青根馬渡・引山遺跡　7．青根中学校地内遺跡　8．宮ヶ瀬遺跡群　9．磨尾遺跡　10．草山遺跡
11．下大槻峯遺跡　12．王子ノ台遺跡　13．向原遺跡

第1図　甲斐国境出土遺跡位置図

府から「使いを遣わして甲斐国都留郡□留村東辺紙沢を定め、両国堺となす。(日本後紀延暦16 (797)年3月2日)」とあり、「紙沢」より東を相模、西を甲斐とした。この件については河野喜映の論考があるが、「紙沢」がどこに比定されるかが問題となり、神奈川県藤野町の「名倉沢」(磯貝2001) や「底沢」(河野2000) 等が比定されている。仮に藤野町が甲斐国域であるならば、藤野町に点在する遺跡の甲斐型甕は地元生産の産物であると考えられるが、山間部の他遺跡はやはり陸路を想定する必要があろう。

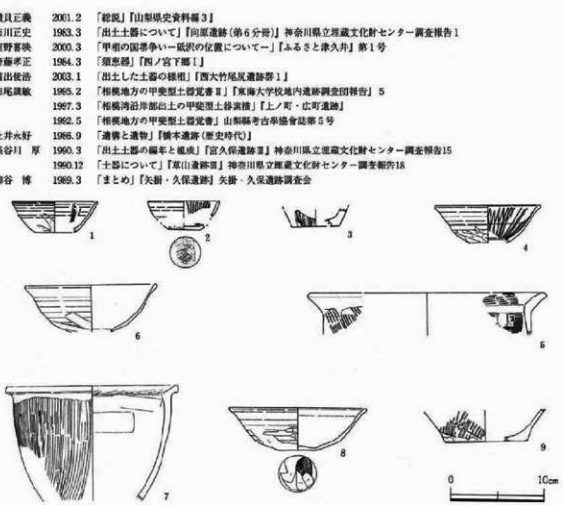
まとめ

宮ヶ瀬遺跡群の土器組成からその特色を検討し、近隣遺跡との比較を試みた。この小稿で甲斐型甕の搬入経路について一つの提言を試みることができた。今まで甲斐型土器の搬入ルートとして海路・河川のルートが基本的な見解であったが、甲斐型甕の出土遺跡についてその分布を見ると山間部と草山・下大槻峯・王子ノ台・向原各遺跡のまとまった分布が見られ、甲斐国からの陸路を推測した。今後、資料的な蓄積を積み上げて更なる検討を加えていきたい。最後に、この小稿に対し冨永樹之、河野喜映の各氏をはじめ、多くの方々にご教示をいただいた。お礼申し上げる。

(木村　尚二)

引用・参考文献

磯貝正義　2001.2　「総説」『山梨県史資料編3』
市川正史　1983.3　「出土土器について」『向原遺跡(第6分冊)』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告1
河野喜映　2000.3　「甲斐の国争い―紙沢の位置について―」『ふるさと津久井』第1号
斉藤孝正　1984.3　「須恵器」『西ノ宮下郎Ⅰ』
霜出俊浩　2003.1　「出土した土器の様相」『西大竹尾尻遺跡群』
田尾誠敏　1985.2　「相模地方の甲斐型土器覚書Ⅱ」『東海大学校地内遺跡調査団報告』5
　　1987.3　「相模湾沿岸部出土の甲斐型土器素描」『上ノ町・広町遺跡』
　　1992.5　「相模地方の甲斐型土器覚書」山梨県考古学協会誌第5号
土井火好　1986.9　「遺構と遺物」『横本遺跡(歴史時代)』
長谷川　厚　1990.3　「出土土器の編年と組成」『宮久保遺跡Ⅲ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告15
　　1990.12　「土器について」『草山遺跡Ⅲ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告18
柳谷　博　1989.3　「まとめ」『矢掛・久保遺跡』矢掛・久保遺跡調査会



1～3 北原(No. 10)遺跡 H6 号住居址　4～5 表の屋敷(No. 8)遺跡 H9 号住居址
6～7 南(No. 2)遺跡 H2 号住居址　8～9 表の屋敷(No. 8)遺跡 H3 号住居址

第2図　宮ヶ瀬遺跡群出土の甲斐型甕及び伴出甲斐型坏

甲斐型土器出土報告書名

市川正史　1986.9　『三ツ俣遺跡』
冨永樹之　2000.3　『三ツ俣遺跡Ⅲ』
柏木義治　2000.10　『矢代遺跡』
大島慎一　1986.3　『永塚北畑遺跡』
田尾誠敏　2002.3　『千代南原遺跡第Ⅷ地点』
中田　英　1990.3　『天神谷戸遺跡』
小島弘義　1985.3　『四ノ宮高林寺Ⅱ』
上原正人　1993.3　『山王A遺跡第2・3地点』
若林勝司　1993.3　『山王B遺跡・稲荷前A遺跡他』
小島弘義　1987.3　『四ノ宮諏訪前A遺跡』
大野　悟　1982.3　『諏訪前B遺跡・六ノ域』
小島弘義　1988.3　『四ノ宮天神前遺跡』
小島弘義　1988.3　『諏訪前B・高林寺』
若林勝司　1991.3　『諏訪前A・十七ノ域遺跡他』
明石　新　1995.3　『山王B・大会原遺跡他』
若林勝司　1997.3　『稲荷前A遺跡他』
大野　悟　2002.3　『厚木道遺跡』
相原敏夫　1998.3　『諏訪町A遺跡』
小島弘義　1980.3　『四ノ宮下ノ郷遺跡概報』
近野正幸　2001.3　『神明久保遺跡』
小島弘義　1987.3　『真土六の域遺跡Ⅱ』
平塚市教育委員会　1990　『戸谷原・高林寺遺跡他』
田尾誠敏　1999.3　『王子ノ台遺跡Ⅱ歴史時代編』
若林勝司　1999.3～2003　『真田北金目遺跡1・2・3』
河合英夫　2003.3　『平塚市真田北金目遺跡4』
河合英夫他　1994.6　『構之内遺跡』
大上周三他　1989.11　『草山遺跡Ⅱ』
安藤文一　1983.11　『草山遺跡―№24地点の調査』
大多和隆志　1983.3　『馬尻八幡神社前遺跡』
大上周三　1997.3　『下大槻峯遺跡』
大塚健一　1999.3　『鉢ノ木遺跡（№27）』
柏木義治　1999.3　『神戸・上宿遺跡（№15）』
宮坂淳一　1998.3　『東富岡北三間上・粕屋川上遺跡』
高杉博章　1997.3　『上粕屋・三本松遺跡』
高橋勝広　2000.3　『池端地区遺跡群』
麻平健三他　1975.3　『倉間遺跡』
香村紋一　1996.7　『及川宮ノ西遺跡』
迫　和幸　2001.2　『愛甲盆山遺跡』
香村紋一　1998.3　『下荻野山中遺跡』
長谷川厚　1979.3　『上浜田遺跡』
鷲川英政　1998　『本郷中谷池端遺跡』
高杉博章　1992.10　『大谷真鮫遺跡』
麻平健三他　1987.3　『宮久保遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』
小池　聡　1991　『深見神社南遺跡』
河野喜映　1986.7　『田名稲荷山遺跡』
林郁利明　1987.3　『藤野町姥峰遺跡』
大日野原遺跡調査団　1988　『大日野原遺跡の調査』
北平朗久　1999.3　『隈笹三ヶ木団地内遺跡』
北平朗久　1995.5　『太井己遺跡』
河野喜映　1992.3　『川尻遺跡』
望月　芳　1998.3　『南殿沖山遺跡古代1・2』
村上吉正　2003.2　『上ノ町遺跡』
大河内　勉　1996.11　『由比ヶ浜中世集団墓地遺跡』
かながわ考古学財団　1994.1～1999　『亀子遺跡群Ⅰ～Ⅹ』
中三川　昇　1998.3　『大町谷栗遺跡』
田尾誠敏　2002.9　『下曽我遺跡・永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点』

谷口　攀　2000.3　『三ツ俣遺跡Ⅱ』
田尾誠敏　1991.9　『国府津三ツ俣遺跡』
杉山博久　1984.4　『千代光海端遺跡』
杉山博久　1989.3　『水堀下り畑遺跡』調査報告書Ⅱ
田尾誠敏　2001.3　『高田北之前遺跡第Ⅱ地点』
鈴木一男　1983.3　『馬場台遺跡』
小島弘義　1986.3　『四ノ宮高林寺Ⅱ』
押木弘巳　2003.3　『山王A一第5地点一』
杉山博久　1980.3　『諏訪前遺跡』
小島弘義　1989.3　『諏訪前A遺跡第2地区』
林郁利明　1997　『諏訪前C遺跡』
上原正人　1996.3　『天神前遺跡一第8地区一』
小島弘義　1989.3　『諏訪前B・大域橋遺跡他』
明石　新　1991.3　『神明久保遺跡第一地区』
菅沼圭介　1996.3　『林B遺跡他』
大野　悟　2001.3　『山王B遺跡』
菅沼圭介　2003.3　『神明久保遺跡第8地点』
小島弘義　1984.3　『四ノ宮下郷遺跡』
小島弘義　1981.3　『四ノ宮上郷下郷遺跡概報』
小島弘義　1986.3　『真土六の域遺跡』
明石　新　1981.3　『中原上宿遺跡』
小島弘義　1988.3　『中皿B遺跡』
市川正史　1982.6　『向原遺跡』
若林勝司　1994.3　『厚木道遺跡第3地点』
栗山雄輝　1998.3　『七ノ域遺跡第2地点』
大野　悟　2000.3　『構之内遺跡』
山上英愛　1989　『草山№24遺跡』
杉山博久　1976.5　『尾尻八幡山遺跡』
伊東秀吉　1976　『根丸島遺跡概報Ⅰ・Ⅱ』
河合英夫　1990　『下大槻峯遺跡Ⅱ・Ⅲ』
河合英夫　1990　『東大竹遺跡群』
宮坂淳一　2003.3　『坪ノ内宮ノ前遺跡』
高橋勝広　1996.3　『原之宿遺跡』
高杉博章　1998.3　『蛭止橋遺跡』
河合英夫　1999.3　『成瀬第二地区遺跡群高森地区』
迫　和幸　2000.2　『恵名神原遺跡』
香村紋一　1997.3　『及川天台遺跡』
林郁利明　1994.3　『愛甲宮前遺跡』
松山敬一郎　1999.7　『曽野№1遺跡』
小出義治他　1985～2000　『本郷遺跡Ⅰ～Ⅶ』
土井義行　1992.3　『大谷向原遺跡』
高杉博章　1998.3　『国分尼寺北方遺跡第16次調査』
呉地英夫　2000.3　『早川城山地区遺跡群』
上田　薫　1977.3　『当麻遺跡』
迫　和幸　1999.3　『田名塩田遺跡群Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』
篠原大割目遺跡調査団　1989　『篠原大割目遺跡の調査』
池田　治　1999.3　『道志導水路関連遺跡』
呉地英夫　1991.3　『寄根中学校地内遺跡』
池田　治　2002.3　『川尻中村遺跡』
新間基史　2000.3　『千原居中原遺跡』
宮下秀之　2000.11　『四久保・広町遺跡』
大村浩司　1995.3　『下寺尾東方A遺跡』
菊川英政　1992.2　『長谷小路南遺跡』
服部敬史　1995.3　『長井町内原遺跡』
『藤野町史』

宮ヶ瀬遺跡群報告書（かながわ考古学財団調査報告）は次通り

1994　『宮ヶ瀬遺跡群Ⅳ北原（№11）遺跡』
1995　『宮ヶ瀬遺跡群Ⅹ馬場（№3）遺跡』
1996　『宮ヶ瀬遺跡群Ⅷ馬場（№2）遺跡』
1997　『宮ヶ瀬遺跡群Ⅹ下原の屋敷（№8）遺跡』
1999　『宮ヶ瀬遺跡群ⅩⅢ半原向原遺跡（2）』
1995　『宮ヶ瀬遺跡群・馬場（№6）遺跡』
1995　『宮ヶ瀬遺跡群ⅩⅢ馬場（№6）遺跡（2）』
1997　『宮ヶ瀬遺跡群ⅩⅢ北原（№10）遺跡』
1998　『宮ヶ瀬遺跡群Ⅹ・北原（№10・11北）遺跡』

(b) 出土土器・陶器の時期区分と様相

はじめに

宮ヶ瀬遺跡群の各遺跡で出土した奈良・平安時代の土器・陶器の年代は報告書に示されているが、遺跡群の全体を対象とした視点からの検討はされていない。奈良・平安時代の研究プロジェクトチームでは平成16年度に宮ケ瀬遺跡群の集落の検討を行う予定であるが、そのために出土した土器・陶器を区分してその様相と年代をまず明らかにすることが必要となる。

検討は基本的に遺構内出土のものを対象とし、遺物数が少ない時期は遺構外から出土したものも対象とした。これらの出土品について遺構内での出土状況を検討し、各遺構に確実に伴うと判断された遺物群は同時存在とした。次いで、出土数が比較的多い土師器と須恵器の供膳形態である坏・椀等を利用して、遺物群の前後関係や時期・時代を検討した。この際に今までの研究(1)や遺構の重複による新旧関係を参考にした(2)。また、宮ケ瀬遺跡群の報告書では多くの場合、遺構内出土遺物の出土位置が点で平面図中に表示され、断面図中の点と会わせることによって三次元的な出土位置を復元できるようになっている。これを利用して重複竪穴のそれぞれに所属する遺物を確定できた例もある(3)。前後関係・時期等が決まってから、同時存在の他の器種を付加して時期別の土器の集成図を作成した(4)。なお、各時期にあてはめられない遺物で宮ケ瀬遺跡群を考えるのに必要と思われるものを各図の最後にまとめた。

時期区分と各期の様相

Ⅰ期　(第3図)

古墳時代の伝統を受け継いだ土師器と東海地方産の須恵器からなる時期。宮ケ瀬遺跡群では土師器だけが出土した。相模川下流域の同時期の遺跡では東海地方産の須恵器の椀等が共伴することが多い。

時期は7世紀末から8世紀第1四半期。図示した遺物は竪穴住居2棟と遺構外から出土したものである。

土師器坏と土師器甕からなる。1・2は坏で、外面の口縁部と底部の境には稜がある。3・4は長胴甕、5は朝顔甕。甕の外面は全てヘラケズリ調整されている。

Ⅱ期　(第3図)

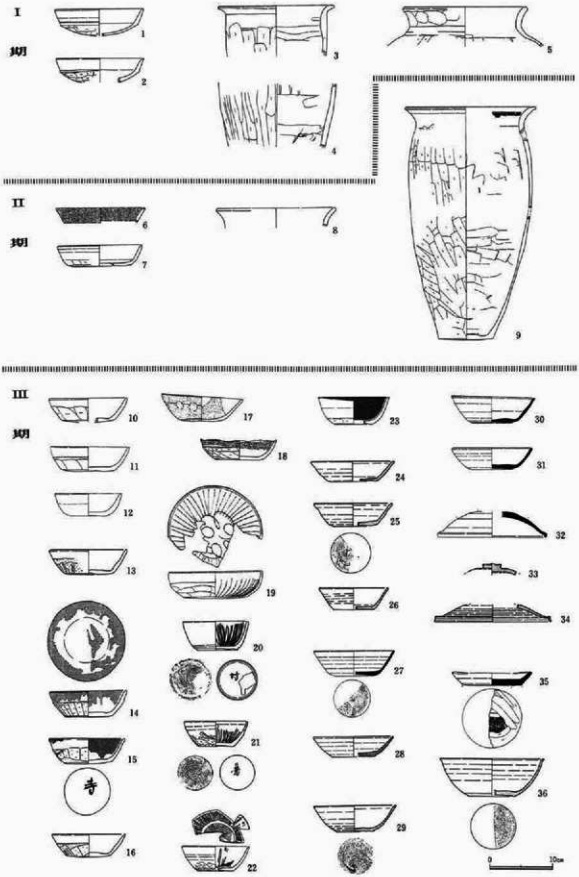
奈良・平安時代の相模国に広く分布する相模型坏が成立する時期で、宮ケ瀬遺跡群の周辺では土師器甕には古墳時代の伝統を引いたものが多くみられる。Ⅰ期と同じく東海地方産の須恵器椀などが搬入されることが多い。宮ケ瀬遺跡群では土師器だけが出土した。

時期は8世紀第2四半期前半で、図に用いた遺物は全て遺構外から出土したものである。

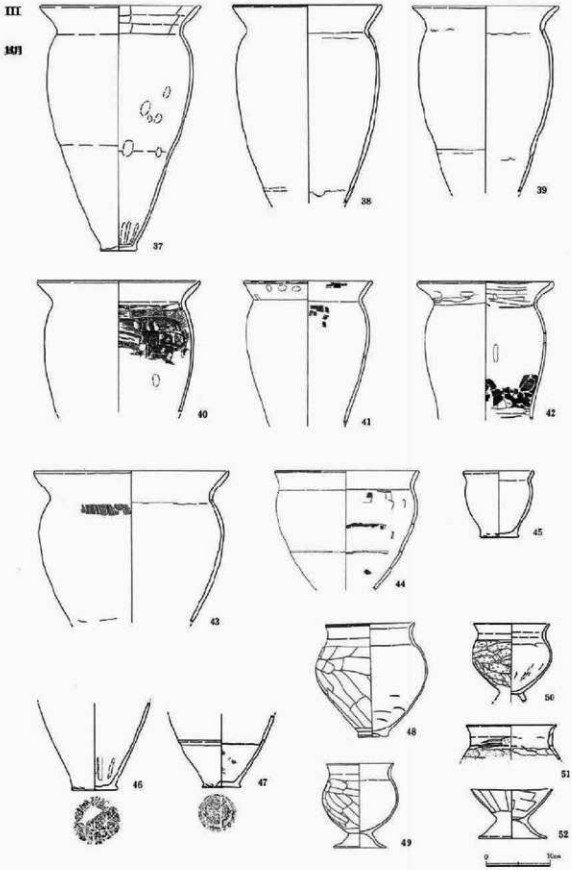
土師器坏と土師器甕からなる。6は内外両面が赤彩された盤状坏で、高座郡北部から武蔵国多摩郡中西部に多くみられるもの。7は相模型坏で、体部の下端がヘラケズリされた平底のもの。法量は推定復元。8は甕の口縁部端部、9は土師器長胴甕で、外面に縦方向にヘラケズリ調整されている。

Ⅲ期　(第3・4図)

相模川流域一帯では相模型坏と甕が主体となり、多摩丘陵に近い高座郡北部や愛甲郡では南多摩窯跡群御殿山窯で生産された須恵器坏が多く伴う時期。宮ケ瀬遺跡群ではこの時期に各地から搬入された土器・陶器が目立ち、武蔵南部や甲斐からは土師器坏が、武蔵北部からは須恵器坏・椀・蓋等が搬入されている。土師器甕は主体の相模型の他に武蔵型甕もみられる。相模型坏は口径12cm前後、底径はその1/2以上の箱型のものである。須恵器坏は底部外面をヘラケズリ調整するものはなく、全て回転糸切り痕が残っている。須恵器椀の底部外面はヘラケズリ調整されている。



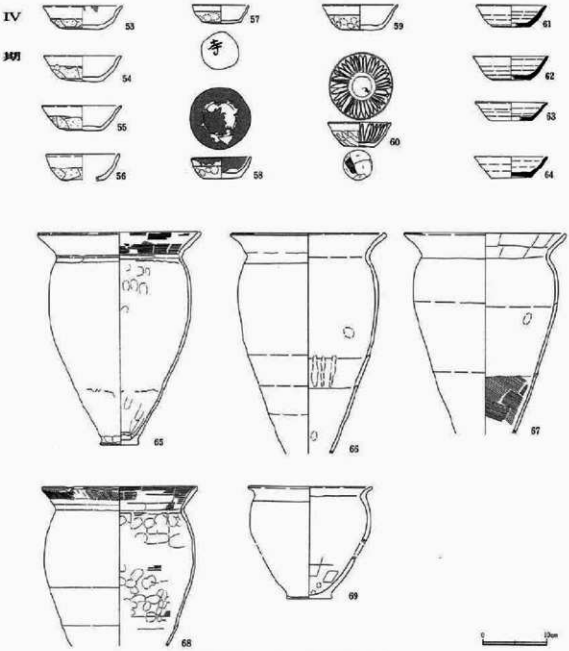
第3図　出土土器・陶器（Ⅰ～Ⅲ期）〔S＝1/6〕



第4図　出土土器・陶器（Ⅲ期）〔S＝1/6〕

時期は9世紀初頭～同第2四半期前半頃と判断され、図に用いた遺物は竪穴住居9棟と土坑1基から出土したものである。御殿山窯の須恵器はG37号窯式のものにあたる。

10～23・37～52は土師器、24～36は須恵器。10～16は相模型坏で、10～12は胎土が軟質、13～16は硬質である。11は内外両面が赤彩され、14・15・17・18の内外には油煙が付着している。15の底部外面には「寺」が墨書されている。17は南武蔵型坏で、18は製作技術が17と同じだが胎土に砂が多く混じり産地が異なる。19は北武蔵型坏で内面に暗文がみられる。20～22は甲斐型坏で、20の体部外面には横位のヘラミガキが施され、底部外面中央には木製工具による静止ヘラケズリ痕が残り、削出高台の両側は回転ヘラケズリされている。20と21の見込部に暗文はみられない。また、底部外面には「村」「十万」がそれぞれ墨書されている。23は内黒土器。24～26・32・35は御殿山窯の製品で、27・28は胎土が精選され焼成のよいもので生産地は不



第5図　出土土器・陶器［Ⅳ期］（S＝1/6）

明。29～31・33・34・36は南比企窯の製品。24～31は坏で、底部外面にはヘラケズリは認められない。32～34は壷、35・36は椀で、35の底部外面は外周が静止ヘラケズリされ、36は底部外面の全面が回転ヘラケズリされている。37～47は相模型甕、48～52は武蔵型甕。37～42は長胴甕で、41・42は口径がやや小さい。43・44は胴張甕でやはり口径に大小がある。45は小形甕、46・47は相模型甕の底部で、径は6cm代。40・42のように相模型甕で内面にハケメを多く残すものは少ない。武蔵型甕は「く」の字状の口縁部が主体だが一部には51のように「コ」の字状のものもみられる。35・52は破損した上端部を磨いて再利用されている。

Ⅳ期　（第5図）

相模川流域の海岸部山寄りの遺跡では土師器や須恵器の様相はⅢ期と変わらないが、宮ケ瀬遺跡群では搬入品に変化がみられる。南武蔵や甲斐から土師器坏が搬入されるが、その数は減少する。須恵器は武蔵北部の南比企窯産のものはみられなくなり、ほとんどが御殿山窯の製品となる。相模型坏は口縁部が外反するようになり、口径が11cm代と最も小形のものが現れる。土師器甕では相模型が主体となっているが、図示できなかったが武蔵型甕もみられる。また、この時期に灰釉陶器が伴うようになったと思われる。

時期は9世紀第2四半期後半から同第3四半期にかけてで、図に用いた遺物は竪穴住居7棟と礎石遺物1棟から出土したものである。御殿山窯の須恵器はG37号窯式からG59号窯式のものにあたる。

53～57は相模型坏であり、57の体部外面にはヘラケズリがみられないが胎土は相模型と同一で製作技法を省略したものと思われる。底部外面には「寺」が墨書されている。58・59は南武蔵型坏で、58の内外両面には油煙が付着している。60は甲斐型の土師器坏で、61～64は須恵器坏である。65～69は相模型甕で、65～68は長胴甕、69は小形甕である。

Ⅴ期　（第6図）

相模川流域の平野部一帯の遺跡では相模型土師器坏や甕が主体を占めるが、宮ケ瀬遺跡群では相模型土師器坏が極めて少なくなり、坏・椀といった供膳形態は御殿山窯産の須恵器が主体となる。土師器坏には甲斐から搬入されたものもあるが、数は多くない。土師器甕には相模型と共に武蔵型もみられる。

時期は9世紀後半で、図の遺物は竪穴住居3棟から出土した。須恵器はG25号窯式を主体とする。

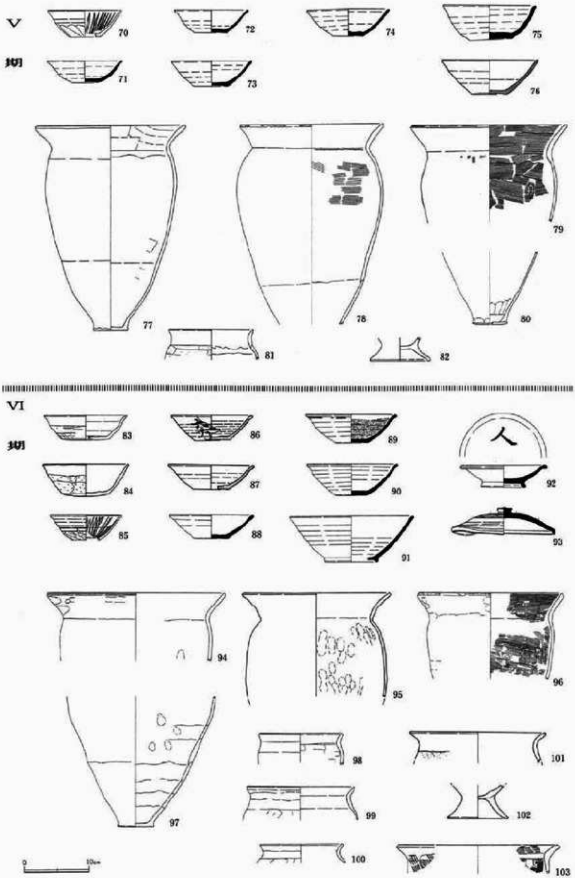
70は甲斐型の土師器坏。71～76は須恵器で、71～74は坏75～76は椀である。75はG59窯式で伝世品と思われる。77～80は相模型の長胴甕。80の底径は5.8cm。81・82は武蔵型の台付甕。

Ⅵ期　（第6図）

宮ケ瀬遺跡群では前のⅤ期と同じように坏・椀などの供膳形態の主体は須恵器が占め、煮沸形態の甕は土師器となっている。土師器坏は客体的に存在し、相模型・甲斐型の両方がみられる。須恵器は御殿山窯産のものが主体である。灰釉陶器は確実な共伴例はみられなかったが、伴出すると思われる。土師器甕は相模型が主体となっていて次いで武蔵型がみられる。また、甲斐型の甕もみられるが、数は多くない。

時期は9世紀末から10世紀第1四半期にあたり、図の遺物は竪穴住居4棟から出土したものである。御殿山窯の須恵器はG5号窯式前半代にあたると思われる(5)。

83・84は相模型坏。85は甲斐型坏で、体部の外傾が強くなる。86～93は須恵器。86～90は坏で、口縁部が肥厚して外反する。89・90のように大振りの坏が現れる。86の外面には「六方」の墨書がされている。89の内面には焼成時の降灰が顕著にみられる。91は高台付椀、92は高台付皿で共にⅦ期にもみられる器形である。92の内面には「人」が墨書されている。93は壷で、この時期にはほとんどみられなくなるもので、伝世品の



第6図 出土土器・陶器［V・VI期］（S＝1/6）

可能性がある。94～98は相模型甕で94～97は長胴甕、98は小形甕である。96のように内面にハケメ痕を残すものは少ない。97の底径は5.8cmである。99・100は「コ」の字状の武蔵型台付甕。101は製作技法が99と同じであるが胎土が異なり、生産地が異なっている可能性がある。102台付甕の台部で、胎土は101に同じである。103は甲斐型の甕の口縁部である。

Ⅶ期　（第７図）

宮ケ瀬遺跡群では前のⅥ期と同じく坏・椀などの供膳形態の主体は御殿山窯産の須恵器が占めているが、灰釉陶器の椀が確実に共伴するようになる。土師器の供膳形態では相模型坏・皿、そして甲斐型坏が少数ながらみられる。相模型坏は体部外面に手づくね痕を大きく残す最終段階のものが主体となる。煮沸形態の甕は土師器で、従来からのものと伴って武蔵型甕の変質した厚手の甕がみられるようになる。甲斐型の甕もみられるが、数は少ない。この他に御殿山窯で生産された須恵器の壺や甕も伴う。

時期は、10世紀第２四半期から中葉にあたり、図の遺物は竪穴住居４棟から出土したものである。御殿山窯の須恵器はＧ５号窯式後半にあたると思われる(4)。

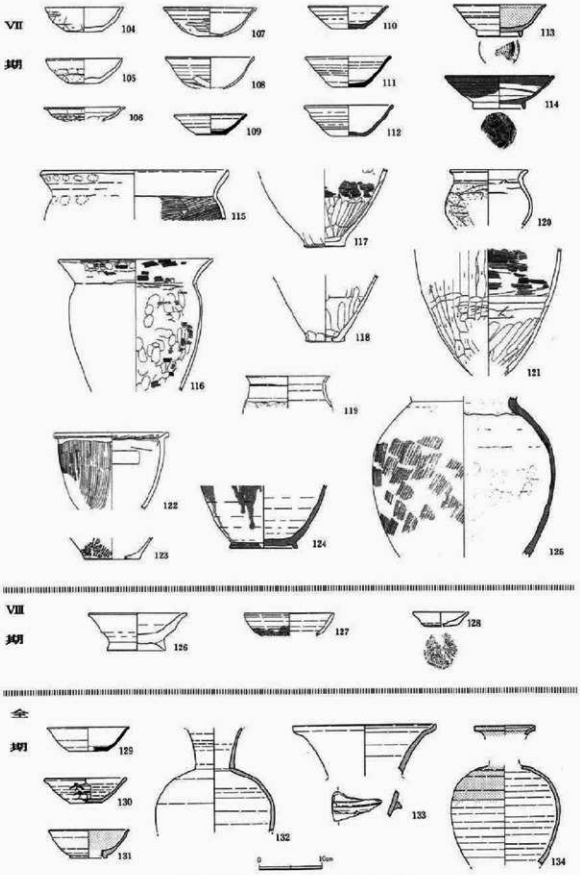
104・105は相模型坏で、底部が丸く小さくなる。体部外面にケズリ残しがみられるが製作技法の簡略化が目立つ。106は土師器皿である。107・108は甲斐型坏の系統の土師器坏で、体部内面に暗文が施されない。109～112は須恵器坏で111・112は大振りのものである。113・114は灰釉陶器椀で、113は黒笹90号窯式、114は折戸53号窯式である。113は伝世品と思われる。115から118は相模型甕で、115・117は胴張甕、116・118は長胴甕である。119・120は武蔵型の台付甕で、120は「コ」の字状の口縁部が変形し、厚い胎土となっている。121は武蔵型甕の影響下で多摩丘陵周辺でこの時期に製作されるようになった外面を縦方向にヘラケズリする厚手の土師器甕の胴部である。122・123は甲斐型の甕で、122は小形甕、124は底部である。124・125は須恵器で、124長頸瓶の底部、125は甕の胴部で共に御殿山窯の製品である。

Ⅷ期　（第７図）

平安時代後半に比定されるロクロを用いて製作された土師器・土師質土器の時期をⅧ期として便宜的にまとめた。実際には126・127・128の各土器の年代はずれていて各土器を別々の時期に分割することもできるが、資料が限られるので一つにまとめた。３点とも竈に付設されたカマドがある竪穴住居から出土している。126は三角形に張出す高台が付くロクロ土師器の高台付椀で、10世紀後半から11世紀前半代のものと思われる。127はロクロ土師器坏で、小破片からの復元実測である。128は土師質土器の小皿で、11世紀後半代を中心した時期のもので、底部内面の中央が段をもって窪んでいる。

全期［特色ある陶器］　（第７図）

竪穴住居址の覆土等から出土したもので細かな所属時期を決められなかった土器・陶器のうち、宮ケ瀬遺跡群にとって意義が認められると考えられるものをまとめてみた。129・130・132・133は須恵器で、131・134は灰釉陶器椀である。129は宮ケ瀬遺跡群では最も新しい南比企窯の製品で、Ⅴ期に並行すると思われる。130・132は御殿山窯の製品である。130はＧ５窯式の坏で、Ⅵ期の86と同じく外面に「六方」と墨書されている。Ⅵ期かⅦ期に属するものである。131は黒笹14号窯式の椀で、宮ケ瀬遺跡群で出土した最も古い灰釉陶器である。132は131と同じ住居址で出土した長頸瓶である。133は胴部上半の外面に突帯が付く壺で、四耳が付く可能性が高い。口唇部の外面の下端が曲線状に崩れた形をしている。軟質の焼成で、生産地は不明。134は長頸瓶で、Ⅵ期またはⅦ期のものと思われる。



第7図　出土土器・陶器［Ⅶ・Ⅷ・全期］（S＝1/6）

まとめ

宮ケ瀬遺跡群では７世紀末から奈良時代の８世紀前半はⅠ・Ⅱ期あたるが、わずかな土器が出土しているだけである。奈良時代後半の８世紀第２四半期後半から平安時代初頭の８世紀末にかけては、土器・陶器の出土は全くみられなくなる。しかし、宮ケ瀬遺跡群ではⅢ期からⅦ期にあたる９世紀初頭から10世紀後半代には150年以上の長期間にわたり、土器・陶器がまとまって継続的に出土している。Ⅲ・Ⅳ期の９世紀初頭から中葉にかけては地元の相模の土器だけでなく、武蔵からは土師器坏と甕、須恵器坏・椀・蓋等、甲斐からは土師器坏が搬入され、この時期には宮ケ瀬遺跡群が周辺の各地と関係が深くなったことを示している。Ⅴ～Ⅶ期の９世紀後半から10世紀後半には相模からの土師器甕の供給は武蔵の土師器甕と同様に続くが、土師器坏の供給は減少し、それに反比例するように南多摩窯跡群御殿山窯の製品が多量に搬入されるようになる。甲斐型の土師器坏と甕は少数ながら一定量の出土がみられ、また、灰釉陶器は９世紀中葉以降にみられるようになる。Ⅴ～Ⅶ期の宮ケ瀬遺跡群は土器の様相からみる限り相模川下流域との関係が薄れ、高座郡北部から多摩丘陵西部地域と共通する部分が大きくなっている。10世紀後半から11世紀代の Ⅶ期には土器の出土数は７世紀末から８世紀前半のⅠ・Ⅱ期と同様に激減する。

以上みてきたことから、奈良・平安時代の宮ケ瀬遺跡群おける土器・陶器の出土量からみた画期は、①７世紀末から８世紀にかけて、②８世紀第２四半期後半、③９世紀初頭、④10世紀後半に認められよう。①では少数の遺物がみられるようになり、②では遺物が全くみられなくなる。③では多くの遺物が出土し、④では遺物の出土量が極めて少なくなる。

（河野喜映）

註

1　長谷川　厚　1990.3「出土土器の編年と組成の特色」「宮久保遺跡Ⅲ」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告15
　　長谷川　厚　1990.12「土器について」「草山遺跡Ⅲ」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告18
　　服部敬史ほか　1981.5「南多摩窯址群における須恵器編年再考」「神奈川考古」第12号
　　服部敬史　1983.1「窯址出土須恵器の編年と背景　南武蔵の窯址」「神奈川考古」第14号
　　服部久美　2000.3「若干の予察　遺物について」「南多摩窯跡群Ⅱ」
　　福田健司　2002.12「土器編年と実年代」「都川・一の宮遺跡　Ⅲ　総括編（第二分冊）」
2　南（№２）遺跡　Ｈ１号住居址（旧）→Ｈ２号住居址（新）
　　表の屋敷（№８）遺跡　Ｈ３号竪穴住居（旧）→Ｈ４号竪穴住居（新）
3　表の屋敷（№８）遺跡のＨ３・４号竪穴住居。点（ドット）を用いて出土位置が公表されていなければ、この重複遺構から出土した遺物群を資料として使用できなかったことになる。
4　資料や博図版下の作成、出土状況の検討にはプロジェクトの全員の参加・協力を得た。
5　南多摩窯跡群御殿山窯産の須恵器の編年研究では、編年の後半期に位置付けられていたＧ５窯式はＧ５窯式古段階・Ｇ５窯式・Ｇ５窯式新段階の三段階に分けられた（註１　服部ほか　1983.1）。しかし、窯跡群の発掘調査による出土品の再検討で、Ｇ５窯式自体は前半と後半に分けられるとされている（註１　服部　2000.3）。消費地で少数のＧ５窯式の坏・椀を根拠に時期を細分するのは困難なので、今回の時期区分では重複遺構の検討や共伴する相模型坏と甲斐型土器などの変遷を利用してＧ５窯式の須恵器が伴う遺構群を前半と後半に分けた。
6　Ｇ５窯式の須恵器坏と椀が出土したが、Ⅵ期・Ⅶ期に時期区分できない住居址が宮ケ瀬遺跡群では４棟ある。

第4表　宮ヶ瀬遺跡群出土土器・陶器属性表

時期区分	図版No	遺跡名	遺構名	器種	種別・産地	住居内の出土位置	法量(cm)			備考	報告書の時期比定	掲載報告書
							口径	底径	器高			
Ⅰ期	1	表の屋敷(No.8)	14号住	土師器坏		床面直上	14.0		4.0		7世紀末～8世紀初頭	XⅢ分冊
	2	ナラサス(No.15)	遺構外	土師器坏		―	12.5				古墳時代後期	Ⅱ分冊
	3	表の屋敷(No.8)	5号住	土師器甕(長胴甕)		床面直上	18.5				8世紀前半以降	XⅢ分冊
	4	表の屋敷(No.8)	5号住	土師器甕(長胴甕)		ｶﾏﾄﾞ					8世紀前半以降	XⅢ分冊
	5	表の屋敷(No.8)	5号住	土師器甕(胴張甕)		床面直上	19.5				8世紀前半以降	XⅢ分冊
Ⅱ期	6	馬場(No.6)	遺構外	土師器坏	盤状坏	―	14.2			内外面赤彩	律令期初頭	XⅢ分冊
	7	北原(No.9)	遺構外	土師器坏		―	13.1	8.2	3.3		奈良時代	Ⅲ分冊
	8	馬場(No.6)	遺構外	土師器甕		―	19.0				律令期初頭	XⅢ分冊
	9	北原(No.9)	遺構外	土師器甕(長胴甕)		―	21.3	8.6	36.0		奈良時代	Ⅲ分冊
Ⅲ期	10	表の屋敷(No.8)	6号住	土師器坏	相模型	床面直上	12.2	8.5	3.6		8世紀末～9世紀初頭	XⅢ分冊
	11	馬場(No.6)	3号住	土師器坏	相模型	床面直上、壁際	12.2	8.4	3.7		9世紀前半～中葉	Ⅴ分冊
	12	馬場(No.6)	1号住	土師器坏	相模型	ｶﾏﾄﾞ	10.3	6.0	3.4		9世紀前半	Ⅴ分冊
	13	北原(No.10)	6号住	土師器坏	相模型	床下土坑	12.0	7.6	3.9		9世紀前半	Ⅸ分冊
	14	馬場(No.3)	6号住	土師器坏	相模型	床面直上、壁際	12.1	7.5	4.1	灯明皿	9世紀前半	Ⅶ分冊
	15	馬場(No.3)	7号土坑	土師器坏	相模型	覆土中層～下層	11.9	7.2	3.8	灯明皿、底部裏墨書「寺」	9世紀中頃	Ⅶ分冊
	16	馬場(No.3)	6号住	土師器坏	相模型	掘り方	11.7	6.8	3.6		9世紀前半	Ⅶ分冊
	17	馬場(No.6)	3号住	土師器坏	南武蔵型	床面直上	12.6	7.0	3.8		9世紀前半～中葉	Ⅴ分冊
	18	表の屋敷(No.8)	10号住	土師器坏		ｶﾏﾄﾞ	12.0	7.4	3.1	灯明皿	9世紀前半～中葉	XⅢ分冊
	19	馬場(No.6)	3号住	土師器坏	北武蔵型	床面直上	14.4	9.9	4.2		9世紀前半～中葉	Ⅴ分冊
	20	北原(No.10・11北)	2号住	土師器高台付椀	甲斐型	覆土上～中層、ｶﾏﾄﾞ掘り方	9.8	5.5	4.0	高台内に墨書「村」	9世紀前半	XⅤ分冊
	21	北原(No.10・11北)	2号住	土師器坏	甲斐型	覆土中層、ｶﾏﾄﾞ	10.0	6.4	4.1	底部外面に墨書「十万」	9世紀前半	XⅤ分冊
	22	表の屋敷(No.8)	6号住	土師器坏	甲斐型	覆土下層、床面直上	10.6	5.5	4.0		8世紀末～9世紀初頭	XⅢ分冊
	23	表の屋敷(No.8)	10号住	土師器坏	内黒土器	ｶﾏﾄﾞ、床面直上、覆土上層	11.1	6.6	4.2		9世紀前半～中葉	XⅢ分冊
	24	北原(No.10)	6号住	須恵器坏	御殿山窯	床面直上、周溝、掘り方、覆土下層	13.0	7.4	3.1		9世紀前半	Ⅸ分冊
	25	北原(No.10)	6号住	須恵器坏	御殿山窯	周溝、覆土中層	12.2	6.0	3.6		9世紀前半	Ⅸ分冊
	26	北原(No.10)	6号住	須恵器坏	御殿山窯	覆土下層	10.7	6.2	3.5		9世紀前半	Ⅸ分冊
	27	馬場(No.6)	3号住	須恵器坏		床面直上、ｶﾏﾄﾞ	12.5	6.0	3.9		9世紀前半～中葉	Ⅴ分冊
	28	北原(No.10・11北)	2号住	須恵器坏		覆土中層	12.3	6.7	3.2		9世紀前半	XⅤ分冊
	29	北原(No.10)	6号住	須恵器坏	南比企窯	覆土中～下層、掘立、遺構外	12.8	5.8	4.1		9世紀前半	Ⅸ分冊
	30	馬場(No.6)	3号住	須恵器坏	南比企窯	床面直上、壁際	12.9	6.1	4.0		9世紀前半～中葉	Ⅴ分冊
	31	馬場(No.6)	5号住	須恵器坏	南比企窯	ｶﾏﾄﾞ	11.4	5.8	3.2		9世紀前半	Ⅴ分冊
	32	南(No.2)	3号住	須恵器蓋	御殿山窯	床面直上	16.7				9世紀中葉～後半	Ⅷ分冊

時期区分	図版No	遺跡名	遺構名	器種	種別・産地	住居内の出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	備考	報告書の時期比定	掲載報告書
Ⅲ期	33	北原(No10)	6号住	須恵器蓋	南比企窯	ｶﾏﾄﾞ					9世紀前半	Ⅸ分冊
	34	北原(No10)	6号住	須恵器蓋	南比企窯	覆土上層、棚覆土	18.2				9世紀前半	Ⅸ分冊
	35	表の屋敷(No8)	6号住	須恵器坏	御殿山窯	床面直上	12.5	9.2	1.9	胴部破損面摩耗・整形	8世紀末～9世紀初頭	XⅢ分冊
	36	北原(No10)	6号住	須恵器椀	南比企窯	掘り方、ｶﾏﾄﾞ	16.2	7.2	5.9		9世紀前半	Ⅸ分冊
	37	馬場(No3)	6号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	ｶﾏﾄﾞ	26.5	5.7	38.5		9世紀前半	Ⅶ分冊
	38	北原(No10・11北)	2号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	覆土中～下層、ｶﾏﾄﾞ	23.4				9世紀前半	XⅤ分冊
	39	北原(No10・11北)	2号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	ｶﾏﾄﾞ	23.0				9世紀前半	XⅤ分冊
	40	北原(No10)	6号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	掘り方、ｶﾏﾄﾞ掘り方、周溝、床下土坑	25.2				9世紀前半	Ⅸ分冊
	41	表の屋敷(No8)	10号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	ｶﾏﾄﾞ	19.9				9世紀前半～中葉	XⅢ分冊
	42	表の屋敷(No8)	10号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	床面直上	20.6				9世紀前半～中葉	XⅢ分冊
	43	北原(No10・11北)	2号住	土師器甕(胴張甕)	相模型	覆土下層、ｶﾏﾄﾞ	32.6				9世紀前半	XⅤ分冊
	44	馬場(No6)	3号住	土師器甕(胴張甕)	相模型	ｶﾏﾄﾞ	22.2				9世紀前半～中葉	Ⅴ分冊
	45	北原(No10)	6号住	土師器小形甕	相模型	覆土下層、ｶﾏﾄﾞ	10.7	6.1	10.5		9世紀前半	Ⅸ分冊
	46	北原(No10)	6号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	覆土上層、掘り方、ｶﾏﾄﾞ		6.8			9世紀前半	Ⅸ分冊
	47	北原(No10)	6号住	土師器甕(胴張甕)	相模型	周溝、掘り方		6.0			9世紀前半	Ⅸ分冊
	48	南(No2)	3号住	土師器台付甕	武蔵型	床面直上	13.7	4.6	17.6	脚部欠損後、底面を研磨整形。	9世紀中葉～後半	Ⅷ分冊
	49	馬場(No6)	3号住	土師器小形台付甕	武蔵型	床面直上	10.3	7.9			9世紀前半～中葉	Ⅴ分冊
	50	北原(No10)	6号住	土師器小形台付甕	武蔵型	覆土下層、ｶﾏﾄﾞ、周溝、床下土坑	11.9				9世紀前半	Ⅸ分冊
	51	北原(No10)	6号住	土師器甕	武蔵型	覆土下層、床面直上	14.0				9世紀前半	Ⅸ分冊
	52	馬場(No3)	6号住	土師器台付甕	武蔵型	床面直上、壁際		10.1		脚部欠損部を研磨整形。	9世紀前半	Ⅶ分冊
Ⅳ期	53	馬場(No3)	1号住	土師器坏	相模型	床面直上	12.5	7.2	3.7	灯明皿	9世紀中葉～後半	Ⅶ分冊
	54	馬場(No3)	1号住	土師器坏	相模型	床面直上	12.1	6.8	4.0		9世紀中葉～後半	Ⅶ分冊
	55	馬場(No3)	3号住	土師器坏	相模型	床面直上	12.3	7.2	4.0		9世紀前半～中葉	Ⅶ分冊
	56	馬場(No3)	7号住	土師器坏	相模型	床面直上	11.6	7.0	3.9		9世紀中葉～後半	Ⅶ分冊
	57	馬場(No3)	5号住	土師器坏	相模型	ｶﾏﾄﾞ	9.1	5.7	2.8	底部外面に墨書「寺」	9世紀中葉	Ⅶ分冊
	58	馬場(No3)	1号礎石建物	土師器坏	南武蔵型	床面	9.6	5.6	3.2	灯明皿	9世紀中葉	Ⅶ分冊
	59	馬場(No3)	3号住	土師器坏	南武蔵型	ｶﾏﾄﾞ	12.4	6.8	4.0		9世紀前半～中葉	Ⅶ分冊
	60	表の屋敷(No8)	7号住	土師器坏	甲斐型	覆土、掘り方	10.2	5.0	3.6		9世紀前半以前	XⅢ分冊
	61	表の屋敷(No8)	3・4号住	須恵器坏	御殿山窯	3号住床面直上	10.8	5.8	3.5		9世紀中葉～後半	XⅢ分冊
	62	表の屋敷(No8)	7号住	須恵器坏	御殿山窯	床面直上	11.8	6.0	3.8		9世紀前半以前	XⅢ分冊
	63	表の屋敷(No8)	7号住	須恵器坏	御殿山窯	床面直上	11.3	6.0	3.0		9世紀前半以前	XⅢ分冊
	64	馬場(No3)	3号住	須恵器坏	御殿山窯	床面直上	11.8	6.3	3.3		9世紀前半～中葉	Ⅶ分冊
	65	表の屋敷(No8)	7号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	覆土下層～床面直上	26.0	6.0	33.0		9世紀前半以前	XⅢ分冊
	66	馬場(No3)	5号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	ｶﾏﾄﾞ	24.8				9世紀中葉	Ⅶ分冊

Ⅳ期	67	馬場(No3)	5号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	ｶﾏﾄﾞ	25.6				9世紀中葉	Ⅵ分冊
	68	表の屋敷(No8)	3·4号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	3号住覆土下層、ｶﾏﾄﾞ	24.2				9世紀中葉～後半	XⅢ分冊
	69	馬場(No3)	5号住	土師器甕	相模型	覆土下層	20.0				9世紀中葉	Ⅵ分冊
Ⅴ期	70	南(No2)	9号住	土師器坏	甲斐型	床面直上	11.5	4.8	4.2		9世紀後半	Ⅷ分冊
	71	馬場(No3)	4号住	須恵器坏	御殿山窯	床面直上、壁際	11.7	4.6	3.3		9世紀末～10世紀初頭	Ⅵ分冊
	72	馬場(No3)	4号住	須恵器坏	御殿山窯	床面直上	11.8	5.2	3.5		9世紀末～10世紀初頭	Ⅵ分冊
	73	馬場(No3)	4号住	須恵器坏	御殿山窯	床面直上、壁際	12.5	5.3	3.8		9世紀末～10世紀初頭	Ⅵ分冊
	74	馬場(No3)	4号住	須恵器坏	御殿山窯	床面直上	13.1	5.0	4.2		9世紀末～10世紀初頭	Ⅵ分冊
	75	馬場(No3)	4号住	須恵器坏	御殿山窯	床面直上	15.0	6.5	5.5		9世紀末～10世紀初頭	Ⅵ分冊
	76	大野原(No13)	1号住	須恵器坏	御殿山窯	床面直上、壁際	15.0	5.7	5.5		9世紀後半～10世紀前半	XⅣ分冊
	77	馬場(No3)	4号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	床面直上	23.8	5.8	32.3		9世紀末～10世紀初頭	Ⅵ分冊
	78	南(No2)	9号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	掘り方	22.4				9世紀後半	Ⅷ分冊
	79	馬場(No3)	4号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	床面直上、壁際	24.6				9世紀末～10世紀初頭	Ⅵ分冊
	80	南(No2)	9号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	ｶﾏﾄﾞ		5.6			9世紀後半	Ⅷ分冊
	81	馬場(No3)	4号住	土師器甕	武蔵型	床面直上	13.6				9世紀末～10世紀初頭	Ⅵ分冊
	82	馬場(No3)	4号住	土師器台付甕	武蔵型	床面直上		9.5			9世紀末～10世紀初頭	Ⅵ分冊
Ⅵ期	83	表の屋敷(No8)	9号住	土師器坏	相模型	覆土下層	13.0	7.1	3.8		9世紀後半	XⅢ分冊
	84	北原(No10)	1号住	土師器坏	相模型	覆土下層	12.7	6.8	5.0		10世紀前半	Ⅸ分冊
	85	表の屋敷(No8)	9号住	土師器坏	甲斐型	覆土下層	11.1				9世紀後半	XⅢ分冊
	86	北原(No10)	1号住	須恵器坏	御殿山窯	覆土下層	12.4	5.4	3.9	体部外面に墨書「六万」	10世紀前半	Ⅸ分冊
	87	北原(No10)	1号住	須恵器坏	御殿山窯	覆土	13.2	5.4	3.8		10世紀前半	Ⅸ分冊
	88	南(No2)	4号住	須恵器坏	御殿山窯	覆土下層	13.0	5.4	3.6		9世紀末～10世紀前半	Ⅷ分冊
	89	南(No2)	4号住	須恵器坏	御殿山窯	床面直上	14.0	5.4	3.6	内面にｶﾙｼｳﾑ分付着。	9世紀末～10世紀前半	Ⅷ分冊
	90	南(No2)	4号住	須恵器坏	御殿山窯	床面直上	14.2	4.8	4.9		9世紀末～10世紀前半	Ⅷ分冊
	91	南(No2)	4号住	須恵器高台付椀	御殿山窯	周溝	19.2	8.0	7.2		9世紀末～10世紀前半	Ⅷ分冊
	92	南(No2)	1号住	須恵器高台付皿	御殿山窯	覆土壁際	12.9	6.5	3.4	内面に墨書「人」	10世紀前半～中葉	Ⅷ分冊
	93	表の屋敷(No8)	9号住	須恵器蓋	御殿山窯	ｶﾏﾄﾞ	16.1	6.4	4.2		9世紀後半	XⅢ分冊
	94	南(No2)	4号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	床面直上	28.0				9世紀末～10世紀前半	Ⅷ分冊
	95	北原(No10)	1号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	ｶﾏﾄﾞ	23.0				10世紀前半	Ⅸ分冊
	96	南(No2)	1号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	床面直上	22.5				10世紀前半～中葉	Ⅷ分冊
	97	南(No2)	4号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	床面直上		5.8			9世紀末～10世紀前半	Ⅷ分冊
	98	表の屋敷(No8)	9号住	土師器小形甕	相模型	床面直上、周溝	12.7				9世紀後半	XⅢ分冊
	99	南(No2)	1号住	土師器甕	武蔵型	床面直上	17.0				10世紀前半～中葉	Ⅷ分冊
	100	南(No2)	4号住	土師器甕	武蔵型	覆土、ｶﾏﾄﾞ	13.0				9世紀末～10世紀前半	Ⅷ分冊
	101	北原(No10)	1号住	土師器甕	類武蔵型	ｶﾏﾄﾞ崩落土	21.0				10世紀前半	Ⅸ分冊
	102	北原(No10)	1号住	土師器台付甕	類武蔵型	覆土下層		9.1			10世紀前半	Ⅸ分冊
	103	表の屋敷(No8)	9号住	土師器甕	甲斐型	覆土下層	24.8				9世紀後半	XⅢ分冊
Ⅶ期	104	表の屋敷(No8)	13号住	土師器坏	相模型	床面直上	12.2	5.8	3.8		10世紀前半	XⅢ分冊
	105	北原(No9)	2号住	土師器坏	相模型	旧ｶﾏﾄﾞ	11.8	5.0	3.9		9世紀後半	Ⅲ分冊

時期区分	図版No	遺跡名	遺構名	器種	種別・産地	住居内の出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	備考	報告書の時期比定	掲載報告書
Ⅵ期	106	表の屋敷(No8)	13号住	土師器皿	相模型	床面直上	12.8				10世紀前半	XⅢ分冊
	107	表の屋敷(No8)	3・4号住	土師器坏	甲斐型	4号住居床面直上、覆土	14.5	4.0	4.8		9世紀中葉～後半	XⅢ分冊
	108	南(No2)	2号住	土師器坏	甲斐型	掘り方	13.8				9世紀後半	Ⅷ分冊
	109	表の屋敷(No8)	13号住	須恵器坏	御殿山窯	床面直上	11.2	4.8	3.2		10世紀前半	XⅢ分冊
	110	ナラサス(No15)	1号住	須恵器坏	御殿山窯	床面直上	12.8		3.7		10世紀前半	Ⅱ分冊
	111	表の屋敷(No8)	3・4号住	須恵器坏	御殿山窯	4号住床面直上	13.5	4.8	3.8		9世紀中葉～後半	XⅢ分冊
	112	ナラサス(No15)	1号住	須恵器坏	御殿山窯	床面直上	14.2		4.9		10世紀前半	Ⅱ分冊
	113	北原(No10)	5号住	灰釉陶器碗		炉址横攪乱	14.4	6.6	5.1	黒笹90号窯式	10世紀前半	Ⅸ分冊
	114	ナラサス(No15)	1号住	灰釉陶器碗		床面直上	17.4		4.9	折戸53号窯式	10世紀前半	Ⅱ分冊
	115	ナラサス(No15)	1号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	床面	30.0				10世紀前半	Ⅱ分冊
	116	表の屋敷(No8)	3・4号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	4号住ｶﾏﾄﾞ	24.1				9世紀中葉～後半	XⅢ分冊
	117	表の屋敷(No8)	3・4号住	土師器甕(胴張甕)	相模型	4号住ｶﾏﾄﾞ		6.5			9世紀中葉～後半	XⅢ分冊
	118	表の屋敷(No8)	13号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	床面直上		6.0			10世紀前半	XⅢ分冊
	119	北原(No9)	2号住	土師器甕	武蔵型	覆土	13.1				9世紀後半	Ⅲ分冊
	120	北原(No10)	5号住	土師器台付甕	武蔵型	掘り方	12.0				10世紀前半	Ⅸ分冊
	121	表の屋敷(No8)	3・4号住	土師器甕(長胴甕)	武蔵型	4号住ｶﾏﾄﾞ					9世紀中葉～後半	XⅢ分冊
	122	南(No2)	2号住	土師器甕	甲斐型	床面直上	17.8				9世紀後半	Ⅷ分冊
	123	表の屋敷(No8)	3・4号住	土師器甕	甲斐型	4号住覆土上層～下層		8.8			9世紀中葉～後半	XⅢ分冊
	124	ナラサス(No15)	1号住	須恵器長頸瓶	御殿山窯	床面直上		10.4			10世紀前半	Ⅱ分冊
	125	ナラサス(No15)	1号住	須恵器甕	御殿山窯	床面直上					10世紀前半	Ⅱ分冊
Ⅶ期	126	ナラサス北(No15北)	1号住	ロクロ土師器高台付坏		床面直上	15.6	9.3	6.0		11世紀前半	Ⅱ分冊
	127	表の屋敷(No8)	12号住	ロクロ土師器坏		床面直上	13.4				10世紀前半以前	XⅢ分冊
	128	北原(No10・11北)	1号住	土師器坏		掘り方	8.7	5.2	2.3		11世紀前半	XⅤ分冊
全期	129	馬場(No6)	6号住	須恵器坏	御殿山窯	覆土	13.0	6.2	3.8		10世紀前半以前	Ⅴ分冊
	130	北原(No10)	7号住	須恵器坏	御殿山窯	覆土	12.6	5.0	3.8	体部外面に墨書「六方」	10世紀前半	Ⅸ分冊
	131	北原(No10)	2号住	灰釉陶器碗		覆土中層、掘り方	12.6	5.4	4.5	黒笹14号窯式	10世紀前半	Ⅸ分冊
	132	北原(No10)	7号住	須恵器長頸瓶	御殿山窯	覆土					10世紀前半	Ⅸ分冊
	133	北原(No10)	2号住	須恵器突帯付壺		覆土上層、周溝	22.2			胴部の実測図は天地逆	10世紀前半	Ⅸ分冊
	134	北原(No10)	2号住	灰釉陶器長頸瓶		覆土	9.3				10世紀前半	Ⅸ分冊

【注】 1 「時期区分」および「図版No」欄は、第3～7図に対応する。
2 「法量」は実値・推定値の区別はせず、「器高」欄には口縁部～底部まで遺存している場合のみ明記している。
3 「住居内の出土位置」は基本的に報告書に拠っているが、報文で記載されていないものは出土分布図から読み取って判断している。
4 「報告書の時期比定」は、竪穴住居の所産(あるいは廃絶)時期を示しており、必ずしも個々の遺物の生産年代とは一致するものではない。
5 「掲載報告書」欄の分冊は、下記の通りである。

上田 薫他1991.11「宮ヶ瀬遺跡群Ⅱ」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告21
市川正史他1993.2「宮ヶ瀬遺跡群Ⅲ」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告21
近野正幸他1995.3「宮ヶ瀬遺跡群Ⅴ」かながわ考古学財団調査報告4
冨永樹之 1996.3「宮ヶ瀬遺跡群Ⅶ」かながわ考古学財団調査報告9
近野正幸他1996.3「宮ヶ瀬遺跡群Ⅷ」かながわ考古学財団調査報告10
市川正史他1997.1「宮ヶ瀬遺跡群Ⅸ」かながわ考古学財団調査報告15
近野正幸他1997.3「宮ヶ瀬遺跡群XⅢ」かながわ考古学財団調査報告19
鈴木次郎他1998.3「宮ヶ瀬遺跡群XⅣ」かながわ考古学財団調査報告40
市川正史他1998.3「宮ヶ瀬遺跡群XⅤ」かながわ考古学財団調査報告41

神奈川県内の「やぐら」集成（2）
－上行寺東遺跡と六浦周辺のやぐら群－

中世研究プロジェクトチーム

はじめに

昨年度実施した、発掘調査が行われたやぐらの集成をふまえ、今年度から個々の事例について検討を行う。やぐらの分布の中心地は言うまでもなく鎌倉であるが、鎌倉の外港として機能した六浦の周辺にも数多くのやぐら群が存在する。現在の行政区画で言うと、横浜市金沢区六浦、瀬戸、釜利谷付近が分布の中心となっており、発掘調査が行われた遺跡もこの地域に集中している。特に上行寺東やぐら群の報告書が2002年に刊行され、資料数が一気に増加した。そこで今年は上行寺東やぐら群を中心として、横浜市南部地域のやぐら群について分布、形態、出土遺物から検討を行うこととする。

Ⅰ．上行寺東やぐら群周辺の歴史的環境

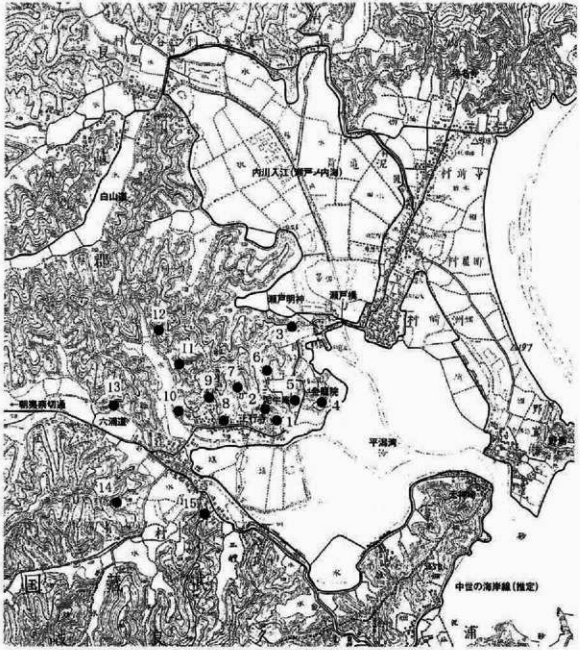
（1）六浦庄の歴史

上行寺やぐら群が所在する六浦庄は、武蔵国久良岐郡に属し、ほぼ現在の横浜市金沢区一帯にあたる。

中世以前の六浦庄は、『和名類聚抄』によると古代の律令制下において武蔵国久良郡鮎浦（あくら）郷と言われており、古代末期には常陸北部の豪族である那珂氏が領有していた（金沢区2001）。しかし、鎌倉時代以前には「六浦」の状況を示す資料はほとんど残されていない。

中世に入ると、六浦庄は鎌倉幕府創業の有力御家人である和田義盛の支配となった。『吾妻鏡』建久三年（1192）二月廿四日の条には、平家の武将上総五郎兵衛尉忠光が、和田義盛により「武蔵国六遠海辺」で切られたと記している。建暦三年（1213）五月には、和田義盛が執権北条氏により滅ぼされた和田合戦に際して、和田方についた「六浦三郎 同平三 同六郎 同七郎」等の名が記されている。和田氏と六浦庄の関係を示すものとしては、大道小学校裏手の谷戸を「和田の谷戸」と呼ぶこと、また六浦庄内には数カ所の「和田」の地名が残されている。確証はないものの、鎌倉市内に所在する杉本の他を、和田義盛の父であり杉本を名字としている杉本太郎義宗が領していたと考えられていることから、和田一族が六浦から鎌倉へ通じる六浦の地を領有していた可能性が高いものと考えられる（石井1986ｂ）。また、六浦と杉本を結ぶ朝夷奈切通は、和田義盛の子朝夷奈三郎義秀が、一夜にして切り開いたと伝えられていることも注目される。朝夷奈切通は、六浦の南を通る六浦道の途中に位置する。上総国夷隅郡から安房国朝夷郡付近を支配地としていた和田氏が、房総方面から鎌倉へ入るときに最短の経路として朝比奈切通を利用したものと考えられる。朝夷奈切通については、仁治元年（1240）十一月卅日の条に「鎌倉与六浦之中間始可不当道路之由有議定 今日曳縄 打丈尺 被配分御家人 明春三月以後可造之由被仰付云々」とある。また翌仁治二年四月五日の条には、「六浦道被造始」とあり、開削が始まったことが記されている。さらに、同年三代執権北条泰時が現場へ足を運んだことも記されている。このことから、朝夷奈義秀の開削した切通はそれほど大規模なものではなく、『吾妻鏡』の記事は既にあった切通の大規模な改修と考えることもできる（石井1986ｂ）。

一方六浦から鎌倉に至る道は、六浦道のほかに白山道があげられる。白山道は、釜利谷と鎌倉を結ぶ道で



1．上行寺東やぐら群　2．上行寺やぐら群　3．上行寺裏遺跡（瀬戸21番地やぐら群）
4．金龍院（瀬戸町）やぐら群　5．泥牛庵脇やぐら群　6．能仁寺跡（お屋敷）やぐら群
7．横松寺跡やぐら群　8．岩松家裏・渡辺家墓地やぐら群　9．お伊勢山やぐら群　10．長生寺やぐら群
11･12．西ヶ谷戸A・Bやぐら群　13．六浦大道やぐら群　14．六浦北部遺跡　15．六浦三叢地区やぐら群

第1図　六浦周辺のの旧地形および周辺のやぐら〔S＝1/20000〕

朝夷奈切通の開通以前には盛んに利用されていた。白山道の開通した年代は明らかではないが、六浦庄の領主北条実泰が、釜利谷に居館を構えたのが元仁元年(1224)と推定されているので、このころまでには開通していたものと考えられる。白山の呼称は、釜利谷に白山権現が勧請されたことによる(武部・近江屋1987)。

和田合戦以降の六浦庄は、二代執権北条義時の子実泰の所領となり、以後実時－顕時－貞顕－貞将と金沢北条氏により相伝される。六浦庄は六浦本郷、釜利谷郷、金沢郷、富岡郷4つの郷に区分されていた(岡崎他1982)。中心となるのは六浦本郷で、大道から瀬戸神社までの一帯とされる。釜利谷郷は、古道である白山道

が通じていた。金沢郷は、称名寺金沢文庫を開いた北条実時とその子孫が本拠としていた。富岡郷は、一時期有力御家人である安達氏か名越北条氏が本拠にしていたと言われている。このように、各郷共に鎌倉幕府と密接な関係が考えられる。鎌倉末期の資料の中には、「相州六連（浦）」と記されているものも見られる。これは、六浦庄が武蔵国と相模国の国境を隔てながらも、鎌倉ひいては北条氏と密接な関係を持った地域であったためにこのような表現が用いられたものであり、六浦が政治的な領域に取り込まれて、鎌倉と一体化して支配が行われていたためと考えられている。一方、鎌倉には大船が停泊できる港が存在していないため、六浦一帯が鎌倉の外港として繁栄していくこととなり、北条氏にとっては三浦半島に勢力を残す三浦氏への牽制と、房総に勢力を張る千葉氏への連絡路を確保する（竹内他編1991）という意味も含まれていたものと考えられる。宝治元年（1247）に三浦氏が滅亡すると、六浦は鎌倉の東を守る軍事的拠点という性格から、貿易港・泊地・避難港という本来の港湾施設としての機能が前面に出てきたものと考えられる（竹内他編1991）。しだいに、経済や文化の面からも、六浦の地が重要視されるようになっていったのであろう。

一方中世では、平潟湾に面した瀬戸神社が重要な役割を占めるようになった。瀬戸神社は近世まで瀬戸明神もしくは瀬戸三島明神と呼ばれ、治承四年（1180）源頼朝が伊豆の三島明神（三島大社）を勧請したのが始まりとされる。頼朝による勧請については確かな記録はないが、三島明神は海上の神としての性格をもっており、近世以前の平潟湾及び六浦周辺の地形的状況を見れば、瀬戸神社が沿岸一体の守護として祀られたものと考えられる。近世の大規模干拓がなされる以前は、洲崎と瀬戸の間が海峡となり、その北側に広大な内海が広がっていた。瀬戸神社はこの海峡から洲崎、金沢方面および内海を望む地に置かれている。14世紀初頭には、鎌倉幕府の主導によって瀬戸橋が通された。これによって、洲崎と瀬戸は陸続きとなり、洲崎～瀬戸～六浦を経て鎌倉へ出るルートが確立された。

鎌倉幕府滅亡後、六浦庄は足利直義の腹心上杉重能に、富岡郷は同じく仁木義長の支配地となった。その後、足利尊氏・直義による室町幕府の内部分裂をへて一時期上杉氏の支配から離れたが、貞治五年（1366）には鎌倉公方足利基氏により再び上杉氏に支配権が与えられている。

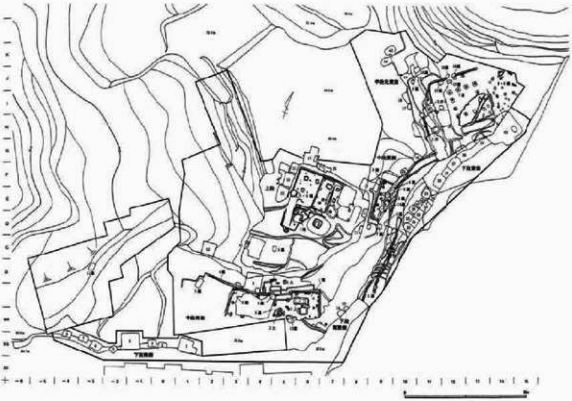
永享十年（1438）永享の乱により鎌倉府が滅亡して鎌倉が衰退すると、密接な関係にある六浦庄の港湾都市としての機能は低下していったものと考えられる。さらに、関東が小田原後北条氏の支配下に置かれると、六浦庄もその配下に与えられた。永禄二年（1559）年に成立した『北条氏所領役帳』には、富岡は玉縄衆の関新次郎、釜利谷は江戸衆の伊丹右衛門大夫、六浦木曽分は江戸衆の武田殿、金沢称名寺分は北条氏綱の弟幻庵が領有し、その他に称名寺・龍源寺の寺領、瀬戸神社の社領などが存在していた。しかし、天正十八年（1590）に後北条氏が豊臣秀吉に滅ぼされると、中世港湾都市としての六浦庄も終わりを告げたと考えられる。

近世以降の六浦は、江戸湾岸の物流の拠点としての性格が強まってゆく。また「金沢八景」として景勝の地としても知られるようになった。さらに、新田開発に伴って、六浦の景観も大きく変わっていった。寛文八年（1668）に平潟湾の一部が埋め立てられたのをはじめとして、内川入江や平潟湾は江戸時代を通して新田開発がなされて行った。なお、享保七年（1722）には米倉氏が金沢を領有し金沢藩が成立している。

（2）上行寺やぐら群と周辺のやぐら

ここでは上行寺やぐら群および上行寺東やぐら群と、周辺のやぐらについてみてみたい。

まず、周辺に多くのやぐらが存在する上行寺について述べておきたい。上行寺は日蓮宗六浦山上行寺と号する。応安三年（1370）頃に、六浦湊の六浦景光が、下総中山法華経寺三世の日祐に帰依して建立したとされる。日祐は、千葉宗胤の孫胤貞の子とされる。開基は荒井平次郎光吉で、瀬戸の金竜院近くの荒井という地



第2図　上行寺東やぐら群遺構配置〔S＝1/600〕

に屋敷があったという。六浦湊を支配する財力豊かな豪族的な商人で、出家してからは六浦妙法とか日荷上人と呼ばれている。寺伝によると、前身は真言宗の金勝寺であったとしている。日蓮宗に改宗したのは、いわゆる「船中問答」がきっかけといわれる。下総の豪族・富木常忍が、同地から鎌倉への途中、たまたま六浦まで同船した日蓮上人と法論をたたかわした。結果は、常忍が帰し日蓮上人に帰依したという。常忍は、のちに日蓮宗大本山・中山法華経寺の開基となった人である。

次に、周辺のやぐら群について述べてみたい。

1.上行寺東やぐら群　横浜市金沢区六浦２丁目に位置し、昭和59年(1984)８月～12月及び昭和61年(1986)７月～12月の２ヶ年にわたって発掘調査が実施された。上行寺東やぐら群は、『鎌倉市史考古編』に「六浦ガード付近やぐら群」として知られていた。発掘調査によって、２段の平場と44基のやぐら、10棟の掘立柱建物址や礎石建物址などが発見された。このうち上段の平場には２棟の掘立柱建物と池状遺構が存在し、阿弥陀如来像や五輪塔が刻まれたものを含む５基のやぐらに囲まれている(小林他2002)。やぐら群とその前面の施設が一体となって発見された希有な例である。この上段平場は数基のやぐらと共に移設復元され、現在も遺跡の一端を垣間見ることが出来る。やぐらの構築から機能していた時期は、出土遺物等から14世紀中頃から15世紀中頃の約100年間であると報告されている。

平成８年(1996)には、上行寺境内西側の墓地内で２基のやぐらと、やぐら前面では建物址の一部が調査されている(宗臺・宗臺1998a)。やぐらには、擂鉢状ピットが穿たれており14世紀以降に手が加えられたと報告されている。

2.上行寺やぐら群　上行寺が位置する谷に６箇所のやぐら群、計31基が存在する。『鎌倉市史考古編』に「横浜市金沢区六浦上行寺境内墓地にやぐら群があるが特記するほどのものはない。多くは墓穴に利用され

ている。五輪塔地輪に「石□□□□ 永徳二二八月」ときざむものがある」とされている。やぐらは、本堂の東側に3基、残りは本堂西側の丘陵部分で確認されている。

3．上行寺裏遺跡（瀬戸21番地やぐら群） 上行寺東やぐら群の存在する丘陵の北西部分に位置する。平成13年(2001)に大小6基のやぐらが調査されたが、後世の改変が著しい(宮坂・鈴木2001)。

4．金龍院（瀬戸町）やぐら群 開山は方崖元圭とされ、南北朝期の創建といわれている、臨済宗建長寺派昇天山金龍院の墓地の南側に位置する。やぐらは、A群からD群までの23基の分布が確認されている。平成11年(1999)にB群とされるやぐら9基の調査が行われている(長谷川・植山2000)。やぐらは上下2段に分けられ、下段の第5号やぐらからは大塞による埋葬を含めて3ヶ所の埋葬遺構が発見されている。この埋葬遺構は、出土遺物から14世紀後半から15世紀後半までに造られたとされている。

5．泥牛庵脇やぐら群 能仁寺の塔頭である泥牛庵の存在する丘陵に2群に分かれて存在する。泥牛庵は、臨済宗円覚寺の末寺で、創建は建武二年(1335)と言われている。開山は、円覚寺第十七世南山士雲和尚と言われている。8基のやぐらが存在し、このうち、昭和61年及び62年に泥牛庵北側の崖面の5基のやぐらが調査されている(砂田1987・長岡1988)。

6．能仁寺跡（お屋敷）やぐら群 上杉憲方の建立と伝えられる福寿山能仁寺跡地の、北側に位置する丘陵南斜面にA・B群の3基のやぐらが確認されている。能仁寺は、18世紀初頭に米倉丹後守忠仰が陣屋を移し「お屋敷」と通称された。

7．横松寺跡やぐら群 上行寺西側の通称「殿ヶ谷」には「横松寺」が存在したと言われていて、2群のやぐらが存在する。横松寺は、臨済宗建長寺の末寺で、開基は瀬戸明神の神職千葉氏の先祖某、開山は月窓元晩といわれている。月窓元晩は、貞治元年(1362)に寂するとされているので、14世紀中頃の創建と考えられる。

8．岩松家裏・波辺家墓地やぐら群 お伊勢山から半島状に突き出した丘陵先端部に、約20基のやぐらがA群～D群の4つの小群で存在する。

9．お伊勢山やぐら群 殿ヶ谷と西ヶ谷戸に挟まれたお伊勢山と呼ばれる丘陵の南側斜面に、やぐら2基が存在する。

10．長生寺やぐら群 長生寺は、浄土真宗西本願寺末寺で壽樂山と号する。元の宗派は真言宗であるが、住僧が蓮如に帰依し改宗したと言われている。やぐらは3基確認されている。

11・12．西ヶ谷戸A・Bやぐら群 六浦小学校の東側の丘陵崖面に7基のやぐらが確認されている。同じく西ヶ谷戸Bやぐら群は、西ヶ谷戸Aやぐら群の北の丘陵崖面に4基のやぐらが確認されている。

13．六浦大道やぐら群 金沢区大道1丁目に存在する。六浦湊の最奥部に位置する。平成6年(1994)と翌7年に、15基のやぐら、やぐら転用遺構3ヶ所が調査された(鹿島・鈴木1997)。出土遺物は、一部のかわらけを除き15世紀中頃から16世紀前半のものが大半を占める。

14．六浦北部遺跡 六浦町1771付近に存在する。4つのやぐら群で、計9基のやぐらが調査された。中世の火葬墓の調査が行われた。他のやぐら群からやや離れていて、侍従川の南側に孤立的に存在する。

15．六浦三艘地区やぐら群 六浦町1182に存在する。平成12年(2000)に、平潟湾を囲む丘陵の北側に延びる舌状の丘陵の北西側斜面と南東側斜面で2基のやぐらの調査が行われた(長谷川2000)。

（3）上行寺やぐら群の性格

以上、上行寺東やぐら群とその周辺にあるやぐら群についてみて来た。横浜市金沢区南部の六浦から横須賀市の北部にかけては、鎌倉市中に近い密度でやぐら群が分布している。実際にはこれ以上のやぐらが存在

していたのであろうが、過去の開発によって破壊されたものも多い。六浦地区においては、権現山やお伊勢山などの独立した丘陵の縁辺部にやぐら群の分布が認められるが、これらはいずれも平潟湾に面しているという点が共通している。また、六浦と鎌倉を結ぶ六浦道沿いや、釜利谷と朝夷奈を結ぶ白山道沿いにも多くのやぐらが分布している。

確認されているやぐら群の多くは寺院が存在する場所か、またはかつて寺院が存在していたと考えられている場所に立地している。これらの寺院は、寺伝等によればいずれも14世紀代に創建されたとされている。

今回取り上げた上行寺東やぐら群では、上下２段の平場に掘立柱建物址や礎石建物址、池状施設と井戸址が分布し、阿弥陀如来像や五輪塔が刻まれたやぐらも発見されている。建物址は、やぐらと一体となって何らかの宗教施設を構成していたと考えることが出来る。鎌倉市内では、やぐら群のあり方が寺院や寺院跡の占地と関係があるとの指摘がなされている(大三輪1986)。六浦の地においても、鎌倉と同様に、やぐら群と寺院が密接な関係を示していると言えるだろう。

以上のように、六浦地域は鎌倉から朝夷奈切通しを経て六浦湊へと通じる交通の要衝にあり、寺院を中心とした宗教活動や経済活動が盛んに行われたところである。これらの活動に従事した僧侶、またはそれに庇護を与えていたと思われる武家や有力商人との関係から、この六浦周辺に多くのやぐら群が成立したものと考えられる。

(宮坂淳一)

Ⅱ．上行寺東やぐら群を中心とするやぐらの形態的特徴

本地域で調査されたやぐらの規模・形態的特徴を抽出すべく、玄室幅・玄室奥行・玄室高・羨道幅・羨道奥行・前庭幅・前庭奥行の数値を取り、データの集成を行った。集成の対象としたのは13遺跡、計150基である。これらのやぐらの中には、その形状から明らかにやぐらではないとみとめられるものがあり、これらを除外したやぐらの総数は137基となる。中には調査範囲が限られていたり、崩落や後世の改変により当初の形状が失われ、それぞれの部位について正確な数値を得難いものもあったが、当初の形状を推定し得るものは可能な限り積極的に取り上げた。この結果、データ数は12遺跡129基となった(第１，２表)。報告書に計測値が明記してあるものはその数値を用いたが、実際は平面形が歪んでいるやぐらもあるため、適宜平均を取るなどして数値の修正を行っている。数値には推定も含まれるため、すべてのやぐらで必ずしも正確な計測値が得られたわけではない。同様に、立地についても山頂・山腹、山腹・崖裾の境界は必ずしも厳密なものではない。これらの数値や分類については、若干の幅、誤差があることをあらかじめお断りしておく。

(１) やぐらの構造、羨道・玄室の有無

やぐらの形態は様々であるが、基本的には主体となる玄室があり、①玄室のみのもの、②玄室に羨道、前庭を持つもの、③玄室に直接前庭がつくもの、の３種に大別される。今回データをとったやぐらでは、129基中前庭を伴うものはわずかに２基、羨道を伴う例も14基に過ぎなかった。明確な前庭がみとめられるのは釜利谷やぐらおよび六浦北部遺跡で各１基のみである(第２図)。

羨道・前庭は崖面の崩落や、やぐら前面の造成等により破壊されてしまうことが多い。今回対象とした各遺跡にも羨道・前庭に当たる部分が壊されていたり、前面に宅地が迫っていて完全に調査できなかった例がある。これらのやぐらの本来の構造を推定する術はないが、羨道・前庭をもつやぐらは実際にはもっと多かったと考えるのが妥当であろう。また、上行寺東やぐら群には丘陵頂部・山腹に造成された平場を取り囲むやぐらが８基ある。この平場を複数のやぐらに共通する前庭ととらえれば、前庭を持つやぐらは10基となる。

第1表　やぐら計測データ(1)

No.	遺跡名	遺構名	立地	開口方向	玄室					廊道			前庭	
					幅	奥行	平面積	平面形態	奥行/幅	天井高	幅	奥行	高さ	幅	奥行
1	梶原やぐら		丘陵中腹	南西	2.00	0.80	1.60	横長方形	0.40						
2	笹利谷東6丁目西地区やぐら群	第1号やぐら	丘陵中腹	南	2.60	0.10	0.26	横長方形	0.04	1.60					
3	笹利谷東6丁目西地区やぐら群	第2号やぐら	丘陵中腹	南	3.50	3.00	10.50	横長方形	0.86	1.60					
4	笹利谷東6丁目西地区やぐら群	第3号やぐら	丘陵中腹	南西	1.50	0.30	0.45	横長方形	0.20	1.20					
5	笹利谷東6丁目西地区やぐら群	第4号やぐら	丘陵中腹	南西	1.30	1.00	1.30	横長方形	0.77	1.08					
6	笹利谷東6丁目西地区やぐら群	第5号やぐら	丘陵中腹	南	1.20	0.70	0.84	横長方形	0.58	1.20					
7	笹利谷東6丁目西地区やぐら群	第6号やぐら	丘陵中腹	南	1.40	1.00	1.40	横長方形	0.71	1.20					
8	笹利谷東6丁目西地区やぐら群	第7号やぐら	丘陵中腹	南	1.60	1.00	1.60	横長方形	0.63	1.20					
9	笹利谷東6丁目西地区やぐら群	第8号やぐら	丘陵中腹	南	1.90	1.20	2.28	横長方形	0.63	1.30					
10	笹利谷東6丁目西地区やぐら群	第9号やぐら	丘陵中腹	南	1.80	1.70	3.06	正方形	0.94						
11	笹利谷東6丁目西地区やぐら群	第10号やぐら	丘陵中腹	南	1.40	0.70	0.98	横長方形	0.50						
12	笹利谷東6丁目西地区やぐら群	第11号石塁	丘陵中腹	南	1.90	1.70	3.23	横長方形	0.89	1.20					
13	笹利谷東6丁目西地区やぐら群	第13号石塁	後背	南東	2.20	2.20	4.84	正方形	1.00	1.60					
14	笹利谷東6丁目西地区やぐら群	第15号石塁	丘陵中腹	南東	2.40	2.70	6.48	縦長方形	1.13	1.80					
15	笹利谷東6丁目西地区やぐら群	第16号石塁	後背	南東	1.90	1.20	2.28	横長方形	0.63	2.00					
16	笹利谷東6丁目西地区やぐら群	第17号石塁	丘陵中腹	南東	1.50	0.10	0.15	横長方形	0.07	0.70					
17	笹利谷東6丁目西地区やぐら群	第18号石塁	丘陵中腹	南東	2.40	0.50	1.20	横長方形	0.21	1.00					
18	笹利谷東6丁目西地区やぐら群	第19号石塁	丘陵中腹	南	1.00	0.40	0.40	横長方形	0.40	0.90					
19	笹利谷東6丁目西地区やぐら群	第20号石塁	丘陵中腹	南	1.00	0.80	0.80	横長方形	0.80	0.80					
20	笹利谷東6丁目西地区やぐら群	第21号石塁	丘陵中腹	南西	1.70	1.10	1.87	横長方形	0.65	1.20					
21	笹利谷東6丁目西地区やぐら群	第22号石塁	丘陵中腹	南西	0.65	0.20	0.13	横長方形	0.31	0.60					
22	笹利谷東6丁目西地区やぐら群	第23号石塁	丘陵中腹	南東	2.20	2.60	5.72	縦長方形	1.18	1.70					
23	笹利谷東6丁目西地区やぐら群	第24号石塁	後背	南西	2.40	3.20	7.68	縦長方形	1.33	1.80	1.20	0.40	1.80		
24	笹利谷東6丁目西地区やぐら群	第25号石塁	丘陵中腹	南	1.80	0.60	1.08	横長方形	0.33						
25	笹利谷東6丁目西地区やぐら群	第28号石塁	後背	南東	1.60	2.20	3.52	縦長方形	1.38	1.83					
26	笹利谷東6丁目西地区やぐら群	第30号石塁	後背	南東	2.10	1.90	3.99	正方形	0.90	1.90					
27	笹利谷東6丁目西地区やぐら群	第31号石塁	後背	東	3.60	3.70	13.32	正方形	1.03	2.30	2.00				
28	笹利谷東6丁目西地区やぐら群	第32号石塁	後背	南東	1.60	1.20	1.92	横長方形	0.75	1.70					
29	坂本元屋敷やぐら群	2号やぐら	後背	南西	3.70	5.00	18.50	縦長方形	1.35	2.40	1.40	0.40	1.80		
30	笹利谷やぐら群	1号窟	後背	南	3.00	3.30	9.90	正方形	1.10	1.97					
31	笹利谷やぐら群	2号窟	後背	南	1.43	0.80	1.14	横長方形	0.56	0.64					
32	笹利谷やぐら群	3号窟	後背	南西	1.52	1.25	1.90	横長方形	0.82	1.67					
33	笹利谷やぐら群	4号窟	後背	南西	3.60	3.03	10.91	横長方形	0.84	2.02					
34	笹利谷やぐら群	7号窟	後背	南西	3.62	2.62	9.48	横長方形	0.72	1.84					
35	笹利谷やぐら群	8号窟	後背	南西	1.37	1.74	2.38	縦長方形	1.27	1.82					
36	笹利谷やぐら遺跡	1号やぐら	後背	北西	3.20	2.50	8.00	横長方形	0.78	1.85					
37	笹利谷やぐら遺跡	2号やぐら	後背	東	3.20	2.60	8.32	横長方形	0.81	1.75					
38	笹利谷やぐら遺跡	3号やぐら	丘陵中腹	南東	2.85	2.45	7.01	横長方形	0.86	1.58	1.74	1.73	1.42	2.85	0.75
39	笹利谷やぐら遺跡	4号やぐら	後背	北北東	4.10	3.30	13.53	横長方形	0.80	1.78					
40	笹利谷やぐら遺跡	5号やぐら	後背	北	2.90	2.40	6.96	横長方形	0.83	1.75					
41	笹利谷やぐら遺跡	8号やぐら	後背	北	3.20	2.60	8.32	横長方形	0.81	1.85					
42	笹利谷やぐら遺跡	9号やぐら	後背	東	2.20	1.70	3.74	横長方形	0.77						
43	笹利谷やぐら遺跡	10号やぐら	後背	東	2.40	1.80	4.32	横長方形	0.75						
44	笹利谷やぐら遺跡	11号やぐら	丘陵中腹	西	1.70	0.30	0.51	横長方形	0.18						
45	金龍院(瀬戸町)やぐら群	第1号やぐら	後背	南東	4.35	4.50	19.58	正方形	1.03	2.80					
46	金龍院(瀬戸町)やぐら群	第3号やぐら	後背	南東	4.70	4.60	21.62	正方形	0.98	2.50					
47	金龍院(瀬戸町)やぐら群	第4号やぐら	後背	南東	4.30	1.60	6.88	横長方形	0.37	2.00					
48	金龍院(瀬戸町)やぐら群	第6号やぐら	丘陵中腹	南東	4.22	2.20	9.28	横長方形	0.52	2.30					
49	金龍院(瀬戸町)やぐら群	第7号やぐら	丘陵中腹	南東	2.38	1.80	4.28	横長方形	0.76	2.00					
50	金龍院(瀬戸町)やぐら群	第8号やぐら	丘陵中腹	南東	5.60	2.40	13.44	横長方形	0.43	2.00					
51	金龍院(瀬戸町)やぐら群	第9号やぐら	丘陵中腹	南東	2.80	2.60	7.28	正方形	0.93						
52	足半城跡やぐら群	第5号やぐら	後背	北西	4.50	4.30	19.35	正方形	0.96	2.90	1.40				
53	上行寺表道路(瀬戸21番地やぐら群)	第1号やぐら	後背	南	5.30	4.50	23.85	横長方形	0.85						
54	上行寺表道路(瀬戸21番地やぐら群)	第2号やぐら	後背	南	1.40	1.80	2.52	縦長方形	1.29	1.70					
55	上行寺表道路(瀬戸21番地やぐら群)	第3号やぐら	後背	南	1.80	1.60	2.88	横長方形	0.89	1.80					
56	上行寺表道路(瀬戸21番地やぐら群)	第4号やぐら	後背	南	1.26	0.40	0.50	横長方形	0.32	0.80					
57	上行寺表道路(瀬戸21番地やぐら群)	第5号やぐら	丘陵中腹	南	0.73	0.90	0.66	縦長方形	1.23	0.80					
58	上行寺東やぐら群	1号やぐら	後背	南	2.45	2.01	4.92	横長方形	0.82	1.38					
59	上行寺東やぐら群	2号やぐら	後背	南	1.34	0.71	0.95	横長方形	0.53	1.05					
60	上行寺東やぐら群	3号やぐら	後背	南	1.34	1.08	1.45	横長方形	0.81	1.53					
61	上行寺東やぐら群	4号やぐら	後背	南	3.06	2.19	6.70	横長方形	0.72	2.44					
62	上行寺東やぐら群	5号やぐら	後背	南	1.57	0.70	1.10	横長方形	0.45	0.70					
63	上行寺東やぐら群	6号やぐら	後背	南	1.91	1.25	2.39	横長方形	0.65	1.20					
64	上行寺東やぐら群	7号やぐら	後背	南	1.48	0.84	1.24	横長方形	0.57	1.30					
65	上行寺東やぐら群	8号やぐら	後背	南	1.67	0.84	1.40	横長方形	0.50	1.93					
66	上行寺東やぐら群	9号やぐら	丘陵中腹	南	2.53	2.60	6.58	正方形	1.03	1.58					
67	上行寺東やぐら群	10号やぐら	丘陵中腹	南東	2.23	2.20	4.91	正方形	0.99						
68	上行寺東やぐら群	11号やぐら	丘陵中腹	東	1.22	1.10	1.34	正方形	0.90	1.41					
69	上行寺東やぐら群	12号やぐら	丘陵中腹	東	1.35	0.70	0.95	横長方形	0.52	1.60					
70	上行寺東やぐら群	13号やぐら	丘陵中腹	東	1.70	2.20	3.74	縦長方形	1.29	1.24					
71	上行寺東やぐら群	14号やぐら	丘陵中腹	南東	0.90	0.86	0.77	正方形	0.96	0.90					
72	上行寺東やぐら群	15号やぐら	丘陵中腹	南西	1.29	1.07	1.38	横長方形	0.83	1.00	1.05	0.45			
73	上行寺東やぐら群	16号やぐら	丘陵中腹	南東	1.20	0.97	1.16	横長方形	0.81						
74	上行寺東やぐら群	17号やぐら	丘陵中腹	東	0.64	0.58	0.37	正方形	0.91						
75	上行寺東やぐら群	18号やぐら	丘陵中腹	東	1.84	0.90	1.66	横長方形	0.49						
76	上行寺東やぐら群	19号やぐら	丘陵頂部	南	2.52	1.95	4.91	横長方形	0.77	1.77				前面平場	
77	上行寺東やぐら群	20号やぐら	丘陵頂部	南	1.53	1.00	1.53	横長方形	0.65					前面平場	

第2表 やぐら計測データ(2)

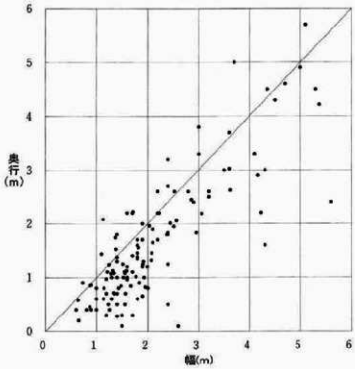
No	遺跡名	遺構名	立地	開口方向	玄室						羨道			前庭	
					幅	奥行	平面積	平面形態	奥行/幅	天井高	幅	奥行	高さ	幅	奥行
78	上行寺東やぐら群	21号やぐら	丘陵頂部	東	1.55	1.10	1.71	横長方形	0.71	1.32				前面平場	
79	上行寺東やぐら群	22号やぐら上段	丘陵頂部	東	2.40	1.25	3.00	横長方形	0.52					前面平場	
80	上行寺東やぐら群	22号やぐら下段	丘陵頂部	東	2.10	1.65	3.47	横長方形	0.79						
81	上行寺東やぐら群	23号やぐら	丘陵頂部	東	2.40	1.84	4.42	横長方形	0.77					前面平場	
82	上行寺東やぐら群	24号やぐら	丘陵中腹	南東	0.87	0.85	0.74	正方形	0.98	0.90					
83	上行寺東やぐら群	26号やぐら	丘陵中腹	南東	1.60	0.96	1.54	横長方形	0.60	1.05	1.18	0.30			
84	上行寺東やぐら群	27号やぐら	丘陵中腹	南東	1.25	1.24	1.55	正方形	0.99	1.12					
85	上行寺東やぐら群	28号やぐら	丘陵中腹	南東	1.56	1.08	1.68	横長方形	0.69	1.14					
86	上行寺東やぐら群	29号やぐら	丘陵中腹	南東	1.59	1.12	1.78	横長方形	0.70	0.96	1.13	0.23			
87	上行寺東やぐら群	30号やぐら	丘陵中腹	南東	1.38	1.53	2.11	縦長方形	1.11						
88	上行寺東やぐら群	31号やぐら	丘陵中腹	南東	2.57	2.06	5.29	横長方形	0.80	1.54					
89	上行寺東やぐら群	32号やぐら	丘陵中腹	南東	2.03	1.96	3.98	正方形	0.97	1.48					
90	上行寺東やぐら群	33号やぐら	丘陵中腹	南東	2.95	1.84	5.43	横長方形	0.62	1.40					
91	上行寺東やぐら群	34号やぐら	丘陵中腹	南東	1.71	2.22	3.80	縦長方形	1.30	1.46					
92	上行寺東やぐら群	35号やぐら	丘陵中腹	南東	2.08	1.45	3.02	横長方形	0.70	1.73					
93	上行寺東やぐら群	36号やぐら	丘陵中腹	南東	1.80	1.45	2.61	横長方形	0.81	1.44					
94	上行寺東やぐら群	37号やぐら	丘陵中腹	南東	1.82	1.56	2.84	横長方形	0.86	1.48					
95	上行寺東やぐら群	38号やぐら	丘陵中腹	南東	1.95	0.82	1.60	横長方形	0.42	1.45					
96	上行寺東やぐら群	39号やぐら	丘陵中腹	南東	1.80	1.35	2.43	横長方形	0.75	1.50	1.29	0.29	1.62		
97	上行寺東やぐら群	40号やぐら	丘陵中腹	南東	5.37	4.22	22.66	横長方形	0.79	2.70	1.80	1.40	2.60		
98	上行寺東やぐら群	41号やぐら	丘陵頂部	西	1.56	0.50	0.78	横長方形	0.32						
99	上行寺東やぐら群	42号やぐら	丘陵中腹	北東	1.13	2.08	2.35	縦長方形	1.84	0.90				前面平場	
100	上行寺東やぐら群	43号やぐら	丘陵中腹	南東	1.32	1.12	1.48	横長方形	0.85	1.05	0.83	0.50		前面平場	
101	上行寺東やぐら群	44号やぐら	丘陵中腹	北東	1.92	1.30	2.50	横長方形	0.68	1.20	1.00	0.60		前面平場	
102	上行寺東やぐら群	1号窟	崖裾	南東	4.30	3.00	12.90	横長方形	0.70	3.50					
103	上行寺東やぐら群	2号窟	崖裾	南	5.10	5.70	29.07	縦長方形	1.12	2.73					
104	六浦大道やぐら群	1号やぐら	丘陵中腹	南東	2.07	1.32	2.73	横長方形	0.64	1.41					
105	六浦大道やぐら群	2号やぐら	丘陵中腹	南東	1.10	1.43	1.57	縦長方形	1.30	1.00					
106	六浦大道やぐら群	3号やぐら	丘陵中腹	南	1.00	0.60	0.60	横長方形	0.60	1.10					
107	六浦大道やぐら群	4号やぐら	丘陵中腹	南東	0.87	0.45	0.39	横長方形	0.52	1.22					
108	六浦大道やぐら群	5号やぐら	丘陵中腹	南東	1.77	1.02	1.81	横長方形	0.58	0.87					
109	六浦大道やぐら群	6号やぐら	丘陵中腹	南東	1.14	0.60	0.68	横長方形	0.53	1.20					
110	六浦大道やぐら群	7号やぐら	丘陵中腹	南東	1.80	1.38	2.48	横長方形	0.77	1.00					
111	六浦大道やぐら群	8号やぐら	丘陵中腹	南	1.40	1.37	1.92	正方形	0.98	1.17					
112	六浦大道やぐら群	9号やぐら	丘陵中腹	南	3.00	3.80	11.40	縦長方形	1.27	2.90					
113	六浦大道やぐら群	10号やぐら	丘陵中腹	南	1.40	0.28	0.39	横長方形	0.20	0.90					
114	六浦大道やぐら群	11号やぐら	丘陵中腹	南	1.40	0.50	0.70	横長方形	0.36	1.00					
115	六浦大道やぐら群	12号やぐら	丘陵中腹	南	0.60	0.40	0.24	横長方形	0.67	1.00					
116	六浦大道やぐら群	13号やぐら	丘陵中腹	南	1.20	0.30	0.36	横長方形	0.25	1.10					
117	六浦大道やぐら群	14号やぐら	丘陵中腹	南	1.30	0.60	0.78	横長方形	0.46	1.00					
118	六浦大道やぐら群	15号やぐら	丘陵中腹	南東	1.70	1.40	2.38	横長方形	0.82	1.10					
119	六浦北部遺跡	第9号横穴	丘陵頂部	南東	1.15	0.80	0.92	横長方形	0.70	0.87					
120	六浦北部遺跡	第10号横穴	丘陵頂部	南	1.93	1.00	1.93	横長方形	0.52	1.13	0.85	0.25		1.60	0.60
121	六浦北部遺跡	第11号横穴	丘陵頂部	南東	1.99	1.20	2.39	横長方形	0.60	1.00					
122	六浦北部遺跡	第12号横穴	丘陵頂部	南	1.24	0.50	0.62	横長方形	0.40	0.90					
123	六浦北部遺跡	第13号横穴	丘陵頂部	南東	0.90	0.40	0.36	横長方形	0.44	0.80					
124	六浦北部遺跡	第14号横穴	丘陵頂部	南東	0.80	0.40	0.32	横長方形	0.50	0.95					
125	六浦北部遺跡	第15号横穴	丘陵頂部	南	1.90	0.65	1.24	横長方形	0.34	1.10					
126	六浦北部遺跡	第16号横穴	丘陵頂部	南西	1.90	2.00	3.80	正方形	1.05	1.25					
127	六浦北部遺跡	第17号横穴	丘陵頂部	南	1.40	1.30	1.82	正方形	0.93						
128	六浦三艘地区やぐら群	第1号やぐら	崖裾	西	4.16	2.90	12.06	横長方形	0.70	2.00	1.10	1.80			
129	六浦三艘地区やぐら群	第2号やぐら	崖裾	南東	5.00	4.90	24.50	正方形	0.98	2.64					

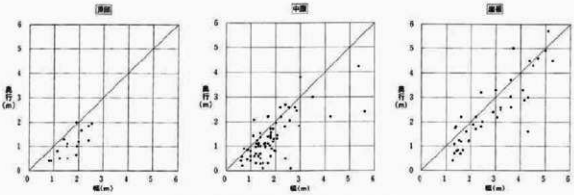
このように、前庭はやぐら前面の大きな範囲に広がる可能性を考慮しなければならないが、往々にして宅地の裏に存在するやぐらではそこまで調査が及んでいない。しかし、そういう事情を割り引いたとしても、現況で羨道・前庭を伴うやぐらが全体の1割に満たないということは、この地域において主体となるものではなかったことを示すのだろう。

なお、鎌倉市番場ヶ谷やぐら群でも羨道・前庭の有無による分類が行われている。構造が明らかなやぐら17基中、羨道を持たないものが11基あるが、前庭を持たないものは2基のみである(永井他1986)。一遺跡だけの限られたデータであり、遺存状態の差もあるだろうが、横浜市域とは数値上大きな違いを示している。

(2) 玄室の規模・形状

羨道・前庭を持つ例が少ないため、規模・形状については玄室のみを検討の対象とした。第3図は各やぐらの幅を横軸に、奥行を縦軸に落としたグラフである。玄室の規模は幅・奥行とも2m以下の小型のものが多く、幅2m以下のものが80基で全体の63%を占める。幅3m以下では107基で全体の84%となる。玄室の平

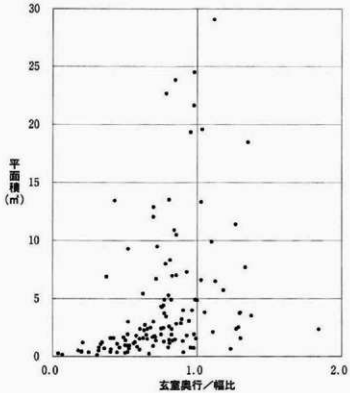




第3図　玄室の規模（上段：全体、下段：立地別）

面積では4㎡以下のものが89基（70％）、6㎡以下では99基（77％）である。天井高についても、内部で動き回るには不自由だったであろう高さ1.6m以下のものが71基あり、天井高が明らかなやぐらの65％となる。他地域のやぐらのデータを細かく取っていないので単純な比較はできないが、総じて平面的に狭く、天井が低いものが多いと言えよう。鎌倉市の百八やぐらのデータ（田代1986a，b）では、玄室幅2m内外以下のものが全体の7割以上を占める。百八やぐらは200基以上の小規模なやぐらが群集し、その中に一定割合で中規模、大規模なやぐらが存在することが明らかになっている。このようなやぐらの規模、分布および立地等は特に上行寺東やぐら群の様相と共通する部分が多くみとめられる。

玄室の平面形態を見ると、奥行／幅の数値が0.9より小さい、すなわち奥行に対して幅が広い横長方形の形のものが93基（72％）と大多数を占める。奥行／幅が0.9～1.1のものを正方形、1.1より大きいものを縦長方形とした場合、正方形は21基（16％）、縦長方形は15基（12％）となる。第4図は奥行／幅比を横軸に、縦軸に平面積を落としたグラフである。中央線より左が横長方形、右が縦長方形、中央に近いほど正方形に近いことを示す。グラフの左下、つまり、平面積が小さく横長方形のものが多いことが明らかである。前面を削平さ



第4図　玄室平面の縦横比(上段：全体、下段：立地別)

れてしまっている調査例があるため、実際は7割よりも少なくなるだろうが、横長方形が主体となる全体的な傾向は変わらないと思われる。番場ヶ谷やぐら群でも同様の奥行／幅による分類がなされており、半数以上の17基中9基が横長方形となっている。このやぐら群も谷奥の斜面中腹に位置しており、各やぐらの形状・規模ともに上行寺東やぐら群等との共通点が見られる。

また、今回集成したやぐらの中で、横断面形状が明らかなやぐらは119基あった。このうち奥壁中央が高い、いわゆる家形(舟底形・屋根形)形状を持つものは全くなかった。壁面に梁を渡したような痕跡をとどめるやぐらも見られない。鎌倉市内における家形のやぐらは比較的大型で、崖裾に多く見られる傾向がある。横浜市内では、崖裾で調査されたやぐらは41基、幅3ｍを超す大型のやぐらは19基である。調査の絶対数は少ないが、本地域の特色として家形のやぐらが少ない(現時点では皆無)ということが指摘できよう。

(3) やぐらの立地

以上で述べてきた諸特徴を個々の立地ごとに検討する。やぐらの総数137基中、丘陵頂部もしくは斜面中腹に位置するものが89基(65%)、崖裾は48基(35%)である。無論、これは発掘調査が行われたやぐらの数であ

り、これをもって崖裾よりも斜面・頂部にやぐらが多く分布すると言うことはできない。特に本地域の場合、既に消滅したやぐらも多くあったと考えられる。また、丘陵の下端から頂部までを調査した希有な例である上行寺東やぐら群が含まれるため、鎌倉市内や三浦半島の調査例に比べて丘陵頂部および山腹の基数が多く出る傾向もあろう。

第３図、第４図下半に示したとおり、山腹～頂部では玄室規模が小さく、崖裾に比較的大きなやぐらが分布する傾向が明らかである。同時に頂部・山腹に横長方形のやぐら多いこともみとめられよう。これらの形態差は単に立地の違いとも考えられる。しかし、龕のような、小さく正面から拝むだけのようなやぐらと、人間が入って中で何らかの行動が可能な大型のやぐらとでは自ずとその性格、機能が異なるはずである。上行寺東やぐら群や百八やぐら、名越まんだら堂やぐら群など、山稜から山腹にあるやぐら群は、小規模なものが群集する例が多い。これに対して、急傾斜地崩壊対策工事に伴って調査されるやぐらは往々にして崖裾にあり、比較的規模が大きい。もちろん崖裾にも小さなやぐらはあるし、山腹に大規模なものもある。しかし、主体となるのやぐらの規模・構造は頂部・山腹と崖裾で明らかに異なっている。山頂・山腹と崖裾では場の性格が異なり、その違いがやぐらの形態にも反映されていると考えられる。小型のやぐらが多く、かつ崖裾での調査例が少ない横浜市域で家形のやぐらが皆無なのも、こうした性格の違いを反映しているのであろう。

以上述べて来たことはこれまでの説の追認に過ぎないかもしれないが、数値的にある程度の傾向を示すことができた。無論、限られた範囲のデータであるため、今後の調査によって得られるデータによって補完・修正されねばならない。さらに、三浦半島、鎌倉市域についても同様の基準でデータを検討することによって、それぞれの地域の特性をより鮮明にすることができるだろう。（鈴木庸一郎）

Ⅲ．遺物からみた上行寺東遺跡

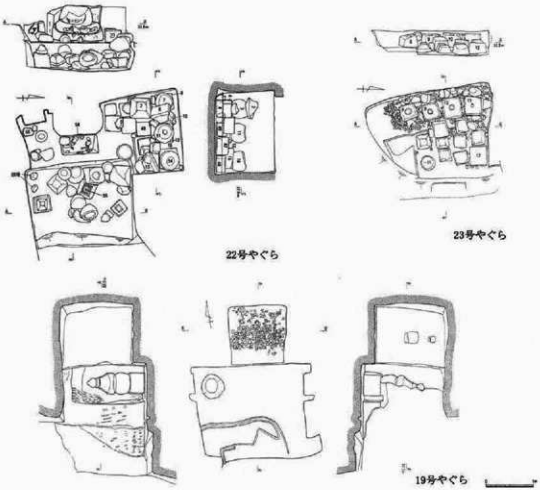
上行寺東やぐら群のやぐら内における石塔の造立、配置について検討してみたい。

上行寺東やぐら群は、横浜市金沢区六浦２丁目の京浜急行電鉄金沢八景駅の南西側に隣接する丘陵上に立地する。この丘陵は、北西から南東方向に傾斜し、先端は半島状に突出している。標高は18～36ｍを測る。丘陵の基盤層は野島凝灰質砂岩で、海食によって形成された上・中・下の３段にわたる崖面を掘り込んでやぐら群が構築されていた（第２図）。また、海食崖下では岩盤を削平して平場が形成され、建物が構築されている。発見された遺構はやぐら44基、建物址10棟、池址１ヶ所、井戸址３基、土坑墓18などである。

上段は、馬の背状をなす丘陵頂部の南側を切り崩して、平場を形成している。平場には５号礎石建物址、６号掘立柱建物址があり、これを取り巻く崖面には19～23号やぐらが掘られていた。

中段は、上段平場との比高差５～６ｍ前後の海蝕崖にやぐらを、崖下部に平場を造成して建物、井戸、土坑墓が構築されている。遺構の配置は、大きく南側、東側、北東側に分けられる。中段南側の平場には１号掘立柱建物址、２号礎石建物址があり、崖面には９・10号やぐらが掘られている。中段東側には３号掘立柱建物址、11～13・16・24号やぐらがある。さらに中段の北東側の平場には７号礎石建物址、８・９号掘立柱建物址、２・３号井戸址等が、崖面には17・18・42・43号やぐらが分布している。

下段の海蝕崖裾部にもやぐら群が構築されているが、下段下部は大きく削平されているため急な崖となっている。やぐらは、その分布から南側、南東側、東側に分けられる。南側には１～８号やぐらが、南東側には14・15号やぐらが、東側には25～40号やぐらが位置している。

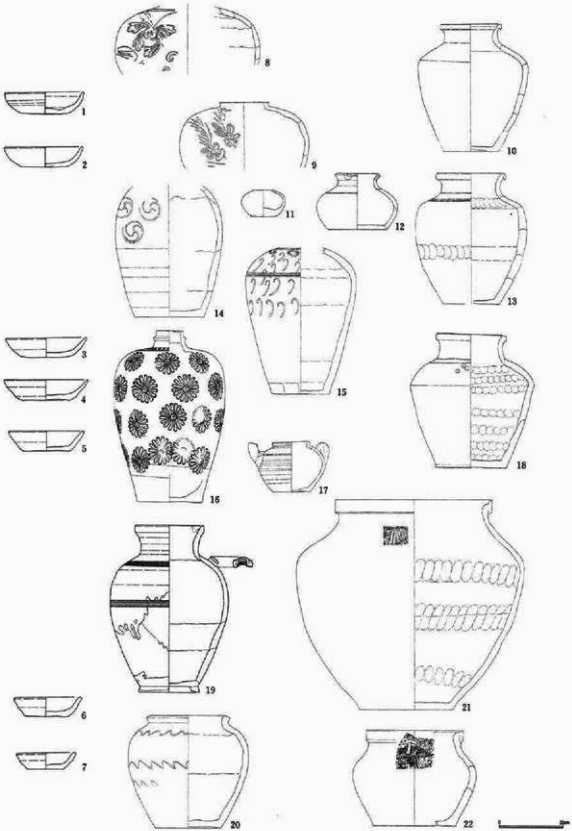


第5図　上行寺東やぐら群　上段やぐらの遺物出土状況

最も注目されるのは、上段のやぐらであろう。上段の中心にある2間×3間の6号掘立柱建物址は、西側に縁側を持ち、南西側に池を併設していた。この建物の柱筋と19～23号やぐらは同一の軸線上にあることから、同一時間幅内に存在していた可能性が高いとされている。その後この6号掘立柱建物から5号礎石建物址に建て替えられる際に、やぐらの一部が削平されるが、3間×3間の仏堂等の建物を中心として回廊状にやぐら群が展開する状況が想定される。上段西側に位置する22号やぐらは、玄室の奥壁中央に阿弥陀如来座像を、またその左側には五輪塔の浮彫が彫刻されている。さらにこのやぐらは玄室右側に一段低い副室を設けていて、その内部にはぎっしりと五輪塔が配列されていた。配列された五輪塔のうち、奥壁寄りの2個体は月輪内に梵字を彫っている(第5図)。阿弥陀如来座像前面の方形の掘り込みには、火葬骨・かわらけとともに火葬骨を納めた瀬戸灰釉瓶子(第6図8)が入れられていた。一方、副室は五輪塔の地輪上部まで火葬骨が堆積していて、五輪塔の間から火葬骨を納めた常滑壺が2個体(第6図10・13)出土している。

22号やぐらの北側に並列する20号やぐらは、形状が不整形であるが、奥壁には2個体の五輪塔の浮彫が認められた。平場の北側に位置する19号やぐらは、玄室奥の一段高い位置に副室を設けている。副室内には玉石敷きを残すのみで、石塔類は原位置を保っていなかった。玄室の両側壁には、それぞれ1体ずつ五輪塔が浮彫されていた。22号やぐらの南側に隣接する23号やぐらは、玄室奥に壇を有し、その上に玉石が敷かれて五輪塔4基が並べられている。さらにその前面には8基の五輪塔が並んでいる。

中段東側では、11・16・24号やぐらで納骨穴が認められた。中段北東側の17・18号やぐらは、安山岩製五



1・2・8・10・13：22号、3・4：24号、6・7：39号、9・11：35号
12・15・18・20・22：34号、14：19号、16・17：43号、19：17号、21：37号

第6図　上行寺東やぐら群出土遺物（土器・陶磁器）

輪塔を主体としていて、本やぐら群の中では新しい。43号やぐらは玄室内に玉石が敷かれていて、前方には2基の五輪塔が立ち、奥壁寄りの穴には瀬戸瓶子が埋納されていた。玉石上には多量の火葬骨が検出されていることから、埋納穴の上にもなんらかの石塔が建てられていた可能性が高い。

下段のやぐら群では、14・15・26・28・29・34・35・37・38号やぐらで五輪塔の配列が見られた。35・37号やぐらでは大型の五輪塔を中心に配列されているが、その他のやぐらではあまり規模の差は認められない。

報告書によるとやぐら群と遺構の年代について、下記のように3期に区分されている。

Ⅰ期　14世紀中頃～15世紀中頃

やぐら群、1・3・6号掘立柱建物址、1号井戸址、池址

Ⅱ期　15世紀中頃から15世紀末ないしは16世紀初頭　やぐら群廃絶後

2・5・7号礎石建物址、8・9号掘立柱建物址、2・3号井戸址、切り通し道址

Ⅲ期　15世紀末～16世紀初頭

土坑墓、やぐら利用墓（注：やぐら内に直接埋葬されたもの）

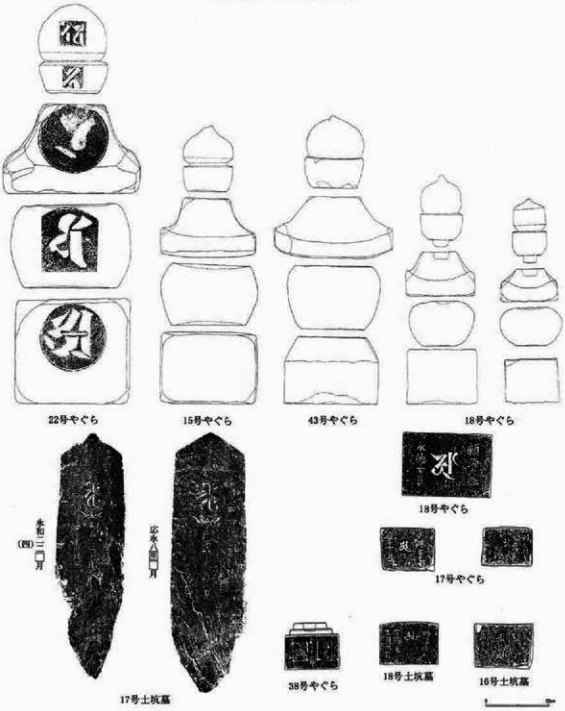
やぐら群より出土したかわらけ・陶器を第6図に示した。そらの年代観から、本やぐら群では14世紀第2四半期から15世紀第2四半期の年代が考えられる。壺・甕・水注類はいずれも火葬骨を納めた骨壺として使われているため、若干の年代的なずれを考慮する必要があるが、伴出しているかわらけ等からみても大きな問題はないと思われる。常滑窯の製品の中で、玉縁口縁壺はやぐら内への火葬骨壺として一般的に見られるが、常滑編年の6・7形式で13世紀後半から14世紀中頃に比定されているため、もう少し細かい形式的な検討をしていく必要があるかも知れない。

そのほかにも、やぐら群の年代を直接的にしめすものとしては、紀年銘を記した石塔類があげられる。

・17号やぐら　安山岩製五輪塔地輪　　応永17年(1410)、永享8年(1436)
・18号やぐら　安山岩製五輪塔地輪　　永徳3年(1383)
・38号やぐら　安山岩製宝篋印塔基礎　　宝徳12年(1440)
・16号土坑墓　安山岩製五輪塔地輪　　嘉吉元年(1441)
・17号土坑墓　緑泥片岩製板碑　　永和4年(1378)、応永8年(1401)
・18号土坑墓　安山岩製五輪塔地輪　　宝徳元年(1449)

報告書では、土坑墓より出土している石塔類は、やぐら群から持ち出されたものと考えられている。これに基づけば、やぐら群は少なくとも14世紀後半から15世紀中頃まで存続していたことが明らかである。

上行寺東やぐら群では、凝灰岩製の五輪塔が主体で、安山岩製の五輪塔はごく僅かであり、緑泥片岩製の板碑がいずれにも伴っている。やぐらから出土している石塔類は、自然に崩れたり、人為的に動かされたりしているものが多いため、地輪や水輪を除くと原位置を保っていない場合が多い。組み合わせが明らかな五輪塔を図示したのが第7図である。左側が22号やぐらから出土した凝灰岩製のもので、総高114.1cmを測る。月輪内に薬研彫りで梵字を彫り込んでいて、火輪の軒は反りが弱く、水輪の最大径が中位にあって太鼓胴状を呈する。ほぼ同規模の五輪塔がもう一体あるため、一対になっていたと考えられる。左から2番目は、15号やぐらから出土した凝灰岩製のもので、総高86.3cmを測る。火輪の軒はやや低く、水輪の最大径は胴部中位よりやや上にあるものの、太鼓胴状を呈する。中央は43号やぐらから出土した凝灰岩製のもので、総高84.7cmを測る。梵字の彫り込みに金箔を漆で付着させている。火輪の軒は高く反り上がり、水輪の最大径は上位にある。なお、19号やぐら内の浮彫五輪塔は、西側が総高1.2mで、梵字が丸彫されている。東側は



第7図　上行寺東やぐら群出土遺物（五輪塔・板碑）

総高1.3mで梵字は薬研彫状である。いずれも火輪の軒先は反りが弱く、水輪の最大径はやや上位にある。第7図の右側の2個体は、18号やぐらから出土した安山岩製のものである。総高は、左側が64cmで、右端が55cmを測る。いずれも空風輪と火輪はほぞ組で、火輪の軒先だけ強く反り上がり、水輪の最大径は上位にある。

先にも述べたように、五輪塔の大半は凝灰岩製であり、その下限は明らかにし得ないが、14世紀代を中心に製作されたものと考えられる。一方、紀年銘を有する五輪塔・宝篋印塔はいずれも安山岩製であり、その年代から見ると15世紀代が多い。最も古いものは14世紀後半であるため、安山岩製の五輪塔はそれ以降に主体的に造られていた可能性がある。

次に周辺のやぐら群と比較してみたい。上行寺裏の瀬戸町21番地やぐら群や、近隣する釜利谷やぐら群、六浦大道やぐら群では、安山岩製の石塔を主体としていることから、15世紀代を中心とした時期に造られたのであろう。瀬戸町やぐら群では、出土した常滑の大甕から14世紀後半以降に主体があるように思われる。やや離れているが、六浦北部遺跡群は凝灰岩製五輪塔を主体としていて、常滑の玉縁口縁甕を出土していることからも14世紀代を中心としているものと思われる。このように、六浦周辺では14世紀前半には出現していたと思われる上行寺東やぐら群が、15世紀中頃まで存続する中で、14世紀後半から15世紀にかけて周辺にやぐらの分布が広がっていったのではないだろうか。

(宍戸信悟)

参考・引用文献

赤星直忠　1959『鎌倉市史　考古編』

安生憲明　2003「中世鎌倉地域の葬送ー「やぐら」を中心としてー」『駒澤考古』29　駒澤大学考古学研究室

上田　薫・植山英史　2001『釜利谷東６丁目西地区やぐら群（２次）』かながわ考古学財団調査報告107

石井　進　1988「中世六浦」『神奈川地域史研究』３・４

石井　進　1986「中世六浦の歴史」『三浦古文化』40 中世の六浦特集　三浦古文化研究会

岡崎文喜他　1982『六浦北部遺跡ー中世火葬墓の総合調査』六浦北部遺跡調査団

小川裕久・堀田明治　1983『横浜市金沢区釜利谷町坂本元屋敷やぐら群調査概報』『横須賀考古学会年報』26

鹿島保宏・鈴木重信　1997『六浦大道やぐら群』神奈川県横浜治水事務所・財団法人横浜市みゑさと歴史財団

鹿島保宏・鈴木重信・樋本昌幸　2000『金沢区No.52(上行寺裏)遺跡ー平成９・10年度範囲確認調査報告書』横浜市教育委員会

神奈川県立金沢文庫　1993『金沢八景　歴史・景観・美術』

神奈川地域史研究会編　1986『神奈川地域史研究』第３・４号合併号

金沢区制五十周年記念事業実行委員会　2001『かなざわの歴史』

倉多正風・井上智朗・宮副究二　1986「横浜市金沢区六浦地域のやぐら群について」『三浦古文化』40 中世の六浦特集　三浦古文化研究会

小林義典・戸田哲也　2002『上行寺東やぐら群遺跡発掘調査報告書』上行寺東やぐら群遺跡発掘調査団

宗臺富貴子・宗臺秀明他　1998a「上行寺東やぐら群」「中世石窟遺構の調査Ⅱ－鎌倉・六浦所在のやぐら群－」東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集

宗臺富貴子・宗臺秀明他　1998b「釜利谷やぐら群」「中世石窟遺構の調査Ⅱ－鎌倉・六浦所在のやぐら群－」東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集

佐野大和　1968『瀬戸神社』

佐野大和　1986「六浦・平潟湾の歴史の景観ー六浦港と瀬戸神社を中心にー」『歴史手帳』1986-14巻３号

上行寺東遺跡を考える会　1985「中世の六浦と上行寺東遺跡」

杉田信弘　1987「泥牛庵塩やぐら群」神奈川県立埋蔵文化財センター・神奈川県土木部横浜治水事務所

竹内理三編　1991『角川日本地名大辞典』14 神奈川県　角川書店

武部喜充・近江屋成陽他　1987「釜利谷やぐら遺跡」釜利谷やぐら遺跡調査団

田代郁夫　1986「中世墓地型墓(やぐら)の考察ー所謂「百八やぐら」の群分けー」『湘南考古学同好会々報』24　湘南考古学同好会

田代郁夫　1987「金下山西やぐら発掘調査報告書」二階堂会下やぐら群発掘調査団

田代郁夫・玉林美男・大三輪龍彦　1986『高徳院周辺遺跡(やぐら)発掘調査報告書』高徳院周辺遺跡(やぐら)発掘調査団

千々和到　1986「上行寺東遺跡と六浦」『歴史手帳』1986-14巻３号

長岡文紀　1988「泥牛庵塩やぐら群Ⅱ」神奈川県立埋蔵文化財センター・神奈川県土木部横浜治水事務所

永井正憲・馬淵和雄・田代郁夫　1985『香場ヶ谷やぐら群発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会

長谷川厚　2000「六浦三艘地区やぐら群」かながわ考古学財団調査報告99

長谷川厚・植山英史　2000「瀬戸町やぐら群・横穴墓」かながわ考古学財団調査報告86

長谷川厚・小川岳人　1999「釜利谷東６丁目西地区やぐら群・谷津町北地区横穴墓」かながわ考古学財団調査報告63

藤本正行　1986「上行寺東遺跡のやぐらと建物址」『歴史手帳』1986-14巻３号

前田光重　1986「中世六浦の古道ー試論ー」『三浦古文化』40 中世の六浦特集　三浦古文化研究会

三浦古文化研究会　1984『三浦古文化』35 瀬戸神社特集　三浦古文化研究会

宮坂淳一・鈴木崩一郎　2001「上行寺裏遺跡(瀬戸21番地やぐら群)」かながわ考古学財団調査報告124

山本厚夫・中田　美　1983「横浜市中区本牧荒井地区発見の中世墓地調査報告」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』25

近世民家の集成（1）

近世プロジェクトチーム

はじめに

当プロジェクトチームでは、1993年の結成以来、考古学の本道ともいえる住まいの研究をテーマとすることが常に話題に上ったが、資料的に制約もあり、これまで時期尚早として見送ってきたところである。しかしながら、一昨年の県内近世遺跡の再集成により、資料的に十分とはいえないものの、近年、数多くの報告のなされていることが明らかになり、ここで集成しておくことも意義のあることと考え、ここに長期的な展望の上に立って実行することとした。

県下における近世の建築遺構としては、城郭・陣屋・軍事施設・寺院・神社・武家屋敷・町屋・民家などがあげられるが、これらの中で圧倒的多数を占めるのは、いうまでもなく一般農民層の住まいである民家である。近世民家については、これまで建築史学に負うところが大で、近世民家＝石場建て（礎石建ち）と考える向きがあったが、考古学的な発掘調査により、近世民家＝掘立柱建物址であることはすでに常識となっている。したがって、今回の集成も掘立柱建物址が中心となるが、掘立柱建物址から石場建てへの転換も踏まえ、それらについても集成する予定である。また民家といえば、母屋だけが想起されるが、屋敷を構成する建物としては、それ以外に納屋（物置）や厩、肥料小屋（灰屋）・厠などの付属建物があり、これらについても併せて集成する。というのも、将来的には屋敷址としての分析を視点においているからであるが、現段階では、建物の規模だけで母屋なのか付属建物か判断しかねるものが多く存するからでもある。

集成に当たっては、『かながわの考古学』第５集および同書「研究紀要７」の検出遺構欄にある建築遺構を当たることとし、今回は横浜市・川崎市・横須賀市・平塚市・鎌倉市の５市を対象とした。これらのうち、平塚市原口遺跡のように近世の屋敷址の報告がなされているものの、個々の建物の全容が不明なため、集成の対象から除外したものもある。また報告書によっては、建物の復元図が示されず、規模の不明なものが多くみられたが、これらについては、プロジェクト構成メンバーによる検討により、復元案を提示することとした。さらに、各報告書の復元案を尊重しつつも、メンバーにより別案が想定されたものについては、それを掲載したものもある。もっとも、近世民家の研究の根底に潜む限界は、建築学に門外漢の我々が地下の痕跡から上屋を推定復元するという無謀な挑戦から始まっているわけで、この集成を通して、建物復元基準を明確化することも使命としておきたい。

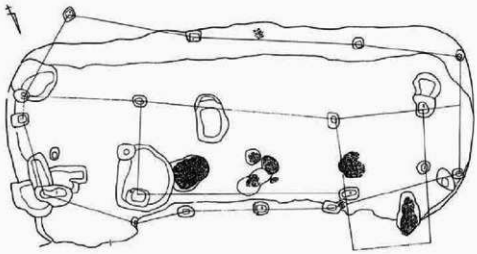
凡　例

・建物の縮尺は原則として1/100とし、スケールを省略したが、規模の大きいものについてはシートに収まるよう、適宜縮尺を変え、図面ごとにスケールを提示した。

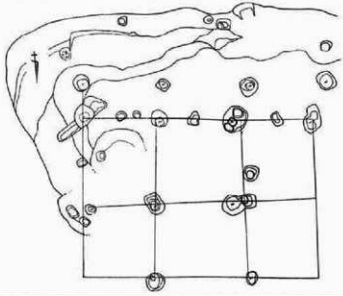
・梁間、桁行の間数は単に柱穴間の数ではなく、柱間距離から概略割り出した１間の梁間及び桁行寸法で換算した数値を示している。坪数は梁間×桁行の面積を、現行の一坪3.3㎡で除したものである。

・建物の機能・構築時期については、報告書の記載に準じているが、母屋と付属建物の別が明確なもの、出土遺物から時期が推定できるものについては記載した。

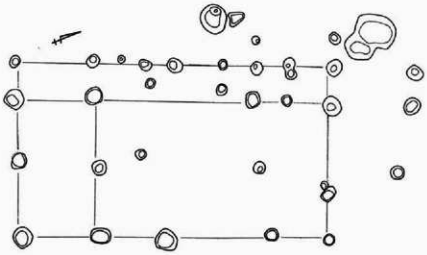
資料No.	1	遺跡名	東耕地遺跡							所在地	横浜市緑区東本郷町		
遺構名		近世建築遺構上面		構築場所	神社跡前面の緩斜面								
規模		桁間	m	桁行	m	×	間	面積	m^2	坪数	坪		
柱穴の形状		方形・不整形	柱間距離	桁	m	梁	m	主軸方位	N−25°−W				
出土遺物		土器・陶磁器・鉄釘・煙管・銭貨・火打石		付属施設	炉址4・土坑2								
建物の機能		神社創建に関わる工房か		構築時期	宝永火山灰降下以前								
備考		隅円長方形の竪穴内に構築											



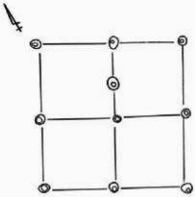
資料No.	2	遺跡名	東耕地遺跡							所在地	横浜市緑区東本郷町		
遺構名		近世建築遺構上面		構築場所	段切り造成面								
規模		桁間	4.2 m	桁行	6.2 m	2 × 3	間	面積	26.0 m^2	坪数	7.9 坪		
柱穴の形状		方形・不整形	柱間距離	梁	2.1 m	桁	2.0~2.5 m	主軸方位	N−60°−W				
出土遺物				付属施設	雨垂に瓮								
建物の機能				構築時期	16世紀か								
備考		資料No.1の下面で検出されており、何らかの関係があると推定。											



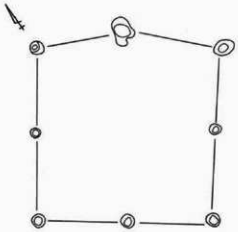
資料No.	3	遺跡名	熊ヶ谷遺跡					所在地	横浜市青葉区奈良町		
遺構名		掘立柱建物址		構築場所	尾根斜面部を段切り造成						
規模	梁間	3.7 m	桁行	8.4 m	2 × 4 間		面積	31.1 m^2	坪数	9.4 坪	
柱穴の形状	円形・楕円形	柱間距離	梁	1.6~2.0 m	桁	2.1~2.2 m	主軸方位	N−30°−E			
出土遺物				付属施設	西面に庇						
建物の機能	母屋			構築時期							
備考	報告では2.5×5間(4.7×10.6m)。										



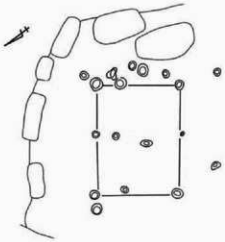
資料No.	4	遺跡名	受地だいやま遺跡					所在地	横浜市青葉区奈良町		
遺構名		第25号掘立柱建物址		構築場所	台地縁辺部緩斜面						
規模	梁間	3.85 m	桁行	3.85 m	2 × 2 間		面積	14.8 m^2	坪数	4.5 坪	
柱穴の形状	楕円形	柱間距離	梁	1.8~2.0 m	桁	1.9~2.1 m	主軸方位	N−60°−W			
出土遺物	志野丸皿			付属施設							
建物の機能	納屋的な倉庫施設もしくは堂舎			構築時期	17世紀前半						
備考	総柱式建物。資料No.5と一対で機能。										



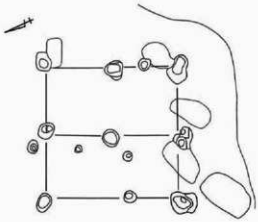
資料No.	5	遺跡名	受地だいやま遺跡					所在地	横浜市青葉区奈良町		
遺構名	第26号掘立柱建物址	構築場所	台地縁辺部緩斜面								
規模	梁間	4.55 m	桁行	4.8 m	2 × 2 間		面積	21.8 ㎡	坪数	6.6 坪	
柱穴の形状	楕円形	柱間距離	梁	2.1~2.4 m	桁	2.2~2.6 m	主軸方位	N−60°−W			
出土遺物				付属施設							
建物の機能	母屋もしくは厩裏			構築時期	17世紀前半						
備考	資料No4と一対で機能。										



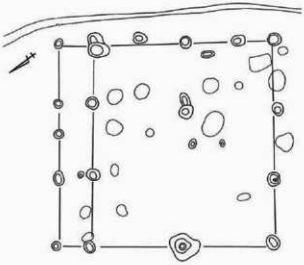
資料No.	6	遺跡名	長津田遺跡群宮之前南遺跡					所在地	横浜市緑区長津田町		
遺構名	1号段切 掘立柱建物K1	構築場所	南北に走るやせ尾根の西斜面を段切り造成								
規模	梁間	2.2 m	桁行	2.7 m	1 × 2 間		面積	5.9 ㎡	坪数	1.8 坪	
柱穴の形状	円形・楕円形	柱間距離	梁	2.2 m	桁	1.3~1.6 m	主軸方位	N−53°−W			
出土遺物	段切りより陶磁器碗・皿・仏飯碗			付属施設							
建物の機能	付属建物			構築時期							
備考	報告では1×2間(1.5×2.7m)北面に庇としている。										



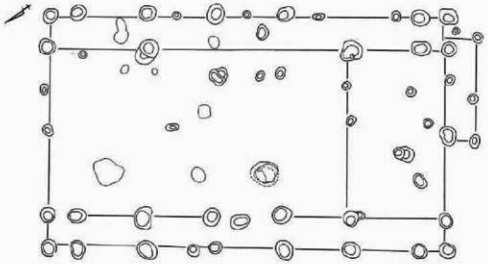
資料No.	7	遺跡名	長津田遺跡群宮之前南遺跡			所在地	横浜市緑区長津田町		
遺構名	1号段切　掘立柱建物K 2			構築場所	資料No.6に同じ				
規模	梁間	3.6 m	桁行	3.7 m	2 × 2 間	面積	13.3 m²	坪数	4.0 坪
柱穴の形状	円形・楕円形	柱間距離	梁	1.8 m	桁	1.6～2.1 m	主軸方位	N−71°−W	
出土遺物	資料No.6に同じ				付属施設				
建物の機能	付属建物				構築時期				
備考	総柱式建物。								



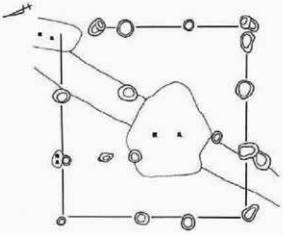
資料No.	8	遺跡名	長津田遺跡群宮之前南遺跡			所在地	横浜市緑区長津田町		
遺構名	1号段切　掘立柱建物K 3			構築場所	資料No.6に同じ				
規模	梁間	4.8 m	桁行	5.1 m	2 × 3 間	面積	24.5 m²	坪数	7.4 坪
柱穴の形状	円形・楕円形	柱間距離	梁	2.4 m	桁	1.7～1.9 m	主軸方位	N−53°−W	
出土遺物	資料No.6に同じ				付属施設	北面に庇			
建物の機能					構築時期				
備考									



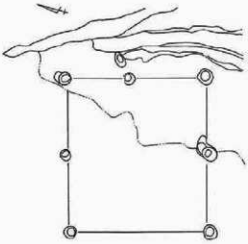
資料No.	9	遺跡名	長津田遺跡群宮之前南遺跡			所在地	横浜市緑区長津田町		
遺構名	1号段切　掘立柱建物K4		構築場所	資料No.6に同じ					
規模	桁間	4.5 m	桁行	10.7 m	2 × 5 間	面積	48.2 ㎡	坪数	14.6 坪
柱穴の形状	楕円形	柱間距離	梁	2.2~2.3 m	桁	1.8~2.5 m	主軸方位	N−31°−E	
出土遺物	資料No.5に同じ			付属施設					
建物の機能	母屋			構築時期					
備考	報告では5×7間(6.0×10.4m)の総柱としている。								



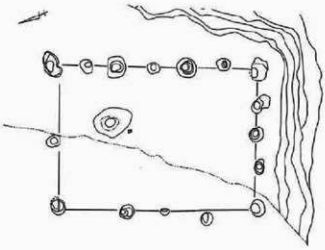
資料No.	10	遺跡名	長津田遺跡群宮之前南遺跡			所在地	横浜市緑区長津田町		
遺構名	1号段切　掘立柱建物K5		構築場所	資料No.6に同じ					
規模	桁間	5.0 m	桁行	5.0 m	3 × 3 間	面積	25.0 ㎡	坪数	7.6 坪
柱穴の形状	円形・楕円形	柱間距離	梁	1.5~2.2 m	桁	1.6 m	主軸方位	N−74°−W	
出土遺物	資料No.6に同じ			付属施設	北面に既				
建物の機能	付属建物			構築時期					
備考	報告では総柱とある。 建物内の柱配置から2×3間が本体で北側に1間の庇が附いたものとも考えられる。								



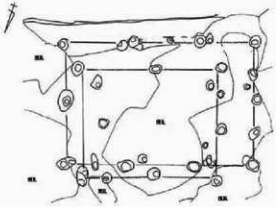
資料No	11	遺跡名	長津田遺跡群宮之前南遺跡			所在地	横浜市緑区長津田町		
遺構名	2号段切　掘立柱建物K６			構築場所	1号段切りの南に位置する高所の段切り造成面				
規模	梁間	3.7 m	桁行	4.1 m	2 × 2 間	面積	15.2 m²	坪数	4.6 坪
柱穴の形状	円形・楕円形	柱間距離	梁	1.7~2.0 m	桁	2.0~2.1 m	主軸方位	N−72°−E	
出土遺物	段切りより染付碗・陶器鉢・片口・砥石			付属施設					
建物の機能	付属建物			構築時期	宝永火山灰降下前後				
備考									



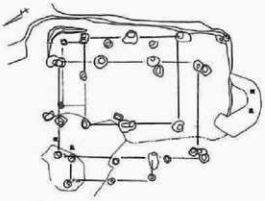
資料No	12	遺跡名	長津田遺跡群宮之前南遺跡			所在地	横浜市緑区長津田町		
遺構名	2号段切　掘立柱建物址K９			構築場所	資料No11に同じ				
規模	梁間	3.6 m	桁行	5.5 m	2 × 3 間	面積	19.8 m²	坪数	6 坪
柱穴の形状	円形・楕円形	柱間距離	梁	1.6-2.0 m	桁	1.8~2.0 m	主軸方位	N−23°−E	
出土遺物	資料No11に同じ			付属施設	北寄りに炉				
建物の機能	母屋			構築時期	宝永火山灰降下前後				
備考	報告では間柱も数えて４×６間としている。								



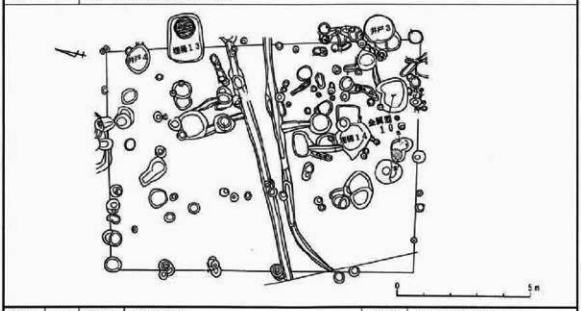
資料No.	13	遺跡名	長津田遺跡群宮之前南遺跡					所在地	横浜市緑区長津田町				
遺構名		3号段切　掘立柱建物址K10			構築場所	西向き緩斜面を段切り造成							
規模		桁間	3.2 m	桁行	5.1 m	2 × 3 間		面積	16.3 m^2	坪数	4.9 坪		
柱穴の形状		円形・楕円形	柱間距離	桁	1.6 m	梁	1.5~1.9 m		主軸方位	N−68°−E			
出土遺物		段切りから長石軸皿・砥石				付属施設							
建物の機能		K11との関係から母屋か				構築時期							
備考		報告では4×4間もしくは4×5間(3.2×5.1m)。2×2間からの建替えとみられる。											



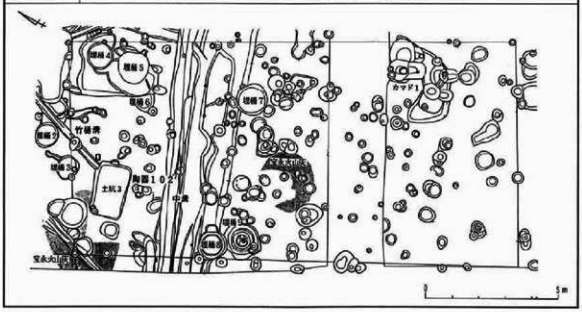
資料No.	14	遺跡名	長津田遺跡群宮之前南遺跡					所在地	横浜市緑区長津田町				
遺構名		3号段切　掘立柱建物址K11			構築場所	資料No.13に同じ							
規模		梁間	2.4 m	桁行	3.8 m	1 × 1.5 間		面積	9.1 m^2	坪数	2.8 坪		
柱穴の形状		円形・楕円形	柱間距離	梁	2.4 m	桁	2.5 m		主軸方位	N−32°−E			
出土遺物		資料No.13に同じ				付属施設	西面2間に庇						
建物の機能		付属建物				構築時期							
備考		1×1間(2.3×2.6m)北面に庇の建物の建替えと判断。											



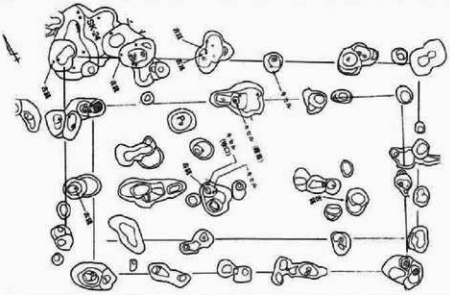
資料No.	15	遺跡名	西ノ谷遺跡			所在地	横浜市港北区南山田町		
遺構名	建物址1			構築場所	西向きの谷戸斜面を大規模に段切り造成				
規模	梁間	8 m	桁行	11.5 m	4 × 5 間	面積	92.0 m^2	坪数	27.9 坪
柱穴の形状	円形	柱間距離	梁	2.0～2.4 m	桁	2.0～2.3 m	主軸方位	N−10°−W	
出土遺物	陶磁器			付属施設	南寄りに焼土				
建物の機能	母屋(名主)			構築時期	17世紀中葉～後葉				
備考	報告では5×5間としている。								



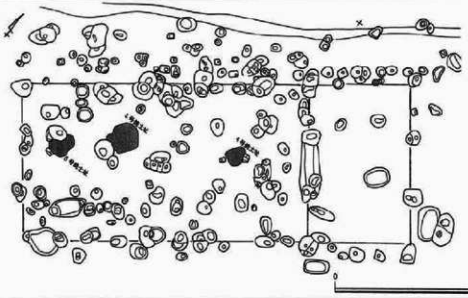
資料No.	16	遺跡名	西ノ谷遺跡			所在地	横浜市港北区南山田町		
遺構名	建物址2			構築場所	資料No15に同じ				
規模	梁間	8 m	桁行	16.5 m	4 × 7 間	面積	132 m^2	坪数	40 坪
柱穴の形状	円形	柱間距離	梁	2.1～2.4 m	桁	2.1 m	主軸方位	N−25°−W	
出土遺物	陶磁器			付属施設					
建物の機能	母屋			構築時期	18世紀前葉～後葉				
備考	報告では建物1を新築したもの。18世紀末からは礎石建物に転換(規模は不明)。								



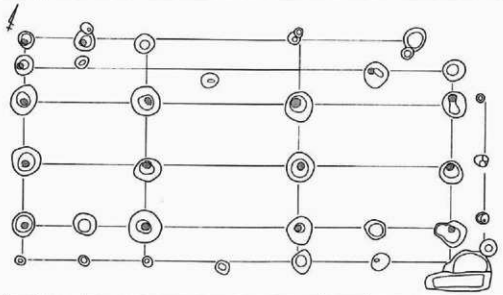
資料No.	17	遺跡名	市ノ沢団地遺跡							所在地	横浜市旭区市沢町		
遺構名		第1号掘立柱建物址				構築場所	西側斜面地を段切り造成						
規模		梁間	4.8 m	桁行	9.5 m		2 × 5 間		面積	44.7 ㎡	坪数	13.5 坪	
柱穴の形状		円形・楕円形		柱間距離	梁	2.4 m		桁	1.8~2.0 m		主軸方位	N−61°−W	
出土遺物		磁器椀・煙管・寛永通宝・箸・瓦石					付属施設						
建物の機能		母屋					構築時期		17世紀後半~18世紀				
備考		2×4間(4.5×8.5m)の建替えか。											



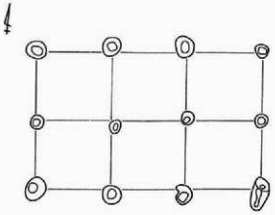
資料No.	18	遺跡名	白幡浦島丘遺跡							所在地	横浜市神奈川区白幡南町		
遺構名		2号ピット群内				構築場所	段切り造成面						
規模		梁間	5.4 m	桁行	10.8 m		3 × 7 間		面積	58.3 ㎡	坪数	17.7 坪	
柱穴の形状		円形・楕円形		柱間距離	梁	1.8 m		桁	1.7~1.9 m		主軸方位	N−55°−E	
出土遺物							付属施設		焼土址3				
建物の機能		母屋					構築時期						
備考													



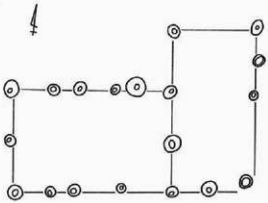
資料No.	19	遺跡名	黒川地区遺跡群宮添遺跡					所在地	川崎市麻生区黒川		
遺構名	1号建物址			構築場所	段切り造成された整地面						
規模	梁間	3.6 m	桁行	12.6 m	2 × 6 間		面積	45.4 m²	坪数	13.7 坪	
柱穴の形状	円形・不整形	柱間距離	梁	1.8 m	桁	1.8~2.25 m		主軸方位	N−81°−E		
出土遺物				付属施設	上屋の東・南・北面の半間外側に庇						
建物の機能	母屋			構築時期	18世紀頃						
備考	整地面は段切りと溝で区画されている。資料№20・21は関連する一群の建物址と考えられる。										



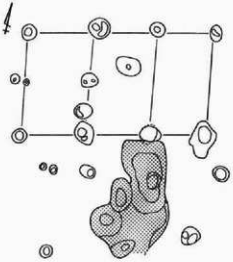
資料No.	20	遺跡名	黒川地区遺跡群宮添遺跡					所在地	川崎市麻生区黒川		
遺構名	2号建物址			構築場所	段切り造成された整地面						
規模	梁間	3.6 m	桁行	6 m	2 × 3 間		面積	21.6 m²	坪数	6.5 坪	
柱穴の形状	円形・不整形	柱間距離	梁	1.8 m	桁	2.0 m		主軸方位	N−81°−E		
出土遺物				付属施設							
建物の機能	納屋等の付属施設			構築時期	18世紀頃						
備考	資料№19・21は関連する同一の建物址と考えられる。資料№21と重複。										



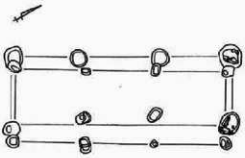
資料No.	21	遺跡名	黒川地区遺跡群宮添遺跡					所在地	川崎市麻生区黒川		
遺構名	3号建物址			構築場所	段切り造成された整地面						
規模	梁間	4.3 m	桁行	6.4 m	3 × 5 間	面積	20.8 ㎡	坪数	6.3 坪		
柱穴の形状	円形・不整形	柱間距離	梁	1.3～1.6 m	桁	1.0～1.6 m	主軸方位	N−81°−E			
出土遺物				付属施設							
建物の機能	納屋等の付属施設			構築時期	18世紀頃						
備考	資料№19・20は関連する同一の建物址と考えられる。資料№20と重複。										



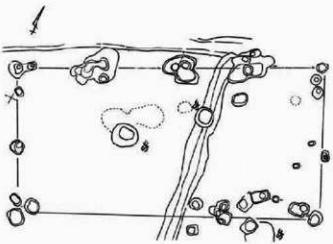
資料No.	22	遺跡名	黒川地区遺跡群宮添遺跡					所在地	川崎市麻生区黒川		
遺構名	4号建物址			構築場所	段切り造成された整地面						
規模	梁間	2.7 m	桁行	4.9 m	2 × 3 間	面積	13.2 ㎡	坪数	4.0 坪		
柱穴の形状	円形・不整形	柱間距離	梁	1.3～1.4 m	桁	1.5～1.7 m	主軸方位	N−85°−E			
出土遺物				付属施設	南側に竈						
建物の機能	作業小屋等の付属施設			構築時期	18世紀頃						
備考	整地面は段切りと溝で区画されている。約9m北側に資料№19～21が存在。										



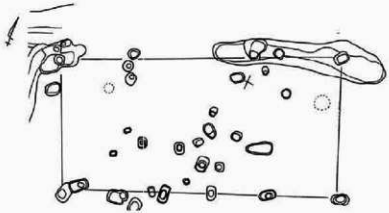
資料No.	23	遺跡名	黒川地区遺跡群No.10遺跡					所在地	川崎市麻生区黒川		
遺構名	1号建物址			構築場所	緩斜面を削平して造り出した平坦面						
規模	梁間	1.8 m	桁行	5.9 m	1 × 3 間	面積	10.6 ㎡	坪数	3.2 坪		
柱穴の形状	円形・不整形	柱間距離	梁	1.8～2.2 m	桁	1.8 m	主軸方位	N−18°−E			
出土遺物	（建物周辺から）陶磁器・砥石・角釘			付属施設	東側に直列する2穴の柱穴列						
建物の機能				構築時期	江戸時代後期～幕末						
備考	1回の建替えが行われている。										



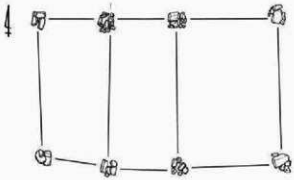
資料No.	24	遺跡名	芝下遺跡					所在地	横須賀市太田和		
遺構名	SB01A			構築場所	丘陵南斜面を段切り造成						
規模	梁間	4.0 m	桁行	8.2 m	2 × 4 間	面積	32.8 ㎡	坪数	9.9 坪		
柱穴の形状	円形	柱間距離	梁	2.0 m	桁	2.0 m	主軸方位	N−64°−E			
出土遺物	志野丸皿・灯明皿			付属施設	中央部に焼土址2						
建物の機能	母屋			構築時期							
備考	報告では3～4回程度の建替えを想定。資料No.25より新しい。										



資料No.	25	遺跡名	芝下遺跡									所在地	横須賀市太田和		
遺構名	SB01B					構築場所	資料№24に同じ								
規模	梁間	3.7	m	桁行	7.5	m	2	×	4	間	面積	27.8	㎡	坪数	8.4 坪
柱穴の形状	長方形			柱間距離	梁	1.85	m	桁	1.6~1.9	m	主軸方位	N−65°−E			
出土遺物	肥前磁器碗・瀬戸擂鉢						付属施設	東端と西寄りに焼土址							
建物の機能	母屋						構築時期								
備考	資料№24より古い。														



資料No.	26	遺跡名	米町遺跡　大町二丁目391-1									所在地	鎌倉市大町		
遺構名	建物基礎群					構築場所	沖積地								
規模	梁間	3.6	m	桁行	6.3	m	2	×	3.5	間	面積	22.7	㎡	坪数	7 坪
柱穴の形状	約50cmの正方形			柱間距離	梁	1.8	m	桁	1.8	m	主軸方位	N−80°−E			
出土遺物							付属施設								
建物の機能							構築時期								
備考	確認面より近世と判断されている。														



神奈川県内における古墳出土鉄製品の形態的検討

－大刀・鉄鏃について－

柏木善治

1．はじめに

鉄製品は銹の影響から、肉眼観察では細部にいたる形態まで把握することが困難であり、それらを出土する古墳の年代は、土器や玄室の年代観に頼らざるを得ないものが多い。把頭や足金具、鎺身（完形）などの優品以外に、断片的な資料まで年代の検討対象となれば、地域における古墳時代研究の進展に繋がることが考えられる。

ここでの分析資料は、神奈川県下の古墳時代後期における古墳（横穴墓含む）玄室から比較的多く出土する大刀・小刀などの刀類と鉄鏃を採りあげた。残存状況の良好な資料をＸ線透過することで、特に切先（鉄鏃では鏃身部）や関、茎（第３図）の形状を探る。それらを基本に細部形態のセット関係を見出し、先学の鉄製品による編年及び土器・玄室の年代観と対比させ、神奈川における大刀を中心とした鉄製品の編年私案を作成し、そこからみた地域差、歴史的背景の把握までを考慮した。

また、Ｘ線透過の副産物として多数の象嵌資料が新たに発見された（第６表）。他県では直刀に関する象嵌資料の発見及び研究が進展しているが、神奈川県ではその数、記録からも遅れているのが現状であり、結果的に新発見が多いこととなった。

本研究は、平成14年度財団法人かながわ考古学財団研究助成制度にともなう研究である。

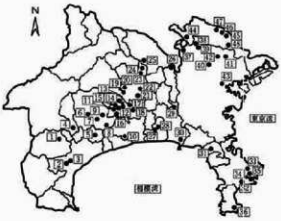
2．Ｘ線透過撮影

・Ｘ線透過撮影は鶴見大学・横浜市立歴史博物館で行い、以下の機器を使用した。

鶴見大学	Ｘ線透視検査装置	FI-355	SHIMADZE
	モニター	Video Moniter WV-BM1400	Panasonic
	プリンター	VIDEO COPY PROCESSOR SCT-P65	MITSUBISHI
横浜市立博物館	Ｘ線透過装置	M-150WM	SOFTEX
	Ｘ線フィルム	Industrial X-RAYFILM IX50	FUJIFILM
	自動現像器	RH-9001	㈱ニックス
	濃縮現像液	MX-D	㈱ニックス
	濃縮定着液	MX-F	㈱ニックス

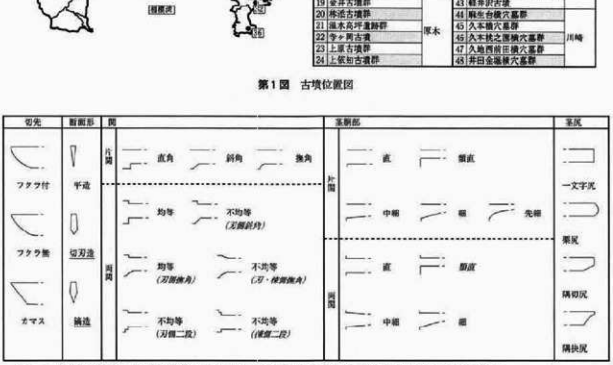
・鶴見大学でのＸ線透過は、モニター観察後にプリンター打ち出し（感熱紙）という撮影方法をとるため、打ち出された撮影画像をポジフィルムで複写し、長期保存を考慮した。

・Ｘ線透過撮影は鶴見大学では永田勝久氏・福田　誠氏・山田真穂氏の、横浜市立博物館では小倉淳一氏の指導・協力のもと、柏木が行った。



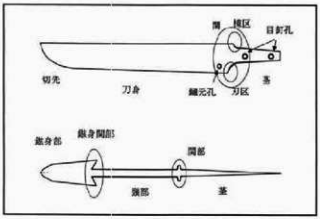
1	屋田古墳群	南足柄	25	砂堀山墳墓	相模原
2	金井久墓古墳	小田原	26	浅間神社前側穴墓群	大和
3	入野諏訪の原古墳群		27	香川後谷横穴墓群	茅ヶ崎
4	鹿沢・河南沢横穴墓群	松田	28	香川後山横穴墓群	
5	比奈窪横穴墓群	中井	29	代官山横穴墓群	藤沢
6	桜土手古墳群	秦野	30	大源太古墳	茅ヶ崎
7	稲荷塚古墳群		31	久木5丁目横穴墓群	
8	広畑古墳群		32	長沢1号墳	
9	金目原古墳群		33	大堀古墳群	横須賀
10	万田雅ノ台横穴墓群	平塚	34	台ノ坂古墳	
11	学馬山古墳	伊勢原	35	古井城山横穴墓群	三浦
12	原面古墳		36	江奈横穴墓群	
13	御領原古墳群		37	堀ヶ谷横穴墓群	横浜
14	日向・渋田古墳群		38	市ヶ尾第二地区18号区	
15	三ノ宮・下尾崎横穴墓群		39	市ヶ尾横穴墓群	
16	笠窪・谷戸遺跡		40	殿宮台横穴墓	
17	高森・赤坂遺跡		41	横島古墳	
18	上粕屋古墳群		42	鉄谷田町西ノ家横穴墓群	
19	金井古墳群	厚木	43	鶴金沢古墳	
20	林添古墳群		44	鶴生台横穴墓群	川崎
21	福水谷坪遺跡群		45	久本横穴墓群	
22	寺ヶ岡古墳		46	久本姥之原横穴墓群	
23	上原古墳群		47	久地西谷田遺穴墓群	
24	上依知古墳群		48	井田金塚横穴墓群	

第1図　古墳位置図



名強　＝　日枠氏の分類（4～5世紀代は除く）にはあるが、分析資料にはないもの；他、日枠氏の分類には片関で五個二段あり
名弱　＝　分析資料にはあるが、日枠氏の分類（4～5世紀代に除く）にはないもの

第2図　刀類各部名称



第3図　各部名称

3．刀類と鉄鏃の撮影結果と問題点

検討の対象は、県内において横穴式石室や横穴墓の構築が始まる6世紀中頃（先行形態把握のため、それ以前となる古墳時代中期の資料も一部撮影）から、それらがおよそ終焉する7世紀末までの資料とした（第1図・第1・2表）。撮影は2002年に実施し、一部1998年の報告書作成に係る既撮データも含み、刀類70点、刀装具2点、鉄鏃193点をX線透過した。

古墳や横穴墓の各報告書では、銹に被覆された状態を図化したものが大半であるが、撮影したことによって各部の形態が判明したものが多い結果となった（第4図）。X線透過の結果を生かして図化した一例が、総世寺裏古墳上部棺床出土の大刀である（第5図）。錆により関部などの情報が不明であったが、銹化による膨れ部分と共にその形態が判明している。図の提示としても関部の形態などが分かるように、並列させるなりした図示の仕方が好ましく、さらにその拵えまで判明している大刀などは、推定も勘案した図化が必要であろう。

刀類の分類は臼杵：1984を参考としたが、ここでは後期の資料に主眼を置いたため、不均等両関では刃側斜角、刃側撫角、刃・棟側撫角、棟側二段などの形態が撮影の結果として新たに確認されている（第2図）。分析資料のなかで、断面形は分類にみられる切刃、鎬造が見られず、X線透過を行った資料はすべて平造のようであるが、銹化により不明なものも多い。また、切先の情報を得るべく撮影も行ったが、徐々に刃先へと薄くなる刀身の地金は、X線透過によっても形態としての不明瞭さを併せ持ち、とくにフクラ付・フクラ無の形態差が判明したものが少ないため、検討対象からは除外している。

鉄鏃は、各墓より遺存状態が良好と考えられる数点を抽出して撮影を行ったが、結果として鏃身部（第3図）、鏃身関部、関部の形態が明確に判明したものは少ない。表面観察によって地金の遺存状態（製作時の形態）を探ることの困難さが浮き彫りとなった。その限られた情報の中で長頸鏃をみると、柳葉形や長三角形、片刃形などで台形関が採用されることが多く、頸部断面形はほとんどが長方形である。鏃箙、端刃などは棘状関が採用されるものが多く、頸部断面形はほとんどが正方形であるという傾向が伺えた。杉山：1988では、関部の変化を6世紀後半頃と捉えているが、笠窟・谷戸遺跡H1号墳（柏木他：2000）の初葬・追葬における鉄鏃の検討では、台形関から棘状関への変化は6世紀末～7世紀初頭の年代が与えられる。しかし、H1号墳の存在する伊勢原及び秦野市域だけをみても、頸部の縦・横サイズには厳密な規格性が認められず、玄室規模との対比や群内での比較など、総体的な評価は分析資料のみでは行えなかった。

玄室に伴う刀類などの鉄製品をみていくなかで、年代的な指標を与えるにあたり宍戸：2000・2001、古墳時代プロジェクトチーム：1995～2002、浜田：1997、田尾・河合：1997などを参考にした（第3表）。これらは土器の年代を中心に考えられているが、鉄製品のみ出土した古墳などは、6世紀代や7世紀代などと広範な年代幅が与えられているものも見受けられる。そのような状況のもと、追葬などによる副葬遺物がどの段階に属するかを、報告書から解読することは困難を伴うものが多いのが実情である。

形態に年代観を付加させるにあたっては、同形態の複数の遺物から最頻値を取るべく年代を考えた（第4表）。関部などが同形態でも年代的には開きを持っているものがあり、形態と年代観を鑑みたときに検討資料で最も数量的に多くなる年代を中心時期として捉えている。この方法では今後の資料数の増加から、中心時期及びその年代幅を変更する必要性も看取される。しかし、これにより複数副葬された刀類でも凡その年代と順列を与えることができ、そこから築造時期と追葬期間などの検討が行えるようになるものと考える。

第1表　X線撮影一覧（1）

No	市町村	遺構名		遺物名	報告図	挿図番号		撮影場所
01	小田原市	久野諏訪の原古墳群	2号	大　刀	第10図	12		横浜市博
02				鉄　鏃	第13図	35·37·38·39·40·43·53·54·59·60	10点	
03		総世寺裏古墳	－	大　刀	第1図（上棺）	13		
04				大　刀	第1図（上棺）	12		
05				小　刀	第2·3図(上棺)	11		
06				鉄　鏃	第4図（上棺）	17～28	12点	
07				鉄　鏃	第6図（下棺）	8～43	36点	
08	秦野市	桜土手古墳群	24号	大　刀	第12図	1		
09				鉄　鏃	第13図	9·10	5点	
10				鉄　鏃	第14図	2·7·9	－	
11			25号	大　刀	第27図	1		
12				鉄　鏃	第28図	8·12	8点	
13				鉄　鏃	第29図	3～5·16·18·19	－	
14			38号	大　刀	第55図	1		
15				鉄　鏃	第56図	14	6点	
16				鉄　鏃	第57図	1·3·4·7·19	－	
17		金目原古墳群	3号	大　刀	概報（写真）	－		鶴見大
18	平塚市	万田熊ノ台横穴墓群	8号	大　刀	第367図	1		
19				小　刀	第367図	2		
20				刀装具	第367図	4		
21				鉄　鏃	第367図	10·12～16·20·22·28·29	10点	
22			19号	大　刀	第376図	6		
23				大　刀	第376図	7		
24				鉄　鏃	第376図	14	1点	
25	伊勢原市	登尾山古墳	－	大　刀	第7図	1		横浜市博
26		埒面古墳	－	大　刀	要旨（番号無）	－		
27		日向・渋田古墳群	1号	大　刀	第10図	1		鶴見大
28				鉄　鏃	第11図	1·3·4	3点	
29			2号	大　刀	第17図	1		
30				鉄　鏃	第18図	1·5·7	3点	
31		笠窪・谷戸遺跡	H1号墳	大　刀	第175図	1-1·1-2		横浜市博
32				大　刀	第176図	2-1		
33				大　刀	第177図	3		
34				小　刀	第178図	6-1·6-2		
35				小　刀	第178図	7		
36				小　刀	第178図	8		
37				鉄　鏃	第180·181図	12～51	40点	
38		三ノ宮・下尾崎横穴墓群	1号	鉄　鏃	第10·11図	14·18·31	3点	鶴見大
39		高森・赤坂遺跡	－	大　刀	未報告	－		横浜市博
40	厚木市	上粕古墳群	1号	大　刀	第7図	挿図右から1本目		鶴見大·横浜市博
41				大　刀	第7図	挿図右から2本目		横浜市博
42				大　刀	第7図	挿図右から3本目		鶴見大・横浜市博
43				大　刀	第7図	挿図右から4本目		
44				鉄　鏃	第7図	掲載分すべて	6点	鶴見大
45		上依知古墳群	1号	大　刀	第7図	1		
46				大　刀	第7図	2		横浜市博
47				大　刀	第7図	3		
48				大　刀	第7図	4		鶴見大
49				大　刀	第7図	7		
50				鉄　鏃	第6図	1～10·12	11点	
51				鉄　鏃	第7図	1A～13A	13点	
52		林添古墳群	1号	大　刀	第5図	挿図右から1本目		横浜市博
53				大　刀	第5図	挿図右から2本目		鶴見大・横浜市博
54				大　刀	第5図	挿図右から3本目		
55				大　刀	第5図	挿図右から4本目		
56				大　刀	第5図	挿図右から5本目		
57				鉄　鏃	第8図（下段）	挿図右から2～4本	3点	鶴見大
58		寺ヶ岡古墳	－	大　刀	第3図	3		
59		温水高坪遺跡群	第3地点古墳	大　刀	第21図(市史)	1		横浜市博
60				鉄　鏃	第274図(報)	5·7·9～11·17·25	7点	
61	大和市	浅間神社西側横穴墓群	4号	大　刀	第12図	－		
62	茅ヶ崎市	香川篠山横穴墓群	5号	大　刀	第8図	－		
63				鉄　鏃	第9図	1·2·3·4	4点	
64	藤沢市	代官山横穴墓群	6号	小　刀	第254図	10		鶴見大
65				小　刀	第254図	11-1		
66				大　刀	第254図	12-1·2·3·7		横浜市博
67				鉄　鏃	第253図	4～7·9	5点	鶴見大
68			8号	刀装具	第261図	8		横浜市博
69	横須賀市	長沢1号古墳	第1主体部	大　刀	第25図	1		
70		大塚古墳群	1号	大　刀	H601PL1	1		
71				小　刀	H601PL1	2		
72		大塚古墳群	4号	大　刀	第104図	50		
73		台ノ坂古墳	－	大　刀	第17図	－		
74		吉井城山横穴墓群	中横穴	大　刀	H721PL1	1		

第2表　X線撮影一覧（2）

No.	市町村	遺構名		遺物名		報告図	押図番号		撮影場所
75	三浦市	江奈横穴墓群	2号	大	刀	第4図	27		横浜市博
76				鉄	鏃	第5図	1・2・7	3点	
77	横浜市	市ヶ尾横穴墓群	1号	大	刀	第48図	3		
78			5号	大	刀	第48図	1		
79			18号	大	刀	第48図	4		
80				大	刀	第48図	5		
81		市ヶ尾第二地区18街区	1号	大	刀	第106図	1001・1003		
82				小	刀	第106図	1002		
83		熊ヶ谷横穴墓群	10号	大	刀	第56図	1		
84			21号	大	刀	第110図	1		
85		久地西前田横穴墓群	1次5号	大	刀	第19図	1		
86			2次2号	大	刀	第11図	3		
87				小	刀	第12図	5		
88			2次3号	大	刀	第17図	1		
89				小	刀	第17図	2		
90				小	刀	第17図	3		
91	川崎市	久本A横穴墓群	3号	大	刀	第13図	36		
92				鉄	鏃	第11図	16・17・19・20	4点	
93		久本B横穴墓群	7号	大	刀	第13図	39		
94		麻生台横穴墓群	3号	大	刀	図版120	1		
95				大	刀	図版120	2		
96		井田金堀横穴墓群	7号	大	刀	第3図	3		

既撮X線フィルム観察

a	松田町	河南沢横穴墓群	1号	大	刀	第41図	1	
b		唐沢横穴墓群	8号	大	刀	第23図	25	
c				小	刀	第23図	24	
d	小田原市	久野諏訪の原古墳群	2号	大	刀	第10図	1	
e	中井町	比奈窪横穴墓群	15号	大	刀	第68図	2	
f	伊勢原市	三ノ宮・下尾崎遺跡	1号	大	刀	第9図	4	
g				小	刀	第9図	5	
h	逗子市	久木5丁目横穴墓群	－	大	刀	未報告	－	
i	横浜市	新宮台横穴墓	－	大	刀	第9図	3	
j	川崎市	久本A横穴墓群	3号	大	刀	第13図	35	

1998年度撮影	大・小刀	9点
	鉄鏃	88点
2002年度撮影	大・小刀	61点（＋2刀装具）
	鉄鏃	105点
撮影総計	大・小刀	70点
	刀装具（鞘）	2点
	鉄鏃	193点

第3表　各墓の年代

①：6c後半を主体とするもの

	所在	遺跡名	号
1	秦野	桜土手古墳群	38
2	秦野	広畑古墳群	1
3	平塚	万田熊ノ台横穴墓群	19
4	伊勢原	北高森古墳群	3
5	厚木	林添古墳群	1
6	厚木	上原古墳群	1
7	横須賀	大塚古墳群	1
8	川崎	久地西前田横穴墓群２次	2
9	川崎	久本横穴墓群A　※	3
10	川崎	久本横穴墓群B	7
11	川崎	井田金堀横穴墓群	7

②：6c末～7c初頭を主体とするもの

	所在	遺跡名	号
1	中井	比奈窪中屋敷横穴墓群	15
2	伊勢原	登尾山古墳	－
3	伊勢原	坪面古墳	－
4	伊勢原	笠窪谷戸遺跡	1
5	相模原	谷原古墳群	1
6	横須賀	大塚古墳群	4
7	三浦	江奈横穴墓群	2
8	横浜	軽井沢古墳	－
9	横浜	市ヶ尾横穴墓群A	18
10	横浜	市ヶ尾第二地区18街区	1

③：7c前半を主体とするもの

	所在	遺跡名	号
1	小田原	松田寺裏古墳	－
2	秦野	桜土手古墳群	24
3	秦野	稲荷塚古墳	－
4	厚木	上依知古墳群	1
5	藤沢	代官山遺跡	6
6	横浜	熊ヶ谷横穴墓群	21
7	横浜	市ヶ尾横穴墓群A	1
8	横浜	新吉田町四ツ家横穴墓群	3
9	横浜	新宮台横穴墓	－
10	川崎	久本桃之園横穴墓群	5

④：7c中頃を主体とするもの

	所在	遺跡名	号
1	秦野	桜土手古墳群	11
2	秦野	桜土手古墳群	13
3	秦野	桜土手古墳群	25
4	平塚	万田熊ノ台横穴墓群	8
5	伊勢原	高森・赤坂遺跡	?
6	大和	浅間神社西側横穴墓群	4
7	横浜	熊ヶ谷横穴墓群	10
8	横浜	市ヶ尾横穴墓群A	5

⑤：7c後半を主体とするもの

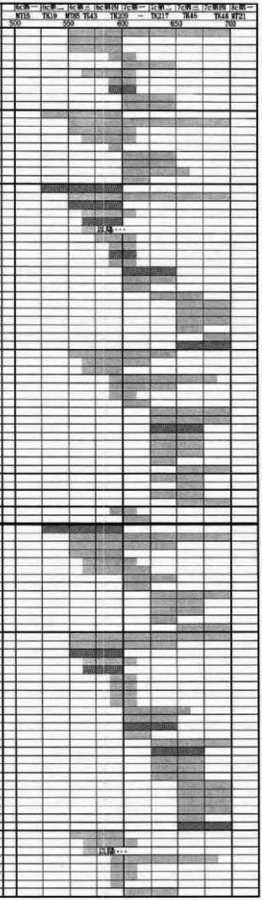
	所在	遺跡名	号
1	小田原	久野諏訪の原古墳群	2
2	松田	唐沢横穴墓群	8
3	松田	河南沢横穴墓群	1
4	伊勢原	日向・浜田遺跡	1
5	伊勢原	日向・浜田遺跡	2
6	伊勢原	三ノ宮・下尾崎遺跡	1
7	川崎	久地西前田横穴墓群１次	5

※年代観は報告書や古墳時代研究プロジェクトチーム（1995～2002）、田尾・河合（1997）、浜田（1997）、宍戸（2000・2001）を参考にした
※久本Ａ３は象嵌大刀の年代ではない
※土器による年代観では遺跡による最終理解を表しているものも多い

第4表 関・茎形態の年代（1）

形態	名称	遺跡名	号	所在
	直角片関	林添古墳群	1	厚木市
		大塚古墳群	1	横須賀市
		広畑古墳群	1	秦野市
		大塚古墳群	4	横須賀市
		[illegible]古墳	–	秦野市
	斜角片関	上[illegible]古墳群	1	厚木市
		笠窪・谷戸遺跡	1	伊勢原市
		笠窪・谷戸遺跡	1	伊勢原市
		[illegible]古墳	–	秦野市
		新吉田町四ツ家横穴墓群	3	横浜市
	撫角片関	北高森古墳群	3	伊勢原市
		林添古墳群	1	厚木市
		桜土手古墳群	38	秦野市
		上[illegible]古墳群	1	厚木市
		軽井沢古墳	–	横浜市
		桜土手古墳群	24	秦野市
		熊ケ谷横穴墓群	21	横浜市
		久本第2地点横穴墓群	5	川崎市
		上依知古墳群	1	厚木市
	均等両関	北高森古墳群	3	伊勢原市
		林添古墳群	1	厚木市
		大塚古墳群	1	横須賀市
		上[illegible]古墳群	1	厚木市
		久地西前田横穴墓群2次	2	川崎市
		久本横穴墓群A	3	川崎市
		登尾山古墳	–	伊勢原市
		埒面古墳	–	伊勢原市
		笠窪・谷戸遺跡	1	伊勢原市
		市ヶ尾第一地区18号区	1	横浜市
		代官山遺跡	6	藤沢市
		市ヶ尾横穴墓群A	1	横浜市
		新吉田横穴墓	–	横浜市
		桜土手古墳群	25	秦野市
		唐沢横穴墓群	8	松田町
		日向・渋田遺跡	2	伊勢原市
		日向・渋田遺跡	1	伊勢原市
		久野諏訪の原古墳群	2	小田原市
		河南沢横穴墓群	1	松田町
	不均等(刃側斜角)両関	三ノ宮・下尾崎遺跡	1	伊勢原市
	不均等(刃側撫角)両関	万田熊ノ台横穴墓群	19	平塚市
		久本横穴墓群B	7	川崎市
		久地西前田横穴墓群2次	2	川崎市
		谷原古墳群	1	相模原市
		[illegible]横穴墓群	2	二宮町
		市ヶ尾横穴墓群A	18	横浜市
		上依知古墳群	1	厚木市
		高森・赤坂遺跡	9	伊勢原市
		市ヶ尾横穴墓群A	5	横浜市
		総世寺裏古墳(上部墳丘)	–	小田原市
		桜土手古墳群	13	秦野市
		万田熊ノ台横穴墓群	8	平塚市
		熊ケ谷横穴墓群	10	横浜市
		浅間神社西側横穴墓群	4	大和市
		久地西前田横穴墓群1次	5	川崎市
	不均等(刃・棟側撫角)両関	総世寺裏古墳(上部墳丘)	–	小田原市
		久野諏訪の原古墳群	2	小田原市
	刃側二段両関	桜土手古墳群	11	秦野市
		三ノ宮・下尾崎遺跡	1	伊勢原市
	棟側二段両関	比奈窪中屋敷横穴墓群	15	中井町
		上依知古墳群	1	厚木市
	一文字尻	北高森古墳群	3	伊勢原市
		林添古墳群	1	厚木市
		万田熊ノ台横穴墓群	19	平塚市
		大塚古墳群	1	横須賀市
		上[illegible]古墳群	1	厚木市
		久本横穴墓群B	7	川崎市
		熊ケ谷横穴墓群	21	横浜市
		上依知古墳群	1	厚木市
		市ヶ尾横穴墓群A	5	横浜市
		桜土手古墳群	13	秦野市
		桜土手古墳群	25	秦野市
		浅間神社西側横穴墓群	4	大和市
		久地西前田横穴墓群1次	5	川崎市
	栗尻	林添古墳群	1	厚木市
		万田熊ノ台横穴墓群	19	平塚市
		大塚古墳群	1	横須賀市
		上[illegible]古墳群	1	厚木市
		久地西前田横穴墓群2次	2	川崎市
		笠窪・谷戸遺跡	1	伊勢原市
		比奈窪中屋敷横穴墓群	15	中井町
		市ヶ尾第一地区18号区	1	横浜市
		市ヶ尾横穴墓群A	18	横浜市
		久本第2地点横穴墓群	5	川崎市
		代官山遺跡	6	藤沢市
		代官山遺跡	6	藤沢市
		上依知古墳群	1	厚木市
		高森・赤坂遺跡	9	伊勢原市
		総世寺裏古墳	–	小田原市
		桜土手古墳群	11	秦野市
		熊ケ谷横穴墓群	10	横浜市
		万田熊ノ台横穴墓群	8	平塚市
		唐沢横穴墓群	8	松田町
		日向・渋田遺跡	1	伊勢原市
		日向・渋田遺跡	2	伊勢原市
		三ノ宮・下尾崎遺跡	1	伊勢原市
		久野諏訪の原古墳群	2	小田原市
	隅切尻	三ノ宮・下尾崎遺跡	1	伊勢原市
	隅抉尻	広畑古墳群	1	秦野市
		上[illegible]古墳群	1	厚木市
		久本横穴墓群A	3	川崎市
		谷原古墳群	1	相模原市
		笠窪・谷戸遺跡	1	伊勢原市
		大塚古墳群	4	横須賀市
		軽井沢古墳	–	横浜市
		桜土手古墳群	24	秦野市

凡例　大刀　小刀



期	形	形式		出典
前角式期	直		-	厚木：林遺1号墳(5-8)
	中軸	一文字民		横須：長河1号墳第1主体(26-1) 横須：大塚1号墳(3001PL1-1)
			-	愛甲：稲荷塚古墳(266-1) 伊勢：御堂原古墳群(P68)
		鞘鉄民		藤沢：大原太古墳(5) 横須：台小関古墳(17) 横須：大塚4号墳第1主体(104-50)
	矢鏃			愛甲：広畑1号墳(37-2)
前角式期	中軸		-	愛甲：稲荷塚古墳(266-2) 横浜：新吉田町四ツ家3号墓(5-1)
		一文字民		厚木：上原1号墳(7-1) 厚木：上原1号墳(7-4)
			-	川崎：丸山西前田1次4号墓(15-4)
	鏃	鞘民		伊勢：笠窪・谷戸遺跡1号墳(175-1-1-2)
			-	伊勢：笠窪・谷戸遺跡1号墳[小刀](175-8-1-2)
				愛甲：稲荷塚古墳(266-3)
角角式期	鏃		-	愛甲：桜土手33号墳(55-1)
	中軸	鞘民		厚木：上原1号墳(7-2)
				愛甲：桜土手41号墳(12-1) 横浜：横浜氏台横浜方部石室(P38-145)
		鞘民		川崎：久本挑之原5号墓(13-29)
			-	厚木：上金知1号墳(7-3) 厚木：谷ヶ国古墳(3-3) 厚木：温水高坪遺跡第3地点古墳(21-1) 厚木：林遺1号墳(5-3)
		一文字民		横浜：熊ヶ谷21号墓(116-1)
	鏃			厚木：林遺1号墳(5-1)
	直			横浜：横高古墳(10-1)
			-	伊勢：北高畑3号墳(376-14)
不知等(角角)両期	中軸	鞘鉄民		伊勢：三ノ宮・下尾崎遺跡1号墓[小刀](9-5)
分類(一段)両期	鏃	鞘民		愛甲：桜土手11号墳(59-16) 伊勢：三ノ宮・下尾崎遺跡1号墓(9-4)
相模(二段)両期	中軸	一文字民		厚木：上金知1号墳(7-2)
	鏃	鞘民		中井：北谷窟中間敷15号墓(68-2)

期	形	形式		出典
角等両期	中軸	一文字民		愛甲：桜土手25号墳(27-1) 伊勢：北高畑3号墳(小刀)(376-15) 厚木：林遺1号墳(5-2)
		鞘民	-	小田：大野御殿の原2号墳(10-12) 伊勢：金尾山古墳(7-1) 伊勢：笠窪・谷戸遺跡1号墳(小刀)(176-7) 伊勢：笠窪・谷戸遺跡1号墳(小刀)(176-8) 藤沢：代官山6号墓(小刀)(254-10) 横浜：新百台横穴墓(8-3)
			茎民	伊勢：日向・池田1号墳(10-2) 伊勢：日向・池田2号墳(7-1) 藤沢：代官山6号墓(小刀)(254-11-1) 藤沢：代官山6号墓(254-12-1) 横浜：舎弟山中横穴(3U121PL1-1) 横浜：若ヶ尾第二地区18号区1号墓(30-1001) 横浜：若ヶ尾第二地区18号区1号墓(30-1002) 川崎：久地西前田2次2号墓(4-7)[12-1] 川崎：久地西前田2次3号墓(4-7)[17-2] 川崎：久地西前田2次3号墓(4-7)[17-3] 川崎：桜生台3号墓(7L120-1)
	鏃			秦野：秦野4号墓(20-28) 厚木：金井1号墳(8-1)
	矢鏃	鞘民		厚木：上原1号墳(7-3) 厚木：林遺1号墳(3-4) 横浜：大塚1号墳(小刀)(3001PL1-2)
	直		-	伊勢：坪面古墳(Na9L) 横浜：若ヶ尾A1号墓(48-3)
			-	松田：河南沢1号墓(41-1) 川崎：久本A3号墓(13-35)
不知等(角角)両期	直	一文字民		平塚：万田熊ノ台16号墓(376-6)
	中軸	鞘民		平塚：万田熊ノ台8号墓(357-1)
				小田：経塚寺表古墳上部埋束(小刀)[1-13] 秦野：金目郡3号墳(現横) 平塚：万田熊ノ台16号墓(376-7) 平塚：万田熊ノ台8号墓(小刀)(357-2) 伊勢：高畑・赤坂遺跡(実見のみ) 厚木：上荻知1号墳(7-4) 横浜：熊ヶ谷19号墓(56-1) 川崎：久地西前田2次2号墓(11-3) 川崎：神谷金堀7号墓(3-3)
		一文字民		秦野：桜土手13号墳(13) 大和：後閑神社西4号墓(12) 横浜：若ヶ尾A5号墓(48-4) 川崎：久本B7号墓(13-10) 川崎：久地西前田1次5号墓(19-1)
		鞘鉄民		相模：砂原1号墳(7-2) 川崎：久本A3号墓(13-37)
			-	赤ヶ：香川横山5号墓(8) 厚木：上荻知1号墳(7-1) 三浦：江奈2号墓(4-27) 横浜：若ヶ尾A18号墓(48-5) 川崎：久地西前田2次3号墓(17-1)
	鏃	茎民		横浜：若ヶ尾A18号墓(48-4)
不知等(角・直式無角)両期	中軸		-	小田：経塚寺表古墳上部埋束(2-3-11) 小田：経塚寺表古墳上部埋束(1-12)
		茎民		小田：大野御殿の原2号墳(11-24)
	鏃			平ヶ：横谷横穴墓群(赤星氏発掘分)

第4図　大・小刀の関・茎形態の分類

4．刀類の各形態における特徴について

・片関から不均等両関へ（第４・６図・第３表）

片関の大刀は６世紀中頃以前からその形態が継続しており、そのうち刃区が直角、斜角、撫角となるものはいずれも６世紀後半代にはすでに存在している。それら形態が、柄の拵えなどにより区別して採用されたかは分析資料からは不明である。直角片関は６世紀後半に多く採用され、７世紀初頭までの期間で存在したと考えられ、大塚１・４号墳や、林添１号墳、広畑１号墳などでみられる。斜角片関と撫角片関は６世紀後半～７世紀前半までの時期が考えられるが、中心となる時期は６世紀後半～末であり、それぞれの形態における先後関係などは最頻値からは明確に現れていない。

臼杵：1984によると６世紀後半に片関から不均等両関への変化が推定されており、万田熊ノ台19号墓、久地西前田２次２号墓、久本Ａ３号墓、久本Ｂ７号墓などにおける不均等（刃側撫角）両関の６世紀後半からの展開は、過渡期における先駆的な存在として捉えられるであろうか。不均等（刃側撫角）両関は、その後７世紀中頃の盛期を迎えることとなり、出土したその数量も大幅に増加する。類似する形態である不均等（刃・棟側撫角）両関は、総世寺裏古墳、久野諏訪の原２号墳、篠谷横穴墓群でみられ、製作技術的に同グループとしての把握が可能であろうか。

・均等両関について

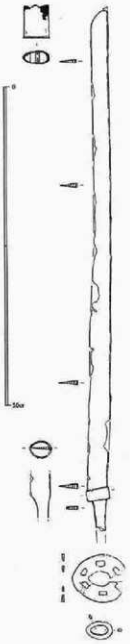
均等両関は形態の判明した大刀のなかでは、もっとも数量の多い形態である。そのうち古相を呈する林添１号墳や上原１号墳は、石室内から５～６本の大刀が出土しており、６世紀後半には存在する片関の大刀が多い。久本Ａ３号墓も、均等両関とみられる象嵌の大刀は奥壁より数えて２本目の出土であり、年代を示す土器は初葬段階のものと考えられる。それらを鑑みて均等両関の出現を考えていくと、登尾山古墳や埒面古墳などの盟主墳に副葬された装飾大刀に求められる可能性が高い。しかし、小刀で均等両関のものは、６世紀後半から一般的に見られ、その製作における技術レベルでは旧来より存在していたものとみられる。検討資料における装飾大刀で均等両関のものは、唐沢８号墓、河南沢１号墓、日向・浜田１・２号墳、吉井城山「中」横穴、市ヶ尾第二地区18街区１号墓などがあげられ、これらのなかには地域的なまとまりを考えていく上で、重要な位置を占めるものも見受けられる。

・二段両関について

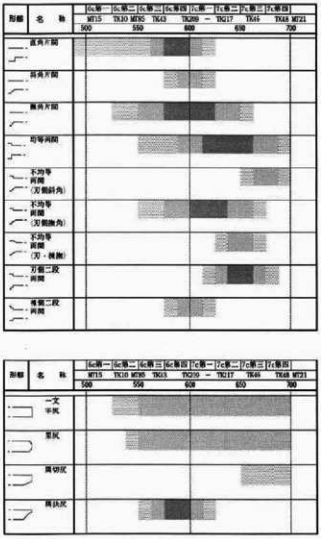
棟側二段両関は６世紀末～７世紀初頭、刃側二段両関は７世紀中頃を主体とするが、共に２例と分析例は少ない。棟側二段両関は比奈窟１号墓の円頭大刀に代表され、刃側二段両関は桜土手11号墳、三ノ宮・下尾崎１号墓で、共に径の大きな切羽が出土していることからも、袋頭（頭椎・圭頭）による拵えとも想定されるものである。

・茎尻について（第５表）

一文字尻、栗尻は後期全般に認められ、片関に一文字尻となるものは６世紀後半を主体とするものであるが、先行する長沢１号墳や綱島古墳でもみられ、大塚１号墳、林添１号墳、上原１号墳などに継続される。片関で栗尻の大刀はこれに後出するものとみられ、笠窟・谷戸１号墳、久本桃之園５号墓などがある。両関では、一文字尻が７世紀を下るものは少なく、後出するにつれ栗尻が主体となる。隅抉尻は６世紀後半～７世紀初頭を主体とする比較的時期の限定されるものであり、大塚４号墳、大譚太古墳、台の坂古墳、桜土手24号墳などから出土しており、関部は片関及び不均等（撫角）両関でしか見受けられない。



第5図　総世寺裏古墳出土大刀



第6図　関・茎形態の年代（2）

第4表　関・茎形態の対応関係

		一文字尻	栗尻	隅切尻	隅抉尻
片関	直角片関	○	○		
	斜角片関	○			○
	撫角片関	○	○		○
両関	均等両関	○	○		
	不均等(刃側斜角)両関？			○？	
	不均等(刃側撫角)両関	○	○		○
	不均等(刃・棟側撫角)両関		○		
	刃側二段両関		○		
	棟側二段両関	○	○		

5．象嵌資料について

X線透過撮影により象嵌資料が新たに多数発見され、時期的には6世紀後半～7世紀初頭に該当するものが多い。装飾大刀は足金具や鴻目など、その痕跡を拾い集めると県内では70例以上（鉄製鞘尻も含む）を挙げることができ、総数に占める割合は今後も増加することが予想される。

現在神奈川県で発見されている象嵌資料は、管見の限り13遺跡21例である（第6表）。そのうち報告書などに挿図として提示されているものは第7図に上げるにとどまり、また、X線写真のみ掲載されているものでも3遺跡3例と少ない。

ここで既報告資料は各報告書などの記載に譲り、今回発見されたものの各意匠をみていくこととする。第8図に模式図を提示したが実測図作成を意図していなかったため、このような簡略図にとどまった。いずれも肉眼による観察からは象嵌の有無が確認できなかったものであり、象嵌の素材も不明である。3は秦野市桜土手25号墳の鍔で、象嵌の遺存は不良である。意匠は三重線によるハート形文がおよそ4単位みられ、縁には二重線及び二重の半円文がある。7は三浦市江奈2号墓の柄頭・柄縁・鐔・鍔である。銹化が特に顕著で、当初形態の検討も困難なものである。柄頭は円頭で、二重円文・三本平行線による亀甲繋で、ほか旋文状の象嵌もみられるが、その意匠は判然としない。柄縁と鐔は旋文状の痕跡、鍔は縁に三重線と旋文状の痕跡がみられるがこちらも判然としない。9は横浜市市ヶ尾第二地区18街区1号墓の鍔と鞘尻である。銹化著しく、鍔は特に不明瞭であるが、縁に1本の直線と2列の対向する半円状文が施される。鞘尻には縁に半円文のほか、4単位のハート形文の内部が旋文により充填され、傍らには二重円文が4単位あしらわれる。13は川崎市久地西前田1次調査5号墓の柄縁と鐔、鍔である。銹化著しく、鐔の象嵌の遺存が特に不良であった。柄縁は縁に半円文が、鐔は不明瞭ながら耳に二重の半円文がみられる。鍔は縁に二重線と、4本の併行波状文が施される。

柄縁金具・鐔・鍔とセットで象嵌されるものが多く、桜土手25号墳、江奈2号墓、久地西前田1次調査5号墓で認められる。このことからみても鍔や鐔の単独で出土した遺存状況の悪い大刀にも、本来的には各個体に象嵌が施されていたことが推測されるものである。桜土手25号墳はハート形の意匠が主体的に用いられ、江奈2号墓では施文状の痕跡、久地西前田1次5号墓では波状文や半円文で、いずれも似通ったイメージの意匠が採用されるという傾向がある。

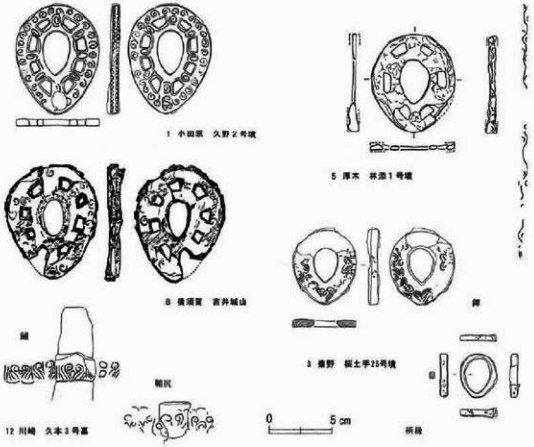
玄室内で多数の大刀が出土している久野諏訪の原2号墳や林添1号墳、市ヶ尾第二地区18街区1号墓、久本A群3号墓などでも、象嵌の施された大刀は1本のみの存在である。また、視点を広げて横穴墓群及び古墳群のなかでみても、いずれも群中から1本のみの出土となっている。

現時点での県内における分布を古代の郡域とされるエリアにあてはめていくと、足下郡（久野2号）、大住郡（三ノ宮字下尾根山）、愛甲郡（林添1号）、鎌倉郡（久木5丁目10号）、久良郡（駒岡町岩瀬）、都筑郡（市ヶ尾第二-18街1号）で各郡内に1本の象嵌大刀がみられる。余綾郡（桜土手25号・諏訪脇）、御浦郡（江奈2号・吉井城山）では郡内に2本の象嵌大刀で、橘樹郡（久地西前田1-5号・久本A3号・加瀬台4号）のみ3本の象嵌大刀がある。また、目を転じて環頭大刀をみると足上郡（塚田2号・黄金塚）、大住郡（栗原中島・御領原2号）、高座郡（川名新林右西斜面2号・本郷）で出土しており、大住郡を除いてはいずれも象嵌大刀の出土していない地域であり興味深い。大住郡は三ノ宮を中心として、いわゆる袋頭の大刀も多く出土しており、大刀及びそれ以外の遺物でも優品の出土が多い地域である。

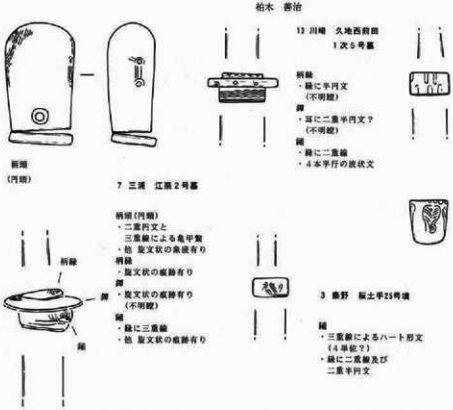
第6表　県内出土象嵌資料

No.	市町村	群名	号名	部位・代表的な文様																												他特徴
				刀		材質	文様		鉄鏃		材質	文様		鉄	鏃		材質	文様		鉄	鏃		材質	文様		鉄	鏃		材質	文様		
1	小田原	久野 諏訪の原	2 号墳			—					—			○	8	鉄	鎬文 半円文					—						—				
2	二宮	諏訪脇	—			—					—						—					—				○	鉄	鎬状文				
3	秦野	桜土手	25 号墳			—		○	鉄	半円文?	○	無	鉄	ハート形文		●	鉄	ハート形文 三重線 二重半円文				—									
4	伊勢原	三ノ宮字 下尾崎山	—			—					—			○	8	鉄	(半) 円文?					—						—				
5	厚木	林添	1 号墳			—					—			○	6	鉄	扇状文 半円文					—						—				
6	逗子	久木5丁目	19 号墳			—					—			◎	無	鉄	鎬文					—						—				
7	三浦	江奈	2 号墳	●	鉄	亀甲類 逆文状		●	鉄	短文状?	●	無	鉄	旋文状?		●	鉄	短文状 三重線				—										円頂
8	横須賀	吉井城山	? 号墳			—				—	○	8	鉄	鎬文				—				—										
9	横浜	市ヶ尾第二 地区18区	1 号墳			—				—				—						●	鉄	半円状				●	鉄	ハート形文 二重円文				柄糸巻痕跡のみ
10		鶴見区鶴岡町 谷遺	—			—				—	○	8	鉄	円文?				—				—						—				柄樹皮巻き?
11		了願寺古墳? (加曽台4号)	—	○	鉄?	亀甲類? 逆文状?				—				—				—				—						—				頭椎
12	川崎	久本A	3 号墳			—				—				—						○	鉄	鼎手状 ハート形文	○	鉄	鼎手状 ハート形文							
13		久地西前田 1次	5 号墳			—		●	鉄	半円文?	●	無	鉄	二重 半円文?		●	鉄	波状文 二重線				—										柄糸巻痕跡のみ

・後述13遺跡21例、H14(2002)年度研究対象新発見、4遺跡10例
・●＝研究助成にて新発見。◎＝逗子市久木5丁目　2002年度逗子市新発見
・斜体は東京国立博の資料、東文研X線フィルム目録より抽出
※1　鼎手文の向きに注意。袋頭であれば鼎手文が向き合うため、鼎尻の可能性高い。埼玉県熊谷市三ヶ尻林4号墳では鎬と鼎尻の植物文は同じ方向となる。



第7図　県内出土既報告象嵌資料の抜粋（番号は第6表に準ずる）



第8図　X線透過結果からの象嵌資料模式図〔番号は第6表に準ずる〕

6．地域的な特徴と副葬意義について

田尾・河合1997による集成では断片資料も含めて436振が挙げられるが、今回分析した資料数は1/4以下にとどまる。関の形態ごとで地域的な多寡は見受けられるが、分析抽出資料の偏在とも考えられる事象である。しかし、古相を呈す片関では横須賀・厚木などでその数は多く、不均等や均等の両関では伊勢原や川崎などで多い。この数は、年代ごとに各地域に展開する古墳の増減を示すものとして把握される。

そのなかで均等両関、不均等両関は県内全域に分布しており、それは6世紀末～7世紀にかけての古墳の数量的な増加に起因するものと考えられるが、形態的な特徴を抽出するなら、不均等(刃・棟側撥角)両関は、現在相模(小田原・茅ヶ崎)のみに存在するだけである。

刀類の関部が片関から両関となることと、鉄鏃が台形関から棘状関になることは、ほぼ同時代の現象として捉えられ、それは6世紀末～7世紀初頭を境として漸移的に変化するようである。

刀類の遺存状態には良し悪しがあり、それは埋没していた土壌などに左右されることが多い。しかし、馬具などを供伴する大刀は堅緻な印象を受けるものが比較的多く、それは各時代を通して共通する。しかし、年代を追うごとに脆弱なイメージを受ける大刀が増加することが看取され、その傾向は7世紀前半頃より漸次認められる。形態的には同類となるものでも、その素材や製作についても検討する必要性が考えられる。

副葬の歴史的背景を考えると、賜与方法や製作主体などの議論にまで派生せざるを得ない。象嵌大刀が6世紀後半～7世紀初頭に多くみられること、不均等や均等の両関の数が7世紀に入り大幅に増加すること、遺存良好な資料が年代を追うごとに減少するなどの現象がある。7世紀に入り更に在地の盟主は地方官人という性格を強くし、中央と地方の関係が変化したことが想定され、大刀などの武器類の製作も、それに伴い在地へと転化されていったことも、製品から感受される現象においては考えられるものである。

X線撮影作業及び協力者について

・X線透過資料は報告書及び刊行物掲載の遺物をその対象とし、抽出にあたっては県内文化財行政担当者の助言を得た。

（順不同・敬称略）

鶴見大学　永田勝久・福田　誠・山田真穂、**青山学院大学**　山口正憲、**長後高校**　今野裕幸、
小田原市　山口剛志・大島慎一・岡　潔、**秦野市**　大倉　潤・霜出俊浩、**伊勢原市**　立花　実、
厚木市　佐藤建二、**大磯町**　國見　徹・鈴木一男、**平塚市**　明石　新、**相模原市**　（故）木村　衡、
大和市　曽根博明・柏柳　豊・川俣桂子、**海老名市**　押方みはる、**茅ヶ崎市**　大村浩司・高橋　和、
逗子市　佐藤仁彦、**葉山町**　伊丹　徹、**三浦市**　須田英一、**横須賀市**　稲村　繁・岩橋英子、
横浜市　小倉淳一、**川崎市**　浜田晋介、**（財）かながわ考古学財団**　大上周三・上田　薫

本研究を遂行するにあたっては次の諸氏の協力をいただいた。（順不同・敬称略）

小川裕久・依田亮一・宍戸信悟・冨永樹之・中澤正人・市毛秀人・曽我雅弘・野坂優介

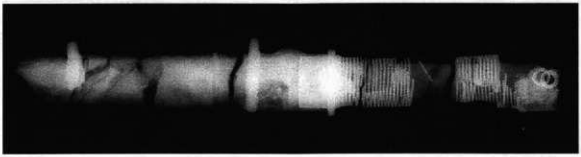
引用文献

1953　神奈川県教育委員会　『文化財調査報告』第19集
1956　古江亮仁・渡部久喜　『川崎市井田伊勢宮金堀横穴群第7号穴調査書』
1959　鎌倉市　『大澤太古墳』「鎌倉市史」資料編
1972　谷津遺跡調査団　「谷原」神奈川県相模原市谷原遺跡の調査
1973　赤星直忠　「神奈川県源頼朝横穴墓群（西半部）」「神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告」4　神奈川県教育委員会
1974　小出義治・久保哲三　「秦野下大槻」「秦野の文化財」第9・10集　秦野市教育委員会
1976　赤星直忠　「三浦市江奈横穴群」「神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書」10
1977　仲野正美　「上依知古墳群（Ⅱ・1・1号墳）」「神奈川県埋蔵文化財調査報告」12　神奈川県教育委員会
1978　曽根博明　「茂岡神社西側横穴古墳群発掘調査報告書」「大和市文化財調査報告書」第1集　大和市教育委員会
1979　神奈川県民部県史編纂室　「吉井城山横穴群」「神奈川県史」資料編20　考古資料
1980　寺田兼方・中島　登　「藤沢市川名新林横穴群調査概報」「藤沢市文化財調査報告書」第15集
1982　横浜市　「第2編 市ヶ尾古墳群の発掘」「横浜市史」資料編21
1983　富永富士雄・大村浩二　「香川篠山横穴墓調査報告」「茅ヶ崎市文化財資料集」第9集　茅ヶ崎市教育委員会
1984　寺田兼方　「藤沢市川名新林古西斜面の第2号横穴墓出土環頭大刀について」「藤沢市文化財調査報告書」第19集
1985　立正大学考古学研究室　「武蔵・熊ヶ谷横穴墓群」
1985　秦野市　「南地区の遺跡 稲荷塚古墳」「秦野市史」別巻考古編
1985　戸田哲也他　「横浜市緑区東方横穴墓群発掘調査報告書」東方横穴墓群発掘調査団
1986　東京国立博物館　「東京国立博物館図版目録・古墳遺物編（関東Ⅲ）」
1986　上田　薫他　「代官山遺跡」「神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告」第11集
1988　福島県立博物館　「日本刀の起源展 ―直刀から彎刀へ―」福島県立博物館展示図録
1988　川崎市　「94廃生台横穴墓群」「川崎市史」資料編1
1989　横須賀市人文博物館　「H601 大塚1号墳」「考古資料図録」
1989　南足柄市　「8塚田古墳群」「南足柄市史」1 資料編
1989　池田　治・村上　紘他　「からさわ・かなんざわ遺跡発掘調査報告書」東海自動車道改築松田町内遺跡調査会、からさわ・かなんざわ遺跡調査団
1989　鈴木重信・安藤広道　「鎌倉古墳」横浜市埋蔵文化財調査委員会
1989　吉田章一郎他　「神奈川県秦野市桜土手古墳群の調査」桜土手古墳群発掘調査団
1990　鴻沢　亮　「新吉田町四ツ家横穴墓群」新吉田町四ツ家地区急傾斜地崩壊防止工事にかかる横穴墓発掘調査団
1991　上田　薫・長谷川　厚・近野正幸　「神奈川県の横穴墓群」「茨城県考古学協会シンポジウム 関東横穴墓遺跡検討会資料」
1992　小出義治他　「台の坂遺跡」「横須賀市文化財調査報告書」第24集
1993　厚木市秘書部市史編さん室　「依知地区5 林添1号墳」「依知地区7 上原1号墳」「厚木市史」古代資料編（1）
1993　横須賀市人文博物館　「H721 吉井城山横穴群」「考古資料集録」
1995　立花　実　「三ノ宮・下尾崎遺跡、三ノ宮・上草原遺跡発掘調査報告書」「伊勢原市文化財調査報告書」第17集
1995　石井昌國　「古代刀の変遷」「古代刀と鉄の科学」雄山閣
1995～2002　古墳時代研究プロジェクトチーム「横穴墓の研究（1）～（8）」「かながわの考古学」第5集～「研究紀要」7　神奈川県立埋蔵文化財センター・財団法人かながわ考古学財団
1996　野崎欽五他　「久野第2号墳」「小田原市文化財調査報告書」第58集

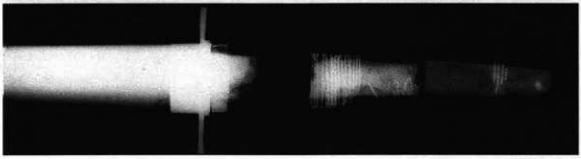
1996　温水高坪遺跡調査団　『神奈川県厚木市温水高坪遺跡群』
1996　後藤客八郎　『久本横穴墓群発掘調査報告書』久本横穴墓群発掘調査団
1997　玉口時雄・大坪宣雄他　『横須賀市吉井・池田地区遺跡群Ⅱ』横須賀市吉井・池田地区埋蔵文化財発掘調査団
1997　田尾誠敏・河合英夫　『神奈川県の状況』「遺物からみた律令国家と畿内」資料編第２分冊　第６回東日本埋蔵文化財研究会
1997　浜田晋介　『加曽台古墳群の研究Ⅱ』『川崎市市民ミュージアム考古学叢書』３
1997　小池　聡他　『川崎市高津区久本桃之園横穴墓群』桃之園横穴墓群発掘調査団
1998　鹿島保安・山田光洋　『市ヶ尾第二地区18街区（大場第二地区21街区）横穴墓群』財団法人横浜市ふるさと歴史財団
1998　東京国立文化財研究所　『東京国立文化財研究所所蔵X線フィルム目録Ⅰ－考古資料編－』
1998　斉木秀雄他　『神奈川県遠子市久木５丁目横穴群の調査』久木５丁目横穴群調査団
1998　竹石健二他　『久地西前田横穴墓群－第１次調査－』久地西前田横穴墓群発掘調査団
1998　竹石健二他　『久地西前田横穴墓群－第２次調査－』久地西前田横穴墓群発掘調査団
1998　寺村光晴・西川修一他　『伊勢原市北高森古墳群と出土遺物』『かながわ考古学財団調査報告』33
1998　厚木市秦野郡市史編さん室　『玉川地区59金井１・２号墳』『南毛利地区74寺ヶ岡古墳』『南毛利地区90高坪遺跡群』『厚木市史』古代資料編（２）
1998　古墳時代研究プロジェクトチーム『小田原市久野・総世寺裏古墳の調査（１）』『神奈川県埋蔵文化財調査報告』40
1998　古墳時代研究プロジェクトチーム『小田原市久野・総世寺裏古墳の調査（２）』『神奈川県埋蔵文化財調査報告』41
1999　平塚市　『万田熊之台横穴群』『平塚市史』11上 別編考古（１）
1999　立花　実・手島真実　『伊勢原市登尾山古墳再考』『東海史学』第33号
1999　小出義治他　『長沢１号墳・熊野神社下遺跡』長沢１号墳・熊野神社下遺跡調査団
1999　長谷川　厚他　『新宮台横穴墓』『かながわ考古学財団調査報告』第82集
1999　関根孝夫　『伊勢原の古墳（講演資料）』『第23回神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨』神奈川県考古学会・伊勢原市教育委員会
2000　武井　勝他　『神奈川県秦野市桜土手古墳群の調査（第２次）』桜土手古墳群第２次発掘調査団
2000　柏木善治他　『笠窟・谷戸遺跡』『かながわ考古学財団調査報告』67
2000　宍戸信悟　『三ノ宮・下谷戸遺跡Ⅱ』『かながわ考古学財団調査報告』76
2001　宍戸信悟　『横穴式石室からみた古墳時代の秦野盆地』『研究紀要』第２号　秦野市立桜土手古墳展示館
2001　秦野市内埋蔵文化財調査会　『金目原古墳群2001発掘調査概要報告書』秦野市教育委員会監修
2001　井出智之・河合英夫　『日向・渋田遺跡』『高森・赤坂遺跡』『いせはらの遺跡』Ⅰ
2001　横浜市歴史博物館・（財）横浜市ふるさと歴史財団　『横浜の古墳と副葬品』企画展展示図録
2002　上田　薫・三枝祈司　『比奈窪中屈敷横穴墓群』『かながわ考古学財団調査報告』136

参考文献

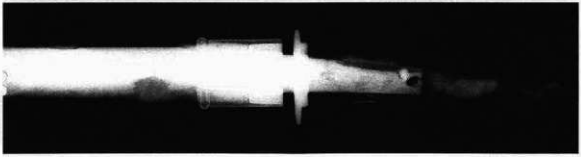
1979　穴沢咸光・馬目順一・中山清隆　『相模出土の環頭大刀の諸問題』『神奈川考古』第６号
1984　白井　勲　『古墳時代の鉄刀について』『日本古代文化研究』新刊号　ＰＨＡＬＡＮＸ古墳文化研究会
1985　横田義章　『古墳時代の象嵌文様』『九州歴史資料館研究論集』10
1986　小林行雄　『古墳時代の大刀（講演録）』『研究紀要』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
1986　滝瀬芳之　『円頭大刀・圭頭大刀の編年と佩用者の性格』『考古学ジャーナル』№266
1986　穴沢咸光・馬目順一　『日本における龍鳳環頭大刀の制作と配布』『考古学ジャーナル』№266
1986　横本博文　『金銀象嵌装飾円頭大刀の編年』『考古学ジャーナル』№266
1986　西山要一　『古墳時代の象嵌－刀装具について－』『考古学雑誌』第72巻第１号
1987　町田　章　『第６章第１節 岡田山１号墳の備前刀についての検討』『出雲岡田山古墳』島根県教育委員会
1987　新納　泉　『戊申年銘大刀と装飾付大刀の編年』『考古学研究』第34巻第３号
1988　杉山秀宏　『古墳時代の鉄鏃について』『榎原考古学研究所論集』第八
1989　金子真土・関　義則　『日本の装飾付大刀』『特別展 古墳－かぎり大刀の世界－』埼玉県立博物館
1989　田中広明・大谷　徹　『東国における後・終末期古墳の基礎的研究（１）』『研究紀要』第５号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
1990　菊地芳朗他　『大年寺山横穴群』『宮城県文化財調査報告書』第136集
1991　末永雅雄　『日本の武器〈大刀と外装〉』末永雅雄著作集４　雄山閣
1991　本村豪章　『古墳時代の基礎研究稿－資料篇（２）－』『東京国立博物館紀要』第26号
1993　横本博文　『亀甲繁鳳風文象嵌大刀再考』『瑞古論集』久保先生追悼論文集
1994　滝瀬芳之・野中　仁　『埼玉県内出土象嵌遺物の研究－埼玉県の象嵌装大刀－』『研究紀要』第12号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団



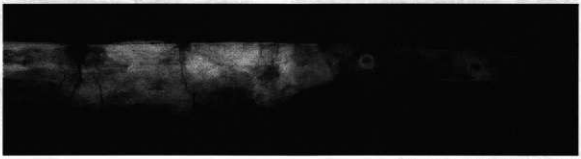
伊勢原　坪面古墳：第１表26



伊勢原　登尾山古墳：第１表25



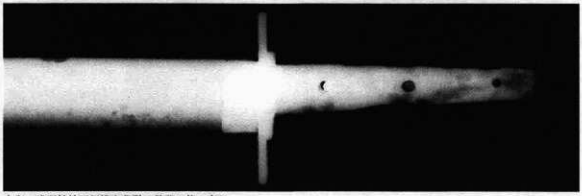
小田原　久野諏訪の原古墳群２号墳：第１表01



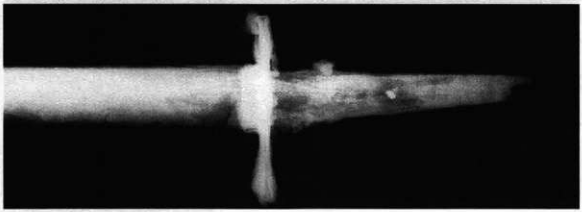
横須賀　大塚古墳群１号墳：第１表70

厚木　温水高坪遺跡群第３地点古墳：第１表60（報274図-17）

小田原　久野諏訪の原古墳群２号墳：第１表02（報13図-38）



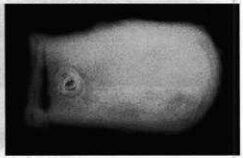
大和　浅間神社西側横穴墓群４号墓：第１表61



茅ヶ崎　香川篠山横穴墓群５号墓：第１表62

川崎　久地西前田横穴墓群２次２号墓：第１表86

川崎　久地西前田横穴墓群１次５号墓：第１表85



三浦　江奈横穴墓群２号墓：第１表75

横浜　市ヶ尾第２地区18街区横穴墓群１号墓：第１表81

泰野　桜土手古墳群25号墳：第１表11

研究紀要９

かながわの考古学

発　行　日　2004（平成16年）２月29日
発　　行　かながわ考古学資料刊行会
〒232-0033 横浜市南区中村町３-191-１
tel (045)-252-8661　fax (045)-262-8162
http://www.planet.pref.kanagawa.jp/city/koukogaku/zaidan.htm
印　　刷　株式会社ナデック

本書は、平成16（2004）年２月16日に財団法人かながわ考古学財団が編集・刊行したものを、かながわ考古資料刊行会が同財団の許可を得て、増刷したものである。

KANAGAWA NO KÔKOGAKU

Vol.9

(Bulletin of KANAGAWA Archaeology Foundation)

CONTENTS

Project Team for Palaeolithic Studies: Palaeolithic Remains in Kanagawa Prefecture (3): Lower Part of Layer B1 and L2 1

Project Team for Jômon Period Studies: Change of the Jômon Culture in Kanagawa Prefecture (VI): An Example in the Late-Middle Period. An Aspect of the Kasori-E-Type Pottery Period, Part 4: Cultural Aspect (2) 19

Project Team for Yayoi Period Studies: A Study of the Miyanodai-Type Pottery (3) 39

Project Team for Kofun Period Studies: Track of Dr. Naotada Akaboshi, a Pioneer of Archaeological Research in Kanagawa Prefecture (1): A Report of Materials of the Kofun Period in the So-called "Akaboshi Note". 55

Project Team for Nara-Heian Period Studies: An Archaeological Study of the Miyagase Sites of the Nara-Heian Period (II). 67

Project Team for Medieval Age Studies: The Corpus of "Yagura" (horizontal loam-cut cave burial chamber of the Kamakura period) in Kanagawa Prefecture (2): On the Jyôgyôji-higashi Site and Several "Yagura" s around the Mutsu-ura District. 87

Project Team for Early Modern Age Studies: The Corpus of Common Houses in the Early Modern Age (1). 103

KASHIWAGI Zenji: On Morphology of Iron Implements Found from "Kofun" (mounded tomb) in Kanagawa Prefecture: With Special Reference to Long Swords and Iron Arrowheads. 117

February, 2004

KANAGAWA Archaeology Foundation

Yokohama, Japan